

スクルージのクリスマス・キャロル: 最後の鎖を解く

C. ピピン・ロウ作・絵

**** 五線譜 1 ****

マリー・リターンズ

スクルージは前によろめきました。必死に瞬きしたにもかかわらず、彼はまだ暗闇の向こうを見ることができませんでした。本能的に支えを求めて手を外側に突き出したが、凹凸のある通路が靴に引っかかり、ペシャンコに落ちた。床からの灼熱で彼は火傷を負った。彼は泣き叫びながら、直立して立ち上がった。

視覚が否定され、触ることも危険なため、嗅覚だけが彼の認識を助けました。彼が少しずつ前進すると、硫黄のカビ臭い悪臭が鼻孔を襲いました。息を吸い込むたびに、匂いが押し出されていきます。ぼやけた涙を通して、彼は頭上でかすかなオレンジ色の輝きがちらつき始めているのを感じた。一步進むごとに明るさが増してきました。

空洞は、見た目は巨大ですが、壁がないように見えました。見上げると、スクルージは何千もの鍾乳石が見え、それぞれの鍾乳石の先端は燃えるようなオレンジ色でした。その光景は素晴らしい光景を生み出しました。天井の驚異を眺めていると、スクルージの前進が止まり、照明も止りました。暗闇の中で立ち止まり、彼が動くたびに部屋が薄明かりに戻った。その後、一歩ごとに鍾乳石の炎が明るくなりました。色は最初はクールなオレンジでしたが、すぐに赤に変わりました。一歩ごとに、すべての付属肢が熱を持ち、天井が青く燃え上りました。その輝きにスクルージの額には汗が滲んだ。そして、天井全体がまばゆいばかりの白い地獄に変わりました。

数秒以内に、スパイクの巨大な炎が洞窟を照らし、スクルージの視界が洗い流されるほど明るくなりました。スクルージは動きを止めたが、炎を止めるには遅すぎた。彼の目が慣れようとすると、詳細を除いて形状を識別し始めました。土間だったはずの場所が、溶けた硬貨の海で地面を覆っていた。

突然割れるような音が洞窟中に響き渡ったとき、スクルージは顔を上げた。それぞれの鍾乳石は、それぞれの炎に襲われているように見えました。脈動する付属肢は、まるで呼吸しているかのような勢いで出入りした。彼がこれについて考える間もなく、白い溶けたコインがスクルージに降り注ぎ始めました。接触すると、コインからチェーンに変わりました。拘束具は獲物を包み込む縛め付け具のように動きました。スクルージは東縛による縛め付けに支配されながらもがいた。

恐怖で吠え、スクルージの叫び声が夢の外で聞こえた。彼はまっすぐに飛び起きて、マットレスに倒れ込んだ。不安に震えながら、彼は小声で「トランスマグリファイ」とう

めいた。しばらくの間、その夢はスクルージに不吉な恐怖を残して残りましたが、時間が経つにつれて彼の考えは思い出に変わりました。

マントルピースの上の時計を見て、スクルージはまだクリスマスイブであることに気づきました。彼は何年も前、別のクリスマスの前夜に見た悪夢と、その悪夢と鎖との関係について考えた。

ベッドに横たわりながら、彼は三人の精霊との出会いを思い出した。彼は自分が変わったことを知っていた。毎年、寛大で匿名の贈り物が彼の金庫からロンドンの貧しい人々の懐に届きました。霊たちは二度と彼を訪れるることはなかったし、その必要もなかった。しかし、幽霊のマーリーは別のケースでした。なぜなら、今年はマーリーがスクルージを必要とする年になるからだ。

1843年の重要なクリスマスイブから、3人の精霊と彼の旧友ジェイコブ・マーリーがスクルージを救いの旅に連れて行ってから、何年も経ち、正確には11年が経っていました。そして今、次のクリスマスの前夜、彼はベッドの中で過去を思い出しながら目を覚まして横たわっていました。

スクルージは幽霊に取り憑かれたとき、自分が老人であることに気づきました。マーリーは彼の魂を救おうと扇動したかもしれないが、スクルージ自身は自分の命が間もなく失われることを理解していた。近づいている自分の死について考えると、彼は平安を感じ、自分に与えられた命に感謝しました。彼は何も後悔していないかった、無神経な父親に何年も拒絶されたことも、人生の唯一の愛であるベルを自分自身が拒絶したことなどもなかった。

スクルージは生涯のほとんどを貪欲の情熱の中に生きてきた。彼は金貨への貪欲者であり、労働者の境遇に対して悪党だった。しかし、幽霊たちの慈悲によって、スクルージは自分の卑劣さを克服し、精神の復活を可能にしたのです。過去11年間を通じて、ロンドンのクリスマスの変容は、スクルージ自身の変容とほぼ同じでした。実際、スクルージ自身がこの休日の変化に大きく貢献しました。

彼が目に見えない世界に誘拐されたのと同じ年、クリスマスカードは新しい伝統を生み出しました。イングランドはこの無色の挨拶に興奮した。このカードにより、中央郵便局と印刷業者に新しい産業が引き起こされました。これは主にスクルージのおかげで、画家にとっても大きな影響を与えました。最初の数年間、スクルージは10月の間に、楽しい休日の風景を彩るために数十人の貧しい子供たちを雇いました。11月中、6枚のカードの束が集計所に入った人全員に渡された。この仕事自体により、子供たちは家族がクリスマスの「プディングクラブ」に参加するのを助ける資金を得ることができました。彼らの一族全員が伝統の食べ物を楽しむことができるよう。それにもかかわらず、数年以内に印刷業者はカードに色を付ける方法を発見し、子供たちは仕事を失いました。

しかし、スクルージは休日雇用を放棄しました。彼自身は音楽的ではなかったが、よく整えられた合唱団の美しい声を聞くと、首の後ろの毛が逆立ってしまうことがよくあった。彼は音楽をあらゆる言語、信仰、伝統を超えた要素として感じることができました。11月下旬のかき混ぜ日曜日の日から始めて、スクルージは十数人の年長の子供たちにお金を払って、休日のお気に入りを歌ってロンドンの通りを旅行させました。キャロルの参加者たちは常に感謝の気持ちを持った大衆によって十分な栄養を与えられていきました。幼い兄弟にお菓子を持ち帰ることができた人もたくさんいました。

スクルージは、自分自身と自分のビジネスのために、多くの個人的な休日の伝統を始めました。彼の個人的なクリスマスカードほど歓迎されたものはなかった。大切な受取人がドアのノックに応えると、身なりの良い若い男性が封筒を持って「あなたは…さんですか？」と尋ねました。または「あなたは…夫人ですか？」肯定の答えは封筒を手渡した。「エベネザー・スクルージ氏は、このホリデー精神の時期に敬意を表します。」そう言って青年は頭を下げ、向きを変えて立ち去った。封筒には必ず、1本の火のついたろうそくの絵が描かれたカードが入っていました。カードに印刷されたテキストには、常に運送業者の言葉が正確に書かれていました。「エベネザー・スクルージ氏は、このホリデー精神の時期に敬意を表します。」

各カードのユニークな点は、スクルージの手書きのメモでした。あるカードには、「あなたのご家族の病気に気づきました。スクルージとクラチットへの恩義を許してください。」と書かれているかもしれません。「あなたの娘さんはヒーラーとして並外れたスキルを発揮しています。提供された資金をこの分野の教育に使ってください。」と言う人もいます。多くの場合、人々はスクルージのカードを幸運のお守りとして持ち歩いていました。ポケットに収まるように折りたたむ人も多かったです。

スクルージが最も大切にしている伝統は、アルバート王子が彼の出身国であるドイツから取り入れたものです。1848年、王子はクリスマスツリーと、リンゴ、ポップコーンの束、リボンの飾りをイギリス国民にもたらしました。登場以来、スクルージは常に家に木を一本、職場にも木を一本持っていました。

オフィスの木の枝からはコインが入った封筒がぶら下がっていて、それぞれが折り目の中に異なる金額を隠していた。従業員の子供たちが休暇中に父親を訪ねると、それぞれがその封筒を見て感嘆の声を上げました。というのは、彼らは、ボクシングデーには、父親が伝統的なお金の入ったポーチを受け取る一方で、保管する封筒を選ぶことも許されることを知っていたからだ。

お金で飾られた装飾品が飾られた5つの季節の中で、スクルージは1851年のことを最も懐かしく思い出しました。そのクリスマス、ツリーのジャックポットを獲得したのは、クラッチット家の末っ子ボズでした。止まらないほど活発な少年ボズは、5ポンド、4シリング、6ペンスを勝ち取りました。5歳の息子はそのお金を大好きな弟のティムに渡し、「ほら、ティム、いつも言っていた足の発明をやってもいいよ」と言いました

。そう言って、彼は兄に金を投げつけ、向きを変え、別の休日の冒険に向かって急いだ。スクルージは、ボズがティムに脚の器具を買うように指示しているのを聞いて、ティムを脇に連れて行き、その発明について尋ねることにしました。スクルージはこのアイデアを知ると、そのコンセプトの妥当性を検討し、それが可能であると判断し、脚矯正装置の作成にさらに資金を提供しました。

矯正器具の効果はゆっくりでしたが、数年間安定して使用するうちに、ティムは身体的に松葉杖を外せるようになりました。ティムの移動の自由とともに、スクルージも過去から自由になりました。まだ来ないクリスマスの亡靈の影は、もはや彼に不気味な闇を投げかけません。それは光の未来のキャストに置き換えられていました。

過去 10 年間はスクルージにとって最高の年だった。彼とマーリーが始めたビジネスは、6 人の従業員を抱える会計事務所にまで拡大しました。年間数千人がこの企業を利用していました。スクルージ個人の寛大さにより、会社に焦点が当てられました。人々は「商店街からの贈り主」と関わりを持ちたがった。毎年、ビジネスは富を獲得しました。そして毎年、スクルージとクラッチットは人々が救貧院に行かないようにするための新しい方法を見つけました。

やがてスクルージは、仕事ができなくなる日が近いことに気づきました。1847 年、スクルージは初期の相続として事業の半分をボブ・クラチットに与えた。「スクルージとクラッチット」の看板が設置されるまでさらに 1 年かかりました。

スクルージはベッドに横たわり、溶けたコインが閉じ込められた悪夢から回復しながら、部屋の隅にあるホリデーツリーにちらつくユールログを見つめた。炎の炎に魅了され、彼はフレッドと双子が訪れた午後のことと思い出し始めた。彼の甥は、彼がこれまで見た中で最高の父親でした。彼は女の子たちに対して保守的すぎることも、寛大すぎることもありませんでした。それでも、彼はいつも楽しい時間を過ごしましたハイティー、ペット・ザ・ワイルド・クリーチャー、そしてナップタイム・ドッジのゲームを行っています。どちらの女の子も、いわゆる上品ではありませんでしたが、優しかったです。

ファンの目には天使のような輝きがありましたが、エビーは...そうですね、彼女の輝きはまだはっきりしていました。彼女は妹を継続的な冒険に参加させ続けました。エビーは、公園の散歩をローモンド湖の洞窟の宝探しに変える方法を持っていました。店への旅行は、しばしばゲイン氏のフィギー・プディングの探求に変わりました。エビーは通常、好奇心で人々の注目を独占していました。スクルージは二人の子供を大切にしたが、ファンの静かな精神が彼の最愛の妹、つまり子供の同名人を思い出させたので崇拜した。

スクルージは、双子の以前のおかしな行動を思い出しながら微笑んだ。スクルージとフレッドが火のそばに座って熱い蜂蜜酒を飲みながら会話している間、4 歳児たちは湯気

を集めながら部屋中を走り回っていた。ある時点で、スクルージは女の子たちを黙らせようとして、ファンに来て膝の上に座るように頼みました。彼女はその要求を快く承諾した。しわだらけの顔をそっと撫でながら、ファンはスクルージの胸に頭を預けた。彼女が風化した顔立ちから手を離すと、スクルージは羽毛のようなブロンドの髪を撫で始めた。ファンは目を閉じて彼の温かい体に寄り添った。しかし、静けさは長くは続きませんでした。エビーは遊び相手を失ってイライラしました。

"ファン！"

「エビー、来て一緒に座って」とフレッドが要求した。

「いいえ！ ファンと遊びたいの」と彼女はファンの腕を引っ張りながら言った。

ファンは妹を見て、「バー・フンバグをプレイしてもいいですか？」と尋ねました。

フレッドがスクルージにウインクすると、エビーは「そうだね、まあまあ」と答えた。

ファンがスクルージの膝から飛び降りると、彼女は彼に「遊んでください、叔父さん」と言った。

「そしてお父さん、あなたも」エビーはフレッドに付け加えた。

二人の男性は抗議したが、どちらの子供も自分たちの興奮のあまりそれを聞くことができなかった。子どもたちにゲームをさせて初めて平静を取り戻すことができると悟ったスクルージは、『バー・ハンバグ』がどうやってプレイされるのか尋ねた。一人の子供がもう一方の子供に話し、それぞれが兄弟の文章を完成させるうちに、ルールは徐々に明確になっていきました。スクルージとフレッドは、進行役のようなサポート的な役割を果たすことになっていました。全体として、それは赤ちゃんにとって予想されるように、簡単なゲームでした。フレッドは「空は青い」とか「雪は緑だ」といった宣言的な発言をすることになっていた。スクルージは、ある発言が真実ではないとき、「まあまあだ」と言った。スクルージが「バー、ハムバグ」と言ったとき、最初に一步前に出た女の子がその場所を守ることになりました。もう一人は元の位置に留まります。勝者は、最初にスクルージに到達した子供になります。スクルージが「Bah Humbug」を完成する前にどちらかの少女が前に出た場合、彼女は後退しなければならず、彼女の妹が前に進むことが許可されます。結局のところ、ルールは挑戦するのに十分なほど複雑でした。

ゲームが全員に理解されたので、女の子たちはスクルージの椅子の反対側の壁に駆け寄りました。彼らは冷たい腰板に背中を押し付けながら、体をくねらせながら、父親が事実か虚偽かを放送するのを待った。

「スクルージおじさん、カエルは飛ぶって言いますよ。」

スクルージは間髪入れずに「まあまあ！」と宣言した。二人の女の子は前に飛び上がった。

「ファン、私の方が早かったよ。」

「あなたはそうではありませんでした。」

"だった！"

「そうだったんだ！」

「両方とも勝った…あなたは引き分けた」とフレッドは宣言した。「さあ、準備をしてください。次はこちらです。スクルージおじさん、この娘たちは二人とも良い子です。」

スクルージが彼らを見て姉妹たちはくすくす笑い、そして「ばあ、ああ、ああ…」

ファンが前に出ると、エビーは「私たちは上手すぎる！」と主張した。

それからスクルージはこう言い終えた、「ふむふむ！ ああ、ああ、そうだ…」彼の笑いは次第に小さくなり、笑顔で終わった。

エビーは前に出たファンを引き戻し、「私が勝ったよ、ファン」と言いました。

「スクルージおじさんが私を騙したのよ」と彼女は口をとがらせた。

「さて、皆さん」フレッドが言った。ファンが後ずさりすると、二人は静かになった。「次の話です。私は信じています、スクルージおじさん、この二人は両方とも悪い女の子です。」

繰り返しますが、スクルージは最初の言葉、「バー、アー、アー！」にしがみつきました。子どもたちは期待に胸を膨らませて、足から足へと飛び跳ねた。「ハムバグ！」彼はすぐに終わった。

エビーがスクルージが終わったことに気づく前に、ファンは妹と互角に渡り合った。

ゲームが進むにつれて、各子供たちは少なくとも2回リードの位置を占めました。最後に彼らが互角になったとき、スクルージは腕ほど離れたところにいた。ファンはそこに立って、父親が次の主張を宣言するのを待ちわびて、エビーの前で少しづつ滑り始めました。妹の動向を知ると、エビーは同じように競争する義務があると感じた。スライド、ストップ、スライド、スライド、ストップー非常に狡猾ですが、誰もがそれが起こ

っているのを見ることができました。フレッドは静かに座っていた。スクルージは独り言のように笑いました。ファンはエビーより少し先に滑り、その後逆転が起きました。スクルージの部屋がかなり広かったため、ゲームは少し疲れてしまったので、フレッドは彼らがずる賢く足をシャッフルするルーチンで競争を完了させるだけでした。エビーは少しずつ前進するファンの腕を叩いた。ファンが勢いに乗ると、今度は彼女が腰でエビーを突き飛ばした。1分も経たないうちに、二人はスクルージの膝元に集まつた。

「私が勝ちました」とエビーは宣言した。

「いいえ、そうではありませんでした」とファンは主張した。「あなたは騙されました。」

「よし、女の子たち」とフレッドが忠告した。

「でも、お父様」それぞれの声が少しずれて言った。

「二人とも勝ったよ」スクルージは二人の女の子に腕を回しながら笑った。

双子はクスクスと笑いながらスクルージから引き離した。「また遊んでもいいですか？」エビーは尋ねた。

「今日はだめだ」フレッドとスクルージは声を合わせて言った。フレッドは続けて、「おもちゃで遊んでください。スクルージおじさんと私はもう少し話すつもりです。」

女の子たちは金のように優秀でした。彼らは通りに面した大きな窓の下で静かに楽しんでいました。

二人の男が忘れられそうな事柄について話し合っていたとき、スクルージが将来にとつて最も重要な話題を持ち出した。「フレッド、あなたは私の唯一の相続人です。ですから、従業員の幸福のために、スクルージとクラッチットの私の片割れの相続をどのように扱うつもりですか？」と尋ねざるを得ません。

事の重大さに不意を突かれたフレッドは、「おじさん、そんなこと考えたこともなかつた」と叫んだ。

「しかし、私はそうする…そうしなければなりません。あなたはビジネスを経営してくれますか？」

「本当のところ、叔父さん、私は法廷弁護士として満足しています。会計事務所——それは私にはあまり向いていません。」

「はい、それは承知しています。ですから、売却する場合は、たとえ分割払いでも支払わなければならないとしても、社内で買い手を見つけるように努めてください。そして、事業を経営することに決めた場合は、Crachit に指導を求めてください。」

「健全なアドバイスだ。それに従うよ、スクルージおじさん」

「それでは満足です。あなたが私とビジネスにとって正しいことをしてくれると知っているからです。」

スクルージは世間知らずではなかった。彼は、自分がいなくなるとビジネスが変わってしまうことに気づいた。彼は、自分の書いた遺書が、未来にその言葉に跪くことを要求できないことを知っていた。せいぜい指導程度だろう。スクルージは将来に目を向け、自分が死んだ後は街の記憶から自分の名前が消えるだろうと推測した。彼は都市そのものの寿命を維持するための記念碑を自分で購入する余裕があったが、そのコンセプトの虚栄心に抵抗した。大多数に与えられた簡素な墓石で十分だった。彼は、何人かの人が時々彼のことを好意的に思ってくれることを望んでいた。しかし、確かなことは何もなかったので、スクルージはその認識に納得した。

午後が夕方に変わるにつれて、スクルージは会社にうんざりし、訪問した若者もそうでした。フレッドさんは叔父に楽しいおやすみを言いながら、バスが午後1時に到着することを伝えた。翌日、彼を伝統的なクリスマスのお祝いに連れて行きました。

スクルージは、まだ来ないクリスマスの亡靈が自分の墓に慈悲を乞いながら去って行ったあの運命の日以来、フレッドの家でクリスマスを欠かさなかった。時が経っても、あの絶望的な時期の情熱は彼の記憶から消えることはなかった。そして、スクルージは自分に与えられた恵みの瞬間への愛情から、フレッドのクリスマスを他のどの日よりも楽しみにしていました。というのも、クリスマスの風習、キャロル、スペイントのきいたエール、子供たちへのクリスマスプレゼントが詰まったストッキング、そしてほぼ全員が大好きなパーラーゲーム「スナップドラゴン」で満たされていたからだ。このゲームは、プランナーの入った燃え盛るボウルからレーズンを奪うという危険な挑戦で、観客と出場者の両方を同様に興奮させました。青い炎が滴る指が燃えている果物を開いた口に放り込むと、観客は拍手を送った。聞こえてくるのは炎を消す口から出る汁の焼けるような音であれ、時折聞こえる痛みの叫び声であれ、どちらも見物人に興奮をもたらした。試合に勝つことはプレーの興奮よりも二の次でした。実際、ゲームの勝者に与えられたのは、勇気を誇る権利だけでした。

多くの場合、その日の喜びは1週間続き、21日のセントトマスの日から始まり、26日のボクシングデーまで続きました。それでも、多くの人々は、新年がかなり過ぎた後、ユールの丸太の黒焦げの残骸が収集され、翌年の休暇の丸太を燃やすために使用できるように保管されるまで、クリスマスの精神を持ち続けました。

スクルージは悪夢を振り切って眠りが戻ることを願った。そして、身体的には休む準備ができていたにもかかわらず、心はさまよい続けた。彼は翌日の活動が心配だった。彼は、これが最後になるだろうと予想していたので、その日が自分史上最高のクリスマスになることを願っていた。

スクルージは目を閉じて横たわり、その間、思い出のせいで目が覚めています。突然、何の前触れもなく、下の通りから歌が寝室に響き渡りました。ホーンとフルートが「グリーンスリーブス」を完璧に演奏しました。オルゴールを握りしめた子供の思い出に思いを馳せたとき、甘い英語のメロディーが彼の目の端に涙を浮かべた。路上で流れてきた歌と、オルゴールの同じ曲を透き通って弾く音が、前の夏の思い出の洪水の中で衝突した。

夏は暑かった——例年よりも暑かった。スクルージは、1854年の最近の夏ほど暑かつた年を思い出せません。その暑さを思い出すだけで汗が吹きそうになりました。ソーホーの闘争の中で、気温がもうひとつの課題となっていたため、これらの出来事の痛みはさらに強まった。

9月の出来事が急速に彼の心に押し寄せた。彼は「ミ」という音を聞いた中年の女性が「知事、医療援助を確保するのを手伝ってもらえませんか?」と尋ねました。そのとき、オックスフォードとポーランドの角に立って、彼を迷惑だと思う人々に向けて叫ぶ男の厳しい声が聞こえた。「神の復讐をもたらしたのはソーホーの犯罪者だ」。それからスクルージの思考はピカデリーでの暴動へとさまよった。そこでは足元で倒れた男から逃げようとして数十人が負傷し、全員が彼の運命を避けたいと願っていた。

通りから聞こえるフルートとホルンのメロディーが寝室を超えていくにつれ、スクルージの考えは最近の9月の日、オフィスで男たちが数え切れないほどの数百人、おそらくは数千人が市街路上で横たわっている死体のことを話して止まなかったあの日のことを思い出した。彼らが話している間、若いフィンガル・ウィルズは毎日のニュースからの手紙を声に出して読み上げました。「亡くなった人は、コレラが発生する汚物の中で生きてきた責任を負っている。コレラの流行で倒れた人たちに、何の同情も示されるべきではない、私は何も言わない……」

「ウィルズさん」

「はい、クラッチットさん?」

「読むのをやめてください。私たちの精神を毒さないように、これ以上思いやりの欠如を口にしてはなりません。遅滞なく仕事を続けてください。」

「はい、先生。」

しかし、沈黙しなかった人々の間では会話が続いた。「何がこのような伝染病を引き起こすのだろうか?」

「いや、その根元に悪臭のある蒸氣があることは誰もが知っています。」

「飢餓を引き起こしたイギリスに仕返しをするというアイルランドの陰謀だと聞いた。」フィンガルは顔を上げたが、そのコメントに眉をひそめるだけだった。

「いいえ、それは労働者を抑圧するために計画された王室の陰謀です。」

「それはばかげています。王族は平民に対して陰謀を立てる必要はありません。彼らは欲望を表明するだけで、ほとんど何でも手に入れることができます。」

「今朝、礼拝堂で牧師は恐怖そのものが病気を永続させると語った。」

「まるで聖職者たちが、このような悪意に満ちた状況のサイクルを作り出し、そこから逃れることができない」と同じだ。」

「教会は真理の番人です。」

「確かに、常に新たな地獄のプロモーションを探しています。」

「皆さんを黙らせなければなりません」とスクルージは言いました。

「ご容赦ください、先生。」

数分間、部屋は静まり返りましたが、それでも彼らの頭の中の考えは続いていました。最後に、少し異なる話題を表明したのはフィンガル・ウィルズでした。「何が病気を防ぐのだろうか?」

「牛乳は飲まないでください。」

「牛乳を飲むな? それはどういうアドバイスですか?」

「それは私が聞いただけで、でっち上げたわけではありません。」

"本気ですか? "

「アヘンは病気の進行を止めると聞きました。」

「私の経験では、アヘンはあらゆるもの進歩を阻止する可能性があります。」

「ビールだけを飲むと病気を遠ざけることができます。」

「それで、あなたはこれをどうやって知っていますか？」

「1949年の疫病の際、叔父は家族の中でコレラに罹らなかつた唯一の人物でした。叔父が唯一違つていたのは、ビールしか飲まなかつたことです。」

「ビール、それならできるよ。」

"私も。"

「きっと…」言葉が言い終わる前にドアが勢いよく開き、全員の思考を遮った。誰かが若い女性にどうやって助けてもらえるかを尋ねる前に、彼女はドアの近くにいた男性に「あなたはピーター・ニダですか？」と尋ねました。

「いいえ、ピーターはあそこにいるよ」とフィンガルは隅の机に座っている男を指差して言った。

心配した女性は手紙を掲げてピーターの机に走った。「手遅れになる前に来なければなりません。」彼女は彼のシャツを引っ張りながら、彼の手に手紙を突きつけた。

「待ってください。やめてください。」ピーターは彼女の手をシャツから外し、2ペンスを彼女の手のひらに押し付けました。

「急いで、時間を無駄にすることはできません。」

ピーターが手紙を開けると、オフィスの男性全員が彼の机の周りに集まりました。「どういうことですか、ピーター？」

「ナンシーです。」

「あなたのお姉さんは？」クラッチットは尋ねた。

「彼女とエリザベスは病気です。私は彼女のところに行かなければなりません。」

「ハンフリーもそこにいるんじゃないの？」

「そうなのですが、病気が多すぎて対処しきれません」と少女は言いました。

「ピーター、助けが必要かもしれない。一緒に行かせてほしい。」

「スクルージさん、本当にあなたの優しさはあります、あなたに降りかかるかもしれない危害については私は責任を負いません。」

「それでは、ここにいる人たちは私の証人です。言っておきますが、私はピーター・ニダに私を傷つけるようなあらゆる状況を免除します。今、この若い女性が言ったように、『無駄にする時間はありません』。」

ピーターは依然として不安を抱えていたが、雇い主を追って通りに出る以外に選択肢がなかったようだ。二人が馬車を確保すると、ピーターは「小さな風車通り」と言った。

「私は死の道を運転しているわけではありません。別の運転をするのが最善です。」

「いや、待ってください。どこまで連れて行ってくれますか？」

「オックスフォードとポーランドは私が冒険できる限り遠いところです。」

「それでいいよ」

スクルージとピーターはタクシーに乗り込み、すぐに王立取引所、そしてイングランド銀行を通過しました。他の平日であれば、これらの場所がスクルージの停留所となるのだが、今日は彼らは商業地区を離れ、悪名高いソーホー地区に向かった。街路の混雑を見れば、まさにその瞬間、ロンドンのどの地域でも数え切れないほどの死者が出ていたとは誰も分からぬだろう。オックスフォード沿いの動きは非常に遅くなり、歩いていた人々が馬車を追い抜いたが、数分後に追い越された。旅行中、馬車は常に次の間を移動しました。動きと停滞を繰り返しながら、同じ顔がタクシーの窓を通り過ぎていった。男たちは、あたかも他に存在しないかのように腕を組んで歩き、会話する二人の女性の変わらぬ街頭劇場を眺めた。それから子供が走っていましたが、息をするために立ち止まっただけでしたが、その後すぐに再び競争する姿が見られました。しかし、最も面白かったのは、男性が驚きか畏怖の念を抱いて見つめ続けていたことだった。彼が何にここまで魅了されたのかは決して定かではなかったが、彼の顔の表情はスクルージとニダの両方に笑顔をもたらした。全員が自分の世界に属していました。彼らは一緒に、その日目にする唯一の喜びを加えました。

馬車がオックスフォードとポーランドの角で止まったとき、スクルージは「ナンシーの夫、ギルバートはどこですか？」と尋ねました。

「オルブライト中尉はクリミアで戦っている。」

「それで、彼女と子供たちは二人きりなんですか？」

「はい、でも私はできる限り彼らを助けます。」

彼らは馬車から降り、運転手に料金を支払い、ポーランドを南下してブロード・ストリートに向かって歩き始めた。それはスクルージがこれまでに市内を歩いた中で最長の 6 ブロックだろう。一步一歩、ロンドンのライフスタイルに異質な光景、音、匂いをもたらしました。死者を乗せた荷車が両方向に彼らの前を通り過ぎた。この地域に入る荷車には遺体が 1 つしかなかったが、出ていく荷車には数時間前には健康だったものの衰弱した魂の残骸があふれていた。

低くゆっくりとした悲しみのうめき声が教区全体に聞こえ、叫び声や叫び声が定期的に強調されました。多くの顔には涙があふれ、今後の不確実な時代への不安も感じられました。流行はわずか 48 時間前に始まりましたが、命と悲しみの犠牲はすでに神話の想像を超えていました。

スクルージとピーターがブロード・ストリートに近づくほど、通りは白くなっていました。ステップごとに細かい粉末が鼻に上がり、塩化物の臭いがはっきりとわかりました。

死者を運ぶ荷車とともに、生者も通りを占拠した。ポーランドとブロード・ストリートの角では、そのようなトラウマとは思えない穏やかな雰囲気が感情的な雰囲気を満たしていました。何十人もの人々が、自分たちの生活に必要なものを追求し続けました。そして、その日の暑さは目に見えて汗をかくほどの暑さであったにもかかわらず、多くの人が布で鼻と口を覆い、疫病を避けるという希望のために暑さを引き換えに喜んでいた。バケツに水を汲むためにポンプの前に列ができた。他の人々はスーツケースを抱えてさまざまな方向に歩き、数分以内にその地域から消えた。男たちは家の中に病気が発生していることを地域社会に知らせるため、窓に雨戸を付けた。そして辺り全体を、哀愁の情熱が覆い尽くした。

ブロード・ストリートのポンプの近くで、ピーターはケンブリッジで左折し、南に進みました。スクルージも続いた。どちらの男性もその地域に入って以来、一言も話していませんでした。言葉は不適切で、ほとんど冒涜に思えた。彼らが一緒に歩いているとき、見ている人は、どちらかが考えを持って行動したのではないか、あるいはおそらく義務が彼らの行動を支配しているのではないかと疑問に思うかもしれません。

ケンブリッジは、1 ブロックしか続く奇妙な小さな通りの 1 つです。ただし、ブロックの端でも通りは続いているが、名前はそうではありません。見知らぬ人に説明すると、「通りは小さな風車に変わります」。ただし、何も変更はなく、名前が変更されただけです。

角から数棟進んだところで、ピーターは右折してドアをノックした。すべてが静かだった。彼はもう一度ノックしましたが、沈黙だけがありました。イライラして彼は三度目にドアをたたき、「ナンシー、ハンフリー、ドアに来い！」と叫びました。

「駄目だ」スクルージはピーターの前腕に手を置きながら言った。ピーターがハンドルを試してみると、ロックが解除されていることがわかりました。彼は中に入ったが、空気を一息も吸い込む前に、少しでも空気を求めて息を切らしていた。部屋の悪臭は、焼けるような嘔吐物と下痢の悪臭を放っていた。この組み合わせは男性の胃袋をひっくり返すところでした。長い間、スクルージとピーターは戸口に立って、建物の汚染に慣れていきました。沈黙を調査したいと思いながらも、ショックを受けるのではないかと恐れながら、二人は住民を呼び続けた。「ナンシー、そこにいるの？ ハンフリー。エリザベス。聞こえたら答えて。」しかし、音はなく、自分たちの声のエコーさえも返されませんでした。

二人とも臭いに完全に慣れることはできなかったが、やがてその嫌悪感に苦しめられなくなる時が来た。男たちは家族を捜すために一緒に入った。最初の寝室のドアから、ピーターは空のベッドが人からのさまざまな排泄物コレラの力で汚れているのが見えました。ピーターがベッドに近づくと、ドアから最も遠い側が床にマットを隠していることに気づきました。ナンシーはマットの上に横たわり、目を少し開いたままでした。彼女のうちに生命が宿っているのかどうか確信が持てなかつたピーターは、ナンシーの隣にひざまずいて、彼女がいないことに気づきました。

床に座ったピーターは姉の上半身を膝の上に引き寄せた。彼女の髪を撫でていると、静かな涙が頬から彼女の頬に落ち始めた。

スクルージは他の人たちを探して部屋から部屋へ行きました。彼は家の大部分を調べた後、建物の裏手にあるドアを開けた。部屋の中には小さなベッドが2つあり、そのうちの1つはナンシーのベッドと同じように汚っていました。もう一つの部屋では、二人の子供がお互いの腕の中に横たわっていました。

スクルージは優しいタッチで彼らの状況を認識した。感動すると、ハンフリーは目を開けた。しかし、エリザベスは額に当てられたスクルージの手を氣にも留めなかつた。

ハンフリーは「私たちはとても病気なのです、先生、助けていただけませんか？」と言いました。

「はい、ピーターおじさんと一緒にです。」

「叔父さん？ 夢の中で彼の声が聞こえました。彼は私に呼びかけましたが、私はオーブンの中に閉じ込められていました。そして彼は立ち去りました。」ハンフリーはスクルージを見上げながら、「あなたは私の叔父ではありません。」と付け加えた。

「彼はあなたの母さんと一緒にです。」

「手伝ってくれませんか？ とても喉が渇いたので飲み物はありますか？」

「いえ、でも水汲んでまいります。」

「水じゃないよ。」ハンフリーは目を閉じながら唇をなめた。

スクルージは、最初に何をすべきかという考えに麻痺し、次の行動が分からず、彫像のように静止していた。子供たちの世話をすべきか、水を汲むべきか、ナンシーの死を当局に知らせるべきか——すべてが緊急であるように思えた。彼はついに決断をあきらめ、子供たちを残してピーターを迎えに行きました。妹を腕に抱えて床で体を揺らしながら、ピーターはスクルージに注意を払わず、スクルージの真後ろの位置に移動した。

「ピーター、エリザベス、ハンフリーは私たちの助けを必要としています。」

ピーターは苦しみの叫びを上げました。その爆発に驚いたスクルージは、悲しむ友人を慰めるためにピーターの肩に手を置いた。スクルージは、静かで安心させるような声で、「さあ、若い人たちがあなたを必要としているのよ。あなたの妹が何を望んでいるのか考えてみましょう。」と言いました。

スクルージの言葉は、顔を平手打ちするようなもので、ピーターは慎重にナンシーを床に横たわらせた。彼は彼女の額にキスをしながら立ち上がって、「子供たちをこの汚染から救わなければなりません。」と言いました。

「彼らは体が痛くて動けないようです。」

「はい、はい、そうだと思います。」二人は一緒に子供部屋に入った。どちらの子供も動搖しなかった。

スクルージは「ナンシーは清潔な寝具を持っていませんか?」と言いました。

「予備の毛布があることは知っています。」

「私がこれらの汚れたリネン類を取り除く間に、それらを取って来てください。」スクルージは排泄物に触れないように注意しながら、予備の寝台から寝具を外した。すぐに、新しい毛布がベッドの上に掛けられました。

次のステップに怯える若者たちを眺めながら、スクルージが「新しい毛布に移す前に、彼らを清める必要がある」と言いながら、二人は顔を見合わせた。

「こんな面倒なことは今までなかった。」

「私もね。」

ピーターは「それは正しいことだ」と言いました。

二人はキッチンにあるバケツの水を使って、エリザベスの体から最悪のものを洗い流した。その子の着替えが見つからなかつたため、彼らは母親の衣服を着せた。少なくともハンフリーから引き離されていることに気づくまでは、彼女は決して動搖しなかつた。

ピーターが彼女のぐつたりとした体を持ち上げると、彼女の目がパッと開き、恐怖のあまり「ダメ！ プリー！」と叫びました。彼女は何度も何度も叫びました、「プレー！ 私はプレーが欲しい！」

か弱い生き物からこれほど大きな声が出るのは驚くべきことでした。ピーターは彼女を新しい毛布の上に置き、その間ずっと彼女を落ち着かせようと努めました。「エリザベス、ハンフリーはまだここにいます。」しかし、彼女はその変化とは何の関係もないでしょう。エリザベスは、下に置かれるすぐに、兄のもとに帰りたいという願いを抱いて、懸命に体を立て直しました。スクルージは彼女をなだめてくれるものはないか周囲を見回した。人形を差し出すと押しのけられ、表紙にウサギが描かれた本も押しのけられた。スクルージは子供をなだめようと必死になって、棚にある木箱にしがみつきました。蓋を開けると「グリーンスリーブズ」のメロディーが部屋中に流れました。

エリザベスはオルゴールを見つめ、腕を伸ばして「お父さん」と言いました。スクルージは開けた箱を彼女のそばに置きました。曲が遅くなるにつれ、エリザベスは粘り強く奮闘し、その春を巻き戻そうと努めた。彼女が音楽を聴きながらリラックスしたり、ターンキーと格闘したりの間を行き来している間、男性たちはハンフリーの世話をしていた。

ハンフリーは自分自身の浄化を手伝うことができました。スクルージの助けで少年はベッドから起き上がり、老人に立ち向かい、ピーターがベッドカバーを交換するのを眺めた。ハンフリーがベッドに落ち着くとすぐに、エリザベスは彼女のベッドに嘔吐しました。ほとんど解放されなかつたが、男性たちはガウンとベッドカバーの両方を再び交換する必要に迫られたと感じた。これらの排出には常に時間がかかる可能性があることを認識した男性たちは、子供たちの陰部の下と胸に簡単に取り外しできる布を置くことにしました。

その日の試練がスクルージに降りかかり始めた。彼はよく耐えていたが、休息が必要だつた。彼は子供たちのベッドの間の椅子に座りました。オルゴールの音が遅くなると、彼はエリザベスのために巻き戻しました。喉が渴いたと絶えずつぶやくハンフリーの言葉に、彼女は沈黙していた。

「水を汲みにブロード・ストリートに行きます」とピーターは言いました。

「彼らは水以上のものを必要としています。彼らに力を与えるものが必要なのです。」

「間違いなく、どちらも食べられなくなります。」

「はい、それは確かです」とスクルージは言った。「私がサックビルのどこに住んでいるか知っていますか？」

「サックビルに行ったことはありますが、あなたの家は知りません。」

「私はサックビル 15 番地に住んでいます e.さあ、鍵を持って、階段の下から缶詰のフルーツのケースを取りに行ってください。また、缶を開けるためのハンマーと釘もいくつか用意してください。彼らも階段の下にいるよ。」

「しかし、先生、どちらの子供も食べ物を保持できるとは思えません。」

イライラして疲れたスクルージは、「言い争いはやめて、品物を持って来い」と言いました。

ピーターはすぐに走り始めました。スクルージはリトル・ウインドミルの場所からわずか 6 ブロックしか離れていないところに住んでいたが、ピーターが戻ってくるまでには 1 時間以上かかるだろう。

スクルージは休息の時間を歓迎した。三人とも、それぞれのタイミングで眠りについた。オルゴールが最後に鳴り響きました。

キッチンでの騒ぎに三人は同時に目覚めた。ハンフリーは頭を上げ、家が攻撃されているかどうか尋ね、ベッドの下から銃を取り出した。スクルージは少年の武装を解除し、心配する必要はないと説得した。エリザベスは黙ったままだった。彼女の沈んだ目は何もないものとすべてを同時に見つめています。スクルージは立ち上がって騒音を調べた。彼がキッチンに入ると、ピーターが片手に釘、もう一方の手にハンマーを持ってカウンターに立っているのを見つけました。スクルージを見たとき、彼はこう言いました、「どうやらこれらの缶は食べ物を無期限に保存するためのものようだ。へこむことはほとんどなく、ましてや穴が開くこともありません。」

「穴が一つでもあれば、子供たちはジュースを飲み切ることができます。」

「この缶はよくへこんでいます。「たとえ大騒ぎで骨がガタガタになっても、私は突破してみます。」そう言ってピーターは釘を力の限り強く打ちました。ハンマーが釘に当たった力で缶からシューシューと空気が放出されました。ピーターは容器をスクルージに渡し、「どちらが飲むか見てみましょう。」と言いました。

ピーターが別の缶の蓋を叩き始めたとき、スクルージは開けた缶詰を子供たちに持つて行きました。

エリザベスは眠っているように見えましたが、ハンフリーはスクルージのあらゆる動きを追っていました。「ほら、ハンフリー。頭を上げて飲みなさい。」スクルージはハンフリーの首を支えながら、少年の口に缶を傾けた。ハンフリーは一口、そしてもう一口。数分以内に液体をすべて飲み込んだ。まだ喉の渇きが潤っていなかったので、もっと飲んでほしいと頼んだ。ほぼ同じ時間内に、ピーターはスクルージに別の缶を手渡した。

少年がゆっくりとその液体を飲み込むと、ピーターはエリザベスのベッドからオルゴールを外し、元の場所に座った。彼は小さな子供を見つめた。彼がいなくなつてから短期間の間に彼女の容貌は悪化した。彼女の青みがかった唇、くぼんだ目、半開きの口はすべてピーターに運命のような感覚を与えた。彼は少女をそっと振り起こした。彼女の額を撫でながら、彼は彼女にどのようにして缶から水を飲ませる必要があるのかを説明した。彼女はほとんど興味を示さず、彼を助けることにエネルギーを費やしませんでした。ピーターは彼女の唇の隙間から、甘い液体を少量注ぎ込んだ。ジュースが口の端でゴロゴロと音を立て、頬を伝って流れ落ちた。彼女の目は焦点が合わずに前を見つめていた。エリザベスの唯一観察できる動きは、左手を握り、そして放すという動きだけだった。ピーターは彼の手を握りましたが、これは彼女をイライラさせるだけでした。彼はエリザベスを慰め、食事を与えようと努力し続けましたが、どちらも失敗しました。

スクルージがハンフリーに餌を与え終えたところだったとき、ドアで大きなノックの音が聞こえた。彼は立ち上がって家の前からの衝撃に応えた。

ドアを開けると、二人とも敷居の向こう側に誰がいたかに驚き、ただ見つめ合った。最後にスクルージは「ジョン、スノー博士？」と言いました。

「会えて嬉しいよ、エベネザー。近所の外であなたと話すのは少し珍しいことです。何があなたをここに連れてきたのですか？」

「あなたも同じことを引き起こしていると思います、コレラです。」

「確かに、私はセント・ジェームス教区のコレラ調査委員会の一員です。情報収集とお手伝いをさせていただきたいと思っています。この病気が家の中にあると考えるのは正しいでしょうか？」

「そうなんです。私たちには病気の子供が二人います。彼らの母親はすでに亡くなっています。」

「子供たちに会ってもいいですか？」

「はい、確かに。私に従ってください。」

医師に対応するために、リビングルームから 3 つ目の椅子が運ばれてきました。それはベッドの足元、ピーターが座っていた椅子の隣に置かれていました。スクルージは新しく到着した椅子に座り、ジョンはベッドの間の椅子に座りました。彼はまずハンフリーを診察した。フルーティな香りを嗅ぎながら、彼は言いました、「彼に餌をあげましたか？」

「私たちは彼に缶詰の果物のジュースを与えました。」

「フルーツの缶詰、なかなか贅沢ですね」

スクルージは「それは贈り物だった」と言いました。

「いいよ。ただし、一度にあまり多くを与えないでください。1 時間に 1 杯くらいかな。体力がついたら量を増やしていきます。下痢が止まったらすぐに柔らかい食べ物を与えてください。」

ピーターは「それで彼は回復すると思う？」と言いました。

「私たちはそうであることを祈ります。そして今度は素敵な…」スノー博士は誰かがその女の子の名前を教えてくれるのを待った。

「エリザベス。」

「ああ、そうだね、素敵なエリザベス。」スノー博士は彼女の診察を始めた。彼女の小さな胸は息をするたびにわずかに盛り上がった。彼が彼女の腕を上げると、彼女の爪が青みがかった色に変わり始めていることに気づきました。つまむ彼女の手首の皮膚が盛り上がったしこりのままになっても、彼は驚かなかった。スノー博士はしこりの上を指でなぞって皮膚を平らにしました。検査中ずっと、エリザベスは左手を握ったり離したりし続けた。

ジョン・スノーは「この子はお酒が飲めましたか？」と尋ねました。

ピーターは「いいえ」と言いました。

「彼女が自分の手を握り続けるのは不思議です。コレラにかかった人がそのようなことをするのを見たことがありません。」

数分間、三人はエリザベスの手に集中した。ピーターは最後に「彼女はオルゴールを探しているようだ」と言いました。

「まあ、慰めになるなら、彼女にあげてください。」

そう言ってピーターは箱を巻き戻し、エリザベスの手の下に置きました。音楽が始まると、彼女の手は静かになりました。

「ドアまで会ってくれますか、エベネザー？」

玄関でスノー博士はスクルージに「子供たちは元気ですね。子供たちも自分自身も清潔に保ちましょう。皆さんも沸騰したお湯を飲み始めてください。さらに、どちらかの子供が胃けいれんを訴えたら、これを舌の下に3滴垂らしてください。」と言いました。そう言って彼はスクルージにアヘンの入った小さな小瓶を手渡し、ドアを開けて立ち去った。

スクルージは子供部屋に入ると小瓶をポケットにしまいました。ベッドの間の椅子に座っているピーターのすすり泣きが聞こえた。スクルージは自分が泣いた理由を知っていたが、ピーターが「彼女は私たちのもとを去った」と告げるのを待った。オルゴールはすぐに再生を停止しました。

ピーターは優しくエリザベスを抱き上げた。彼女をナンシーの部屋に運び始めたとき、ハンフリーはその行為の意味を悟った。彼は泣きながら、「エリザベスじゃない。いいえ、私は彼女が欲しいのです。」と言いました。彼は腕を上げて妹を迎えました。

スクルージは「いいえ、ハンフリー。これが最善です。」と言いました。

「せめてキスくらいさせてよ。」

男性たちはお互いの合意を視覚的に確認した。ピーターは「はい、エリザベスにキスしてください」と言いました。そう言って、彼は彼女を少年のベッドの高さまで下げた。ハンフリーは、かつては遊び好きだった妹のこけた頬を撫でた。彼は話そうと口を開いたが、代わりに彼女の額にそっとキスをし、ベッドに倒れ込んだ。

エリザベスを母親の隣に寝かせた後、ピーターは朝、死刑台と水、そして3人を安全な場所へ運ぶ馬車を取りに家を出た。

軽い夕食を食べ終わると、男たちはそれぞれ順番に少年を観察し、もう一人は休んだ。夕方、ハンフリーさんは一度嘔吐し、二回下痢を起こし、一晩中泣き続けました。朝になんでも、彼は良くも悪くもならなかった。

ナンシーとエリザベスのカートが到着するのは午前中だった。係員は男性たちに、埋葬は午後遅くまでに行われると告げた。ピーターは驚きました。彼は通常の喪期間を予想していたが、疫病のせいで変更が必要となった。

「申し訳ありませんが、知事、死者が増えて負担にならないよう、私たちは埋葬に立ち会うよう指示を受けました。」

荷車がブロード・ストリートに向けて旅を始めた後、ピーターとスクルージはその日の物流について話し合いました。

スクルージは「ハンフリーを家に連れて行ったほうがいいと思います。私は埋葬には参列します。」と言いました。

ピーターは両方のイベントに参加したいと考え、そのアイデアに同意する前にあらゆる可能性を検討しました。コーチが到着すると、スクルージはピーターがハンフリーの足を骨折したかのように見せるのを手伝いました。彼らは、運転手が少年の本当の苦しみを知ったら、彼らを見捨ててしまうのではないかと心配した。このいたずらは運転手を騙しませんでしたが、彼はこの恵まれない少年を助けたいという願望を持った勇敢な男でした。

御者は三人を墓地を通ってピーターの家に向かって運転した。墓地でスクルージは馬車から降り、運転手にピーターのところまでの代金を支払った。

墓地では数人の男たちが忙しく深い穴を掘っていた。2人の男が掘り、他の人が滑車システムを使って土を表面に引き上げた。墓はあまりにも深く掘られていたため、スクルージは男たちが地下の川に突破するのではないかと心配し始めたが、決して突破しなかった。

1時間以内に、2台のカートに乗った7つの棺が到着した。彼らは唯一完成した墓の隣で立ち止まった。各棺の上部には、中の人の名前が印刷されていました。2つのオールライトの棺は最も小さく、エリザベスの棺は最大のものの半分強の大きさでした。

参列者たちはその日の感情に麻痺しており、棺を穴に下ろし始めた。一人目は最大のネッド・シェパードという男で、次に二番目、そして三番目でした。それぞれが最後のものの上に直接座っていました。スクルージは、一つの穴の中に複数の棺が積み重なっているのを当惑しながら見つめた。7つの棺をすべて同じ墓の中に積み上げることになっていると気づいた瞬間、彼はエリザベスを母親の上に直接置くよう要求した。そして、サイズによる積み重ねがいずれにせよこれが起こることを指示したであろうにもかかわらず、係員は彼らが求められたとおりにすることを喜んで確認しました。

ファンファーレはなく、木を木で叩く音とともに牧師が各棺を祝福する儀式だけが行われた。ナンシーの棺が降ろされると、スクルージの目の端に涙が浮かんだ。彼は涙を流そうと抵抗したが、その後エリザベスは母親に屈服した。の抑えていた涙が落ち、その後に他の人も涙を流した。スクルージは喜んで涙を流すのを許しました。彼は少女のことを思い出しながら、状況全般の悲劇に悲しみを覚えた。

スクルージは、ぼやけた涙を通して、墓の中心から頭が、そして肩が浮かび上がってくるのを見た。彼は目の潤いを拭い、視界を鮮明にした。頭と肩は残っただけでなく、墓

からさらに上昇し続けました。彼の視力は老眼であり、細部まで見る能力が欠けていた。前に進むと、立ち上がった人物が自分に視線を向けていることに彼は気づきました。突然、スクルージはその人物が幽霊であるマーリーであると認識しました。彼の友人であり、恩人であり、彼の清められた精神の指導者であるジェイコブ・マーリーは彼を見つめ、そして「助けて」と息を吹きかけた。

マーリーの要求の思い出は、半分眠っているスクルージに衝撃を与え、完全に覚醒した。目がぱっと開き、彼は墓地の悲劇的な記憶を残しました。快適なベッドに横たわったまま、彼は「18年」と言った。その瞬間まで、彼はその日が社会で最も愛されている祝日の始まりであるだけでなく、友人の命日でもあることを忘れていた。スクルージは一日中マーリーのことを一度も考えなかつた。彼はマーリーが亡くなつて18年目のことを覚えていなかつたことを悲しんでいた。「私がいなくなつたら、誰があなたのために悲しむでしょうか？」と彼は心の中で思いました。

「当時も今も、誰も私を悲しむ必要はありません。」

「誰がそんなこと言ったの？」

スクルージは音の方に頭を向けた。暖炉からの最小限の光で、ベッドから数フィート離れたところに立っている男の輪郭が見えました。スクルージはベッドの側面に足を振り上げた。

「ジェイコブ、あなたですか？」

「そうですよ。」

「いつもと様子が違うね。鎖はどこへ行った？」

「私たちが集めた間違いはすべて、あなたが正したときに私から解放されました。」

「私がしたことあなたに影響を与えたましたか？」

「あらゆる行動が波及効果をもたらします。孤立して行動する人はいません。」

「しかし、生者が死者にどのような影響を与えることができるでしょうか？」

「あの世の私たちは存在し、存在の中にいるすべての人が動きを経験します。動きは変化です。」

「わかったけど、生者が死者をどう変えるの？」

「私たちに向かられたどんな行動や思考も、私たちを変える可能性があります。私たちの進歩は要素にそれほど結びつきません。したがって、精神は思考によって簡単に動かされるのです。」

「それでは、亡くなった人のことを考えるだけで、彼らは何らかの形で変わってしまうのでしょうか？」

「それがその考えを感じたいという幽霊の願望である場合に限ります。」

「それで、あなたの鎖はもう外れました。なぜあなたは天に昇らないのですか？」

「私には、あなたに出会う前に作った鎖がまだ一本残っています。」

「見えません。」

マーリーはシャツを開けて「よく見てください」と言いました。スクルージがマーリーのむき出しの胸に集中すると、肌が透明になった。彼にはその中心に心臓が見え、その臓器を貫く一本の巨大な鎖の輪が、その重みに常に負担がかかっていたに違いない。

「これがあなたを煉獄に結びつけるものですか？」

「そうですよ。」

「どうすればそのような悲惨を取り除くことができますか？」

「もしあなたが私を助けるを選択するなら、あなたの助けを通して。」

「私はいつでもあなたに身を貸します、ジェイコブ。」

「あなたにとって危険がないわけではありません、エベネザー。」

「私はあなたのため死に至るつもりです。」

「危険はそれだけ現実的です。しかし、成功すれば報酬も同様です。」

「私は老人で、恐れることも、失うものもほとんどありません。それで、ジェイコブ、私がどのように助けることができるかを教えてください。」

「私について来なさい。いつも近くにいてください、そうすれば私のエネルギーはあなたのものになります。」

そう言ってマーリーは壁を突き抜けて浮き上がった。スクルージは立って見ていた。長い一瞬の後、マーリーの頭が壁を通り抜けて「ついて来い、エベネザー」と言いました。

スクルージは目を閉じて壁越しにマーリーを追った。

**** 五線譜 2 ****

職場での裏切り

中に入ると水の部分がありますが、レンガではない、または少なくともそうではないはずです。しかし、十数年も経たないうちに、スクルージは再び家の外に浮かび、目を閉じて拳を握り、地上数フィートの高さに浮かんでいた。マーリーがスクルージの肩をたたき、スクルージの目がぱっと開いた。そして自分の苦境に気づき、倒れ始めた。叫びながら、彼は打たれたら固いものに向かって飛び込みましたが、マーリーはスクルージの手首に手を巻き付けました。彼の死んだ感触の冷たさは冬の空気よりも深く冷えたが、それでもスクルージの下降は突然止まった。

ゆっくりと二人はサックビル・ストリート上空に上昇し始めた。そうしているうちに、バーリントン・アーケードの天窓がはじけ始めた。立て続けに彼らは姿を消した。すると、それを支えていた垂木がなくなってしまいました。二人の友人がどんどん高く登っていくにつれて、アーケードの豪華な店舗は消え去り、かつて建物が立っていた地面は芝生に戻りました。

「ジェイコブ、ここはどこ？」

「いつになるかが本当の問題だ。」

「それでは、いつですか？」

「私たちのパートナーシップの初めに、エベネザー。」

「私たちのパートナーシップの始まりはあなたの救いにとって重要ですか？」

「いいえ、私の失敗は同じ年に始まったばかりです。」

「それで、1813年ですか？」

「はい。あの年のことを覚えていますか？」

「あなたがどれほど悲しかったかを覚えています。」

"それでマーリーさんは人生で最も残念な出来事を思い出しながらこう言い、「ここにいるよ」と付け加えた。

スクルージは暗い通りを見回した。「ガス灯はどこにありますか？」

「1813年だよ、エベネザー」

「うーん」スクルージは周囲を見回し続け、「なぜ私たちはプレッシーとバークレーの食料品店にいるのですか？」と尋ねました。

「ガラスを見てください。」

彼らは一緒に暗い窓の前に立ち、ガラスの隙間を見つめていました。いつの間にか店内のガス灯が明るくなった。幽霊たちは、男が彼らに近づいてくるのを見つめました。彼らは彼が「ご冥福をお祈りします、陽気な紳士たちよ」と口笛を吹くのを聞いた。男は顔に笑みを浮かべて、ぶら下がっているガチョウを調べている二人組の真正面に立った。最後に彼は鳥の中で一番大きなものを選びました。それを降ろして、彼はガチョウをカウンターの上に置きました。店内を見回すと、スクルージは棚の多くが空になっていることに気づきました。彼は話そうと口を開いたが、元気いっぱいのジェイコブ・マーリーがドアを駆け抜けていくのを見て考え込んでしまった。

「ノア、ノア、どうだろう？」

「まあ、誓うよ、弟よ、君は幽霊を見たようだね。」スクルージとマーリーは顔を見合させた。スクルージは微笑んだが、マーリーは心配そうな表情を浮かべた。

「いえ、いえ、もちろん違います。」ポケットから出たお金をカウンターの上に置き、彼はこう続けた。「ロリアン・ビネルは私にチップとして半分クラウンをくれました。彼女は「季節の雰囲気が私の良識を追い越した」と言いました。ジェイコブ青年は、「食料品を配達しているときに、あの車が彼女を追い抜いてくれて本当によかったです。」と笑いました。

「そうですね、ジェイコブ、それはあなたにとってとても素晴らしい休暇になるでしょう。配達はすべて完了できましたか？」

「はい、みんな家に帰ってお金を払っていました。」

「素晴らしいですね、プレッシーさんはその日の領収書にとても満足しているはずです。これほど利益を上げた日は思い出せません。」

「それは、おそらくかつては存在しなかったからです。」

「さて、そろそろ仕事を終えて、私たち自身の休日を祝う時間です。私がお金を数えてデポジットを準備している間、あなたは掃除をしてください。」

二人が一日の終わりの家事に取り組んでいると、ドアが開き、一人の老婦人が入ってきた。彼女の鼻は冬の寒さで赤くなっていました。彼女の顔に風が当たったので、彼女の目の端には涙が浮かんでいました。二人の男は誰が入ってきたのか顔を上げた。ノアは女性に微笑みかけましたが、ヤコブは眉をひそめました。彼女は杖を手にゆっくりとカウンターへ向かった。

「どうしたらお手伝いできますか、バックナーさん？」

「山芋を買いたいのですが」と小銭入れをいじりながら声が割れた。

「あと何人か残っています。」

「お金を見せてください」とジェイコブは要求しました。

「ジェイコブ！季節を思い出してください。」

若いマーリーは不平を言いながら掃除に戻りました。ノアは2つのヤムイモを手の中で転がし、両方を注意深く調べました。「夫人。バックナー、これらのヤムイモはどちらも最高の品質ではありません。1つ分の値段で両方お譲りしてもよろしいでしょうか？」

「それはとても親切ですね。」

「よかった、よかった」彼はカウンターの上のガチョウを指して、こう付け加えた。「これは、クリスマスにここで妻と若いジェイコブに餌をあげる予定の鳥です。問題は、私たちの誰も翼が好きではないということです。それらは無駄になるだけです。あげてもよろしいでしょうか？食べてくれる？」

「そうですね、羽があればいいですね。ありがとうございます、マーリーさん。」

ノアはか弱い女性に微笑みかけ、翼を胸から切り離し、商品と一緒に包んだ後、荷物を彼女に手渡しました。彼女は喜んでノアにペニーを渡し、向きを変えて立ち去りました。

「素敵なおクリスマスをお過ごしください」とノアは女性に続いて叫んだ。

彼女がいなくなった後、ジェイコブは泣き言を言いました。なぜそんなことをしたのですか？」

「太ももも楽しんでみませんか？」

"私はします。"

「明日はお腹を空かせて家に帰れると思いますか？」

「いえ、もちろんそうではありませんが…」

ヤコブの肩に手を置いて、彼は言いました、「ヤコブ、幸運に感謝することについては学ぶことがたくさんあるよ。」

引き離しながら彼は答えた。「そして兄貴、世界が実際にどのように機能するかについて、あなたには学ぶべきことがたくさんあります。」

「クリスマスだよ。今寛大になれないなら、いつになるの？」ノアは立ち止まり、「バックナー夫人の状況についても知っていますか？」と付け加えた。

「いいえ、でもそれがどこで重要になるのか分かりません。」

「そうなります、もちろんそうです。彼女の夫は昨年の冬に亡くなりました。彼女の息子は相続人であったため、彼女は成人してからずっと住んでいた家から追い出されました。彼女には今何もありません。」

「それは私の関心事ではありません。」

「はい、ジェイコブ、コミュニティの幸福があなたの関心事です。」

「いいえ、そうではありません。」

ノアはイライラして、「掃除に戻ってください」と言いました。

スクルージはマーリーを見て、「本当にそんなに厳しいことを言ったのですか？」と尋ねました。

「非難には気をつけてください、エベネザー。私たちは二人とも同じ布から切り取られたのです。」

"知っている。あなたの兄弟は良い人でした、ジェイコブ。彼が出会った運命を残念に思います。"

「彼は私が値する以上に優っていました。」

「ジェイコブ、あなたも立派な魂になりましたね。」

「もうすぐ、そんなこと思わなくなるかもしれないよ。」

スクルージはジェイコブを好奇の目で見つめ、靈は彼の兄弟を見守っていましたお金を数えます。

2人が閉店手続きに取り組んでいると、乗馬バスが店の横の縁石に突っ込んだ。この力により、停止する前に車輪が飛び跳ねました。二人の男も幽霊たちも騒ぎのほうに目を向けた。

「ああ、またスワインバーン夫人です。閉店していると伝えてください。」ノアがドアに向かって歩きながらジェイコブが言いました。

「いいえ、ジェイコブ、彼女は良い顧客です。重要でなければ、彼女はここにはいないでしょう。」

「つまり、彼女は裕福な顧客なのです。」

「親愛なる兄弟、それは関係ありません。」

「そう言うなら、親愛なる兄弟よ」

ノアがドアを開けると、バスの運転手は乱暴にベルを鳴らし始めた。

「せっかちな不機嫌者」ジェイコブがつぶやいた。

開いたドアから一陣の寒気が入ってきたので、ジェイコブはほうきを落として腕をさすり始めました。

スワインバーン夫人はノアを見ると、彼に元気よく微笑んだ。その笑顔は、唇のルージュのバラ色と前歯2本の隙間の両方を見せつけた。

「こんばんは、スワインバーンさん。何かお手伝いできますか？」

「十分に時間がかかりましたね」と運転手は言いました。

「あなたにはそれで十分でしょう」とスワインバーン夫人は忠告した。「ごめんなさい、ノア。まだ営業してるといいのですが。」

「現在閉店に向けて準備中ですが、いつでも喜んでお手伝いさせていただきます、スウェインバーン夫人。」

「エミリー、お願ひします。予期せぬゲストが来ることが分かりました。山芋 12 個と最高の鳥が必要です。」

「申し訳ありませんが、山芋はもうなくなりましたが、素晴らしいジャガイモはまだ残っています。」

「ああ、それは怖かった。まあ、ジャガイモでしょうね。十数個はありますか？」

「数十はあるはずです。」

「全部持っていきます。」

スウェインバーン夫人はノアに 5 ポンド紙幣を渡し始めたが、その後躊躇した。彼女は紙幣を引き出し、心からキスをして、紙幣に唇の跡を残しました。彼女はノアにメモを手渡しながら、いたずらっぽくウインクした。ノアはお金を受け取り、それが適切に署名されていることを確認してから、軽薄な女性に微笑み返しました。彼が店に入ろうと振り向いたとき、運転手は彼に「寒くてつらいので急いでください」と声をかけた。

ノアは運転手のほうを向いて頭を下げ、「もちろんです、先生」と言った。数分以内に、彼は商品と残りの資金を女性に手渡しました。彼らは到着するやいなや、雪を空中に漂わせながら、一目散に走り去っていきました。

閉店手続きは数分で終わりました。最後はノアが 6 個の石油ランプを消しました。ジェイコブは待ちきれずにカウンターに立っていましたが、その場を離れるのが待ち遠しくて、ようやくドアが開いたとき、彼はドアの端に肩を押しつけました。彼は木から跳ね返り、それから通りを走り始めました。

「ジェイコブ、ジェイコブ！」

ジェイコブは、足を踏み鳴らして雪を圧縮してきた氷の上で滑って止まりました。明らかに焦りを感じながら、彼は弟の方を向いた。

「クリスマスに来ますか？」

「ノア、明日は大切な人に会わないといけないんです。出席できないと思います。」

「ジェイコブ、クリスマスにそれをしなければならないほど重要なことは何ですか？」

「それについてはまだ話せません。」

「まあ、それが何であれ、私たちの休日の伝統を終わらせるつもりはありません。フローラが夕食にあなたを待っています。人々がクリスマスを守るために命を捧げたときのクロムウェルの抑圧を覚えていませんか？」

「ノア、私がそれを忘れていないことは知っています、あなたは私を許してくれません。しかし、私には約束があります。」

「私にはそれはありません。ジェイコブ、一緒に過ごせる家族がいればよかったですと思う日が来るかもしれません。」

「それで、家族がいないように、あなたとフローラは一体どこへ行くのですか？」

「私たちは移転するかもしれません。あなたも移転するかもしれません。誰にもわかりません。」

「ああ、ご自由にどうぞ。私が行きます。」ジェイコブは向きを変え、再び走り始めました。

「2時に夕食です。遅刻しないでください。」

スクルージはマーリーを見た。マーリーは弟を見つめていた。幽霊の頬からは涙が一筋落ちているように見えました。どうしてそんなことが可能になったのでしょうか？霊には物理的な要素はありません。それでは涙には水分が含まれていなかつたのでしょうか？スクルージは考えを巡らせたが、何も言わなかった。彼は友人を慰めたいだけだったので、マーリーの肩に腕を置きました。

ノアはヤコブとは反対の方向に歩き始めました。マーリーはスクルージを引っ張って、「彼についていきましょう。」と言いました。オックスフォード・ストリートはほとんどの店が閉まっており、ほとんど真っ暗で、数軒の住宅の窓からは薄暗いガス灯とろうそくの明かりが灯っているだけだった。照明がまばらだったため、ノアは氷のエリアを避けることが困難でした。彼がロンドン銀行に向かって通りを歩いているとき、吐く息が顔の側面に沿って流れていった。彼の周りの人々はあらゆる方向に旅をしていました。子供たちは走り回り、クリスマスキャロラーは歌い、他の人たちちは街中の休日のお祝いに向かっていた。

警告もなく雪玉がノアの頭の側面に衝突し、ノアは丸石の上で回転しました。バランスを崩して彼は仰向けに倒れ、お金の入った鞄が空中に飛んでいきました。ir。ノアは地面に大の字に横たわり、今何が起こったのかを理解しようとしながら荒い呼吸をしていました。若い男が彼の上に立ち、「許してください、知事、怪我はありませんか？」と尋ねました。

ノアは少年の目を見つめて言いました、「私は大丈夫だと思います。」

「それでは、先生、お手伝いさせてください。」青年はノアに右手を差し出した。

ノアは正すと「私は…持っていた」と言いましたが、言い終える前に少年は彼にお金の入ったポーチを手渡しました。

マーリーとスクルージは、ノアが若者に感謝の意を表し、銀行の方向に進んでいくのを見ていた。

「ノアはそのバッグの中に毎日のレシートを入れていると思いますか？」スクルージは尋ねた。

「彼はそれらをそこに入れました。」

「それで彼はお金を預けようと急いでいるのですか？」

マーリーが返事をする前に、友人のノアはクリスマスキャロルを避けようとして、また滑って転んでしまった。今度はスノーヒルの途中で滑って停止した。そしてまた彼のお金の入ったポーチが空を飛んでいきました。それはついに、最も背の高いキャロラー、スティーブン・マッキントッシュ卿の足元に止まりました。スティーブン卿はバッグを手に取り、中を見て、ノアに向かって歩き始めました。ノアは立ち上がって、お金を探し始めました。バッグが半ブロック以内のどこにでもある可能性があることに気づいたとき、彼は心配そうな表情を浮かべた。

「彼は様子がおかしいようです。お金を返すつもりはないでしょう？」スクルージは尋ねた。

「人の正直さは身体的特徴ではありません」とマーリーは答えた。

スクルージがさらにコメントする前に、スティーブン卿はノアにバッグを手渡しました。「あなたはこれを落としました。」

「ありがとう。本当にありがとう。」ノアはひょろ長い男からポーチを受け取りました。

「スティーブン・マッキントッシュ卿、よろしくお願ひします。」

「先生？ あなたはまだ若いのに、このような名誉ある称号を得るには。」

青年はただ肩をすくめた。ノアは若者に再び感謝の言葉を述べ、それから銀行に向かって進みました。彼がロンドン銀行に到着したのは、ドアが施錠されてからわずか1分か

2分後でした。彼は家に帰ろうと向きを変え、何事もなく無事に自宅の玄関に到着した。入った後、彼はすぐにお金の入ったポーチをベッドの下の緩い床板の下に隠し、すぐに妻のフローラと一緒に休暇を始めました。

フローラを見て、マーリーは泣き始めました。彼の顔から涙がこぼれると、床に落ちる前に消えてしまいました。

「ジェイコブ、どうしたの？」

「全部間違ってるよ！」彼は堪えきれずに泣きながら、「私にはトランスマグリファイを超えた天罰が下るのが当然だ。これを続けることはできない、エベネザー。家に連れて帰る。」と叫んだ。

「いいえ、ジェイコブ、あなたが何をしたとしても、あなたはこの終わりのない苦しみを受けるに値しません。」

「親愛なる友人よ、あなたは何も知らずに話しています。」

「ジェイコブ、私はあなたの良い面を知らないわけではありません。」

「それなのに、あなたはこの連鎖について何も知りません。それが私の任務です。」

「あなたの使命ですが、なぜあなたはいつまでも苦しまなければならぬのですか？」

「無期限ですか？死者のための変化は確実ですが、それは支援を通じてのみです。私自身のエネルギーによって、私は運命づけられています。」

「ふむふむ！ それでは、前回会ったときのバインディングはどこにあるのですか？」

「私を変えたのはあなたです。」

「ふんふん、言っておきますが、私を変えたのはあなたの影響です。どちらかというと、私たちはお互いを変えました。だから教えてください、ジェイコブ、あなたはまだ存在しますか？ 今話しているのは雲ですか、音ですか、それとも単なる想像の産物ですか？」

「いいえ、あなたが話しているのは私の精神です。私の存在に関して言えば、私は今でも自分が何をしたかを痛感しています。」

「あなたが認識している限り、変化への欲求は改革を発展させるのに役立つはずです。確かに、死者の移行は生者の場合とは異なるように見えますが、あなたにとってすべてが失われるわけではありません。」

「私はあなたの真実を渴望しています、エベネザー。もしそうでなければ、この使命全体が希望を超えていたからです。」

「あるレベルでは、あなたは私が今話していることが真実であることを常に知っていました。約 11 年前、あなたが私を初めて訪問したことを覚えていますか？あなたはそのとき私に、よく私の近くに座っていたと言いました。あなたはそれを自分の苦行と呼んでいました。そうですね、赦免に向けて進むために罰を受け入れること以外に苦行とは何ですか？」

「親愛なる友よ、あなたの啓発的な考えは私を元気づけてくれます。しかし、この冒険を続けるなら、今すぐ行かなければなりません。出席すべき会議があります。」

雲との競争もなく太陽が昇ってきました。若いジェイコブがほとんど人通りのない通りを早足で歩いていると、朝のさわやかな空気が彼の顔を冷やしました。時々、彼は氷床で滑ることがありました。決して足場を失うことはなく、滑る驚きを楽しんでいるように見えました。30 分以内に、彼は目的地に到着した。彼は勢いよくドアをノックした。

「私はこの場所を知っています」とスクルージは言いました。

「当然のことよ」とマーリーは答えた。

ドアが開き、暖かさの中に若いエベネザー・スクルージが立っていた。

「入ってください、ジェイコブ。」

彼らは一緒に、燃え盛る火の近くに椅子が二つ置かれた部屋に入った。それぞれが座り、ジェイコブがグレートコートを脱いで椅子の背もたれに置いていた間、スクルージは声を静めた。「えと、それでは私のパートナーになる準備はできていますか？」

「そうですか。お金は持ってきました」「全部？」スクルージは尋ねた。

「全部だよ」

「あなたには 100 ポンドしかないと思っていました。最後に会ったときに、残りの 100 ポンドは 2 年間で支払うと言いましたか？」

「私はそうしましたが、裕福な後援者を確保しました」とマーリー氏は言いました。

「同様に。もっと良い条件だと思いますか？」

「ああ、そうだね、ずっと良くなつたよ。」

「いい、ビジネスセンスがいい」スクルージは薄い唇にかすかな笑みを広げながら言った。

「確かに」マーリーは言った。

「そうですね、書類は作成しました。しかし、条件が変更されたので、契約書を変更する必要があります。」

スクルージは羽ペンとインクを取り出し、数行取り消し線を引いて、契約書の一番下に「全額支払った」と付け加えた。そのとき、彼は妹のファンに参加を呼びかけた。2人は変更を開始し、その後パートナーシップを正式に発表しました。ファンも証人として契約書に署名した。

スクルージは男たちに任せながら、「彼女は一ヶ月後に結婚するんだ。私は彼女の婚約には乗り気ではないが、父は彼のことが好きだと聞いている。それで私の意見が何の役に立つというのか？」と言いました。マーリーはその質問が修辞的なものであると感じたので、何も言わなかった。代わりに、彼はスクルージにお金の包みを手渡しました。紙幣を数えた後、スクルージは「よかった、私たちは一緒にビジネスをしているんだ」と言いました。仕事を終えた二人はブランデーの杯を分け合つた。二人とも会話が上手ではなかつたので、それぞれ静かに座つて飲み物を飲みました。

その後間もなく、マーリーは別れを告げて兄の家に向かつた。彼が到着するまでに、パーティーは1時間以上続いていた。

「私はあなたのことを諦めようとしていたのです」とノアは言いました。「おじいちゃんのワッセイルを作りました。一緒に乾杯しましょう。」

ヤコブは温かい杯を受け取りました。それから彼らはリビングルームに入ると、フローラが彼らを出迎えました。彼女の妹のジョアンは椅子から立ち上がつた。4つの杯がカチャカチャと音を立てながら、ノアは「この祝日が私たち全員が望む喜びをもたらしますように」と言いました。

フローラとジョアンは元気よく「ワッセイル」と言った。ジェイコブは自身の弱点である「ワッセイル」で追撃した。

「ジェイコブ、あなたがここに来てくれて本当にうれしいです。今年はあなたに特別なものを買ってあげました。もしあなたが来なかつたら、私は悲しんでいただろう」とフローラは言いました。

ジェイコブは目を伏せ、緊張してこう言いました。「何ももらわなければよかったです。」

「なんて、そんなことはナンセンスです。私たちの愛の表現なしに夫の弟を手放すことは絶対にありません。それに、今年は特別です。ノアは一週間前に昇進すると告げられました。」

「そんなことは聞いたことがありません」とジェイコブは好奇心旺盛にノアを見つめながら言いました。

「本當です。昨日がメインテストでした。プレッシーさんは、私がクリスマスイブを彼の助けなしでこなせるようになつたら、私をマネージャーにすると言いました。私たち二人はうまくやつたと思います。その店は百十ポンド以上の売り上げを上げました。無事に終わつたようです。同意しませんか？」

ヤコブは話そうと口を開いたが、ノアを見つめるだけで沈黙した。

「さて、プレゼントを開ける時間です。それから食事をしましょう」とフローラは言いました。

ノアとジョアンの両方からプレゼントを渡されたフローラを除いて、各人は1つのプレゼントを受け取りました。フローラは一番多くのプレゼントを持っていたので、ジョアンからのプレゼントを開けるところから始めました。他の人たちが見守る中、それぞれが順番にプレゼントを開けました。それぞれの贈り物に興奮の騒ぎが起つた。ノアの新しい眼鏡に対して、彼がついに見えるようになったという皮肉がなされました。ジョアンは香水を受け取り、ジェイコブへのフローラとノアからの特別な贈り物は、最終的にはビーバーの皮のシルクハットになりました。「これで、あなたはとてもおしゃれに見えるでしょう。女の子たちはあなたの影にしがみつくでしょう。」とフローラは言いました。

どれも嬉しいプレゼントだったが、騒動を引き起こしたのはノアからフローラへの最後の贈り物だった。1813年6月7日のスター新聞の迷彩から、塗装された木箱が現れました。箱の美しさに、ジョアンは目を見開き、フローラは下顎を開き、ジェイコブは額をこすりながら咳き込みました。

「蓋を開けてください。」

フローラはとてもそっと箱の蓋を持ち上げました。彼女はノアに何を期待すればよいのか全く分かりませんでした。彼は、高価な宝石を箱に入れるのと同じくらい、飛び出して彼女を驚かせるようなものを箱の中に入れる可能性が高かった。蓋が半分も上がる前に、箱の中心から「グリーンスリーブス」の曲が飛び出しました。それは彼女のお気に入りのメロディーだったので、フローラから興奮の涙が流れました。

贈り物を分かち合う喜びが終わった後、4人はダイニングエリアに行き、完璧に調理されたガチョウ、ヤムイモ、レーズン入りの焼きリンゴ、そして今まで食べた中で最高のプラムプディングを食べました。

ジェイコブは食べ物を試食せずに食べ、他の人たちがプリンを食べ終える前に、立ち去る必要があると告げました。

「まだだよ」とフローラは言った。

ノアは「ヤコブ、なぜ急いで逃げなければならないのですか」と尋ねました。

「昨日、今日は約束があるって言いましたね。」

「この約束は何ですか？午後中ずっと緊張していましたね」とノアが言いました。

「そうですね、今なら言えると思います。私はエベネザー・スクルージと取引を始めるつもりです。私たちは最終決定しました」今日の合意はNGだ。」

「なんてエキサイティングなニュースでしょう」とフローラは言いました。

「なぜそんな秘密が？」ノアは尋ねた。

「あなたが怒るのではないかと心配しました。」

「ジェイコブ、私はあなたがいつまでも使い走りをしているとは思っていません。嬉しいです。いや、実際のところ、私はあなたを誇りに思っています。」

「ありがとう、ノア、でも行かなきやいけないんだ。」

「まあ、もしそうしなければならないなら。一皿の食べ物を家に送りましょう。」

「いいえ、大丈夫です。それに、待っている時間もありません。」それ以上何も言わずに、ヤコブは立ち上がった。

「私があなたを追い出します」とノアは言いました。

二人は一緒に玄関まで廊下を歩いた。「来てくれてありがとう、ジェイコブ。それで、店を出るんですか？」

"はい。一週間くらいで。」

"大丈夫。月曜日にお会いしましょう。メリークリスマス、兄弟。」

「ノア、今までありがとう。」

そう言ってジェイコブは家を出てアパートに直行しました。

スクルージは「なぜ兄に嘘をついたのですか？」と尋ねた。

「心に悩みがありました。」さらに彼はこう付け加えた。「その間、憂鬱な気分が私を襲いました。それは今でも私を捉えています。」

「あなたの真面目な性格があなた以外の何ものでもないとは思いませんでした。」

「それが私になったのです。でも、少年の頃、ノアと私はいつも笑っていました。」

「それは驚いた」とスクルージは言った。

「さあ、今日は新しい日です」とマーリーは言いました。

クリスマス後の月曜日 ノアは早く起きた。彼は興奮しながら、仕事での進歩をもたらすと信じていたことに備えました。彼は別の日の寒さの中に出で、銀行に向かって歩きました。彼は、約束されていた昇給が得られたら、すぐに暖かいコートを買おうと決心した。銀行が開く 10 分前に到着したノアは、ドアの前を歩き始めた。余分に体を動かしても、体を温める効果はほとんどありませんでした。彼が行ったり来たりしていると、店のオーナーであるバーソロミュー・プレッシーが後ろからやって来て、彼の肩をたたきました。ノアは振り返り、驚いて「おはようございます、先生」と言った。

「ノア、ここで何をしているの？」

"夫人。スウィンバーンの到着が遅れたので、クリスマスイブの資金を入金できませんでした」とノアさんは言いました。

「なるほど、クリスマスは楽しかったですか？」

「ああ、はい、先生、とても嬉しいです。そしてあなたの家族は？ 休日は楽しかったですか？」

「特にルーベンと過ごした時間は素晴らしいです。彼はケンブリッジにいるので、ほとんど会うことができません。」

銀行がドアを開くと、二人の男はその銀行に入った。ノアは預金を取り出そうとカバンを外し、途中で立ち止まった。彼は腕をバッグの中に押し込み、端の周りを探り、それから空の手を取り出しました。自分の触覚を信じず中を覗いてみたが、資金らしきものは見つからなかった。

ノアの心配そうな表情を見て、プレッシーは「どうしたの？」と尋ねた。

「お金です。消えてしまいました。」

「なくなってしまった。それで何をしたの？」

「カバンの中に入れておきました。」

二人の男は顔を見合わせた。ノアの顔の苦悩は、震える唇に表っていました。プレッシーの増大する怒りが、目を細めて明らかになった。「それはどこにあるでしょうか？ あなた以外にあなたのかばんにアクセスできた人はいますか？」

「誰もいないよ。しかし、銀行に行く途中で二度転びました。しかし、そのたびに、名誉ある人物と思われる人物がポーチを返してきました。」

「名誉あるハムバグだ。それはスティーブン卿でした」とスクルージは言いました。

「気をつけて、エベネザー」とマーリーが言った。

「他に誰がいるでしょうか？ 返す前にカバンを開けたのは彼です。」

「彼がお金を取り出すのを実際に見たのですか？」

「いや、でも…」

「それでは気をつけてください、エベネザー、間違った考え方はあなたを傷つけるでしょう」とマーリーは主張した。

プレッシーは「ノア、そのお金の責任はあなたにあります。」と言いました。

「私は知っていますし、その責任は私が負うつもりです。何が起ったのか分かりません」とノアは語った。

「どうしてお金がなくなっていることに気づかなかったのですか？ バッグの中に重さがなかったので、お金が入っていないことがわかりましたか？」

「小銭を持っていけば良かったのですが、銀行に行くのが遅かったので店に預けることにしました。」

「それでも、私にはあなたを逮捕する以外に選択肢はありません」とプレッシーは言った。

「お金を返すために働かることはできないでしょうか？」

「私は信頼できない従業員を雇いません。あなたの信頼性のなさは許せません。」

スクルージは幽霊のような友人を見て、糸状の髪を引っ張っているのを見つけました。引っ張り声はガクガクと変わり、突然パチパチという音とともに髪の毛が抜け、頭蓋骨の一部だけでなく脳の物質も一緒に運ばれました。片手を解放するとすぐに、もう一方の手でも同じプロセスを繰り返しました。奇妙なことに、脱毛によってできた穴は瞬時に埋まり、彼は苦痛なプロセスを何度も繰り返すことができました。

プレッシーが巡査を呼んでいる間、ノアは足の前の空間に目を集中させて静かに立っていました。ノアは簡単に逃げることができたでしょうが、銀行内の名譽ある人物は全員追いかけたでしょう。5分以内に被告はニューゲート刑務所に連行された。途中、人々は立ち止まって、瘦せていて身なりの良い男性の姿を見つめていました。身なりの悪い、がっしりした巡査に道を案内されていたが、「彼を絞首刑にするつもりか？」と尋ねる気概を持っていたのは幼い少年だけだった。

「一緒に移動してください。」

銀行に最も近い刑務所であるニューゲートが、銀行が立っていた地域を支配していた。その巨大な石ブロック構造と三重の入り口は、強さと危険さの両方の雰囲気を作り出しました。建物の大きさの割に入口のドアが狭かったです。巡査が木をたたくと、ノアの脳裏に動物の罠のイメージが浮かんだ。犠牲者は中に入るが、そこを通って誰も自由に戻ることはできない。背筋に悪寒が走った。「私はここにいるべきではありません。私は何も間違ったことはしていません。」

"静かな！"

「お願いです、お金を見つけると約束します。」

「盗む前にそれを考えるべきだった。」

ノアは話そうと口を開いたが、巡査が人差し指を唇に当てて「次の言葉を後悔することになるだろう」と言ったとき、立ち止まった。

中に入ると、尿の匂い、腐った死体、そしてあらゆる悪臭がノアの鼻に漂い、ノアは吐きそうになった。男性たちは暗くて短い廊下を通って小さな部屋に案内されました。黒いスーツとつばの広い帽子をかぶった身なりの良い男が部屋のドアの鍵を開けた。部屋の中では、男性が壁に背を向けて床にうずくまって座っていました。ノアが部屋に押し込まれたとき、彼は新参者たちに何の認識も示さなかった。何も言わずにドアがバタンと閉まり、閉じ込められた二人は窓も照明も家具もない空間に取り残された。

闇がノアの芯まで浸透し、直火では暖められないほどの寒気を引き起こした。座っていた男は立ち上がってノアに歩み寄り、拳ひとつで彼を気絶させた。ノアが気づいたとき、彼は自分がどれほど長い間忘却の中にいたのか見当もつきませんでした。彼が最初に気づいたのは、靴もコートも履いていないということでした。冬のような部屋の気温で感覚が麻痺し、見当識を失い、体が震えた。彼は自分がどこにいるのか、どうやって石の床に横たわったのか思い出せなかった。彼の目が捉えた唯一の光は、ドアの下から流れ出る光だった。そして、その光が彼の心を照らしたかのように、失われたお金、逮捕、襲撃のことすべて思い出しました。彼は飛び起きて、襲撃者が座っていたと記憶している方向を向き、「服を返して！」と叫びました。

反応のない静寂がノアの痛む頭全体に響き渡った。あまり熱意を失って彼は同じことを繰り返しましたが、同じように沈黙しました。ノアは落胆し、寒さと増大する恐怖に震えながら部屋の真ん中に立っていた。彼は再び襲撃者の餌食になるかもしれないという恐怖から、動くことも話すことも怖かった。ドアが開いたとき、静けさが破られた。その時になって初めて、ノアは自分の襲撃者が排除されたことに気づきました。戸口には警備員が少年の首輪を掴んで立っていた。ターンキーは子供を独房に放り込んだ。⁷⁰ ポンドの若者がノアの胸に激突し、彼を3フィート後方に押し飛ばした。二人の落下を阻んだのは壁だけだった。ノアはバランスを取り戻した後、子供を立ち上がらせ、「大丈夫ですか？」と尋ねました。

「手を離すなよ、野郎。」

「安心してください、私はあなたを傷つけません。」

「ただ自分自身に留まってください。」

薄暗い光の中でも見えるのはマーリーとスクルージの二人だけだった。若者がノアから後ずさりすると、マーリーは兄の後に移動した。マーリーはノアの背中から数インチ以内に立って、自分の胸の中心に手を押した。ハートのチェーンが回転するファイヤートワラーの中にあります。彼は捕らえたブレイズの1つを除いてすべてを肩に移し、

次に残りのトワーラーに心臓を突き刺す鎖を回転させ始めるように指示した。炎がちらつくたびに、鉄の円形の輪はますます速く回転し、ついには消えてしまったように見えました。その後、マーリーは人差し指の端を噛みちぎった。彼は指の露出した骨を回転する金属の上に置き、胸から火花を散らしました。彼から出ると、ちらつきが弟の中に入ってきた。ノアはその熱さを理解していませんでしたが、それでもそれを感じました。ゆっくりと彼は震えを止めるのに十分な温度になりました。マーリーはドアが開くまでこのプロセスを続け、ドアが開いた時点で残りのファイヤートワラーをハートチーンに戻しました。

数秒間、光の洪水でノアの目は固く閉ざされました。男はノアを指さして、「ついて来い」と言った。目を細めて見つめながら、ノアは言われた通りにした。ターンキーは、ノアを右と左の迷路を通って狭い廊下に沿って突き進み、オフィスに入るまで、そこでは男性が机に向かって本を読んで座っていました。暖炉の灯りが、ノアが家を出て以来初めて感じた本当の温かさを感じさせた。

その男は文書をすべて読み終わるまで読むのをやめなかった。頭を上げて読書の主題を見つめながら、彼は言った、「あなたはとても勇敢な人か愚かな人かのどちらかです。あなたはどちらだと思いますか？」

「不運だと思います...」

「話すように頼んでないよ！」男は叫んだ。「いつもこんな無愛想なの？」

ノアさ何も考えず、靴を履いていない足に目を向けた。数秒返事を待った後、その男は続けた、「まあ、あなたは愚かでしょう。あなたは聞かれていないときは話し、質問されると黙っています。それで、私たちはあなたをどうするつもりですか？」

ノアは再び沈黙を保った。「そうですね...」判事は報告書に目を落とし、続けてこう言いました。「マーリーさん、この辺がどうなっているか教えてください。」彼はノアを診察し、「あなたはいつも靴とコートを着ずに通りを歩いているのですか？」と尋ねました。彼は返事をするために立ち止まり、机を拳でたたきながら「答えてください、マーリーさん！」と叫びました。

判事の要求に唖然としたノアは、すぐさま「待機している独房の男が盗んだものです」と答えた。

判事は微笑みながら、「よく盗まれるようですね。なぜだと思いますか？」と言いました。「あなたはニューゲートの法則を学んだばかりです。自分を守らなければ、すべてを失います。あなたは私や他の自動販売機から甘やかされることはありません。ベッドも暖かさもなく、食べるものも多くなく、きれいな水を飲むことさえできない法を遵守する人々がたくさんいます。それで、なぜあなたが彼らよりも優れたものを手に入れる必要があるのでしょうか？」これは返答が得られないだろうし、返答も望んでいない

ことがわかっていた質問だったので、彼は立ち止まることなく続けた。「ロンドンの治安判事は私の職業であり、自動販売機も同じです。私たちはあなたや社会に良いことをするためにここにいるのではありません。私たちは生計を立てるためにここにいます。あなたが受け取るものはすべて私個人にお金がかかります。したがって、あなたに与えられるのは法律で要求されているパン 1 ポンドと水だけです。それ以外のものは購入する必要があり、そうでなければ外部の誰かがあなたに持ってくる必要があります。私には何も期待しないでください、そして私たちは両方とも幸せのままで。私は自分のことをはっきりさせていますか？」

ノアは、その言葉が聞こえたことを確認するためにうなずいた。

「あなたはおとなしいですね。それがあなたにとって有利に働くかもしれません、私にはそれが疑わしいのです。私にはあなたは死人のように見えます。服を着替えなければ、あなたは三日以内に死ぬでしょう。彼をここから連れ出してください。」判事は、別の新参者を脅迫しただけのことを考えて楽しんで笑いました。

迷路のような廊下を突き抜けたノアは、ほとんどが男性がいる大きな部屋に押し込まれた。二人の女性と一人の少年が暖炉から一番遠い隅で身を寄せ合っていた。肌の色が浅黒い女性が少年の首をこすっていた一方、もう一人の女性は綿棒を湿らせたウイスキーのカップを持っていた。4人を除く全員が、燃え盛る火の近くの長いテーブルの周りに座っていました。6人はトランプをしており、5人はビールを飲み、最後の3人は集まってささやき合っていた。テーブルにいなかつた4人のうち、3人はサイコロを転がしており、最後の1人は女性と少年の近くの金属製の壺に放尿していた。ビールを飲みながら顔を上げて新人が入ってくるのを眺めていたのは、数人の男性だけだった。

警備員が入り口を警備している間、ノアは門の方を向いた。彼は、路上で二度も見ることのなかつた人々の中に閉じ込められ、冷たく、混乱して立っていた。ゲートウェイの閉鎖により、感情の水門が開きました。何の前触れもなく、爆発的な怒りが彼を圧倒した。彼はドアが開いているかのようにドアに向かって走った。彼はその音が部屋中に聞こえるほどの力で木に向かって飛びつき、その後、全員の顔が彼のほうを向いた。サイコロは暖炉に転がり、カードは手から落ち、ビールは顔の毛に飛び散り、少年が立ち去ると女性たちはノアに近づき、会話に没頭していた3人はためらってから話を続け、放尿中の男性はポットを見逃した。

ノアは呆然としてテーブルの方を向いた。一人一人の人物を調べて、彼はすぐに探している人物を見つけました。次の瞬間、彼は悪党に向かって走り始め、「コートを返せ！」と叫びました。彼はコートを着ている男性の襟を掴み、あまりにも強く引っ張ったため、ベンチから引きずり出され、衣服から引きずり出された。二人はそれをめぐって争いを始めた。「あなたは私のコートを盗みました。」

「私が買ったんです」と男は立ち上がるのに苦労しながら言った。

それぞれが互いに打撃を合わせた。戦いは、実際にコートを盗んだ男がノアを回転させ、顎に拳を当てたときに初めて終わりました。この数時間で二度目の出来事で、ノアは意識を失い床に倒れた。

意識が戻ったノアは、二人の女性と一人の少年が自分の上に立っていることに気づきました。正気に戻りながら、黒人女性は言った、「もう静かに、ハニー。敵を作つてここに入るつもりはないよ。」

ノアはその女性をまるで別の惑星から来たかのように見ました。すると、グループ内的一人の若い男性が彼の混乱を察知し、「彼女はアメリカから来たのです。自由の国から自由へ逃げてきたのです。彼女に任せてください。彼女は大丈夫です。ひどい虫刺されを助けてくれました。」と説明しました。

「知事、あのジェームス・マクシーには近づかないでください。彼は妻と娘を毒殺しました。そして彼はあなたにも敵対するでしょう」と2人目の女性が言った。

ノアは座つて顎をこすり、「ジェームズ・マクシーって誰?」と尋ねた。「なんだ、君のコートを着ているのは彼だ。君を気絶させたネイサン・シモンズから買ったのだよ。」

「私はその腐ったものを手に入れるつもりです。」

「いいえ、あなたはそうではありません。私は今あなたの世話をしています。そしてあなたも彼に近づかないでください。」黒人女性はノアの顎を触るために立ち止まり、「私はダイナ・スミスです。私の本当の姓は正確には知りません。アフリカに残ったのです。ディーと呼んでください。私にはもう何もかもが足りないです。何もかもが壊れたと思わないでください。」と続けた。

「何しに来たの?」少年は尋ねた。

「誤解だ」ノアはつぶやいた。

「まったく、それが法律違反だなんて知りませんでした。もし重い罰則が科せられたら、私は二度と出られなくなるかもしれません。でも、自己紹介させてください。私はジョセフ・フリーマン、スウェル・ギャングのメンバーです。ギャングのことを聞いたことがありますか?」

「いいえ、そんなことは信じないでください。」

「同様に、あなたも彼らの一員だと思われれば、混雑した劇場を通り抜けるのは簡単です。決して裕福ではありませんが、彼らは金持ちです、まあ、彼らは金持ちです。」ジョセフは立ち止まってノアの顔のこぶを見てから、「私はギャングの中で一番のひしゃ

くだ。少なくとも彼らが私を捕まえるまではそうだった。おそらくこれから絞首刑になるだろう。私の一番の仲間は少し前にロープに遭った。私も同じだろう。」と付け加えた。身なりの良い青年はノアと握手を交わし、「この素晴らしいテントウムシはマーサ・ハートです。私はいつでも彼女に心臓を差し上げたいと思います。」と付け加えた。

「よろしくお願ひします、ミスター…」彼女は立ち止まり、ノアからの返事を待った。

「マーリー。ノアと呼んでください」

「ミスター・マーリー、あなたは感じの良い人で、私には販売できる楽しい経験があります。ここでやるのはちょっと難しいですが、不可能ではありません。」彼女はインクして、「あなたの靴はあそこでリーヴァイと一緒に歩いていると思いますよ」と付け加えた。マーサは暖炉の横に立っている男性を指差して、「取り戻してあげましょう。彼はユダヤ人ですから、誰も助けてくれません。コートがなくなってしまったのです。日中は炎の近くにいるほうがいいですよ。」と付け加えた。

ノアはリーヴァイを見て、その靴が自分のものであることを確認した。4人は集まって、盗まれた靴を取り戻すための戦略を立てました。

マーリーはマクシーに向かって歩きながら、「彼らはあの卑劣な殺人者に対して何もできないかも知れないが、私にはできる」と言った。

スクルージは友人を訪ねて電話した。「ジェイコブ、ジェイコブ、何をしているの？」

「彼にとって生活が不快なものになっている。」

マーリーはマクシーの前に立ち、爪で前腕の皮膚をはがして粉状にし始めた。皮膚を細断した後、マーリーは表皮の下の幽霊のような組織を削り続けた。数分も経たないうちに、彼の前腕全体が骨まで埃の山になった。彼は胸が通常の二倍の大きさになるまで息を吸い、それから幽霊のような空気を保ったまま、ボロボロの腕をマクシーの前に差し出した。素早く手を離すと、彼はこの世のものとは思えない肉の山を顔に吹き飛ばした。すぐにマクシーは立て続けにくしゃみをし始め、それから必死で皮膚をこすり始めました。

「もう一度やるか、必要ならもっとひどいことをする」とマーリーさんは腕の全体像が再び現れながら言った。スクルージに復帰する間、彼は「彼はすぐにはこの問題を乗り越えることはないだろう」と冗談を言った。

「そんなことやってもいいですか？」

「いいえ、エベネザー、もし腕を引き裂いても、怪我の一部は肉体に残るでしょう。天使の幸運があれば、死ぬときにそのようなことをする必要は決してありません。」

「天使の幸運ですね」とスクルージは言った。

マクシーさんはくしゃみや咳をし続け、近くにいた人全員が後ずさりするほどだった。

独房のドアが勢いよく開いた。エントランススペースのほぼ全体を占める巨大なターンキーが立っていた。「よし、このクソ野郎ども、庭に出る時間だ。君たちの犬の中には人を待たせている奴もいる。急いでくれ、無駄にする時間はない。」

ノアを除く全員がドアに向かって急いだ。列の最後尾だったので、門番はノアを呼び止め、「最後に外に出ると通行料金が支払われます。それは一ペニーです。」と言いました。

ノアは激怒して、「お金を払わないことにしたらどうするの？」と尋ねました。

「それでは、檻の中にいる自分によく似た若者と話すことはできません。家族の類似点は双子のようです。あなたもそう思われませんか？」

ノアは靴下のつま先からコインを取り出し、強奪者に投げました。「これがあなたの血まみれのペニーです。」彼は急いでハスキーのターンキーを脇に踏み出し、彼を待っていたジョセフを追った。彼らは一緒に狭い庭へ向かいました。冬の極度の寒さが狂犬の牙のように彼の皮膚を貫通し、惡意はなかったが、それでも大きな害を与えた。ノアは通りに面した鉄格子の囲いへ急いだ。通りの側で待っていたのはジェイコブでした。ノアはフリーサイドにつながるバーに触れる前に、兄にコートと靴を譲るように命じた。

「あなたのものはどこですか？」

「そんなことは気にしないでください。今すぐあなたのものをください！」ヤコブは指示どおりに行動しました。彼がコートをバーに通したとき、金属の拍車が彼の腕に引っかかり、切り傷を負った長さは2インチ以上。ジェイコブは「ひどい！ あれは何だ？」と叫びながら飛び退いた。

二人は一緒に鉄の棒を調べ、誰かがナイフを持って金属に切り込み、鉄の一部が本体から丸まって離れていることを確認しました。とげは鋭い先端を作り、近くを通るものは何でも引っ掛かります。よく見てみると、誰かがバーを切るスポーツをしていたことがわかりました。いくつかは、さまざまな長さと厚さの金属突起が突き出ていました。ヤコブは慎重にノアに靴を手渡しました。ヤコブの服を着ると、残った熱でノアの足の指がチクチクしました。足の感覚が戻り始めると、リーヴァイから靴を取り戻すという考

えが彼を去った。ノアはしびれの痛みよりも熱さの快感でうめき声を上げた。すぐにジェイコブは寒さを跳ね返そうと足から足へ飛び跳ね始めました。

「プレッシーさんは私を解雇しました」とジェイコブは言いました。

「どうせ辞めるつもりだったんだ。助けてほしいんだ。」

「聞いたらすぐに来ました。」

「来てくれてありがとう。持っている中で一番暖かい服を持ってきてほしいんです。下着からブーツ、帽子まで全部持ってきてください。」

「明日持ってきます。」

「お金を持ってきてください。少なくとも毎日数ペニーです。それと食べ物、そして水。あなたを頼りにしています、ジェイコブ。あなたが私の代わりにこれをやってくれると思いますか？」

「はい、もちろんです、ノア」

「いいお兄さんだよ。フローラは知ってる？」

「私はそうは思わないが、ニュースがどのように伝わるかはご存知だろう。」

「私から離れたらすぐに彼女のところに行ってください。彼女に伝えてください。ただし、彼女をここには来させないでください。」

「どうすれば彼女を止められるでしょうか？」

「分かりません。彼女にこんな姿を見せるわけにはいきません。ジェイコブ、あなたが彼女をこの悲惨な場所から遠ざけてくれることを期待しています。」

「全力を尽くします。」

「プレッシーさんは何が起こったのか教えてくれましたか？」

「はい、彼は私を解雇するときにそうしなければなりませんでした。」

「私はそのお金を盗んでいません。信じますよね？」

「はい、もちろんそう思います。」

「ああ、ありがとう、兄弟。あなたが私を信頼することが私にとってどれほど重要であるかあなたはわかっていません。」

「たとえお金を持っていなかったとしても、あなたがお金を盗まないことはわかっています。」

「まあ、そこまで行くかは分からぬけど」

彼らは互いに微笑み合ったが、笑うには事態は深刻すぎた。

「そのお金がどうなったのか調べてもらいたいのです。」

「どうやってやればいいの？」

「スウィンバーン夫人が支払ったメモを探してみてください。それを私に渡す前に、彼女はそれにキスの跡を付けました。彼女の唇の跡を探してください。」

「彼女はおそらく、ほとんどのノートでそうしているでしょう。彼女はすべてのパンツ、さらにはスカートの一部をはいてもイチャイチャします。」

「はい、はい、でも今回は違いました。」

「どういう方法で？」

「彼女が私に請求書を手渡すとき、彼女の手でルージュが汚れ、唇の上部に指紋が残りました。」ノアが続けた間、スクルージはマーリーを見つめた。「結局、彼女の唇の跡は、配偶者を探す誘惑者というよりも、子供を黙らせる母親のように見えるパターンを作り出しました。」

スクルージがマーリーを見つめると、若いジェイコブは目を丸くした。「その法案は知っています、ジェイコブ」とスクルージは言いました。

「あなたが覚えていても不思議ではありません。」

「どうして自分の兄弟にこんなことができるの？」

「エベネザー、どうして私が誰かにそんなことをすることができますか？なぜ私が誰かにそんなことをするのですか？」彼は立ち止まり、それから自分の質問に答えた。「チャンスが突然現れたので、私はそれを掴みました。」

「はい、でも私たちがパートナーになったお金を盗んだのですか？」

「私の精神は、そのお金を盗んだという重荷を半世紀近く背負って生きてきました。そして今、私の心には時間だけでは決して解けないという束縛がかかっています。」

「あなたの苦しみはノアの苦しみに比べれば大したものではありません。」

「しかし、確かに、すべての人は苦しみを抱えているのです。」マーリーは心の鎖を引きちぎりながら、苦悶の叫び声を上げた。傷口からは幽霊のような血と粉塵が噴き出す。一瞬のうちに心臓は自己修復し、以前よりも大きな鎖が激化した苦痛で心臓を掴みます。

「今後もお手伝いできるかわかりません。」

「それなら、家に連れて帰ろうかな。」

**** 五線譜 3 ****

捕まえてから制御する

スクルージが言葉を発する前に、マーリーは 1813 年からスクルージをひったくりました。スクルージはかすかな抗議のため息をつきましたが、苦悩する友人が彼を刑務所から引きずり出すのを許しました。マーリーの出発の猛烈な速さにより、スクルージは友人の突進に身構えた。マーリーが未来に向かって突っ走る中、活動の爆発がロンドンの変化を加速させた。バーリントン・アーケードがまばたきの合間に再び現れました。建物が上昇し、他の建物が崩壊するという急速な変化は、ロンドンに呼吸しているかのような錯覚を与えました。

マーリーは空に煙が立ち込めたときだけ速度を落とした。彼は舞い上がる噴石の影響を受けなかったが、スクルージは煙で涙を流しながら、灰で窒息しそうになった。彼はすべての音節をハックして尋ねました、「ジェイコブ、何が起こっているのですか？」

「コベントガーデン劇場が燃えている！」

「燃える？！ 50 年前の出来事だよ」

突然マーリーが立ち止まった。ロンドン上空で二人はお互いを見つめた。スクルージは続けた咳き込むと、ジェイコブは何の前触れもなくエベネザーの腕を掴み、有毒な雲の中から二人を真っ直ぐに撃ち落とした。

スクルージは咳払いをしてから、「もっと昔に私たちを連れて行ってくれたの？」と尋ねた。

マーリーはその時代を特定できる目印を見つけようとあらゆる方向を探したが、スクルージはそれを黙って見ていた。それから、何の前触れもなく、マーリーは「あそこだ」と叫びました。彼はテムズ川の向こうを指さした。「クリスタル・パレスはすでにシデナム・ヒルに移転しました。」

「だから、我々は現在にいるに違いない」とスクルージは言った。「宮殿——ほんの数年前に移転された理由。」

「この建物は数年前からそこにあるようです。」

「いや、そんなことあり得る？」

「建物の周りを見回してください、エベネザー。木々はかなり高く成長しています。数年ではそんなことは起こりません。」

スクルージは建物の敷地を調べてから、「おそらくあなたの言うことは正しいと思います。」と言いました。

「期限を過ぎてしまった」とマーリーはスクルージに対してというよりも自分自身に対して言った。

「戻れますよね？」

「こんなことは起こるはずがない。」

「でも、私たちは戻れるんです——そうでしょう？」

マーリーは答えなかった。代わりに、彼の考えは彼らの苦境を理解しようとするに集中しました。彼は実際に 1854 年を超えて彼らを推進できたでしょうか？

「新聞で日付がわかるよ」とスクルージが提案した。

ここでもマーリーは答えなかった。彼は街の 400 メートル上空に留まり、目を閉じて、自分の内なる瞑想の場所に釘付けになりました。まるでハッチが開いたかのよう、スクルージは重力に向かって急降下した。「マアアアアアアアアアアアアアア！」

マーリーは体を硬直させ、スクルージを急落させた。スクルージは叫び続けたが、マーリーが自分だけの沈黙の世界に囚われていることを知っていた。彼の下への競争は加速し、「ついに男の子を抱くことができるよ」という母親の声が聞こえました。その言葉で彼の恐怖は消え去った。彼が降りると、街の音が目立つようになった。彼は下を見ようとはしなかったが、大地の凍った指が上に伸びてくるのを感じた。奇妙なことに、彼は、彼を愛していると知っていた親からついに愛撫される準備ができていました。彼の

ために命を捧げ、それでもなお精神的に献身的な人。そこでエベネザーは避けられないことを考えて目を閉じた。

スクルージは、自分の肉体、いや、実際の命がすぐに粉砕されてロンドンの石畳の上に横たわることを予期して、全身の筋肉を落ち着かせた。彼の精神がリラックスに負けたとき、彼を超えた力が彼の腕をつかみました。驚いて、彼は正体を確認するために空を見上げた。風に揺れる黒いマント。布がはためき続けると、エベネザーはマントの下に骸骨の骨があることを確認した。そして彼は叫びました。

まだ来ないクリスマスの亡靈に翻弄されながら、スクルージは尋ねた、「私は死んだのか？」幽靈は上向きに動き始めたばかりです。恐怖に駆られたスクルージは身をよじり始めた。彼は幻影から自由になることを望んでいたが、幽靈は彼のコートをきつく掴むだけだった。

一度マーリーと互角になったとき、まだ来ないクリスマスの幽靈がスクルージを友人の頑なな精神に投げつけた。マーリーはかろうじてひるみました。スクルージが次の息を吸い込んだとき、幽靈は再び彼をマーリーの中に押し込みました。黒マントの幽靈は繰り返し、生者を強制的に死者へと追いやった。スクルージは抗議したが、効果はなかった。幽靈があまりにも頻繁に、そしてとても力強く彼らと一緒に駆り立てるので、マーリーはついに警戒するようになった。

マーリー内の霧は混乱からパニックへと急速に変化しました。「この幽靈はあなたを滅ぼすでしょう」と彼はエベネザーに警告した。「彼の骨が肌に触れないようにしてください。」幽靈は二人を突きつけ続けた。虐待は続いたが、どちらの男性も幽靈の動機を理解していなかった。ついにスクルージはマーリーの袖を掴んで「やめろ、ジェイコブ！」と叫びました。瞬間、幽靈は二人を 1854 年に連れ戻しました。

その後、スクルージは再び重力に屈し、数フィート落下しました。衝撃の瞬間、彼の膝は地面に折れました。マーリーはスクルージの肩の下に腕を置き、立ち上がらせた。
「怪我はありませんか？」彼は尋ねた。

「今日、私は石畳の上に横たわる運命にあったと思う。」

マーリーは友人を疑問の目で見つめたが、「まだ来ないクリスマスの幽靈が私たちを救ってくれた」とだけ言った。

「またか」スクルージは答えた。

マーリーさんは友人が何を言っているのか分かりませんでしたが、それは重要ではないと考え、エベネザーを家に連れて帰るという任務を続けました。

彼らがスクルージのドアに近づくと、マーリーの胸がオレンジ色に輝き始め、熱くなり、外側に向かって盛り上りました。スクルージは幽霊の虹色の皮膚の下で、心臓が鼓動するたびに友人の一本の鎖が脈動するのを目撃した。死んだ筋肉が鼓動するたびに、溶融金属がチェーンの表面に押し上げられました。「燃えてるよ！」マーリーは叫びました。「燃え上がってるよ！」彼の額から蒸気が抜け出すると、心臓の鎖の周りに新しい束縛が形成され始めた。

彼らは一緒に、2番目と3番目のリンクが金属の輪にくつつくのを観察しましたが、4番目のリンクがマーリーの皮膚に突き刺さるまで、スクルージは「ジェイコブ、戻らなければなりません。あなたは...攻撃を受けています！」と叫びました。

「リスクが大きすぎる！」

「私たちの勇気は強力になるだろう」とエベネザー氏は主張した。「私たちはそうしなければなりません-私はあなたのことを心配しています...」彼の声が遠ざかりながら、彼は焦点を合わせたマーリーの顔に傷を付けた。新しい鎖の苦痛に、マーリーは同意しながら顔をしかめた。ゆっくりと彼らは過去へ動き始めました。

1844年が過ぎ、次に1834年が過ぎ、1829年が28に移ったとき、最も新しいマーリーのチェーンは姿を消しました。1813年に彼らが定住すると、3番目のチェーンは消滅しました。彼らが刑務所に近づいたとき、マーリーの心臓には2つのつながりだけが残っていました。追加の抵抗は生じましたが、マーリーはすぐにその負担に適応しました。

12月28日というその日は、ロンドンのぼやけた歴史の中で最も濃い霧が発生していました。ニューゲート刑務所は霧と暖炉の排気が混ざり合ったスープ状の混合物でほとんど隠れていました。二人はノアの独房に近づくと、駅馬車が薪を満載したワゴンに衝突するのを眺めた。街中には衝突、滑落、急停止の音が響き渡り、旅行者は映像を目にすることができないことが多かった。

彼らが囚人たちの部屋に入ると、空気には暗い雰囲気が漂っていた。もやがかかっていても、マーリーとスクルージには部屋を圧倒する問題が見え、ノアはその真っ只中にいた。受刑者のほとんどは、ターンキーも同様に端から見守り、シモンズはまだ十数歳にも満たない少年を手荒く扱っていた。

「これは私に借りがあるのよ」とサイモンズは少年の頭から帽子を掴みながら言った。

「それは私のです！」ヘンリーは叫んだ。彼はかなりの抵抗を見せたが、その凶悪犯には太刀打ちできなかった。それは、ノアが少年を助けに来るまでのことでした。

「この子は私の所有物だ」とノアは言いました。

「人を所有することはできない。」

「それでも私はそうします」とノアは主張した。「さあ、私の財産を解放してください！」ヘンリーはノアを見つめて話そうと口を開いたが、ノアは激しい表情でヘンリーを黙らせた。

「もちろん、彼を解放しますが、帽子は私のものです。」

「いいえ、そうではありません」と、薪で泥棒を殴りながら、肌の黒い女性、ディーが言いました。

彼女の足元には、何の役にも立たないものが冷たく横たわっていた。ヘンリーは帽子を拾い上げ、ノアとディーの両方にお辞儀をしました。「ありがとう、知事。お二人にはお世話になりました。」

二人の大人は声を揃えて少年を歓迎した、「両親が要求するまで、君は私たちと一緒にいてね。」

「そうすれば、私は永遠にあなたと一緒にいます」とヘンリーはコメントしました。

ノアは孤児を見て、「永遠は十分に長いと思いますか？」と尋ねました。

3人は微笑んで、意識を失ったシモンズの体から離れた。犯人が無力で横たわっている間に、他の人が彼の所持品を盗みました。シモンズが意識を取り戻した時には、下着はからうじて残っていた。彼は憤慨して突撃した。復讐を誓い、彼はたき火の熱に近づき、そこに留まりました。

部屋の反対側に、ノアはディー、ヘンリー、そして他の2人の友人、マーサとジョセフと一緒に集まりました。「なぜここにいるのですか？」ノアはヘンリーに尋ねました。

「ジョセフは知っているよ」と彼は頭上にそびえ立つ凶悪な少年を見つめながら言った。

「彼は私の弟子です」とジョセフは言いました。

「彼はあなたのレッスンをいくつか欠席したようです。」ノアは彼の皮肉に微笑んだが、刑務所に入ったことすでに考え方が変わってしまったことに気づいた。なぜなら、ほんの2日前には犯罪についてそのような軽薄なコメントをすることはなかっただろうからである。

残りの一日は何事もなく過ぎた。刑務所では決して容易に眠れないので、その夜、ノアは近くの殺人者に襲われるかもしれないという恐怖を解放し、長い間待ち望んでいた休息に入ったとき、自分自身さえ驚いた。

夜明けの光とともに、いつものようにその日は男たちを眠っている地下牢からデイルームに連れて行った。唯一の違いは女性がいないことだった。ノアは彼らが遅れただけだと思ったが、その日は到着しなかった。尋ねると、ターンキーは「それはあなたには関係ありません」とだけ言いました。彼らがいなかつたら、部屋は一日中攻撃的な暗さをもたらしました。ささいな争いが数時間のサイクルを通して勃発した。ノアは少年たちと自分自身を争いながら遠ざけました。

その日静かだった他の男は、ノアが到着して以来一緒に集まっていた3人だけでした。彼らが自ら課した隔離は正常なことのように思えた。誰も彼らに興味を持ったことはなかったので、彼らは再び静かに自分たちの孤高の世界に固執しました。

その水曜日、ノアは訪問者がいないことを予想していました。彼は、家族や友人が受刑者と接触することを許可されている演習場への旅行を断念するところだった。しかし、逮捕された悲しみを晴らしたいという願いが、ノアをその日の凍てつく空気の中に送り込んだ。彼はさわやかなそよ風が彼の気分を高揚させることを望んでいたが、彼の願望がどれほど深刻に実現するかは見当がつかなかった。

冷たい空気が彼の顔を襲った。風の強さの衝撃で、彼の目の端には涙があふれた。天候と向き合わなければならなくなつたとき、彼の考えは自分の死の出来事を分析することに移つた。しかし、ノアは正しい結論に達することは決してありませんでした。彼の心には、ヤコブが彼の悲劇を引き起こしたとは想像できませんでした。彼が真実に近づくには、ノアの人格が崩壊する必要があります。それにもかかわらず、庭を一周していると、彼の緊張は緩み始めた。少なくとも彼の訪問者が到着するまでは。

ノアが受刑者が運動のために歩いて輪の周りを回っていると、面会者の檻の前に立っているフローラを発見して彼の歩幅が止まつた。彼女はそこに立って、黙つて彼を見つめていた。ノアは内心、フローラが自分の意に反したこと憤慨していた。E 内心、彼は彼女を見て興奮した。

「なぜここにいるのですか？」彼は要求した。

「だってあなたは私の夫だから。」

「この件であなたが苦しむ必要はありません。」

「それでも、私は喜んでそうします。」さらに、「ニュースをお届けします」と付け加えた。

「良い知らせですか？」

「いいえ、お知らせです。あなたの裁判は今日から2週間予定されています。」

「ジェイコブは私のために弁護士を見つけてくれましたか？」

「彼らは皆、多額の預金を望んでいます。私はその資金を見つける決意をしています。」

ノアは彼女を優しい目で見つめた。その瞬間、ノアは自分の裁判で代理人が得られないだろうと悟り、一番好きな話題である妻のことを持ち出した。

「来なければよかったですのに。」彼は目をそらしながら、「こんな風に見られたくなかったんだ」と付け加えた。

「あなたは私をこのことから守ることはできません。」

「できればいいのに」彼は独り言のようにつぶやいてから、フローラに話しかけた。
「あなたの笑顔が私を元気づけます。」

「あなたが朝たき火を起こしてくれたのが懐かしい、私は布団の中でゆっくり寝ているのに」と彼女はからかった。

「そして、寝る前にシーツを温めた後、同じシーツの間を滑ることができたのが懐かしいです。」

鉄格子の境界線が二人の完全な抱擁を妨げたが、それぞれが相手の手まで届いた。絡み合う指が情熱的に握りしめた。二人がお互いのホールドの中で長居していると、ノアは自分の握中に固い物体を感じ始めた。

フローラの目を見つめて、ノアは大衆の存在を認めた。両手を組むと、二人は物体が自分の間で回転するのを感じた。フローラは彼の手を引っ張ったが、彼は抵抗した。彼にとって、彼女の感触は彼の悲しみを和らげたので、どんな物質も彼女の感触を壊すことを許さなかった。

ノアがクラッチを放したのは、ターンキーの「近すぎる」ポリシーに促されたときだけだった。そのときになって初めて、彼女の祖父がスイスから彼女に持ってきた水晶の正体を突き止めた。それは亡くなる前に彼女に贈った最後の贈り物だったので、それが今手元にあるという衝撃が彼を心配させた。

"これは何ですか？" 彼はガラスのような宝石を見つめた。もちろん、彼は結婚生活中毎日、その石がフローラのタンスの上に置かれているのを見ていた。この石は石英の世界でも特別で、その中心には若い結晶の幻影が立っていた。結晶の内側の先端は黒い粉末状の鉱物で覆われていました。

「私たちは2つが1つになったこのクリスタルなのです」と彼女は説明した。

「おじいちゃんのものは受け取れない…」

「これは私のクリスタルです、ノア。それに、おじいちゃんがこれを私にくれたとき、私がこの石を『困っている愛する人』に渡す義務を感じる日が来るだろと言いました。彼は私に、この一つの石の中に二人の愛が込められていると言いました。」

「何か特別なことをしたほうがいいでしょうか？」彼は尋ねた。

「この石があれば、必要なときにいつでも私の力を使うことができます。」

「親愛なるフローラさん。ありがとう。」

「エベネザー、来てこれをよく見てください」とマーリーが要求した。それぞれがノアの両側に立って、その石の性質を賞賛しました。

「なるほど、それはすごいですね。煙突のすすの飛散が、成長の途中で先端に落ちたようです」とスクルージは言った。

「はい、それも完璧に形作られています。」

たとえターンキーがノアとフローラの「極度の愛情」違反を監視し続けたとしても、彼らはお互いの連絡範囲内に留まりました。かなりの時間が経った後、ターンキーはすべての受刑者にデイルームに戻るよう要求を叫びました。ノアは看守の叫びを無視した。

代わりに、ノアはフローラの手を唇に当てました。彼が彼女の指の裏にキスをすると、一羽の鷹が二人の頭上わずか数フィートのところで旋回を始めました。寒さに耐える鳥の姿に驚いたノアは顔を上げ、フローラにこう言いました。

警備員はノアの肩を掴み、フローラに触れられないよう引き離した。彼は怒って言った、「よく聞いてください、有罪判決者。私が話すと、あなたは反応します。二度と私を無視しないでください。すぐに移動してください。」 そう言ってノアは建物に向かって歩き始めた。ターンキーの激怒は、彼の輝かしい精神のために支払われる小さな代償でした。彼はフローラを振り返らなかった。嗚咽の恐怖で彼の目は前に進まざるを得なくなつた。その日、ノアは最後に中にいたため、喜んで看守にペニーを支払いました。

「何か言ってください、ジェイコブ」スクルージは言いました。

「リクエストは何ですか？」

「あなたはすでに起こっていること、あるいはこれから起ころうとしていることをすべて知っていますか？」

「いいえ、私は自分の生きた経験からの知識しか持っていません。」

「それではクリスタルのことを知らなかったのですか？」

「その通りです。実を言うと、フローラがノアを訪ねたことすら知りませんでした」とマリーは説明した。

エベネザー氏は「では、我々は裁判の結果を変えるためにここにいるのか？」と尋ねた。

「いいえ、それは不可能です。私たちは悲劇を完全に理解するためにここにいます。」

「最終的に何を変えるつもりですか？」

「ノアの悲惨さ」

それを聞いてスクルージは言葉を失った。彼は少し考えてから、慎重に尋ねました。「私は実際にそれを理解していました。しかし、どうやって...?」スクルージには、より多くの情報を得るために質問をどのように表現すればよいのかわかりませんでしたが、マリーは助けになりませんでした。友人は彼から目をそむけただけで、次の日に向かって動き始めた。

寒さと霧の冬のミックスが始まりましたノアの逮捕のこと。そして5日後の今、天候は異常事態となった。ロンドンは氷点下の日々に慣れていませんでした。ニューゲート内で、厳しい寒さから猛烈な極寒に変わったのは、受刑者たちがコミュニティテーブルができるだけ火の近くに押し込んだことだけだった。その日、受刑者のほとんどは火の周りに座っていました。彼らは生き残るためにそうしなければなりませんでした。仲良くなるのは別の問題だった。

その部屋にいた誰もが、マクシーとシモンズの両方を避けることを知っていました。その木曜日、一人の人間を避けるための行動が野性的であることが判明した。全員が閉じ

込められてしまった。ノアと彼のグループは、他のほとんどの人たちと同じようにテーブルに集まりました。三人の隠遁者は火の端に座っていた。彼らは他の囚人から逃げ続けた。しかし、この三人が他の囚人に対するスパイであるという噂が部屋中に広まったため、忌避は相互に行われた。

その日は部屋に何も価値のあるものをもたらしませんでした。囚人たちはそれぞれ、それぞれの個人的な苦しみを経験しました。ユーモアや物語を通じて気分を和らげようとする試みは、集団的な苦痛を和らげるにはほとんど効果がありませんでした。

「なぜあの人は床に横たわっているのですか？」ヘンリーは尋ねた。

「彼に近づかないでください。彼はネズミに噛まれました」とノアは説明した。

「彼は狂犬病を持ってますか？」

「マクシーかシモンズなら今頃彼を殺していたでしょう」とマーサは答えた。

「それで、彼の何が問題なのですか？」

「刑務所熱です。彼は死人ですが、まだ呼吸が止まっていないだけです」とディーは言った。

「なぜ誰も彼を助けないのですか？」

「ヘンリー、君は好奇心旺盛だね」とジョセフが言いました。

「狂犬病ほど伝染力はないかもしれないが、それでも刑務所熱は感染者を死に至らしめる」とノア氏は語った。

「彼を助けたいです。」

「ほら、ヘンリー、誰もあなたが病気になることを望んでいません。それに、彼は私たちとは違います。」

「彼は同じに見えます。それに、ディーも違います。彼女は女性であり、黒人でもあります。では、リーヴァイは何が違うのでしょうか？」

「彼の宗教だよ」とマーサは言った。

"おお。"ヘンリーは理解してうなずきましたが、その件に関してはそれ以上何も言われませんでした。

「それで、マーサ、あなたの話は何ですか？」

「幸運もあれば不運もあるが、ほとんどは路上で働いているだけだ。」

「それは悲劇のようですね。」

「大変なのは、私はもうすぐ釈放されるのに、皆さんには残ることです。」

不快な沈黙のため、ノアは話題を変えた。

「それで教えてください、ヘンリー、あなたの家族はどこですか？」ノアは尋ねた。

「ジョセフは私の…」

これに即座に反応して、グループは次のように声を掛けた。

「インストラクター」

"マスター。"

"所有者。"

「いいえ、彼は私のいとこです」とジョセフは説明しました。

「それで、スリになることについては？」

「必要です。ボート事故で家族のほとんどを失いました。食べなければなりません。」
ジョセフはさらに、「それに、ヘンリーは私を騙したのよ」と付け加えた。

「そんなことはしなかった。私があなたよりリフティングが上手なのは私のせいではない」とヘンリーは自慢した。

"あなたは何について話しているのですか？"ディーは尋ねた。

「昨年、葬儀の後、私がヘンリーに金を掴む技術を教えていたとき、レッスン後に小悪魔が私に財布を渡しました。」

他の三人は笑い、賛成の意でテーブルを叩き、二人のうちヘンリーの方が賢いと宣言した。彼らは午後中ずっとおしゃべりした。それぞれが自分たちの物語を語る中で、あらゆる形式の話題が取り上げられましたが、1つの話題が際立っていました。それは奴隸制度です。

「ディー、アメリカの黒人女性がどのようにしてイギリスにたどり着いたのか教えてください。」ジョセフは尋ねました。

「奴隸の主人に助けてもらいました。」

「彼らは何をしたのですか？あなたを船に乗せたのですか？」

「彼らはそうしましたが、私が英国で一度逃亡するという目標はありませんでした。」

「それで、あなたは逃亡者ですか？」

"私は暇だ！"

「アメリカに行きたいんだけど、寂しくない？」ジョセフが尋ねた。

「奴隸の罪は決してその地から洗い流されることはできません。それは私にとって何の利益もありません。」

「オールド・ベイリーが君を送り返したらどうなる？」

「法廷は今私を所有しているので、彼らの意志を持つことができます。しかし、これだけは言っておきますが、私は必ず主人の鎖から逃れます。」

「幸いですように」とマルタは答えました。

「幸いありますように」スクルージは繰り返した。

日が暮れると、通常は眠っている地下牢に恐怖を感じる夜が訪れるが、今夜は、少なくとも光が差し込むまでは、穏やかな休息がもたらされた。薄暗い夜明けが続く中、数台のターンキーがダンジョンを襲撃した。

「クソ野郎どもは一列に並びなさい！」

要求の激しさに唖然とした囚人たちは皆、看守たちを見つめながらも、行動を起こすのを待っていた。看守はそれぞれ、持てる限りのレッグアイロンを持っていました。

「もう起きますよ！」警備員が叫んだ。

「ちょっと待ってください。列に並んでいない人は寝室に残っています」と別の声が怒鳴りました。男たちは全員慌てて立ち上がった。すべての囚人が急いで従おうとしたため、その分は数秒で過ぎました。

「両足を開いて立ってください」とターンキーが指示した。

男たちは避けられないことをした。それぞれが看守に足を固定させることを許可した。

足かせの重みがカチャカチャ鳴る中、ヘンリーはいとこに「なぜこんなことが起こるの？」と尋ねました。

「めちゃくちゃ静かに！」監督は叫んだ。

全員が足錠をしている理由を男性たちに伝えたのはデイルームのマーサだった。とらえどころのない3人のスパイは脱獄犯だったことが判明した。

「彼らはそれについて黙っていましたが、屋根を突き破る音が聞こえました。」

「あなたの寝室もダンジョン内にあるのに、どうしてそんなことを聞いたのですか？」
「あの男を見てください」マーサは二人の警備員のうち最も重い警備員を指さした。
「昨夜、彼のズボンの膨らみを直しました。」

ヘンリー以外の全員が理解しました。「なぜ彼のズボンを直すのですか？」彼は尋ねた。

マーサは質問を無視し、「私は3人を助けたこともあります。」と続けた。

"どうやって？"ジョセフは尋ねた。

「あの不気味な男が私を突いてよろめきそうになったとき、私は彼が窓から背を向けるように向きを変えました。それから私は、三人が刑務所と医師大学の間に間に合わせのロープを落とすのを見ました。」

「それで、警備員は知らなかったのですか？」

「当時彼は少し忙しかったのよ」とマーサは冗談めかして言った。

「なぜ女性は自分を裏切るのか？」スクルージは尋ねた。

「いいえ、エベネザー、法律は女性を放棄しています」とマーリーは答えた。

「マーサに強制するものは何もないよ」とスクルージは主張した。

「ニューゲートからの解放への欲求はどうですか？」

「なぜそれが重要なのですか？」

「エベネザー、誰も刑務所に入りたくないのです！マーサがまだ釈放されていない唯一の理由は、彼女が解放費を支払うための2ペンスを持っていないからです」とマーリーは説明した。

「他にお金を手に入れる方法はないのでしょうか？」

「それは彼女のためではありません。教えてください、エベネザー、彼女には所有権、さらには質素な生活をする権利さえありますか？」

マーリーは返事を待ったが、答えは理解されたので、エベネザーは黙ったままだった。

夕闇が迫る頃、デイルームの巨大なドアが勢いよく開いた。入り口には、足を引きずった男性を乗せたターンキーが2台立っていた。垂れ下がった頭を絞首刑執行人用の鞄で覆い、レッグアイロンとリストアイロンで抵抗を防いだ。儀式も行わず、警備員らは男性を床に投げ捨て、立ち去った。

他の囚人の中で意識を失った男性に興味を示した人はほとんどいませんでした。しかし、ヘンリーは手伝うと主張しました。彼は慎重にその男に近づきました。ヘンリーの怪我を防ぐために、彼の4人の仲間は、彼が理性のない男の頭からバッグを持ち上げるとき、彼の近くに立っていました。ヘンリーはその人物が仮面を外したことに驚きを示しましたが、他の人々は驚きませんでした。床には三人の脱獄犯のうちの一人が山積みになっていた。

マーサ、ディー、ノアはその男を特定するとすぐにコミュニティのテーブルに戻りました。ジョセフは逃亡者の必要に応じてヘンリーを助けるために留まりました。男性の頭全体が腫れ上がっていました。ヘンリーは、目のあざが消えるまで、その男が正気を戻さないことを願った。二人の少年は一緒に脱獄犯を暖炉へ引きずり込んだ。彼らは彼を瀕死のレビの近くに置きました。ゆっくりと、男はうめき声を上げ始めた。

少年たちがコミュニティのテーブルに加わると、ディーは「グロッッグがあれば、みんなにあげるよ」と言いました。

「そうだね、今日は盛大にお祝いするんだよ」とマーサも同意した。「それはグロッグだけではありません。元旦は良いことをするのが当然です。でも、きっと私たちの中には一銭もありませんよね？」

マーサが半分答えを待っていると、ノアは 1814 年が到来したという真実に気づき始めました。クリスマスは一週間後に迫っていたが、その七日間で一生分の恐怖が起こった。

ノアが物思いにふけっている間、他の人々は会話を続けた。彼の運命の激変は混乱を引き起こした。彼は、愛に満ちた神がなぜ自分だけでなく、どんな人に対してもそのようなことをされるのだろうかと疑問に思いました。そのような裏切り行為に、どんな愛に満ちた目的があるでしょうか？それでも、彼はイエスがフローラを守ってくださるよう心から祈りましたし、神の子ならきっと守ってくださると信じていました。彼は自分を憐れんだくなかったので、怒りが頭に突き刺さったとき、テーブルから離れ、二重格子の窓の方へ歩きました。

開口部の寒さに呆然としていたノアは、すぐに暑さの中へ退却した。一人で立っている彼は怒りを抑えるのに苦労したが、自分の将来はもはや自分の計画では形作れないことに気づいたとき、彼は涙を流した。悲しみと怒りがひとつになった。

マーリーは兄の隣に立つスクルージを手を振りながら見送った。スクルージは部屋の向こうから、マーリーがノアの苦難を公然と悲しんでいる遠吠えを聞いた。生者の中でリヴァイだけが靈の鳴き声を聞いた。リーヴァイが騒音に震え始めると、マーリーは言った。「あなたのためこれを変えられたらしいのに。」ノアの赤くなった目を見つめながら、マーリーは続けた。「ノア、私はあなたにこれを誓います。私はあなたの魂がこの生命の精神の痛みから回復するのを助けます、そうでなければ私自身の精神と魂をあなたの代わりに明け渡します。」マーリーから来る罪悪感はノアには逆効果で、涙はすすり泣きに変わりました。

ノアが泣き声を抑えようとして体をけいれんさせていると、マーリーは弟の肩に腕を置いた。「ノア、おばあちゃんの芋虫の話を覚えてる？」彼は質問の後、ノアに通常の応答時間を与えるために一時停止し、続けました。「毛虫はただ一つの目標を持って生まれます。それは、植物の世界を這い回り、虫が死ぬ前にできるだけ多くの植物を食べることです。」マーリーは凍りつくような空気を吸い込み、それからこう言った。「奇妙なことに、毛虫は自分の本当の目的さえ気づいていません。ただ変身するだけです。この生き物の中の虫にとって、大量に食べられた後、命は終わります。毛虫は、食べることが命であるため、終わりが近づいていることを悲しんでいます。しかし、創造者は獣の本当の目的を知っています。動物のために常に計画されている変身は、生き物の運命です」オン。」

マーリーは立ち止まり、次の言葉を慎重に計画してからこう言いました、「あなたの魂は、これから起こる自分の変化を知っています。落ち着いてくださいとは言えますが、いつこの恐怖から救われるかはわかりません。ワームが自然の最も美しい例になることを知らないように、私たち人間も自分の完璧な本質を知りません。私たちは魂の計画によって完全に機能するようになっただけです」と立ち止まり、マーリーはこう締めくくった、「ほとんどの人間は自分たちの旅の目的を認識していませんが、たとえ無意識のうちにでも、私たちはしばしば素晴らしいことを行っています。ノア、あなたの人生は終わっても、あなたの未来は前進していることを知っておくべきです。」

ノアが他の男性たちとともに眠っている地下牢に戻ると、ジョセフは「手伝うことはできますか？」と尋ねました。ノアは袖で目をなぞりながら、黙って続けた。日中は光が消え、眠りの暗闇の中で、ノアの苦しみはついに弱りました。

その夜、ターンキーがデイルームのドアを閉めたとき、彼はリーヴァイを連れ出す必要があることをメモした。

ある日、また捕虜が戻ってきた。その日は日曜日だったので、刑務所で唯一主催された行事は教会であり、全員が出席する必要があった。ザ・オーディナリーは捕らえられた聴衆に向けて激しいサービスを吠えた。出席者全員にとって地獄への道が説教のテーマのようでした。式典が終わると、ノアは話された言葉をすぐに忘れてしました。

デイルームに戻ると、部屋の中央に横たわる男のうめき声が戻ってきた囚人たちを出迎えた。囚人たちが鎖につながれた足を引きずりながら方向感覚を失った山の上を通り過ぎると、先に戻ってきた囚人が床の上のその姿に気づき、攻撃した。

すべてはあっという間に起こり、誰も攻撃を止める本能を持っていませんでした。彼らは、最初の囚人が二番目の囚人を襲撃するのをただ警戒して見ていた。

「ターンコートよ！」最初の囚人は叫んだ。

「私は…しなければならなかつたのです」と、戻ってきたばかりの男は不平を言った。最初の男は、二番目の男が思考を完成させるのを止めた。代わりに、彼は手首の足かせの鎖を座っている男の首に巻きつけ、できるだけ強く引き上げた。男性を床から数インチ持ち上げると、部屋全体に首の骨が碎ける音が聞こえました。激しいトントン音とともに、攻撃者は獲物を床に戻し、そのまま動かずにそこに留まりました。

部屋中が当惑して見守っていると、彼らは男性が死亡していることに気づきました。すべてがこれ以上早く起こることはありえませんでした。たとえ弾丸であっても、これほど突然ではなかつたでしょう。部屋にいた子供たち全員と多くの女性が叫び始めました

。殺害された男性は、壊れた首によって頭の重みが下に引っ張られ、凍りついたまま座っていた。奇妙なことに、彼は突き出た目、垂れ下がった口、そして大きなとがった鼻を備えた亀のように見えました。その男が息絶えたことなど誰も気に留めなかった。囚人たちの部屋は、自分たちに与えられるであろう罰をただ恐れていた。

グループの男性たちが殺人犯と対峙する前に、2台の自動運転車が警棒を振りながら部屋に入ってきた。「わかった、豚さん、下がってください」警備員の一人が人々がいる部屋に向かって言った。

警官は死体に向かって進み、亡くなった男性の肩に手を置いた。すぐに彼は倒れてしまいました。ターンキーはグループに殺人犯を送るよう要求した。報復から身を守りたいと思って、誰もが、ノアも含めて加害者を指さしました。

警備員が殺人犯を確保すると、2台の新しいターンキーが部屋に入り、死体を運び去った。ターンキーの誰も他の人たちを懲らしめることを望んでいなかったので、危機はその日の道を通り、光とともに消えていきました。

マーリーの魂は、若いジェイコブが人生の使命を逃したのではないかと疑問に思いました。彼は常にビジネスにおいて達人でした。しかし、会計事務所は決して彼の情熱ではありませんでした。それはまさに彼の生計そのものでした。そして今、マーリーは若き日の自分が自分の馬に注ぐ注目を見て、自分が金儲けよりも厩務員として社会に役立つだろうということを知っていた。しかし、それは過去のことであり、彼は未来のためにここにいたのです。

スクルージとマーリーは、幼いジェイコブが馬にブラッシングをし、餌を与え、馬を可愛がる様子を眺めていました。獣たちを甘やかすことで、ノアに対する裏切りの罪悪感が慰められました。兄が檻の中で苦しんでいる間、彼は双子のスモークとシャドウと一緒に騎手ごっこをした。彼は若い頃の筋肉を馬小屋に捧げていたため、常に一対のサラブレッド馬を所有していた。当初交わされた契約は、ジェイコブが子馬が生まれるまで無給で働くというものだった。当時、彼は馬を所有していましたが、動物の食べ物と住居のために働き続けました。この取り決めはジェイコブにとって最高の取引となった。なぜなら、双子が生まれたとき、馬小屋の所有者は野心的な息子に両方の牡馬を与えたからである。

二人の毛づくろいをした後、ジェイコブはスモークの額に額を押し当ててこう言った、「私は取り返しのつかないほど自分自身に不名誉を与えてしまった。「友人よ、あなたたちこそが、私が正しい道を取り戻す唯一の希望なのです。」各馬を均等に撫でながら、彼は付け加えた、「残されたわずかな時間を有効活用しましょう。」次の息で、ジェイコブは一頭の馬にまたがり、野原を疾走し始めました。馬が彼の指示に従おうとあらゆる努力をしたとき、そして外に出ました。

厳しい気象条件により、走行時間は短縮されました。「もっと寒くなるかも？」ジェイコブは乗馬用具を片付けながら疑問に思いました。両方の子馬に通常の飼料を与えた後、彼はそれぞれに半分の冷凍リンゴを与えました。彼らが果物をむしやむしやとどろどろにしている間、ジェイコブはニューゲートへ向かいました。

歩きながら、ヤコブはノアを解放する方法を考え出しました。彼は兄が逮捕されたらすぐに行動すべきだったが、自分の身の危険を感じて身を縮めた。1日以内にお金を返すのは簡単だったでしょう。ノア自身が氷上に液体をこぼしたことについて説明を行っていた。最も疑わしい巡査でさえ、「バッグからお金が落ちた」という話の論理的根拠を理解することができました。しかし、彼はそうではありませんでした。むしろ、ジェイコブは状況が悪夢へと悪化するのを許しました。

煙と影はジェイコブの唯一の資産でした。馬を売るという決断はジェイコブの心の中で何日も悩みました。彼は個人的な損失を被らなければならないという考えに憤慨していました。しかし、彼は、自分の大切な子馬を引き渡さなければ状況は改善しないことに気づいた。ジェイコブは、馬を一頭売れば、プレッサーと刑務所の費用の両方を返済できる十分なお金が得られることを知っていました。

彼はシャドウを維持することを考えたが、それは考えの中で固まらなかった。どちらの馬も同じように遊び心と友情を彼に与えてくれました。スモークは門を開ける能力に困っていました。一方、シャドウはライダーを投げ飛ばすことを期待して枝の下を走ることに情熱を持っていました。

しかし、ジェイコブの命を救うために両馬が協力した出来事が、彼の決断に最終的な印象を残した。彼は、3頭のコヨーテが馬の周りを囲んでいる間、馬が自分を中心に留めていた日のことを思い出した。最初のコヨーテが左に移動し、次にシャドウが左に移動してブロックに向かいました。2匹目は右にプッシュしたが、スモークは右へのヘッドフェイクで反撃し、ジェイコブに向かって進んでいる3匹目のコヨーテの脇にキックを与えた。獣たちを旋回したり蹴ったりする踊りは数分間続いた。

結局、シャドウは太ももに噛み傷を負い、スモークは首に擦り傷を負いましたが、ジェイコブは無傷でした。コヨーテが森の中に消えたとき、ジェイコブは彼らの道を覆う血の跡に気づきました。

刑務所に近づくと、ジェイコブはスモークとシャドウと一緒に売ろうと決心した。双子は一度も離れたことがなく、片方を残したいという利己的な願望が両方を傷つけることを彼は知っていたので、正しいことをして双子と一緒に住ませようと決心しました。

スクルージと幽霊がジェイコブの到着を待っている間、マーリーは友人に尋ねました。

「ジェイコブ、なぜあなたの質問が私をトラブルに巻き込むような気がするのですか？」

二人は顔を見合わせて微笑み、「その通りだ。私に干渉する正直な理由はない」とマーリーは言った。

「いいえ、いいえ、そのような会話は気にしません。悪い知らせを伝えられてショックを受けたくなかっただけです」とスクルージは答えた。

マーリーは会話を始めた。「私が死んだとき、私は『ぐっすり眠った』と思っていた状態から目を開け、その後服を着たり、仕事に行ったり、そういういた類のことをして一日を過ごしました。」

「なぜそんなことをするのですか？」

「平凡な一日のように思えました。しかし、それも長くは続きませんでした。すぐに、事態は非常に奇妙になりました。私は自分の鎖に気づき、その後、自分の肌が半透明であることに気づきました。」

「その時、自分が死んだと悟ったのですか？」スクルージは尋ねた。

「いえ、それはテントとアプルトを前にしてはっきりと分かりました」

"誰が？"

「もうすぐ彼らに会えるでしょう。」

「まだ彼らが誰なのか分かりません。」

「テントはトランスマグリファイ島に出入りする者たちを追跡している」とマーリー氏は語った。

「またその言葉が出てきましたね。」

「何、テント？」

「いいえ、トランスマグリファイ。私はそこに行ったことがあると思います」とスクルージは答えた。

「そんなことはありえない、あなたはまだ生きている。」

「それでも、私は今晚そこにいたと確信しています。」

「あなたはまだ生きていますね、エベネザー？」

「最後に確認しました。」

それからマーリーは最初の質問を繰り返した、「エベネザー、あなたが亡くなった後何が待っているか知っていますか？」

「私の推測では、あなたが経験したことはすべてですが、それ以上は...?」

若いヤコブは刑務所に立ってノアが到着するのを待っていました。ヤコブは進んでノアの命綱になったのです。ほとんどの日、彼はノアが生き残るために必要なお金と食べ物を持ってきました。ロンドン史上最も寒い日のように感じられたその日、ノアはついに訪問者の檻に到着した。彼の顔には疲労の兆しが見えた。

"あなたは何をしましたか？" ジェイコブは尋ねました。

ノアは足枷をされた足をシャカシャカさせながら、「人が殺されるのを見たんです。それで、何をしたのですか、弟？」と答えた。

「つまり、なぜレッグアイロンをしているのですか？」

「脱獄があったからだ。ターンキーはペンスを稼ぐためなら何でもするだろう。」

「分かりません」とジェイコブは言いました。

「言っておきますが、この刑務所は金儲けのビジネスであり、看守は全員その金儲けに取り組んでいます。」

「それで、今日はいくらお金が必要ですか？」ジェイコブは尋ねました。

「あなたが持っているペンスはすべてです。」

"真剣に？" 「私が解放の代金を支払うまで、彼らはこの足かせを外しません」とノアは説明した。

"真剣に？"

「その言い方はやめてください！ 私があなたを誤解させていると思いますか？」

「いいえ、もちろん違います」とジェイコブは答えました。それで彼は弟にすべてのペニーを与えました-合計 13 ペンス。

「これはいいですね、ジェイコブ。ありがとう。」するとノアは「スティーブン・マッキントッシュ卿はもう見つけましたか？」と尋ねた。

「いいえ、でもします。ノア、あなたをこの刑務所から解放してみます。」ヤコブは続けて、「そうするまで私の心は落ち着かないでしょう。」

ノアは目の端で弟を見つめ、「感謝します」と慎重に言い、さらに「あなたの情熱は理解できませんが、あなたの献身には感謝しています」と付け加えた。

兄弟たちは資金や情報の交換に必要なだけ天候に恵まれずに過ごしました。両方とも移送されると、すぐにそれぞれの加熱されたエリアに移動しました。

1月4日前日と同様に曇りで寒かったが、期間を通して天気は良くなった。明るくなる頃には霧も晴れ、寒さも和らぎ、3人目の囚人はデイルームに戻された。

最後の脱獄囚が到着すると、残った囚人たちはテーブルを叩き始め、「鎖を外せ！」と叫び始めた。建物全体で、囚人たちは足首の束縛から解放されるよう叫びました。当初、暴徒を静めることを期待して、ターンキーたちは拷問の脅迫を叫びました。結局、何もグループを沈黙させることができなかつたので、所長は、解放料金を支払うことができる囚人から足かせを取り除くことに決めました。

ノアは友人たちの学費の支払いを手伝うと申し出た。この提案に腹を立てたヘンリーは、「私は自分のお金を持っている」と言いました。ジョセフもマルタもノアのお金が欲しいかのように振る舞っていましたが、どちらも受け取りませんでした。ディーは一銭も持っていないかったので、彼の申し出に応じた。

鎖から解放されると、ディーは足かせによってできた擦り傷に治癒軟膏を塗り始めました。彼女の心地よい触れ合いで痛みが和らぐと、友人たち5人全員がくすくす声を上げた。ディーに関して言えば、彼女の安堵のため息は非常に大きく、部屋全体の注目を集めた。

一日の終わりが近づくと、ほとんどの囚人は不機嫌になりました。通常、グループはグロッグを購入しただけで、その後酔っぱらっていました。しかし、マクシーとシモンズは両方とも、膀胱を窓の外に出すことで、溜まったエネルギーを解放しました。後で彼らがターンキーに説明したように、彼らは彼らのおしっこが道路に出る前に凍るかどうかについて実験を行っていました。それはそうでしたが、凍った尿を浴びせられた

男性は、落下する氷の下を通過しながらも吠え続けました。忌まわしい行為ではあったが、どちらの男性も罰を受けなかった。

翌朝、ノアはいつものように、囚人を次々と連れて足を引きずってデイルームに入った。時間が経つにつれて、彼は施設のやり方に固まってしまった。順応が忍耐力を必要とするにつれて、日々がぶつかり始めました。ヤコブは毎日コインを持ってきました。ほとんどの日、フローラは愛をもたらしてくれました。二人の間でノアは生き残った。

7日の金曜日、ジェイコブが良い知らせを持って訪問者の檻に到着しました。「お金を見つけました」と彼は発表した。

ノアは目を丸くして「それは素晴らしいですね！」と答えました。そしてヤコブに「この喪失感を解決してくれるなら馬小屋を建ててあげる」と約束した。

ヤコブはその考えを拒否しました。「いいえ、報酬はいりません。もし私があなたをこの虐待から解放することができれば、私の報酬はあなたを自由にすることです。」

ノアは「どうして私にこんな兄弟がいるのでしょうか？」と感激しました。ジェイコブはただニヤリと笑った。その日の残りの間、ノアは笑顔を誇示していましたが、翌朝彼は新たなパニックを引き起こすことになります。

朝はルーティンに変化をもたらした一日を迎えました。マーサはすでにデイルームで待っていました。男たちが中に入ると、それぞれが彼女がたき火のそばに立っていることに気づきましたが、ほとんど気にしませんでした。マクシーだけが彼女が早く現れた理由を理解しており、それを理由に彼女を攻撃した。「あなたは自分が解放されると思っているかもしれません、私が最初に解放されるまではそうではありません。」

彼は彼女を暖炉に押し倒し、「残り物の誘惑にお金を払うつもりはない」と言いました。

「私は無料で演奏しているわけではない」と彼女は言い、彼の押さえつけの下をすり抜けようとした。

「それについては見てみましょう」マーリーは攻撃を強めながらうなり声を上げた。

ノアは暴行に警戒していたが、新参者であることを示すような発言は何もしなかった。「彼女を放っておけよ」と彼は叫んだ。

マクシーはひるむことなくマーサの胸を掴み、強引にキスをした。同じ瞬間、ノアはマクシーの胸に腕を回し、非常な力で引っ張ったため、マクシーは床に落ちました。マーサは本能的に加害者の頭を蹴り、犯人は気を失いましたが、止められませんでした。しかし、マクシーはマーサにはもう興味がありませんでした。彼はゆっくりと立ち上がり、ノアの方を向き、そして猛烈な力で英雄志望者の脇腹に7インチの木片を叩きつけた。

マクシーが手を引っ込めると、部屋はノアが血を噴き出すのを眺めた。彼は幸運だったが、彼のグレートコートのおかげで、木片が重傷を負うことはなかった。マクシーはエリアを出るとき、ノアにこうささやいた。絞首刑執行人はあなたに短いロープを使います。」

友人たちの助けにより、ノアはすぐに修理されました。部屋に入ってきたばかりのディーさんは、別の軟膏を使って傷口を保護し、マーサさんは包帯用にペチコートを細長く引き裂いた。

その日の終わりに向けて、マーサはニューゲートから解放されました。刑務所を出る前に、彼女は新しい友達全員とハグをしました。マーサはノアを抱きしめながら、彼の耳元でささやきました、「このことは妻には言わないでください。それから、何の前触れもなく、彼女はノアのバランスを崩すほどの激しさでノアにキスをし、ノアが立ち直ろうとよろめきながら立ち去った。

翌朝、ノアとジェイコブは早めに訪問者の檻に到着しました。毎日のやりとりを終えると、ヤコブはすぐに立ち去りました。ノアは中庭をぐるりと歩き続けた。夏の太陽の考えがノアの心を満たし、体は震えを抑えようとあらゆる努力をしました。彼が刑務所の入り口に向かって進んでいると、彼の名前を呼ぶ声が聞こえました。振り向くと、フローラが来客用の檻で待っているのに気づいた。ノアは彼女に向かって走りながら満面の笑みを浮かべた。

到着すると、フローラはノアに半笑いを見せた。彼は彼女の顔を見つめて、「どうしたの？」と尋ねました。

彼女は下を向きながら「大丈夫です」と答えた。

「私を見てください、愛さん。」彼は彼女の顎を持ち上げ、彼女の目が彼のものを覗き込むようにした。「何が間違っているのですか？」

「それは私だけです。」

彼女は立ち去ろうとしましたが、ノアがその動きを止めました。 「もしもあなたが今私から離れたら、私は一日中あなたのこと心配するでしょう。」

彼女はノアの目をまっすぐに見つめ、「子供がいると思うよ」とささやきました。

マーリーはすぐに膝をつき、「いや、いや、この真実は難しすぎる！」と叫びました。

「ジェイコブ、なぜそれがそんなに心配なのですか？」スクルージは尋ねます。

「エベネザー、あなたも私と同じようにこの悲劇を知っています。それなのに、ノアが赤ちゃんのことを知らされていたとは思いもしませんでした。また一人犠牲者が。マーリーにとって、その質問は単なる修辞以上のものだった。彼は今、自分が何をしても自分の間違いが正されることはないのではないかと恐れていた。多くの罪のない魂を失い、今は子供になった。まったくの地獄だ、マーリーは自分自身を憎んだ。

ノアはしばらくの間、動かずに立っていました。彼はどう答えるべきか考えた。ジョイは恐怖を乗り越えてフローラにこう言って安心させた。ジェイコブは失われたお金を見つけました。裁判までに状況を修復できることを願っている。彼がそうすれば、この後我々はさらに強くなるだろう。」

フローラはノアの優しさに尻込みした。「願いは叶わないよ、ノア」彼女の頬を涙が流れ始めました。それらが頬に届くと、ノアは手でそれらを拭いました。

永遠に思えるほどの間、ノアは沈黙したままだった。励ましの言葉は消えたが、それでも過去の話が湧き出てきた。「私たちが出会った日のことを覚えていますか？」彼は尋ねた。

「はい、もちろんそう思います」と彼女は言った。

「あなたは私のことが好きではなかったのですね？」

「あなたは単純な人かもしれないと思っていました。」彼女の笑顔は、ノアの継続への意欲を高めました。

彼は言いました、「そうですね、私は単純でした。あなたの魅力にすっかり魅了されました。」

フローラはその出来事を思い出して笑顔を広げた。「確かにあなたは自分を馬鹿にしましたね。」

「あなたは私に一瞥もくれませんでした。何かをしなければならなかった」とノアは答えた。

「それでは、わざとピエロのように振舞ったのですか？」

「もう気づいていないのか——私はピエロだ。」

フローラは笑った。彼女は、ノアの愚かさはめったに現れないことを知っていましたが、それが現れたときはそれが喜びでした。彼らは一緒にその物語を語り直した。「騎士道精神を示す壮大な態度で帽子を通路に払い落としたときは、とてもショックでした。」

「私は印象的になろうとしていました。」

「それで、穀物のシャワーは計画されていたのですか？」彼女は尋ねた。

「『大げさなジェスチャー』をしたときに、膨大な量の小麦が飛んでくるとは思いもしませんでした」とノアさんは説明した。

「それはどこにでも起きましたが、主にあなたに影響を与えました。」

「それは私も計画したことだ」と彼は認めた。

「それでは、はっきり言っておきますが、あなたは私に感銘を与えたくて、コートの腕の袖口に一掴みの小麦を入れたのです。」フローラが続けたとき、ノアは同意してうなずきました。「あなたが私にあなたの前を通るように合図したとき、穀物があちこちに散らばったとき、私はほとんど信じられませんでした。」

彼らは一緒に笑いました。「ご存知の通り、フローラ、私は赤ちゃんの誕生に興奮しています。」

「それは単なる可能性です。数週間以内には確実に分かります。」

フローラがノアに数セントを渡すと、シモンズが攻撃した。「私の服を盗んだのよ！」彼は叫び、ノアの頭を柵に叩きつけた。シモンズ氏が鉄格子の間にノアの顔を押し付けると、金属から切り出した自家製のとげの一つがノアの頬を引っ搔いた。フローラが叫んだ。

シモンズはノアから小銭を掴み、「君の仲間の誰が僕を気絶させたのかは知らないが、君を罰してやる」とつぶやいた。犯人の死体からの臭いが辺りに充満した。彼の息だけでノアは咳き込んだ。「あなたは今日死ぬような気がします。」

「いいえ！」フローラが叫んだ。彼女はバーの間から手を伸ばし、凶悪犯の髪の毛を掴み、強い力で引っ張ると髪の毛のほとんどが頭皮から剥がれた。シモンズはほとんど不

快感を感じなかった。フローラの攻撃は彼を圧迫しただけだったがノアは激しい怒りを込めて檻のとげに突っ込んだ。突き刺す棘の圧力でノアの顔に血が流れた。

「神の地獄に備えなさい」と彼は言い、持てる力すべてでノアの頭を押した。

"いいえ！"マーリーが吠えた。幽霊はシモンズの胸に手を伸ばし、心臓を掴み、肉体を圧迫した。シモンズの臓器の筋肉がマーリーの骨の形に一致すると、ノアは後ろに手を伸ばしてシモンズの髪をつかみました。自分を解放しようとして、彼は重犯罪者の頭を後ろに引っ張った。この反撃にシモンズは激怒し、攻撃を激化させた。マーリーは心臓をしっかりと握るまで握りしめた。

3人がコントロールしようと奮闘する中、シモンズはクラッチを緩め始め、空いた手で胸を掴んだ。彼は狂気のあまり、「私に何をしているの？」と叫びました。

ノアはシモンズを救出しが、マーリーは心臓の発作を解除しなかった。殺人者志望者がよろめきながら面会者用の檻から出てくると、マーリーも後を追った。「ジェイコブ、彼を解放してください」とスクルージが命じた。

マーリーは混乱して、「できるとは思えない」と答えた。

「ちょっと引いてください。」

シモンズは痛みから解放されようとして、あちこちよろめきました。「助けて、エベネザー」マーリーが叫んだ。

スクルージはマーリーをつかんで引っ張りましたが、彼のエネルギーは報われませんでした。「手がきつく締められすぎている」とマーリーは叫んだ。必死になって、二人はシモンズから離れようとあらゆる努力をしましたが、犯罪者的心臓自体がマーリーの手にしっかりとくっついていました。

「彼は死ぬでしょう」とフローラは言いました。

警告もなく、シモンズは地面に倒れた。落ちた衝撃でマーリーさんの腕が肩から抜け落ちた。廊下に横たわり、心臓にくっついたままのマーリーの手の骨が一つ一つピクピクし始め、その後、すべて消えてしまいました。腕が自然に元に戻ると、彼は「私が彼を殺したと思う」と言いました。

「ノアがこの件で責められることはわかっているだろう」とスクルージは答えた。

衛兵は倒れた悪役に気づき、急いで助けに駆けつけた。"あなたは何をしましたか？" ターンキーが唸った。

ノアは頬の傷から血を流しながら警備員の方を向き、「シモンズが私を襲った」と言いました。

「彼はノアを殺すつもりだと言った」とフローラは言った。彼女は看守にまだ手に残っている髪の毛の塊を見せながら、「痛みさえも彼を止めるものは何もなかった」と付け加えた。

「そうですね、何か痛ましいことが彼を止めたようです。」警備員はシモンズの側にひざまずき、「彼はまだ息をしている」と報告した。彼は立ち上がると、「では、髪を引っ張っても発作が終わらないとしたら、何が起こったのだろうか?」と言いました。

「彼は胸をつかみ、そのまま倒れました。」

ターンキーはカップルを見た。「私はあなたを見ていました」と彼はノアに言った。さらに警備員は「あなたは尊敬に値する。この人は…」と付け加え、地面でまだ動かないシモンズを見て立ち止まり、「…彼はそれに値する…」と言い、男は警告もなしにシモンズの頭を蹴った。警備員は首に巻いていたバンダナを解き、ノアに手渡した。「ほら、今日は首が冷えるかもしれないよ。体を清潔にしてね。」

ノアとフローラはショックを受けてただそこに立っていた。「馬鹿なの? 全身から血が出てるよ。きれいにして!」警備員はノアの手を掴み、その中に布を置きました。

フローラが「あなたの優しさは報われるよ」と言うと、ノアはハンカチを受け取った。

自動運転車はフローラを見て、同意しないように首を振り、それからノアに言いました、「私の名前を知っていますか?」

「いいえ、先生。」

「そのままにしておいてください。」そう言って、ターンキーはサイモンズがノアから盗んだ落としたペニーを拾い上げ、意見の相違を解決するために3人を去った。

数分以内にシモンズさんは回復し始めた。うめき声を上げながら、呆然とした犯人は片手で頭を掴み、もう片方の手で心臓のあたりをこすった。ゆっくりと彼は立ち上がることができるまで回復しました。彼はノアとフローラをじっと見つめた。どちらも、相手が攻撃を続けるかどうかわからませんでした。しかし、慎重に両軍とも撤退した。

シモンズは屋内に戻るためにノアの前に整列した。ドアが開くと、ノアはシモンズの胸ぐらを掴み、彼の前に歩み出た。「ペンスを用意してください。料金を支払うときに私が最後になることは二度とありません。」サイモンズはため息をついただけで、新しい立場を受け入れた。

屋内に入ると、ディーさんはノアの怪我に数種類の軟膏を投与した。「これで出血が止まります」と彼女は内容物をグループに見せながら言った。「これは傷跡を残さずに皮膚を縫い合わせます。そしてこれは痛みを和らげます。」

「あなたは医者ですか？」ヘンリーは尋ねた。

「いいえ、ダーリン。私には軟膏しかありません。医者のことはナイフを持った男たちに任せます」とディーは答えた。

「まあ、ジェイコブ、今日は天使のような幸運に恵まれたようですね」とスクルージは言いました。

「そうだね。いつか私も怒りをコントロールできるようになるだろう。」

「いいえ、いいえ、あなたはそうではありません。あなたの怒りは名誉なことです。コントロールはノアの終焉をもたらすだけでした。」とスクルージは断言した。

マーリーの顔には感情は見られなかつたが、生きた歴史を変えることはできないことを彼は知っていた。ノアはその日死ぬつもりはなかつた。

**** 五線譜 4 ****

ハードジャスティス

一日の終わりはノアに新たな力をもたらしました。男たちが寝室の寝室に向かうデイルームを出る前に、彼は他人に攻撃の隙を決して許さないと誓つた。

火曜日から刑務所内では平凡で退屈な出来事が続いた。囚人の群衆は、それぞれのプライベートグループ内で楽しんでいた。正午、自動運転車がデイルームに入り、「明日、次の人々がオールド・ベイリーで裁判にかけられる」と告げた。部屋にいる全員が自分の名前が呼ばれるのを聞きました。

誰も驚かなかつたが、この通知には会話をミュートする効果があつた。囚人たちはそれぞれ、その日の残りの時間を自分の運命について考えて過ごしました。おそらくほとんどが有罪判決を受けるだろうから、将来への不安から全員が沈黙する状況が生まれた。

その日、マーリーの中で任務を負っていたのは若いジェイコブだけだった。彼は二度スマーケ・アンド・シャドウの売却を試みたが、どの購入者からも同じことを言われた。「馬は一頭しか必要ない」というものだった。ジェイコブは双子の特別な関係を説明しましたが、どちらも説得されず、両方の売り上げは失われました。彼は元の職場に向か

って走りながら、マネージャーのマシュー・ペピンがそのような誘惑を必要とするだろうから、2頭の馬を割引価格で売ることに決めた。

馬小屋の扉の中で、ジェイコブはマシューが馬の世話をしているのを見つけました。寝具を交換し、食料を補充し、肥料を取り除くのが彼の仕事でした。ジェイコブが馬小屋に入ると、マシューの口笛が聞こえました。曲調は不明瞭ながらも耳に心地よいものでした。ジェイコブは忙しい男に近づき、「マシュー、フランス人の浮浪者ね」と言いました。

「まあ、まあ、若い使い走りじゃなかったらね」マシューは熊手を壁に当てながら言った。「こんにちは、ジェイコブ。なぜあなたを昔のたまり場に連れてきたのですか？」

「去年、スモーク アンド シャドウを買おうと思ったのを覚えてますか？」

「もちろんです。オファーはまだ受付中です」とマシューは答えた。

「そうなることを期待していました」とジェイコブは答えた。

「それで二人で 300 ポンド？」

「破格の契約を結んでいるね」とジェイコブは言った。

「売る気があるのですから、当然それで十分です。それでよろしいでしょうか？」

"はい。" 残念ながら、ジェイコブは取引を終了しました。スモークとシャドウにリンゴとハグを与えて最後の別れを告げた後、ジェイコブはノアの自由を確保するために旧ベイリー裁判所に急いだ。

裁判所の正面玄関に入ると、ジェイコブはすぐに「手伝いましょうか？」と尋ねられました。質問をした若者は、そのような有名な組織で働くには若すぎるよう見えました。

ジェイコブは考える間もなく、「ウィリアム・ドンヴィル殿下に会いに来ました」と要求しました。

「彼は今日、自宅のオフィスで仕事をしています。他に手伝ってくれる人はいますか？」

「彼は明日の裁判の裁判長ですか？」

「はい」と若者は答えた。

「今日は彼と話し合う重要な用事があるのですが、彼の自宅オフィスの住所を教えてもらえますか？」ジェイコブに尋ねました。

“いいえ。”

ジェイコブは少し驚いて、「彼は今後の裁判について私が発見したことを知る必要があるのです」と説明しようとした。

「裁判で証拠を提出しなければなりません」とヘルパーは主張した。

「しかし、今日彼と話すことができれば、裁判は起こらないでしょう。」

「分かりました。お手伝いできればと思います。しかし、裁判官の居場所を公開すれば、判事は私をこの仕事から解放してくれるでしょう。私にはその仕事が必要なのです。」

ジェイコブは、ノアを排除するという取り組みが、当初期待していたほど簡単ではないことを悟りました。彼は愉快だが役に立たない少年に別れを告げ、すぐに郵便局に駆け込んだ。オフィスの従業員がその日の終業の真っ最中だったので、ジェイコブはロンドン郵便局名簿を閲覧するように要求しました。係員から嫌な顔をされた後、彼は最終的にジェイコブに本を2分間読むことに同意した。時間に余裕があったので、ジェイコブは裁判官の住所を記憶し、管理人に感謝の意を表し、急いでその場所に向かいましたが、建物は暗かったです。ヤコブは負けて裁判官のドアの外に立っていました。

マーリーとスクルージは早めに法廷に到着した。オールド・ベイリーの「家族と友人」セクションに座って、未来から来た二人の目に見えない人は裁判が始まるのを待っていた。彼らがコートエリアを見下ろしながら、スクルージはマーリーに尋ねた、「あなたは私が亡くなった後に何が起るか知っているかと尋ねましたが、もちろん、可能性を示されるまではそんなことは決して知りません。しかし、同じ問題について、あなたが肉体を持たなくなった今どうなったのか教えてください。」

「私はモグリファイド・スピリットになることを目指して努力しています」とマーリーは答えた。

「あなたは今、地獄に陥っていますか？」

「この精神、私の未来は過渡期にあります。そしてあなたの質問に答えると、誰も非難されることはできません。最終的に道に迷う人もいますが、それは彼ら自身の行動や要求によるものです。」

これはスクルージにとってほとんど意味がありませんでした。「もちろん、他人を殺し、強盗をする者は、必ず滅びる運命にある。」

「いいえ、彼らの精神は行為から浄化されれば価値があります。実際、そのような出来事の知識は、新しい世界がそのような間違いを避けるために使用されます。」

「だから、殺人はただの間違いだ」とスクルージは皮肉った。

「それは犯人の意図次第です。」

「つまり、戦闘中の人や死刑執行人は罰せられないが、酔った人は罰せられない」誤って歩行者を轢いた人は罰せられますか?」

「誰も罰せられません」とマーリーは答え、それからスクルージの探究的な視線を見て、「それは無限の意識の目的ではない」と付け加えた。

「しかし、どうやって殺人者を無罪にすることができるでしょうか...?」

「無限の意識」とマーリーはスクルージの質問を終えた。

「はい、それが私が求めていることだと思います。」

「生きているすべてのスピリットは、無限の意識がそのより大きな存在に組み込みたいと望む何らかの性質を持っています。それは常に達成されるわけではありませんが、それが目標です。」

「無限の意識は不純な行為による汚染を恐れているのではないか?」スクルージに尋ねてください。

「いいえ。無限の意識の魂を汚染することは不可能です。人間の精神は腐敗の容器です。一度その悪行を断ち切ると、それは変容するのです。」

「スピリットと魂は同じではないですか?」

「もちろん違います」とマーリーは囚人たちが部屋に流れ込んでくるのを見ながら答えた。各囚人がレッグアイロンを足を引きずって囚人の団体に向かっている間、一般の人

々は二人の見えない人が住んでいた上部のエリアを埋め続けた。数分以内に、あらゆる種類の書記官、弁護士、そしてお金を払って傍観する人々が法廷に入ってきた。

執行吏が裁判官に告げたのは、部屋が満員になった後だった。「全員起立。「オールド・ベイリー法廷は現在開廷中であり、ウィリアム・ドンヴィル名誉判事が裁判長を務めている。」ドンヴィル判事はもう一人の判事とともに部屋に入り、それからベンチの後ろの中央席へ向かった。それとともに、各有罪判決者の状況の詳細を準備するためにさまざまな職員が急いでいる間、耳をつんざくような騒音が部屋中に聞こえた。

スクルージとマーリーが手すりに腰掛けていたバルコニーを除けば、裁判官は室内の他の作業グループの上に座っていた。書記官と法廷記者たちは裁判官席の真下にある半円形のテーブルの周りに座った。裁判官の左側、一般公開エリアの下に 12 人の陪審員が座っていた。囚人たちは書記官のテーブルの 6 フィート後ろにある囲いに落ち着いた。囚人の囲いの中では、その日に裁判を受ける予定だった 20 人が法廷の騒ぎが静まり、不穏な待ち時間が始まる中、ほとんど身動きもせず、何も言わなかった。

「執行吏、最初の被告を呼べ」とドンヴィル判事は命じた。

「ジョセフ・フリーマン、立ち上がって告発者と対峙してください」と執行吏が要求した。ノアは友人が被告席に向かうのを見ていた。ジョセフは留置場に立って、執行吏が続ける裁判官の動きを追った。「あなたは、12月 11 日にロイヤル劇場でエフライム・ウィードンから時計を盗んだ重罪で起訴されています。どうやって懇願するの？」

「無罪です。」

そう言ってエフライム・ウィードンは、書記官のテーブルの前のスペース内に設置された一段高い台に過ぎない証人席に着席した。黒服の男が陪審員席の近くの部屋の反対側にあるペンを持った証人のところに入った。選手全員が揃ったところで、ドンヴィル判事はウィードンに「あなたの時計の価値はいくらですか?」と尋ねた。

「12 ポンドです。」

「それで、時計は預けたときと同じ形に戻ってきましたか?」

「はい。」彼は証人尋問場にいる男を指差し、「ウィリアム・テイラー巡査が時計を返した」と言いました。

「いいよ。どうしてこんなことになったのか説明してください」と裁判官に要求した。

それでウィードンは劇『お気に召すまま』から退場したこと、そしてジョセフが時計を持ち上げたときに彼にどのように反論したかについて語った。ウィードンは即座に犯罪が行われていることに気づき、「止めろ、泥棒…」と助けを求めた。

検察官の証言の後、ウィリアム・テイラーは同じ出来事について、わずかに変更を加えて語った。ジョセフには、自分が引き起こした危害を申し訳ないと言う以外、弁護の余地がなかった。

「確かに、一度捕まつたら誰でも残念に思うよ」とベンチの後ろの匿名の判事が答えた。ジョセフの話は、両当局がオールド・ベイリーでのセッションのたびに何度も聞いた話だった。少年は自分が罰されることを知っていた。彼はただ身体的な怪我が少ないことを願っていた。あまり考えずに陪審は彼を有罪と認定し、ドンヴィル判事は彼にオーストラリアへの7年間の移送刑を言い渡した。彼は冒険を望んでいたので、この判決に対してほとんどの人ほど不満を感じなかつた。

裁判官と陪審員は、その日に行われた裁判のほとんどを短時間で終えた。20人の被告のうち19人は重罪で窃盗の罪で起訴された。暴力犯罪を犯したのはジェームズ・マクシーだけだった。刑務所にいる間、重罪犯はマムシの頭を噛みちぎるかのような振る舞いをしたが、実際には妻と継娘を毒殺する以外に勇気がなかった。しかしながら法廷では殺人は殺人だ。そこで陪審は15分以内にマクシーの有罪を認定し、裁判官は彼に推奨される刑罰、つまり死刑を言い渡した。

マクシーに手首の手かせが加えられているとき、執行吏は次の被告に「ダイナ・スミス、立ち上がって告発者と対峙してください」と呼びかけた。ディーは受刑者席から突き上げて被告席に入り、そこには鏡が吊り下げられていた。太陽の光が彼女の目に直接反射しました。彼女が立て続けに2回くしゃみをすると、彼女の体は光を避けようと全力を尽くした。

「しっかりしてください」と裁判官が要求した。

ディーは光による不快感が最も少ない場所に落ち着きました。それから執行吏は続けた、「あなたは12月23日にハンナ・デンハウスからグレートコートを盗んだ重罪で起訴されています。どうやって弁護しますか？」

"有罪。"

「あなたがそのような嘆願書を提出した場合、私には量刑の選択肢がないことを知っていますか？」裁判官は尋ねた。

「実のところ、私にも選択の余地はありません。暖かくなるためにコートを着たのですが、また同じようにします」とディーは誇らしげに認めた。

陪審は、ドンヴィル判事が法律で要求されている両方の量刑を言い渡しながらも、判決に自身の偏見を盛り込んで刑の重さを軽減するのを見守った。「ダイナ・スミス、合

計 10 回のむち打ち刑を宣告します。」たとえまつ毛が減ったとしても、法廷内の女性全員が胸をはだけたまま殴られるという考えにうめき声を上げた。

ディーの裁判後、ノアは残りの事件を 1 つのストーリーに統合し始めました。それぞれの犯罪において、誰が、何を、どこで悪事を行ったかの詳細は異なるものの、ほとんどの場合、結果は同じであった。何かが盗まれ、誰かがその泥棒を止め、今度は誰かが犯人を罰しようとしていました。

最も興味深い裁判はシモンズ裁判の直前に行われ、事件の検察官を除く会場全体に、悪と不幸の話から切望されていた休憩時間が与えられた。

12 月 27 日、3 人の若い友人、キャサリン・フィッツジェラルド、ルビー・アン・マー、メアリー・エグダーブがブルーックス・ブティックに入った。3 人全員が互いに 1 分以内にリボンを購入し、支払いました。オーナーのベンジャミン・ブルークは、キャサリンに結婚するほど美しいと言って浮気した。キャサリンは友人たちに目を丸くした。3 人はこんな女との結婚なんて考えてくすぐす笑った。

ルビーはリボンの代金を支払い、ブルークは「寝る場所が必要なら、私が探してあげるよ」と言いました。

「優しくないですか？」彼女は友達にウインクしながら皮肉っぽく答えた。メアリーがリボンの代金を支払うまで、これらすべては「カサノバのユーモアゲーム」のように続いていましたが、その後、ブラックは意地悪になりました。

ブルークはメアリーに小銭を渡そうとしたとき、メアリーの手を掴み、「なぜあなた達は私から盗むのですか？」と叫びました。

「放してください、おじいさん！ あなたは妄想癖があります。」

そう言って、ブラックはバンシーのように叫び始めた。「いいえ、リボン代を払ってくれた人は誰もいません。」

「やめろ！ 悪党だ！」

女性たちが店から逃げ出す前に、巡査のデイビスが店から出るのを止めた。デイビスは 4 人を黙らせた後、彼らの話を聞いた。3 人の女性が同じ話をし、店主が好色であるという評判があったにもかかわらず、警察官は店主の話を信じました。なぜなら、他の人々たちは女の子だったからです。

そこで彼らはニューゲートへ向かいましたが、そこで判事は 3 人に同情しませんでした。何らかの理由で、ターンキーは彼らをニューゲートの独房に入れ、「デイルーム」には決して入れませんでした。彼らの裁判は、ドンヴィル判事がブラックのことをよく

知っていたという点で独特であった。判事は過去にブルークの冤罪を経験しており、法廷が再びだまされることを許すつもりはなかった。彼は陪審に対し、女性たちが無罪であると認定するよう指示し、陪審がその通りに行動すると、女性たちを解放するよう命じた。

この事件の最後の判決として、裁判官はブラックに対し、訴訟費用、ニューゲートでの女性たちの住居費、そして虚偽に対する多額の罰金の支払いを命じた。女性たちは自由以外何も受け取らなかった。

3人の女性が法廷から出ていくと、サイモンズは自分の犯罪について説明するよう呼び出された。彼の不法行為は、彼が愚かであると同時に残忍であることを示しました。検察官のフランクリン・パクストンは、白い羊の群れの中で唯一の黒い羊が屠殺されているのを発見したと説明した。殺害の残酷さは、聞いているすべての人の心に響きました。

パクストン氏は、牧草地全体に広がっていた足、内臓、その他の部分の発見について詳しく説明した。その後、彼は滴る血を追ってサイモンズの庭に行き、そこで杭の上に羊の頭が刺されているのを発見した。その悲惨な光景は、犯罪を犯した農場主、そして彼の足元に立っていた血まみれの男に明らかでした。シモンズに向かって、農夫は「それは私の羊の頭だ」と叫びました。

「返してほしいですか？」

「いいえ、その杭に頭を突っ込んでほしいのです」と彼は言い、タックルでシモンズを地面に叩きつけた。

数分間の殴り合いと顔の血を拭き取る時間がさらに長くなった後、ヒュー・ペザリック巡査は二人を逮捕して乱闘を止めた。治安判事の事務所に入ると、犯人は投獄され、パクストンは家に送られた。

シモンズの窃盗と、その日に裁かれた1件を除く他のすべての窃盗との唯一の違いは、その判決だった。ドンヴィル判事は何の不安も感じずに、サイモンズの正義は死であると宣告した。

雲が午後の日差しを遮るために、被告席の上の鏡はもはや被告人に光を反射しなかった。受刑者の顔。その日、ヘンリーにとって楽だったのはこれだけだった。執行吏が彼の名前を呼んだとき、彼はただ座ったままだった。

「私は言いました——ヘンリー・フリーマンよ、立ち上がって告発者と対峙してください」と執行吏は叫んだ。ジョセフはいとこを前に押し出しました。ヘンリーはゆっくりと被告席に入った。彼は囚人の囲いで自分の下に座っているジョセフに目を集中させた

。「あなたは 12 月 28 日にロイヤル劇場でローレンス・ブランドから時計を盗んだ重罪で起訴されています。どうやって弁護しますか？」

ヘンリーは黙ったままだった。

「どうやって懇願するの？」執行吏に要求した。ヘンリーはまだ黙っていたが、注目を集めていることに震え始めた。

「弁護しなければなりません」とドンビル判事は言った。

ヘンリーは口を開いたが、何も出なかった。「話せるんですか？」裁判官は尋ねた。

ヘンリーはきしむ音を立てましたが、何も発声されませんでした。裁判官はイライラして「黙秘しても罪は免除されない」と続けた。彼はヘンリーからの返事を待っていましたが、現れたのは若者の足元に尿の水たまりだけでした。

「これが最後のチャンスだよ、発言しないと有罪判決を受けるんだよ！」

法廷は緊張に包まれた静寂に陥った。最後にドンヴィル判事は「あなたには私に選択の余地がありません。ヘンリー・フリーマン、私はあなたが重罪窃盗の罪で有罪であると認めます。私はあなたに死刑を宣告します。」と言いました。この宣言を聞いて、ヘンリーはすぐに気を失ったので、ジョセフはいとこのそばに駆け寄りました。フリーマン老人は少年を立ち上がらせるのを手伝い、「閣下、話を聞いていただいてもよろしいでしょうか？」と尋ねた。

「私の判決を支持しない理由を明らかにしていただければ、よろしいでしょうか。」

「できますよ、閣下」

「それでは話してください。」

「ヘンリーは私のいとこです。彼の舌に猿轡をかませたのは恐怖です。私たちは田舎の漁師から生まれました。1 年前、私たちの両親と数人の兄弟姉妹がボートの事故で命を落としました。」

「この悲劇は現在はどう語りかけるのか？」

「もしヘンリーが助けてくれなかつたら、私はあの事故で死んでいたでしょう。」彼は裁判官からの返答を待つために立ち止まりましたが、何もなかつたので、ジョセフは続けました。「ボートが沈むとき、何かに頭を打ち、意識を失いました。」再び一時停止し、再び沈黙。「ヘンリーがどうやって私を安全な場所に連れて行ったのかは分かりませんが、彼はそうしました。ヘンリーがいなかつたら、私は創造主と一緒にいたで

しようし、ヘンリーは決してスリにはならなかつたでしょう。なぜなら、彼にその技術を教えたのは私だからです。」

「あなたの正直さはすがすがしいです。それで、残ったフリーマン一族の皆さん、私はあなたをどうしましょうか？」

裁判官が彼らの状況を熟考している間、ジョセフは沈黙を保つ必要があると感じました。ドンビル判事は自分が何をしたいのかを正確に知っていたため、質問自体は修辞的でした。「あなた方は二人とも罪を犯していますが、あなたの状況を考えれば、罰を受ければ更生できるはずです。」それから彼は立ち止まり、「あなたには自分を向上させる能力がありますか？」と質問を投げかけました。

「はい、そうです。」

「そして、誠実な国民になるために努力しますか？」

「閣下、私たちの過去の行いを正すことを約束します。」

"どうやって？"

「ええと、あなたはすでに私を輸送しています。私たち二人が一緒に輸送されるなら、私はヘンリーを倫理的な方法で育てるつもりです。私たちはオーストラリアで新しい世界を構築するためにイギリスのために一生懸命働きます。」

「私は受刑者に対して不信感を持っているので、あなたの言葉を信じていいのか疑問に思っています。」

「どうやって保証できますか？」ジョセフは尋ねた。

「それはできないと思います。あなたの今後の行動によってのみ、あなたの言葉が真実であることがわかります。」

「過去の行動が決断に役立つかもしれません。」

「説明してください」と裁判官が要求した。

「ヘンリーがよちよち歩きのとき、彼はまず後ろ向きに歩くことを覚えました。理由は誰にもわかりませんが、1年以上、彼はほとんどの場合、世界を逆向きに移動していました。実際、家族はヘンリーがその行動に慣れていたのですが、ある日散歩中、突然彼が私と妹のエミリーを地面に突き飛ばしました。私が土を叩いたとき、周囲でガサガサという音が聞こえました。ヘンリーの方を向くと、巨大な木の枝が彼の足元からほんの数インチのところに来るのが見えました。ヘンリーは私たちを救ってくれました。それ

に、あの出来事の後、彼は後ろ向きに歩くことに多くの時間を費やすことはなかった。
」

「生き続けるためには、ヘンリーを連れていなければならないようだ」と裁判官はコメントし、法廷は笑いに包まれた。

「それはおそらく本当でしょう。ヘンリーに死刑を宣告するなら、私にも同じようにしてください。」

裁判官はジョセフを見つめ、彼の真剣さを判断した。彼はこの発言が狂気であることを知っていましたが、その概念の中での語りや騎士道精神についてジョセフを非難しませんでした。「他の日なら、私はおそらくそうするだろうが、今日、オーストラリアは労働者を必要としているので、あなたたち二人に終身輸送を宣告する。もしあなたたちのどちらかがイギリスに戻ったら、あなた方は絞首刑になるだろう。私は自分の考えを理解できているだろうか？」

「はい、閣下、ありがとうございます」とジョセフは言いました。

「あなたの言葉を守ることで、私に感謝してもいいでしょう。」

「はい、もちろんです、先生。」そう言って二人の少年は席に戻った。

「若い頃の自分をどこかで見かけますか？」スクルージは尋ねた。

「いいえ、しかし、私は別の証人室に閉じ込められたことを覚えていています。しかし、私は決して証言しませんでした。」とマーリーは答えた。

"なぜ？"

「座ってたわ寒くてカビ臭い部屋で何時間も過ごします。実際、一日中です。太陽が沈み始めたとき、その日の試練は終わったと思ったので、私はその場を去りました」とマーリーは説明した。

「なぜ尋ねなかつたのですか？」

「質問できる人が見つからなかつた。」

「そして、たとえあなたが証言したとしても」とスクルージは立ち止まり、続けた。「あなたはおそらく嘘をついたでしょうね？」

マーリーはゆっくりと長くため息をつき、「たぶん」と答えた。

スクルージは公開ギャラリーで近くに座っていたフローラに向かって身振りで示した。「残念ながら、彼女は証言することを許可されないでしょう」と彼は言った。

「とにかく、彼女はこの事件について何の知識も持っていないません。」

さまざまな書記官、弁護士、裁判官が一日中下された複数の判決から必要な文書を入手する中、法廷内の活動は激しく動いた。更新されると、ドンビル判事は「執行吏、次の被告を呼んでください」と言いました。

「ノア・マーリー、立ち上がって告発者と対峙してください」と執行吏が叫んだ。ノアはためらうことなく被告席へ歩いていった。

彼が動かず立ったまま、執行吏は続けた、「あなたは 12 月 24 日にプレッシー・アンド・バークレーの食料品店から 112 ポンドを盗んだ重罪で起訴されています。どうやって懇願するの？」

「無罪です。」

ノアは、昔の上司であるバーソロミュー・プレッシーが証人席に入るのを見ていた。黒いローブとマントを着た丸顔の男がプレッシーに近づいてきた。一步ごとに弁護士の腹は左右に揺れ、長い白いカツラは一步ごとに前にはためいていた。男の動搖は法廷でゴリラが放し飼いになっているような印象を与えた。「あなたはプレッシー・アンド・バークレーズ食料品店のオーナーですか？」弁護士は尋ねた。

「私です。」

「それで、バークレーはこの法廷にいるのですか？」

「いいえ、彼は退職しました。」

「それでは、食料品店の唯一のオーナーとして、あなたのお店で起きた盗難について裁判所に報告してください。」

「ノアは私のために 4 年間働いていて、クリスマスイブの活動を彼に任せる時期が来たと思ったのです」とプレッシーは語り始めた。

「なぜ彼を信頼したのですか？」弁護士は尋ねた。

「彼は完璧な労働者のように見えました。常に時間を厳守し、人付き合いも上手で、私は正直にそう思いました。」

「彼は正直だ！」幽霊マーリーが叫びました。

スクルージはマーリーを見て、「これは君にとっては大変なことになるだろう。何も変えることはできないので、自分の為にも落ち着いてください。」

マーリーは怒りの目でスクルージを見つめた後、音もなく被告席のノアの隣に移動した。スクルージはマーリーが自分のもとを去ったことに驚きましたが、弟の近くにいる必要があることは理解していました。

プレッシー氏は、銀行でノアに遭遇し、お金がなくなっていることに気づき、その後行員が逮捕されたという話を続けた。話にはそれ以上のことはほとんどありませんでした。「ノアがこのように私を敵に回すのは心が痛む。こうなるまでは、私は彼をほぼ三男として見ていました」と述べ、この出来事の語りを終えた。

その時点で、プレッシーの弁護士はノアに「事件の事実を変えるために何か言えることがありますか?」と尋ねた。

「お金は受け取らなかった。閉店後に銀行に行く途中にバッグから落ちたに違いありません。」

「さあ、これを理解させてください-お金が「袋から落ちた」のです。どうやって?」

「地面が凍っていて、途中で二度転んでしました。」

「転ぶたびにバッグの中を調べる知性はありましたか?」

「いいえ」

「それでは、なぜバッグからお金が落ちたと思うのですか?」

預けに行つたらなかつたので。

「そして問題がある。あなたは私たちに自分が真実を言っていると信じてもらいたいのですが、あなたは嘘をついていますよね? お金を盗んだのはあなたであり、幽霊の歩行者ではありません。それは事実ですか?」

「いいえ、私がお金を盗んだんです」幽霊のマーリーがあまりにも勢いよく咆哮したため、弁護士のカツラが額から外れてしまいました。

弁護士は髪飾りを整えながら、「まあ、マーリーさん、あなたはお金を盗んだのですか、それとも盗まなかつたのですか?」と尋ねた。

ノアが「いいえ」と首を振ると、目に見えない兄弟が「はい」という言葉を発しました。

「話してください」と裁判官は指示した。

「はい、はい、はい、やったよ」と幽霊は叫びました。

ノアがこう言ったとき、幽霊の体から熱い怒りの蒸気が噴き出しました。彼は私をマネージャーにするつもりだと言いました、そして私ならその可能性を傷つけることはなかったでしょう。」

「つまり、あなたは昇給を台無しにしただけでなく、それを台無しにしたのです。それは正しくないですか？」

「いや、偉そうなバカ野郎」マーリーはスクルージを見て、「どうすればノアのためにこれを変えることができるでしょうか？」と付け加えた。

「ジェイコブ、あなたは何をしても過去に起こったことは変わらないことを知っていますね」スクルージはマーリーに呼びかけた。

残りの裁判は予想通り続行され、ノアは有罪となった。彼の判決はいくぶん驚くべきものだったが、実のところ、法廷手続きに詳しい人なら誰でも予想していたものだった。「あなたには死刑が言い渡される」とドンヴィル判事が発表した。バルコニーからはフローラの泣き声が聞こえた。

すぐにノアには手首に手枷がかけられた。囚人席に向かう途中、ヘンリーは立ち上がりつて彼の隣に移動した。少年はあまりの感動でノアを抱きしめたので、ドンビル判事がさえぎった。彼らの瞬間。「ニューゲートに戻ると時間があります。囚人は全員着席したままにしてください。」ヘンリーがノアの隣に座ると、ノアは少年の肩に腕を伸ばした。

残りの裁判が進行している間、陪審員席で騒ぎが起こった。12人の男性のほとんどがセッションを終えたくてうずうずしているようだった。朝から夕方まで、一瞬たりとも休むことなく一日が過ぎてしまいました。男性たちは疲れと空腹を訴えた。それにもかかわらず、彼らが最も望んでいたのはトイレでの時間でした。

ドンビル判事は、全員が同じ状況にあると言って12人を黙らせ、最終裁判を続行した。陪審はほぼ瞬時にこの男が重罪の窃盗で有罪と認定し、裁判官は処罰として移送を発表した。こうしてセッションは終了し、スクルージとマーリー以外の全員が部屋を出た。

「さあ、どうする？」スクルージは尋ねた。

「悲劇が展開します」とマーリーは答えた。

「ということは、我々はこれ以上の困難に直面することになるのか？」スクルージは、もう空になった法廷を指差しながら言った。

「私たちの最終目的地に比べれば、ここは教会です。」

そう考えてスクルージは沈黙し、翌日までマーリーを追った。

受刑者たちがデイルームに足を引きずって入ってくると、辺りは全体的に憂鬱な雰囲気に包まれた。友人たちは集まって、お互いの文章を慰め合った。ジョセフは唯一の外れ値でした。彼はヘンリーに、これから経験するであろう素晴らしい冒険について元気よく話しました。

ヘンリーは「別のボートに乗るくらいなら、絞首刑に処せられたほうがました！」と爆発した。その爆発で部屋は静まり返った。

「ヘンリー、私も水が怖いです。これ以上怖いものはありません。」とジョセフの目の端に涙が浮かんでいました。

「私はあなたとは行かないよ、ジョセフ」

"あなたは何をしますか？"

「そうですね…」

「逃げるつもりですか？」

ヘンリーはためらうことなく、「はい、私は若いです。船まで歩いている途中で逃げても大丈夫です。私が普通の少年ではないことは誰も知りません。」と言いました。

「ヘンリー、あなたはレッグアイロンとリストアイロンの両方を着用することになるので、みんなに知られるでしょう。」とジョセフが言いました。

「くそったれ！」

「ほら、ヘンリー、あなたは私が知っている誰よりも勇敢です。私たちは一緒にこれを行なうことができます」とヘンリーの目の高さになるようにしゃがみながらジョセフが言いました。"私を見て。"

ヘンリーはしぶしぶいとこの目を上げ、「怖いよ」とささやきました。

「私も同じです。私は自分に勇気があるように振舞っているだけですが、あなたは私には決してかなわない勇気を持っています。」

「はい、ヘンリー、あなたはここでは特別な人です」とディーは言いました。「親愛なる天使よ、聞いてください。あなたには飛行する力があります。翼の動かし方を学ぶ必要があるだけです。」

ヘンリーがアメリカから来たアフリカ人女性の風化した顔を眺めていると、デイルームのドアが勢いよく開いた。ターンキーは「ダイナ・スミス」とアナウンスした。

「はい」とディーは答えた。

"私に従ってください。"

ディーは間髪入れずに部屋から出てきた男の後を追った。彼らが刑務所のじめじめした廊下を進んでいくと、ディーは穏やかな息を吸い始めた。鞭打ち部屋のドアが十分に開いて彼女を迎えるまでに、彼女は精神の焦点を祈りの状態に置きました。

鞭打ち部屋に入ると、フードをかぶった男がディーさんを壁の手枷に固定し、シャツを脱がせ、「あなたには合計 10 回の鞭打ちの刑が言い渡された」と言いました。彼女の顔をまっすぐに見て、彼は続けた、「今日この部屋で私があなたに与えることについて、あなたは他の人に話してはなりません。あなたは自分自身、私、そして将来この部屋に連れてこられた人々を守るために沈黙を守らなければなりません。わかりますか？」

ディーさんは間違なく当惑したが、首を振って肯定的に答えた、「私は死ぬまでこの部屋の秘密を守ります。」

フードをかぶった男は満足して、「それではつり革の準備をしてください」と言いました。彼は、ディーの真後ろの場所まで歩きながら、自分の歩数を数えました。彼女が気づく前に、男は鞭を鳴らした。生皮がディーの肉に触れると、はっきりとした二重の亀裂が生じた。新鮮な傷から血が滴り落ち始めたとき、彼女は動かなかった。

男は立て続けにさらに四回鞭を打ち、そして立ち止まった。ディーさんは、なぜ男性がただ鞭で彼女の背中を撫でているだけのように見えるのか不思議に思った。鞭が鳴るたびに、彼女は背中に空気の勢いを感じましたが、接触による深い刺し傷はありませんでした。最初の 5 回の鞭打ちの後、男はディーの近くの空き地で鞭を打ち始めた。さらに 5 回の空気の鞭のカウントが鳴ると、彼は立ち止まり、ディーのところに歩いて行き、「このことはいつ話すつもりですか？」と言いました。

「死に際に」

そう言って、男はディーをカウンターに連れて行き、ディーは彼女の背中の痕跡を数えました。開いた傷の必要な数が数えられた後、ディーさんはシャツを着ることが許可されました。彼女は他の人たちに別れを告げるためにデイルームに戻されることを望んでいましたが、自動運転車は彼女を正面玄関まで連れて行ってくれました。

ディーが刑務所を出たとき、彼女は、どうして5回のむち打ちで10回の傷ができたのか不思議に思いました。彼女は当惑にこだわることはなかった。死によって鞭打ちのすべてが思考から解けるまで沈黙を約束したからである。。むしろ、自由が再び自分のものになったことを実感して彼女は微笑んだ。

ノアが訪問者の囲いのところで弟を待っていると、ディーが通り過ぎた。「ディー、ディー」彼は彼女に呼びかけた。

彼女は歩みの途中で立ち止まり、ノアの方へ歩いていった。「わかりました、お別れを言いたかったのです」と彼女は言った。

「罰を受けましたか？」

「はい」と彼女は残りの返答をつまづきながら答えた。「まつ毛10本。多すぎませんよ。」

「それで、これから何をしますか？」

「それに対する答えはありません。」

「ほら、これを取ってください。」彼は最後のペンスを彼女に手渡した。

「いいえ、今日私に必要なのは自由だけです。」そう言って彼女はノアにお金を返し、彼の頬をそっと手で撫でてから、刑務所と自分との間に距離を置き始めました。

ノアは体を温めようとして、足から足へと飛び跳ねました。30分後、ついにジェイコブが到着しました。ノアは弟が刑務所に近づいてくるのを見ながら、怒りが嵐に変わった。「なぜ私の裁判で証言しなかったのですか？」

「一日中そこにいたんだけど…」

「あなたの言い訳は気になません。あなたの無関心のせいで私は殺されました。」

ヤコブは兄の言葉にショックを受けました。彼は自分の犯罪が暴かれ、罪悪感という内なる圧力に屈しそうになつたのではないかと恐れていた。彼が告白しようと口を開いたとき、ノアは口を挟んでこう言った。「あなたはこれを正さなければなりません。私がしていないことで死ぬ必要はありません。」

「明日、内務大臣があなたの死刑判決を検討する予定で、私もそこに行きます」とジェイコブは断言した。

「私は今、生まれてから今まで誰を必要としたよりもあなたを必要としています。」

「あなたには寛大な処置が与えられるべきだと彼に説得してみます。」

「あなたが努力するのはわかっています。このレビューはいつ予定されていますか?」

「午後ですよ。3時から始まります」とジェイコブが言いました。

「出発する前に、明日は追加の食料とラム酒を1本持ってきてほしいのですが。」

「パーティーの予定はありますか?」

「はい、明日それらのものを持ってこなければなりません。持ってきてもらえますか?」ノアは尋ねた。

「正午までに着く予定ですが、もうすぐでしょうか?」ヤコブは答えた。

"はい。"

ノアがデイルームに戻った後、ヘンリーは「ディーを見ましたか?ずっと待っていましたが、戻ってきません。」と尋ねました。甲高い口調が彼の顔の不安を浮き彫りにしました。

「彼女は解放されました。私は彼女が去るのを見ました」とノアは断言した。

「彼女は血まみれでしたか?」

「いいえ、いいえ、王冠は野蛮人でいっぱいではありません。」

「彼女がいなくなると寂しくなるよ。」

「そうするのは分かっています。」

それからヘンリーはノアの耳元で「ジョセフのお母さんを思い出します。誰よりもアーリーンおばさんがいなくて寂しいと思います。」とささやきました。

「この世界では、ヘンリー、たった一人の人が自分を信じていれば、人は素晴らしいことを成し遂げることができます。あなたには、あなたの一歩一歩を信じてくれる人が二人いるのです。」

「本当、誰？」

「ジョセフと——私。」ヘンリーはノアの腰に腕を回し、それからしばらくの間友人の胸に頭を置きました。

「あそこで壊してください」とターンキーが叫びました。

暗闇が刑務所を覆い尽くしたとき、移送囚と死刑囚を除く全員が処罰され、その後釈放された。デイルームは放棄されたように感じました。

金曜日の朝、ノアは落ち込んだ。彼は訪問者用の囲いの中で弟を待ちながら、クリスマス以来のさまざまな出来事を思い出しました。なぜ自分がこんな状況になったのか、彼には不思議でなりませんでした。代わりに、彼の心はフローラを守ることに集中することで未来に向かいました。刑務所では、彼は彼女を助けるためにほとんど何もできませんでした。彼女の安全を守ることが死よりも彼を心配させ、個人的な絶滅が彼を怖がらせた。彼は彼女の安全を約束できないことを知っていたので、希望のない人々がすることを行い、祈りました。

「ごめんなさい、遅くなってしまいました。追加の食べ物を用意するのに苦労しました」とジェイコブは言いました。

ノアは祈りを終えて目を開けました。彼の前には鞄を持った二本の腕が立っていました。
「ラム酒を買うのに問題はなかったのですか？」

ジェイコブはバッグの周りを覗いて、「ラム酒が街で流れている。最近人々は酒を飲むことだけをしている。この天気では誰もが酒を飲んで冬眠している。」と言いました。ジェイコブはノアにさまざまな食べ物を手渡しながら、「アディントン殿下は公正な内務大臣だと聞いています。」と付け加えた。

「彼は私に許しを与えるほど公平な人ですか？」

「それは分かりませんが、彼が納得できるなら説得してみます。」

「もし彼を揺さぶったら、戻ってきて言ってください」とノアは要求した。

「あなたが最初に知るでしょう。」兄弟たちは立ち去ろうとした後、考え直してノアは振り返り、ヤコブに「愛しています」と呼びかけました。ヤコブは、まるで兄の言葉を

聞いていないかのように振る舞っていました。1時間以内に、若いマーリーは内務大臣室に入った。

ジェイコブは内務大臣が書き続ける間、アディントン閣下の机の上で静かに待っていた。ついにヤコブは咳払いをした。「はい、はい、あなたがそこにいるのは知っています」と貴族は言いました。考えを終えた後、アディントン内務大臣は羽ペンをインク壺スタンドに戻し、頭を上げて目の前に立っている若者を眺めた。“いかがなさいましたか？”

「私は兄の事件で寛大な処罰を求めるためにここにきました。」

「それで、あなたのお兄さんは？」と役人は尋ねた。

「ノア・マーリー。彼は窃盗で有罪判決を受けたが、犯罪を犯したわけではない。」

ホームセクレタライは自分が書いていた論文を振り返り、「毎日、男性たちから、私はあなたよりも信じる傾向があると聞いています。」と言いました。そう言って彼はペンを取り、再び書き始めた。

「お金を見つけたので持ってきました。プレッシーとバークレーの食料品店に返したいのです。そうすれば、兄を解放してもらえます。」

「待って、待って、待って——正義はそうはいきません。」

“なぜだめですか？”ジェイコブは尋ねました。

「犯罪が犯され、判決が下されたからです。お金を返済するだけでは間違いを正すことはできません」とアディントン殿下は述べた。

「なぜそうではないのですか？その犯罪はお金を奪うことだったのに、なぜ返済すれば悪行が清算されないのでしょうか？」

「親愛なる皆さん、犯罪以来、別の代償が発生したからです。」

「それなら、その費用も私が払います。」

「なぜ裁判前に出廷しなかったのですか？」

「お金を見つけるとすぐに、裁判の前日にドンビル判事に会いに行きましたが、対応してもらえませんでした。」

「そして裁判では、なぜあの時黙っていたのですか？」

ジェイコブは行動が遅れた理由についての内務大臣の質問にすべて答えた。「わかりました、裁判所の記録を調べさせていただきます。」そう言って貴族がノアの事件に関する報告書を読んでいる間、二人は沈黙した。最後に、アディントン殿下はジェイコブを見て、「私はあなたの兄弟を釈放する気はありません。彼の犯罪は処罰に値します。」と言いました。

「しかし、彼は真実を話しました。彼が転んだときにバッグからお金が落ちたのです。私は地面に落ちているお金を見つけた少年からお金を回収しました。」

内務大臣はヤコブのことを調べて、「私はあなたの言うことを信じません。あなたは聖人から、ましてや平民からそのお金を取り戻すことは決してできないでしょう。」と言いました。

「ノアを手放さなければなりません。」

"なぜ？"

「彼の妻は赤ちゃんを産んでいます。」

「それでも彼の評決を覆す理由にはならない。」

スクルージは幽霊のマーリーを見て、「フローラが子供と一緒にいたことを知らないのかと思った」と言いました。

「その時は知りませんでした。彼に影響を与えることを願って言っただけです」と幽霊は言いました。

「あなたが望むものなら何でも払います」と若いマーリーは言いました。

アディントンはジェイコブの自由を脅かすことで彼の申し出を拒否した。「お兄さんと一緒に行きませんか？」

「それで彼が釈放されるなら、そうだ、代わりに私を刑務所に連れて行ってください。」

「これにはあなたが言っていること以外にもたくさんのことがあります。なぜあなたは兄の代わりをしようとするのですか？」

「彼は私の命を救ってくれました。彼に借りがあります」と若いジェイコブは答えました。

「それも嘘ですよね？」スクルージは尋ねた。

幽霊はため息をつき、「ノアを解放してもらうためならどんな嘘でもついたんだろう」と認めた。

「それでも、真実を話すという選択肢はなかったのですか？」スクルージはマーリーの返事を待ちましたが、何も来ないことはわかっていました。

「もしもあなたが彼を釈放してくれるなら、私が所有するすべてのシリングをあなたに差し上げます。それに、ノアの代わりに刑務所に入れてください」と若いマーリーは内務大臣に金を手渡しながら嘆願した。

「そうですね、絞首刑は兄さんにとって厳しすぎる刑罰ですので、減刑させていただきます。」男はすぐに紙にいくつかの数字を書き、ノアの借金を支払うのに必要な正確な金額を数えました。「期限が切れたたらあなたの弟を釈放します。私に必要なのはプレッシーを正すのと、ノアの投獄費用を賄うのに十分なお金だけです。」その後、アディントンは残りの資金をジェイコブに返し、「もしまた私に賄賂を贈ろうとするなら、1年間投獄する」と警告した。

「当然のことだ」とジェイコブは言った。

アディントン殿下はジェイコブの過剰な賞賛にうめき声を上げ、片手で羽根ペンを取り、もう一方の手でジェイコブを振り払った。「あなたはやるべきことをやったのですから、去ってください。」

ジェイコブは熱意を持って建物から飛び出し、刑務所まで数ブロックを走った。面会時間が過ぎても彼は驚きませんでしたが、とても興奮していたので、暗闇が去らざるを得なくなるまでそこに立っていました。

ジェイコブが口笛を吹きながら家に帰ると、ノアはパーティーバッグをテーブルの上に置き、「みんな、カップを出して」と言った。ラム酒のボトルをカウンタートップに置きながら、彼はこう付け加えた。「今夜はパーティーだ、明日が別れだからね。」

ジョセフは瓶を見て、「お兄さんはきっとあなたのこと気に入っているはずです。これは良いものです。」と言いました。

「そうだと思うよ」とノアは瓶の前にパンとチーズのブロックを置きながら答えた。ヘンリーは食べ物を見て唇をなめた。「宴会の準備はできていますか？」ノアは隣の席をたたきながら尋ねた。

ヘンリーは座って、「私もあなたと同じくらいもらえるの？」と尋ねました。

「いいえ…」とノアは答えた。

ヘンリーは眉をひそめて、「大丈夫、私はあなたより小さいの。そんなに食べないわ。」と言いました。

「ヘンリー、あなたは私が終わるのを待っていました。私はあなたに私以上のものを与えるつもりです。船まで歩くには余分なエネルギーが必要になるでしょう。」そう言って、ノアはパンをほぼ同じ大きさの3つに裂きました。このプロセスをチーズでも繰り返しましたが、チーズ片のサイズはまったく同じではありませんでした。ノアはヘンリーに両方の最も大きな部分を手渡しました。少年はチーズをかじりながら、嬉しそうに笑いました。

「これがあなたのものです、ジョセフ」と彼は言って、若者に自分の分け前を手渡しました。ジョセフは友達の向かい側に座りながらカップをテーブルの上に置きました。それからノアはラム酒をカップ半分ずつ注ぎました。

ヘンリーはチーズをむさぼり食うのに忙しすぎて、目の前のカップを見ることさえできませんでした。ジョセフは飲み物をがぶ飲みした。飲み終えた後、彼はカップを差し出し、「お願いです、もう少しいただけますか？」と尋ねました。

「自分のペースでやらないといけないよ」とノアはカップ半分を注ぎながら言った。

「そうですよ。チーズはどうですか、ヘンリー？」

少年から聞こえたのは「うーん」という声だけだった。

三人はチーズをすべて食べ尽くし、パンのかけらだけが残るまでむさぼり食った。ヘンリーはノアの前にパンを置き、「私のお腹を見てください。」と言いました。彼はシャツを持ち上げてお腹をさすり、「これほどお腹が膨れたのは初めてだ」と付け加えた。

「最初にご挨拶できて嬉しいです。乾杯の準備はできていますか？」

「トーストフォークはありますか？」ヘンリーは尋ねた。

「そんな乾杯じゃなくて、こういう乾杯だよ」ノアはカップを掲げながら言った。ジョセフはノアの先導に従い、飲み物を持ち上げました。彼らは一緒にヘンリーを見つめ、彼はほとんど残りの食べ物を吸い込み、それからカップを他のものにぶつけてカチャカチャと打ち鳴らしました。「あなたたち二人おかげで、私はこの経験を耐えられるものにしてくれました。あなたがいなくなると寂しくなるでしょう。それでは、オーストラリアに飲みに行きましょう。」

「分かった、オーストラリアがドイツに移住してもいいよ」とヘンリーは言った。

「そんなことで乾杯はしません。意味がありません」とジョセフは冷笑した。

「だから乾杯はいいのかもしれない、ジョセフ。ラム酒の楽しみ方では、30分も経てば乾杯のことなどまったく思い出せないだろう」とノアは他の人たちにカップを押し付けながら言った。

「分かった、ドイツがオーストラリアに移住してもいいよ。」ジョセフは間髪入れずに他の人たちと杯を打ち鳴らし、それから飲みました。

「いいえ、いいえ、やめてください。それは乾杯の挨拶ではありません。私はオーストラリアがドイツに移住してほしいのです。」

「ヘンリー、あなたはこれを理解していません。オーストラリアがドイツに移ったら、ドイツはどこに行くのですか？」

「ああ、そうそう、ドイツはオーストラリアに移住しなければならないようですね。」

「以上です、同じ乾杯です」とジョセフはカップを他のカップに叩きつけながら言いました。

二人は一緒に酒を飲むと、ヘンリーはすぐに咳き始めた。「ああ、これはひどいですね。」

「ラム酒の場合は、気に入るまで飲まなければなりません」とジョセフは言いました。

「そんなことは起こらないよ」ヘンリーは残りの液体をジョセフのカップに注ぎながら言った。それから彼は行って、コップに水を入れました。

テーブルに戻ったノアは、「それでは明日が大事な日ですか？」と尋ねました。

「聞こえますよ、明日。はい、明日です」とジョセフは答えた。

「ジョセフ、あなたに言いますが、もしスピードを落とさなければ、明日ウーリッジまで5マイル歩くことはおろか、動くこともできないでしょう。」

「ノア、あなたが正しいことはわかっていますが、私は気にしません。この素敵なお部屋でまたパーティーができるのはいつですか？」彼は尋ねた。

彼らは一緒に、ほぼすべてのことに乾杯しました。食べ物はなくなりましたが、少年たちは飲み物で満腹のままでした。「ノアに乾杯します」とジョセフは言いました。カップのカチャカチャという音を待たずに、彼は空になったものを飲み、それからげっぷ

をした。ヘンリーは、自分自身のほぼ無音のげっぷを出しながらくすぐすと笑い、それにジョセフがまた音を立てて吐き出しました。それからヘンリーは、最初の時よりも少し大きな声で、本当のげっぷを発しました。

このお腹の鳴き声の交換は、ノアが深呼吸し、部屋全体に聞こえるゲップを鳴らすまで、いとこたちの間で続きました。ジョセフが羨望の目でノアを見つめていると、ヘンリーはくすぐすと笑いました。彼らは皆沈黙し、お互いを見つめ、そして笑い出した。ノアはユーモアの涙をこらえながら、「あなたたち二人はいつもそんなに競争心が強かつたのですか？」と尋ねた。

「競争しているときだけだよ」とジョセフは答えた。

ノアは笑いすぎてベンチから転げ落ちた。ヘンリーの顔に衝撃が走ったので、ジョセフは行動を起こしました。彼はノアのところに行き、立ち上がるのを助けました、「怪我はありませんか？」

「ジョセフ、あなたと一緒に酒を飲むのは楽しいよ」とノアは言いました。

「そして、あなたは私が飲みすぎだと思ったのでしょうか。」

彼らが再びテーブルに着くと、ノアは「酔うと重力がより強力になると思いますが、誰が知っていたでしょうか？」とコメントしました。落ち着きを取り戻した後、彼はこう付け加えた。

いとこたちが返事を求めて顔を見合わせていると、沈黙が三人を襲った。それからジョセフは微笑みながらこう言いました。「それは、ヘンリーと私がアドル川で釣りをしていた日のことですね。」

ジョセフが詳しく説明する準備をしている間、ノアは微笑んだ。「いいえ、そのことは彼に言わないでください」ヘンリーは叫びました。

「さあ、私の飲み物を一口飲んでください。あなたの内気な気持ちが和らぐでしょう。」とジョセフは言いました。ヘンリーはカップを掴んで一口飲みました。彼は咳き込みながら、「あのくだらないことに慣れることができるかもしれない」と言った。

「まあ、血まみれのヘンリー、その土汁を取り除いて、男たちに加わってください。」とノアは言いました。

ヘンリーが水を飲み終えると、ジョセフが話をしながらノアが少量のラム酒を注ぎました。「私たちは二人同時にセリフを吐き出しました。そして、すぐに私は強い引っ張りを感じました。私は叫びました。『ヘンリー、一本取れた』と。すると、彼は私に怒鳴り返しました。『私も同じです。』」 ジョセフはもう一杯飲み、それから続けた。

「私たちは獲物をめぐって悩んでいました。最初、私が釣り糸をボートに向かって引っ張っていると思ったら、突然魚が私の釣り糸を強く引っ張ったのです。すると、ヘンリーが金切り声を上げました。『もうすぐ釣れそうだ』と。」

「私は金切り声を上げなかつた」とヘンリーは抗議した。

「もしあなたがいなかつたらひどいよ興奮した。とにかく、これは数分間続き、私たちは両方ともキャッチの成功を宣言しましたが、戦いは續くだけでした。」

「それで、その夜はよく食べましたか？」ノアは尋ねた。

「そうですね、そうしました」とジョセフは答えました。

「私も食べました。あなたは私と共有してくれました」とヘンリーはコメントした。

「まあ、それが私にできる最低限のことでした。」

「それで、ヘンリーの魚はどうなつたの？」ノアは尋ねた。

「私たちは引っ張っても引っ張ってもあまり成功しませんでした。それから私は魚を引き上げるか、竿を折るかのどちらかにしようと決めました。私が強く引っ張りすぎたので、ヘンリーは川に飛び込みました。」

「船を揺らしたりとか、何をしたの？」ノアは不思議に思いました。

「それは何かです。ようやく魚を引き上げたとき、私の釣り針は獣の尾に取り付けられていきましたが、もう一つの釣り針、ヘンリーの釣り針が獣の口の中に残つたままでした。」

ノアは首を振つてから笑いました。「何が起こつてゐるのか知つていましたか？」

「どうしてそうなるの？ 尾に魚を引っ掛けるのは誰ですか？」

「もちろんあなたよ」ヘンリーは少しライラしながら答えた。

「それで、ヘンリー、あなたのいとこはあなたを完全に辱めました。彼の話をうまく説明できますか？」とノアは尋ねました。

「もっといいものを手に入れたよ」とヘンリーは答えた。彼はためらうことなく自分の話に飛び込んだ。「2年ほど前、私たちは釣りをしていましたが、そこは湖でした。どの湖だったかは覚えていません。」

「君たちはよく釣りをするんだよ」とノアは言った。

「そうですね、私たちはブライトヘルムストン出身です。そこで他に何ができるでしょ
うか?」とジョセフは言いました。

「私は話しているのよ」ヘンリーは不平を言った。彼は沈黙を待ってから、「ジミー…
」と続けた。

「ジミーって誰?」ノアは尋ねた。

「それは私の兄でした」ヘンリーは再び沈黙が進むのを待ちながら答えました。「私
たちは一日中釣りをしていましたが、ジミーは一匹も魚を捕まえていませんでした。彼
は水が悪いと言い続けましたが、ジョセフと私はサイフォンのように水を引き込んでい
ました。」

「ああ、ジミー——競争だと思ったらどんなことでも負けるのが嫌いな若者がいたんだ
」とジョセフは付け加えた。

「とにかく、ジミーは引っ越したかったのですが、私たちはそうしませんでした。そこ
で彼は糸を限界まで飛ばしたが、湖の向こう側の木の枝に絡まってしまったのである。
」

「小さな湖?」と言うと、ノアはすでに微笑んでいました。

ヘンリーはうなずき、こう続けた。「私たちは糸を失いたくなかったので、糸をたどつ
て木の枝まで行きました。その間、ジミーは糸がフリーになることを願いながらずっと
糸を引っ張っていた。「そうではなかったので、今、私たちはこの巨大な木の下で、
どの枝がフックに引っかかったのかを正確に把握しようとしています。」ヘンリーはコ
メントを待ちながら立ち止まりましたが、何も来なかつたので、続けました。「最後に
、ジョセフはその位置を追跡し、枝を掴もうと飛び上がり始めました。そして、彼はそ
うしました。」そこで彼は足をボートから振り下ろし、紐を緩めようとしていたところ
、背中に蛇が落ちてきました。」

「それは加算器でしたか?」ノアは尋ねた。

「そうだと思いました」とジョセフは答えた。

「ジョセフ、もしそうなら、あなたはここにはいないでしょう」とヘンリーは主張しま
した。

「それでも私はそうなのですから、それは滑らかな蛇だったに違いありません」とジョ
セフは言いました。

「それは疑わしいよ。どちらも稀であり、慎重です」とノアは断言した。

「分かりません」とヘンリーは言いました。「それはただの蛇でした。とにかく、ジョセフは赤ん坊のように叫びました…」

「しませんでした。」

「私たちが気づかないうちに、彼は枝から湖に落ちました。ジョセフが叫び続ける中、ヘビは出て行った。『殺される、殺される…』

「ほぼそうなりました。」

「そうは思いません。」ヘンリーは立ち止まり、話を終えた。「ジョセフは小枝を持って水面に飛び出し、『分かった』と叫びました。ジミーはただ首を振ってから尋ねました、『いつも視力が悪いのですか？』

「目に水が入った」とジョセフはこぼした。

三人がマグカップをたたいておいしい魚の話で乾杯していると、ノアが尋ねた。「ジミーは今どこ？」

ジョセフはヘンリーを見つめ、目に涙を浮かべながら、「彼は残りの家族と一緒に亡くなりました。」と答えました。

「それ以来、一度彼に会ったよ」とヘンリーは言った。

「いいえ、ヘンリー、あなたはちょうど彼に似た人を見ました。あなたは彼に会いたかったのですね。」

「ジョセフ、私が何を見たかは言わないでください！それに、それは夢でした、そしてジミーが私のところに来ました。」

「大丈夫ですよ。私はあなたを信じます、ヘンリー。夢の中で兄さんは何をしたの？」とノアは尋ねた。

「空の色は違っていて、私たちのような青はありませんでした。オレンジと緑っぽい感じでした。」

「そうすると茶色になりますよ」とジョセフは言いました。

「茶色ではなかったですよ。オレンジと緑が渦巻いているようでした。なぜ私を信じないのですか？」と彼はジョセフに尋ねました。

「私はあなたを信じます、ヘンリー」ノアは答えた。

「でも、私のいとこはそうではありません」と彼はジョセフを睨みながら言った。

「彼はただ酔っているだけだ。彼はあなたが真実を語っていることを知っています。ジミーはあなたに何か言いましたか？」とノアは会話を進めようとして尋ねました。

「いいえ、でも私は彼のことを理解しました。地平線上の光線が彼の周囲に後光を与えた。彼の髪はまるで別の世界から来たかのように、燃えるような色でした。彼は私を見て、それから夕日の方を向きました。ジミーは夕日の中を歩きたかったのです。」

「何かが彼を止めたのでしょうか？」ノアは尋ねた。

「私——私に対する彼の心配を感じました。」ヘンリーが続けると、ノアの頬から涙がこぼれた。「私は彼に手を振りました。彼は振り返り、オレンジ色の光に向かって走り始めた。彼が滑り去っていくのが見えて泣きましたが、もう彼がいなくとも怖くなくなりました。」

「それは美しかったよ」ジョセフが飲み物をするのを手伝ったが、すぐにテーブルに頭を落とした。

「いなくなつたようだ」ノアはジョセフの方に頭を動かしながら言った。

「彼はあの世に住んでいるのよ」とヘンリーは答えた。彼はカップから一口飲み、ゴクゴクと飲み込んでから言った。「これは大丈夫だと思うよ。ノア、釣りの話は何？」

「そうですね、私は良い釣り堀の近くに住むことに喜びを感じたことはありませんが、水糸は持っています。」彼は少し立ち止まってから続けた。「私が12歳くらい、ジェイコブが9歳のとき、私たちは泳いでいました。実際、私たちは暑い太陽から体を冷やそうとしているだけでした。とにかく、水面から約1インチ下にあるこの大きな平らな岩のセットに遭遇しました。3つまたは4つの岩のグループが完全に一緒に並んでいて、1つがもう1つと続くようにしました。それらが一緒にわずかな傾斜を作成しました。」ノアは深呼吸をしてから、話を再開した。「ヤコブは、服を着たまま、石層の一番高いところに座り、突き飛ばされました。彼は岩を滑り落ちました。」

「それは楽しそうですね。」

「そうだった、そしてそれが問題でもあった。」

「楽しみがどうして問題になるのでしょうか？」

「私たちは2人とも1時間以上岩を滑り降りました。アクティビティに飽きたら家に向かいました。そのとき、ジェイコブのズボンの裾がすり減っていることに気づきました。1ブロック離れたところからでも彼のお尻の頬が見えました」とノアは笑った。

スクルージはマーリーのお尻を見て、「回復したようですね。傷はありましたか？」と尋ねました。

「少しはありましたが、一週間はほとんど歩くことができませんでした」と幽霊は答えました。

「それは痛ましいことですね」とスクルージは言った。

「あの日は私の人生で最も楽しい日でした」とマーリーさんは語った。

「お兄さんには言いましたか？」ヘンリーは尋ねた。

「ダメージは受けっていました。彼の裸を指摘する理由は見当たりませんでした。もちろん、母は彼が家に入ってきた瞬間に気づきましたが、それが面白いとも思ったのです」とノアは答えた。

二人は顔を見合わせ、同時に笑い声をあげた。「うーん」とジョセフはうめき声を上げ、かろうじて頭を上げ、そして再びテーブルに落としました。

「今日は彼からの連絡はもうありません」とノアは言いました。彼はヘンリーの肩に腕を置き、「大事なことについて話してもいいですか？」と尋ねました。

ヘンリーはラム酒を一気飲みし、マグカップをテーブルの上に置き、「分かった、酔った。さて、何の話をしているんだ？」と言いました。

「ジョセフは大冒険に行くつもりだが、イングランドは君たち二人を働かせるだろう。問題が起こるだろう。」

「オーストラリアに良いことは何もないのでしょうか？」

「もちろん、あるでしょう。あなたはジョセフと一緒にいるでしょう、そして、いくつかの良い釣り穴があると確信しています。」

「ノア？」ヘンリーはベンチから立ち上がってノアの耳に手を当て、「オーストラリアには行かない」とささやいた。

「明日はアイアンをすることを知っていますか？」

「はい、でも、わかったんです。見ていてください。」そう言って、ヘンリーは体が持てる限りの空気を吸い込み、お腹を膨らませながら 30 数えるのを待ちました。勢いよく息を吐き出した。「ターンキーでアイアンを装着するとき、息を止めて手首と足首を大きくします。これにより、普通に呼吸するだけで手首と足首が緩みます。後でアイアンから滑り落ちます。」

「これを言わなければなりません、ヘンリー、あなたの心は思考の道具です。しかし、問題が 1 つあります。ターンキーはあなたの胃に束縛されるつもりはありません。」

"私はそれを知っています。"

「試してみてもいいですし、うまくいくといいのですが…」

「わかっています、手と足に空気が入っていないことはわかっています」とヘンリーは言いました。

「それは生物学上の奇妙な事実です、ヘンリー。あなたが行きたくない理由は、家族が亡くなっただけですか？」

「そうだと思いますが、とても寒いのに、なぜ今こんなことをしているのですか？」

「はっきりとは言えませんが、長い旅です。もしかしたら、季節が後になってうまくいくのかもしれません。」

「それでもできるなら逃げるつもりだ。」

「心の赴くままに進んでください。でも、あなたは思慮深い人のようですね。では、どうやって自分を強くするのか教えてください。」

ヘンリーはすぐには返事をしなかった。代わりに彼は「あなたの質問が理解できないと思います」と言いました。

「そうですね、イングランド最大の敵との戦いに参加する自分のことを考えてみてください…」

「フランス」とヘンリーがさえぎった。

「そうだ、そうだ、フランス。それでは、ナポレオンとの戦いにどう備えるだろうか？ 祈るだろうか、武器を研ぐだろうか、もしかしたら剣術の練習もするだろうか？ 困難に立ち向かう自分の中に強さをどうやって見つけるだろうか？」

ヘンリーは迷わず「私は歌います」と答えた。

ノアは少年の顔を見つめて、「なぜ私は驚かないのですか？ それは素晴らしいことです。少なくとも私の世界ではそうです。それで、あなたは私が知っているような歌を歌うのですか？」とコメントしました。

「時々。でも、たいていは曲を作るんです。」

「何か歌ってください。」

ヘンリーは「ベガーズ・コーラス」のラウンドに突入する前に一時停止した。心躍るメロディーを女の子らしい甘い声で歌い上げた。ノアは少年がすべての音を完璧に演奏するのを畏敬の念を持って見つめました。話し終えた後、ノアは「それは素晴らしいね。ヘンリー、あなたには才能がある。私にはアイデアがある。」と言いました。

「それでもオーストラリアに行かなければなりませんか？」

「逃げられるなら逃げろ、でもイングランドに捕まつたら、彼らはあなたを絞首刑にするでしょう。」

「では、私は何ヶ月も怯えなければならないのですか？」

「怖くなったら、いつでも歌い始めてください。ボートに向かって歩きながら、戦いに力を与えるものは何でも歌ってください、ヘンリーのために、あなたは最大の恐怖である海との戦いに行くのです。したがって、最も強力な武器、つまりあなたの声が必要になります。」

「もし誰かが私に歌ってほしくないとしたらどうする？」

「とにかくやってみなさい。あなたは誰も傷つけることはありません。」

「でも、みんな私より大きいよ。彼らは私を傷つけるかもしれない。」

「それは本当かもしれない。「周りに邪悪な連中がいるよ」と彼はマクシーに頭を振りながら言った。「その場合は、やめるか、沈黙を求める男についてお世辞の歌を作つてください。」

「お世辞？」

「あの人気がいかに頭がいいとか、見た目が良いかについて歌いなさい。しかし、彼をからかわないでください。もしそうすれば、彼は必ずあなたを船の側面に投げ飛ばすでしよう。」

「それが私が恐れていることなのです。」

「あなたならそれができるよ、ヘンリー、あなたは強い人よ。いつかジョセフがあなたを追ってくるから、あなたは今、自分の恐怖と強さをコントロールする方法を学ぶ必要があります。」

「ジョセフが私についてくると思う？」

「彼はすでにそうしていますが、決して他の人をコントロールしないで、彼らを導いてください。」ノアは立ち止まり、確信を込めて付け加えた、「あなたは歌のサンプソンです。どの詩でも恐れることなく行動すれば、あなたの強さは増すばかりです。」

「音楽にこれほどの力があるとは知りませんでした。」

「音楽は常に人類の精神を慰めるものの一つでした。あなたにはそれを使用する能力が与えられています。」

「ありがとう、ノア、私はその船に乗ろうと思います。」

「たとえ自分のためだけでも、歌い続けてください。」

そう言ってヘンリーはノアを抱きしめ、「来てくれたらいいのに」と言った。

「あなたへの愛も大きくなりました。」

「よし、睡眠制限の時間だ」というターンキーの叫び声とともに、デイルームのドアが勢いよく開いた。

「何ということだ」とジョセフはうめき声を上げた。

「まだ息があるとわかってよかったです」とノアはジョセフの後ろに入り、立ち上がるのを手伝いながら言った。「ヘンリー、もう片方の腕を掴んでください」と彼はジョセフの左腕を肩の上にたたきつけながら言った。

三人は一緒にドアに向かって歩きましたが、ノアが部屋の中央の柱で左に行き、ヘンリーが右に行くと、ジョセフは頭から柱に突っ込みました。「すみません、先生、どこへ行くか気をつけてください」とジョセフは電柱に向かって言いました。

「彼はおそらく明日、これを感じるだろう。」

**** 五段目 ****

悲しみのシュラウド

朝が来るのは早すぎて、まだ酒で目がくらむ3人でした。彼らがデイルームに入ると、すぐにターンキーが搬送対象の車両とその他の車両を分離し始めました。ジョセフは輸送業者の側に向かうノアの肩を叩きました。ヘンリーはノアを抱きしめ、顔を見上げて、「私たちの話を覚えています」と言いました。

ターンキーが少年をノアから引き離すと、彼は体を動かして野獣から解放され、鼻歌を歌い始め、それからジョセフに足かせをつけたターンキーに向かって歩きました。そこで彼はアイアンが固定されるのを待った。全員が旅行のために準備が整うと、ターンキーはグループに一列で互いに従うように命令しました。ジョセフとヘンリーはノアの別れの手を振り向かずに部屋を出ました。数分以内に、高い声の澄んだ音色が通りから聞こえてきました。

音楽が消えると、新しいターンキーがデイルームに入ってきた。彼らは残りの囚人をニューゲート礼拝堂まで行進させた。これが日曜日の日課だったが、警備員が棺を乗せたテーブルに座るよう強制したとき、ノアは恐怖を感じた。死刑を宣告された者は全員、病的な陳列台の周囲に配置された。シモンズは決してテーブルから頭を上げなかつたが、マクシーは決して股間から手を離さなかつた。平凡な人々が地獄の恐怖について叫び始める中、ノアは悪い仲間の中でただ棺の向こう側の悪役たちを見つめていた。

「悔い改め、手遅れになる前に悔い改めなさい。」

牧師が囚人たちを軽蔑し続けると、マクシーはノアに唾を吐き始めた。よだれの塊が規則的にノアの服を襲った。ノアはベンチにできるだけ低く腰を下ろし、脚全体の力でマクシーを蹴ったが、彼が達成したのは棺が跳ね返るほどの力でテーブルを強打しただけだった。すぐに自動運転車がノアの左耳を叩き、唾がノアのシャツに付いていることに気づき、何も考えずに口から血が噴き出るほど強くマクシーを棒で殴り、続いて歯を立て続けに打ちつけた。

2時間のイベントは、非難された聴衆からのさらなる騒ぎもなく続いた。同じことは通常の囚人たちにも言えませんでした。なぜなら、彼らは説教者から非難の叫び声が上がるたびに落ち着きがなくなったからです。ある囚人は一般人に毒蛇にキスするよう叫び、別の囚人は牧師に砒素を吸うことを望み、そして三番目の囚人はただ部屋の隅で小便をするだけだった。

礼拝後、非難された信徒席に座っていた人々はそれぞれ自分の部屋に連れて行かれ、そこで孤独に最後の日を過ごした。ノアは自分の考えを放棄し、思索に時間を費やしました。

た。自分の死が近づいているという認識は、最初は混乱する静けさをもたらしましたが、次に不穏な恐怖が彼を震えさせました。ノアは自分の印象だけを考え続けたフローラの思索に戻ります。最後にもう一度だけ、彼が彼女の愛に抱かれていれば。彼が彼女の思い出に浸っていると、奉仕の一般人が彼の部屋に入ってきた。

ノアはその男を一瞥するだけで、牧師はベンチの反対側の端に座っていた。「あなたの告白を聞きにきました。」

「彼の悲劇を売るということではないのですか？」マーリーはじっとしている弟を見ながら叫んだ。スクルージは友人を見つめたが、彼もまた沈黙を保った。

「教えてください、ノア、どうしてこのような結末に至ったのでしょうか？」普通の人は尋ねた。ノアは男の質問に耳を貸さなかった。代わりに、彼はマーリーとスクルージが立っている場所をまっすぐに見て、彼らの空白のスペースを指して、「彼らに聞いてください」と言いました。

説教者は虚空を見て、「誰ですか？」と尋ねました。彼は返事を待ったが、返事がなかったため、「私はあなたを犯罪の重荷から解放するためにここにきました」と続けた。彼はノアの隣に足を踏み入れる前に再び立ち止まった。彼はノアの肩に手を置き、「自由に残せるように、あなたの話を聞かせてください。」と言いました。

最後にノアは聖職者を見上げて、「明日、絞首刑になる前に妻に会わせてくれれば、すべて話します。」と言いました。

「そんなことはできないよ。」

「それでは出発してください。」

男はノアの前腕に手を置き、「手遅れになる前に助けさせてください」と懇願した。

「明日の明け方に訪問者エリアまで連れて行ってくださいとターンキーに伝えてください。それが私の物語をあなたのものにする唯一の方法です。」そう言って彼は男の掴みから腕を引き離した。

一般人は立ち上がると、ドアの方へ歩いて行き、見張りに立っている男に尋ねた、「この囚人を死刑執行人に引き渡すためにここに来てくれませんか？」

「そうします」とターンキーは答えた。

「イベント前に彼をビジターエリアに入れてもらうことは可能でしょうか？」

看守は牧師をじっと見つめ、「彼の話から 30 パーセントだけ教えていただければ」と言いました。

一般人の冷たい目が警備員越しに見守りながら、彼はささやきました、「今日から一週間後にはあなたと落ち着くつもりです。」

「それでは、明るくなったらどこへでも自由に行かせます。」

そう言って説教者はノアの元に戻り、話を聞きました。ノアは人生最大の嘘をつきました。彼はそれを窃盗の範囲内に留めていたが、金を盗むだけでなく店自体から逃亡できるようにプレッシーを弱体化させる計画を立てた話を詳しく述べた。

金儲けができたことをうれしく思った平凡な男は、ノアを運命に任せた。

若いジェイコブは日の出前に立ち上がり、良い知らせに興奮してほとんど服を着ないまま刑務所に向かって走り始めました。極寒の空気が肺を焦がすほどだったが、彼はその感情を脇に押しやった。彼はノアの英雄としてみなされるでしょう。彼はその考えが好きだったが、ただこの悪夢を終わらせるために兄を解放してほしかっただけだった。

息を整えるために定期的に立ち止まると、彼の顔の笑みが深まった。内務大臣がノアをすでに釈放していても彼は驚かないだろう。彼は心の中で、ノアが訪問者の囲いの空いている側で自分を待っている姿を想像した。うなり声が聞こえるとフェンスに向かって全力疾走が遅くなり、騒ぎの場所を特定しようとして一斉に立ち止まった。女性ならではの叫び声に耳を澄まし、再び足を速めた。

スクルージとマーリーは、刑務所が若いジェイコブの視界に入るのを眺めていました。ヤコブは遠くから、地面近くにうずくまる正体不明の人影の塊を見た。恐怖の叫び声がその場に響き渡りました。ジェイコブはその場面に集中し、目の前の恐怖に気づき、フローラの側に急いで行きました。

山積みの中に身を寄せ合って、ノアの血にまみれたフローラが座っていた。彼女が息の絶えた夫を抱きしめようと叫んだとき、彼の血が広がり、彼女の服のすべての部分が覆われました。ジェイコブは物理的な接触を避ける前に立ち止まりました。彼は信じられない気持ちで目の前の光景を眺めた。ノアは地面に倒れ込みましたが、左手首は刑務所の鉄格子の 1 つに鋭い棘に引っかかったままでした。腕がぶら下がり、体の重みでフックの切れ込みが深くなつた。フローラが動くたびに傷口から血が噴き出した。

最後にジェイコブはフローラの背中に手を置き、「助けが必要だ」と言った。

「いや、それはあまりにも…」涙が語尾を置き換えた。

「警備員、警備員」とジェイコブは叫びました。

ターンキーが混乱に向かって走ってくると、ジェイコブはフローラを立ち上がらせようとしたが、フローラは抵抗した。フローラはノアの血の中で倒れ込み、慰められないままでした。ターンキーはノアの一生を感じました、そして、その場にいた誰もが彼から去ったのを見ることができました。その後、警備員は手首を解放しようとしたが、とげがしっかりと保持されていました。ターンキーは強い引っ張りでノアの腕を刑務所の柵から引きはがした。ノアはすぐに庭に落ち、血が溜まり続けました。

他のマーレ人がいることに気づかず、ターンキーはノアをドアに向かって引きずり始めました。

「いや、待てよ。どこへ連れて行くの？」ジェイコブに尋ねました。

「彼は私たちのものです」と看守は主張した。

「埋葬のために彼を取り戻すにはどうすればよいでしょうか？」

「あなたの思いとともに彼を葬ってください。」そう言ってノアは牢獄の中に引きずり込まれた。

「それは私をどうするのですか？」「それは？」とジェイコブは叫びましたが、悲しんでいる親戚にもそれ以上説明する必要はありませんでした。

ヤコブは次の行動を知らずにただそこに立っているだけでした。彼の目の前で取り乱した義理の妹が泣き、彼の心の中にはこれまで感じたことのない痛みが燃え上がった。一体どうして彼はこんなことを許すことができたのでしょうか？彼はゆっくりとフローラを立ち上がらせ、家に帰るために必要な一歩を踏み出すのを手伝いました。

フローラが通りの好奇の目から離れて屋内に入ると、ジェイコブは妹のジョアンを呼びに行きました。彼女の到着を待つ間、義理の妹を落ち着かせることがジェイコブの仕事となつたが、彼は失敗した。ジョーンが到着した後も、涙が妹を支配し続けた。ジョアンはフローラの悲しみを止めるために何もしませんでした。代わりに、彼女はフローラをきれいにすることに集中しました。彼女が着ていたドレスはすぐに燃えてしましました。新鮮な服を着て、フローラから不愉快な沈黙が訪れた。彼女はまだ泣いていましたが、静かに泣き叫んでいました。

ジェイコブはできるだけ早くフローラを妹に任せ、刑務所に走って戻りました。彼は血まみれになっていたが、埋葬のためにノアの遺体を回収する必要があったため、気にしなかった。彼はニューゲートの正面玄関を試みましたが、施錠されていたため、できる

限り強くノックしました。やがてターンキーがドアを開け、血まみれの男を見てこう言いました、「ここは聖バーソロミュー病院ではありません。私たちは刑務所です。そこに行って助けを求めてください。」

男がドアを閉めようとしたとき、ジェイコブは開口部に足を突っ込み、ドアを押し広げ、「弟の遺体を回収しに来ました」と言いました。

「それで、あなたのお兄さんは？」

「ノア・マーリー」

「ああ、自殺だ。一緒に来てください」男はジェイコブを治安判事の事務所まで連れて行った。

日記に書きながら、看守はジェイコブを一瞥もせず、「何が欲しいの？」と言いました。

「今日、兄が亡くなったので、遺体を埋葬してもらいたいのです。」

そう言って、判事はインク壺にペンを入れ、ジェイコブを見上げて尋ねました、「あなたの兄弟は…？」

「ノア・マーリー」

判事は机の上のいくつかの書類をシャッフルし、ノアの死に関する書類を手に取りました。「ここには彼が自殺したと書かれています。彼を手に入れることはできません。今、私は忙しいです。向かってください。」

「なぜ埋葬に連れていけないのですか？」

「絞首刑のマークが付けられたすべての囚人は、医師会の所有物となる。私たちが話している間、あなたの兄弟は解剖されていると思います。」

「しかし、誰もこれに許可を出しませんでした」とジェイコブは言いました。

そう言って所長は辺り一帯に響きわたる笑い声を上げた。「許可、許可—そうですね、あなたの要望を無視してしまい、本当に申し訳ありませんでした。あなたの兄弟は絞首刑を言い渡された」と彼は立ち止まり、机の上の書類を何枚かシャッフルしてから、一枚から読み上げた。「『ノア・マーリーの死刑判決は取り消された。彼は直ちに釈放されることになる。』内務大臣ヘンリー・アディントン殿下が署名した」治安判事は新聞から顔を上げて言った、「この命令を出す時間がなかったんだと思います。」

ジェイコブは注文書がどれくらいの間机の上に置かれていたのか聞きたかったが、考え直した。しかし彼は「弟が欲しい」と要求した。

「そして私はあなたを刑務所に入れたいと思っています。それで、誰が最初に願いを叶えると思いますか？」

「彼の遺骨はいつ大学から受け取れますか？」

「安心してください、あなたはそれらを望んでいません。あなたの兄弟ができるだけ明るい場所で思い出してください。望むなら葬儀を執り行ってもいいが、遺体は残らないだろう。」

「これは正義ではない」とジェイコブは叫びました。

「いえいえ、法律ですよ。繰り返しますが、マーリーさん、自由を守りたいなら、今すぐ立ち去ってください。二度と言いません。」

ジェイコブは所長の言葉を信じて刑務所を出ました。ターンキーがジェイコブの背後で刑務所のドアに掛け金を掛けたとき、ジェイコブの注意は、歓声を上げる群衆の叫び声によって、ジェームズ・マクシーとネイサン・シモンズの二人が運命に陥っていく様子を見つめざるを得なくなってしまった。

彼は何時間もロンドンの雪に覆われた通りを方向もわからずさまよいました。人々は彼の血まみれのスーツを見つめたが、誰も彼の状況を理解しようとはしなかった。ようやく家に到着したとき、ベッドに倒れ込む前に彼がした唯一のことは、衣服を燃やすことだった。

翌朝、ジェイコブは、ノアが埋葬に戻らないことをフローラに伝えなければならないのではないかという恐怖を感じた。彼は寝室からキッチンまで歩きながら足を踏み鳴らした。彼は乏しい朝食を作りながら、カウンターをこぶしでたたいた。そして、彼は家を出るときにドアを全力でバタンと閉めました。フローラに向かって一步を踏み出すたびに、彼の怒りは少しづつ弱まっていた。

ジョアンはジェイコブがノックする前にドアに出ました。彼女は指を唇に当てて、「フローラはまだ眠っているよ」とささやきました。

ジェイコブは廊下に入ると、「彼女に伝えたいことがあります。」と言いました。

「今日は違います。彼女は疲れぬ夜を過ごした…」

「これは待ちきれません。ノアが私たちに返されないことを彼女に伝えたくないのなら話は別ですが…」

「いいえ、いいえ、それは彼女に伝えるべきです。」彼らはフローラのドアまで歩いてノックし、ジョアンがジェイコブに話したいことをフローラの妹に伝えることができる程度にドアを開けました。

フローラはローブを着て、頬の涙をぬぐい、ジェイコブが待つ廊下に入った。彼女はただジェイコブを冷たく虚ろな目で見つめていた「ノアはすでに埋葬されています。私たちの奉仕は彼の遺体なしで行われなければなりません。」

フローラは床に倒れ、ジョアンとジェイコブがぐったりとした彼女の体に駆け寄った。彼らは一緒に彼女をまっすぐに持ち上げました。ジェイコブは彼女を支えようとして、彼女の真ん中に腕を回して、「私たちは一緒にこの状況を乗り越えましょう」と言いました。

「一緒に。一緒に？ 裁判のどこにいた？ 彼を有罪判決させたのはあなただ。」

「いいえ、私はそこにいました、彼らは決して電話しませんでした...」

「嘘はやめてください。あなたは決してそこにいなかったのです。」

ジェイコブは何も言いませんでした。実のところ、彼は証言をせずに立ち去ったので、まるで裁判に参加したことがなかったかのようでした。この思いやりのある女性が自分が起こした出来事によって打ちひしがれていくのを見て、ジェイコブは初めて自分の犯罪の全容を理解した。彼の盗難は彼の家族を崩壊させた。

「去ってほしい。」

「何かお手伝いできることはありますか？」

「ジェイコブ、あなたは利己的で冷たいです。私の家を凍らせる前に去ってください。」

そう言ってジョアンはジェイコブをドアまでエスコートした。彼は彼女に自分の家に戻るつもりかどうか尋ねた。「はい、フローラも私もフレンチ・アレーの外れにある私の家に行くつもりです。」

「あなたの励ましが慰めになります。私には助ける義務があると考えてください。」ジェイコブは帰り際、フローラに「明日様子を診るよ」と呼びかけた。

ジェイコブは最寄りの居酒屋まで歩いて行き、隅に座って、昼から夜まで酒を飲みました。

気温が凍りつき、フローラのまつ毛が凍りつき、制御不能な涙が溢れ出た。まばたきするたびに、彼女の目はまつげを引き離そうと奮闘していました。彼女の前で空の靈柩車の車輪が回った。この儀式に参加する人は誰もいなかつたため、彼女は一人で馬車を追った。靈柩車は墓地に向けて登り始めると、速度を上げた。フローラは足を速めた。彼女は靈柩車の勢いについていくのに苦労し、「だめ、だめ、やめて！」と叫んだ。死の馬車は彼女の視界から消えた。

「フローラ、フローラ——起きて、フローラ」とジョアンは妹を揺すりながら言った。

「え？ 何…」 フローラの顔に当惑の表情が浮かんだ。

「悪夢を見たんだよ」とジョーンは言った。

「それでは、ノアを埋葬するつもりですか？」

「いいえ、彼は行ってしまいました、可愛い人。」

「それが悪夢ではなく、現実だったのです」 フローラは枕に倒れ込み、そこで一日中眠りました。

ジェイコブは毎日フローラの様子をチェックしたが、ジョアンは毎日彼を追い返した。「彼女はまだ眠っています。回復には時間がかかります。時間を与えてください。」

毎日同じような拒絶の出来事があったので、ジェイコブは同じ居酒屋に行き、同じ隅に座り、酔うまで飲みました。

「集計所からの一時帰休中にあなたがしたのは、お酒を飲むことだけですか？」スクルージは友人に顔をしかめながら尋ねた。

"たいてい。"

同じような気まずい出来事が3日間続いた後、スクルージはマリーに「なぜここに長居するの?」と尋ねた。

「なぜなら、あなたがこれまで起こったことさえ知らない一連の出来事がまた一つあるからです。」

「どうしてそんな秘密なの？」

「恥ずかしくて言えなかった」とマリーさんは言った。

「それで、なぜ今？」

「それはノアの死よりも重要かもしないからです。」

「フローラに何かしたんですか？」スクルージは尋ねた。

「私は彼女の夫を殺しました。」

「しかし、それはすでに起こったことです。もう一度尋ねます、なぜ私たちはここに留まるのですか？なぜノアを助けないのですか？」

「私が言いたいのは、フローラはノアの物語だということです。彼女に起こったことはノアから差し引くことはできません。」

「彼らの状況が組み合わさって、2つのうち1つが生まれるような？」スクルージは尋ねた。

「正確に、ここでの使命はただ一つです。我慢してください。すぐにあなたの命を危険にさらします」とマーリーは卑劣だがいたずらっぽい笑みを浮かべて言った。

スクルージとマーリーは若いジェイコブが酒を飲んで呆然としているのを眺めながら、さらに日が経った。スクルージは、会話で時間を潰すのに役立つ質問を作りました。

「あそこの隅で一人で何を考えていたの？」スクルージはマーリーに若いジェイコブを合図しながら尋ねた。

「私が考えているなんて誰が言った？」

スクルージは一時停止し、会話を別の方向に進めました。「ジェイコブ、あなたがいつも私の質問に答えたがらないことはわかっていますが、私がすでに一度尋ねた質問に教えていただきたいのです。」

「それで、私はそれに答えなかつたのですか？」マーリーは尋ねた。

「あなたはあいまいさを率直に言いました」とスクルージは答えた。

「ご質問があれば、できる限りお答えします。」

「なぜスピリットと魂は同じではないのでしょうか？」スクルージは尋ねた。

「ああ、またその質問ね。そうですね、できることなら、それは答える価値のある質問です。」マーリーは言葉を慎重に選ぶために立ち止まり、「精神と魂は異なります。魂がなければ精神は決して存在しないからです。」と言いました。

「では、魂は靈よりも重要なのでしょうか？」

「まあ、厳密な意味ではないよ」とマーリーは答えた。

「分かった、それでは魂が何であるか教えてください」とスクルージは要求した。

「魂は創造主、つまり無限の意識と直接つながっています。」

「無限の意識、それは何ですか？」

「人々にとって、それは存在の創造者ですが、ほとんどの場合、それは愛を提供するだけです」とマーリーは答えました。

「愛、それは単なる感情であり、抽象的なものです」とスクルージは言いました。

「いいえ、愛は受容に含まれる物理的なエネルギーです。」

「受け入れますか？」

「承諾それは、靈がその有害な地上の行動を変えた後にのみ達成されます。それが私が今取り組んでいることです」とマーリーは語った。

「では、私たちの魂、あるいは無限の意識とのつながりは愛を通してなのでしょうか？」

「無限の意識は、善と惡の両方と判断されるあらゆる思考と結びついています。しかし、愛は魂と精神の間で共有されるエネルギーであると考えるのは正しいです。」

「それでは、魂が愛なら、精神とは何でしょうか？」スクルージは尋ねた。

「私たちの靈は、私たち一人一人が地上で日々を過ごす原動力となっています。スピリットは私たち一人ひとりが持つ強さと弱さの両方を持っています。」

「ヤコブ、『無限の意識』という言葉は、神の名前としては厄介な名前のように聞こえます。」

「エベネザー、もしあながたが神を、死んだ人々の価値を判断する玉座に座った老人だと考えるなら、そうではありません。魂はそれをはるかに超えた存在です。死んだ人を裁くことは無限の意識の仕事ではありません。」

スクルージはしばらくのことについて考えてから、「死者を裁くのは誰ですか?」と尋ねました。

「人は死ぬと自分の価値を知る。唯一の裁きは靈から靈へと下されるのです。」

「ジェイコブ、この会話を始める前よりもさらに混乱しています。人間には魂と靈魂の両方があるのでしょうか?」

「あなたには精靈がいるよ、エベネザー。無限の意識は魂を運ぶのです」とマーリーはためらったが、「すべての赤ちゃんは、無限の意識から来る魂を持って生まれてきます。その精神とは無条件の愛だ。」

「では、魂は愛なのでしょうか?」

「魂はすべてです-愛、笑い、発明、さらには破壊です。しかし、Mogrified Spirit にとつて、それは主に受け入れです。」

「あなたは、人が Acceptance に触れて押し続けることができるかのように見せていました。」

「それは具体的です。トランスマグリファイ島内で不死の始まりを過ごすほとんどの人がそうであるように、私もそのシャワーを浴びてきました。」

「では、無限の意識は人々との関係から何を得るのでしょうか?」

「愛です」とマーリーは答えた。

「何? 無限の意識それ自体が愛であるなら、なぜそれは私たちの愛を必要とするのでしょうか?」

「仕事を成し遂げるためです」とマーリーは答えた。

「その仕業は……」

「来歴」。

「ああ、それを説明してください」とスクルージが要求した。

「出自を調べるのは簡単だ。それは単に新しい宇宙の創造にすぎません。」

「そして人間はどのように必要とされるのでしょうか？」スクルージは尋ねた。

「魂は常にその宇宙を拡大しています。そのため、新しい世界が私たちの経験を必要としています。もちろん、創造主はすべての創造物に愛の息吹を与えますが、人間が生き残るために乗り越えなければならない労苦を与えることはできません。変容のプロセスを通じて人間の愛が無限の意識に戻されるとき、その愛、または受容には、個人の人生で学んだ教訓が保持されます。こうした人類の冒険は、新たな社会に与えられます。私たちの地上での闘いは魂に必要とされています。なぜなら、私たちの記憶は、生きた経験を呼び起こすことによって、新しい世界を強化するからです。」

「まあ、その考えは予想していなかった」とスクルージは言った。さらに、「つまり、それはすべて人間が学んだ知識に関するものなのでしょうか？」と付け加えた。

「気まずい言い方ですが、参加を通じて得た知識をいかに集めても、それが私たちの価値だと思われます。」

「この取り決めから人々は短命以外に何かを得るのでしょうか？」

「穢れた精霊は永遠の存在を得る。それで十分ではないですか？」

「私は判断していない。ただ聞いているだけだ」とスクルージは答え、「受け入れられた後、人間としての経験を思い出すだろうか？」と尋ねた。

「そう、あなたの記憶がなければ、あなたのの人間性にアクセスすることはできません。浄化された魂はすべて永遠に続きます」とマーリーは答え、「それではまた、存在するだけでは十分ではないのですか？」と尋ねました。

「確かに、幸せな生活、たとえ平凡な生活であっても。しかし、ノアの最後の数週間のような存在、いやいや、それだけでは十分ではありません」とスクルージは主張した。

「ノアの最後の3週間は彼の人生の総計ではありませんでした。それでも、私はあなたの不満を理解しています。」

「では、そのような痛みを補うものは何でしょうか？」スクルージは尋ねた。

マーリーはスクルージの隣に歩み、友人の胸に手を上げてこう言いました、「これを見せる許可はもらっていないけど、とにかくやります。立ち止まってください。」

「待て、どうするつもりだ…」

別の考えが表現される前に、マーリーはスクルージの胸に手を伸ばし、そっと彼の心臓に手のひらを置き、そして輝き始めました。黄色がかった光が強まるにつれて、スクルージはマーリーの接触による力に目を閉じた。「私があなたにあげることができるのには、最小限の量だけです」とマーリーはスクルージの胸から手を引きながら言った。

動かなくなつたマリオネットの糸のように、スクルージはぐつたりしてしまいました。マーリーは落ち着きを取り戻した彼をサポートしようとした。「なぜやめたのですか？心が熱狂的に震えるほどの喜びを感じたことはありません。もう一度やってください。」

「最初は許可をもらえませんでした。」

「ジェイコブ、あれは何だった？」スクルージは尋ねた。

「私の貪欲の精神が受け入れられる。」

「私にあげると迷惑になりますか？」それから、「教えてください、ジェイコブ、どうやってそんなことを学んだのですか？」と付け加えました。

「いいえ、私には危険はありません。魂の喜びは生まれた瞬間にすべての新生児が感じます。私たちは二人とも、魂の力を感じる能力を常に持っていました。愛のエッセンスは、各赤ちゃんが無限の意識から受け取るスピリットの1つです。」

「精霊の一人。人は何個の靈を持っていますか？」

「生まれた時点では少なくとも3人はいます」とマーリーは答えた。

「魂の靈以外に、人にはどんな靈が宿っているのでしょうか？」スクルージは尋ねた。

「彼らの母親と父親のものです。それが基本的な幼児を構成するものです。」

「つまり、基礎的な赤ちゃんや初心者の赤ちゃんがいるということですね」とスクルージは言い、「上級の赤ちゃんもいるのですか？」と尋ねました。

「そのように判断されるわけではありませんが、ほとんどの赤ちゃんは他の魂を持って生まれます。」

「どういうこと？」

「ティモシー・クラッチットの足の障害は、生まれたときに彼に宿った精神でした。天才の魂を受け取る人もいます。あらゆる種類の靈が存在します。私たちが良いと呼ぶも

のもあれば、悪いと呼ぶものもありますが、それぞれが個人の個性を形成するのに役立ちます。本質的に、魂は人の中で結合して自力を生み出します。」

「私には精霊が何人いる？」スクルージは尋ねた。

「今ですか、それとも生まれたときですか？」

「違いはありますか？」

「間違いなくね。人は誰しも、新たな焦点を獲得するにつれて、スピリットを追加します。使用されなくなったスピリットもドロップします。しかし、3つの基本的な精神を人から取り除くことはできません」とマーリー氏は説明しました。

「恐ろしいことをする人は、無限意識の愛の精神を決して失わないのですか？」

「決して」

「そんなこと信じられないよ。愛することとスピリチュアルなつながりを全く持たない人もいたと思います。」

「つながりがほつれることはありますが、もちろん個人自身がつながりを断ち切らない限り、決して切れることはありません」とマーリー氏は言う。「無限の意識は決して関係を壊すことはありません」と彼は付け加えた。

「人はしばしば無限の意識から離脱するのでしょうか？」

「はい、でもそれでも、すべてが失われたわけではありません。しかし、このようなスピリットブレイクを克服することは非常に困難になります。」

「成功する人は多いですか？」スクルージは尋ねた。

「ほとんどの人は、最終的にはそうですよ」とマーリーは答えた。

「なぜ人は魂の愛を使うのに許可が必要なのでしょうか？」

「許可に関して言えば、それは間違った言葉でした。しかし、受容は強すぎるため、生きている人間に長く続けることはできません。エネルギーは濾過される必要があるので、即時変身のプロセスは開始されませんが、私がそれを始めたら悲劇になるでしょう。」

「それは私を殺すことになるでしょうか？」

「間違いなくね。」

「それで、瞬間変身とは何ですか？」

「エベネザー、もう説明するのは飽きた。もうすぐクレーターが見えます。」

「わかった、でももう一つだけ質問だ」スクルージは少し立ち止まってから続けた。
「ヤコブ、あなたの靈は今あなたと一緒にいるのですか、それとも私はあなたの靈の一つだけと話しているのですか？」それに、私が精靈を何個持っているのかという質問にも、あなたは決して答えませんでした。」

「それは2つの質問です。」マーリーは強調するために一時停止してから続けた。「私が見落としていた質問について言えば、あなたには5つの精靈がいます、エベネザー。さて、あなたの目の前に見える精靈についてですが、私は最終変容の深淵から来ました。私の他のスピリットはすべて受容へと進化し、現在は無限の意識とともに存在しています。あなたの目の前にある精神だけが、その目標に向かって今も努力しています。」

スクルージがマーリーの現実について熟考していると、若いジェイコブはテーブルから立ち上がり、よろよろと家に向かって歩き出した。スクルージは尋ねた。「あと何日、あなたが愚かな酒を飲むのを見なければならないのですか？」

「明日が最終日です。その後、イベントは数日以内に終了します」とマーリー氏は言いました。

「そもそもなぜ私たちは待っていたのですか？なぜその日に飛びついてはいけないのでですか？」とスクルージは尋ねた。

「1854年に連れて行ったときは、うまくいきませんでした。その年はオーバーシュートしてしまいました。それは私を意識を失いました。あなたが私に押し込まれているのを感じなかつたら、私は決して身動きをしなかったでしょう。」

「そうだね、不愉快だったね。だって、もしクリスマスの亡靈が私を救ってくれなかつたら——そうだね、私はロンドンの石畳の上にいただろうね」とスクルージは言った。

マーリーはエベネザーの発言に一瞬戸惑ったが、次の考えを口にした。「準備をしなさい、エベネザー。フローラの話は楽しいものではないだろう。」

「これが楽しかったのはいつですか？」スクルージは尋ねた。

次の日は、ここ数日と同じように始まりました。若いジェイコブはフローラに断られ、同じ居酒屋に行き、同じテーブルに座り、酔うまで飲みました。

「あなたが自己憐憫に浸っているのを見るのは、今日が最後の日ですよね？」スクルージは尋ねた。

「はい、明日はまた状況が変わります。」

「それで、ジェイコブ、私は個人的なことについて疑問に思っているんです。」

マーリーは友人を見て、「もちろんそうだよ。今他に何をする必要があるだろうか？」
彼は少し立ち止まって尋ねた、「それで、旧友よ、今日は何を考えているのですか？」

「この仕事を手伝ってもらうのに特別な理由はありますか？」

「あなたはもう知っていると思っていました。ノアを救うのに協力してほしいのです。」

「はい、それはわかっていますが、なぜ私が？」

「あなたは私を恐れ知らずにしてくれます、エベネザー。あなたと無限の意識との生きたつながりがなければ、私の靈的なつながりにはノアを解放する力がありません。信じてください、私は試してみました。それが私のアウトリーチの仕事です。受け入れは私の理解の範囲外になるでしょうノアが先にそれを達成するまで。」

「それはあなたが私を必要とする理由の説明にはなりません。」

「私には他に誰もいないから、エベネザー。ノアの死後、あなたは私の兄弟になりました。あなたを危険にさらしたくないのですが、それでもあなたの助けが必要です。」

「あなたは私が危険にさらされるといつも言いますが、なぜ私があなたよりも大きな困難に陥るのかわかりません。」とスクルージは言いました。

「息をしている人間を再び殺そうとするあらゆる邪悪な心にあなたは無防備になるでしょう。」

「それで、私が殺されたら？」

「それではあなたは死ぬでしょう」とマーリーは答えた。

「私には何の保護もないのでしょうか？」

「私は何も知りません。しかし、私たちはまだ Transmogrify に足を踏み入れていないので、この危険を拒否するかどうかはあなた次第です。」

「私は人生に置かれたあらゆる落とし穴を乗り越えてきました。助けがなくなつても、私はトランスマグリファイを躊躇しません、兄弟。」

「必要があれば、私はいつでもあなたを守ります、エベネザー。」

「それでは二人の兄弟が三男を救うことになるだろう」とスクルージは言った。

「成功しても失敗しても、あなたはすでに私を救ってくれました」とマーリーは言いました。

スクルージは驚いた表情で友人を見つめた。「いつ私があなたを救ったの？」

「私の貪欲な出来事のほとんどを解決してくれたのはあなたです。私はアウトリーチの任務を通じて最終的には解放されるはずでしたが、あなたは私の魂への解放を早め、魂は今では受容の中に住んでいます。エベネザー、あなたは私たちのビジネスの焦点を変えることで私を救ってくれました。」

その日、二人は多くの話題について話しました。夕闇が薄暗くなり、若いジェイコブはよろよろと家に帰り、ドアのすぐ内側で気を失いました。彼は朝までそこに留まりました。

翌日はなかなかスタートできなかった。二日酔いによるうめき声のため、フローラの家まで歩くのが遅くなつた。もう行く価値はほとんどないと思ったので、その日は到着が遅れた。しかし、フローラの驚きの声に彼は酔いからびっくりしてしまいました。「彼らは私からすべてを奪おうとしているのです」と彼女はすすり泣きました。

混乱してヤコブは答えました、「そんなはずはありません。このアイデアを思いついたのは一体何が起こったのですか？」

「昨日裁判所から男が来た。同氏は、ノアの自殺時の正気を判断するための公聴会を月曜日に開く予定だと述べた。」

「それについては前に聞いたことがあります。それは普通のことだよ」と若いジェイコブは言いました。

「手段を選ばずに家族を離れるのは普通のことでしょうか？」フローラは尋ねた。

「私も一緒に行きます。私たちは力を合わせてこれを阻止します。」

「そうしますか？」

「はい、今度は私がお手伝いします」とジェイコブは断言しました。

フローラはジェイコブの目を研究しました。彼女は彼らの青さを見つめながら、彼女を守ろうとするノアの情熱を認めたいと願った。そのようなイメージは決して現れませんでしたが、すぐに彼女は夫の兄弟だけが彼女に保護として残されていることに気づきました。「月曜の朝8時までにここに来てください。一緒に公聴会に行きます。」

「早めに到着します」と若いジェイコブは言いました。

ジェイコブはフローラを残してバーへ向かいました。彼は飲み物を購入し、隅にある自分のテーブルに行き、飲み物をテーブルの上に置き、そして空の椅子をただ見つめました。そこで彼は、フローラを守るためのさまざまな計画を頭の中で考えながら、何もせずに固まっていました。彼は自分の飲み物を長い間眺めてから向きを変えて酒場を出た。

この日の唯一の幸いな出来事は、気温がついに氷点下を超えたことだ。ジェイコブがロンドンの通りをさまよっていたとき、彼の馬、シャドウとスモークがカートを引いて彼の前を通り過ぎたとき、彼は急停止しました。彼はただ、過去の仲間たちが視界から去っていくのをただ見ていました。彼は、なぜそのような高価な血統が役用動物に使用されるのかに興味を持っていました。しかし、彼らの未来はもはや彼のものではなかったので、彼はその考えに固執しませんでした。

若いジェイコブが通りを歩き回ると、マーリーとスクルージもすぐ後ろを追った。「そうですね、少なくとも今日は若い頃のあなたが全力で酩酊しているのを見る必要はありません」とスクルージはコメントした。

「しかし、私たちはまだ明日を乗り越えなければならないので、新しい日に何をするか誰にもわかりません。」

「まあ、ご存知の通り、ジェイコブ。あの日曜日のことを覚えていないのか？」とスクルージは尋ねた。

「覚えてますよ。この期間全体を忘れられればよかったのに」とマーリーは認めた。

「それでは、何が起こるか見てみましょう。」それで彼らは翌日に移り、ジェイコブが再びフローラに背を向けられるのを見ました。二人の幽霊は若いマーリーが酒場を脇道で通り過ぎたときを追った。

若いジェイコブが氷で覆われた通りを当てもなくさまよっていると、スクルージは質問をしました。「なぜ愛は憎しみよりも強いのでしょうか？」

マーリーは、なぜこの質問をしたのかについて、スクルージの顔を注意深く観察しました。最後に彼は問い合わせに答えた。「愛とほぼ等しいのは憎しみではなく恐怖です。」

「では、愛と恐怖はどちらが強いのでしょうか？」

「最終的には愛のほうが強いのです。愛には思いやりの力が宿っているからです」とマーリーは答えた。

「それでも、恐怖には情熱が宿りませんか？」

「はい、情熱はありますが、思いやりはありません。」

「では、恐怖には価値がないということですか？」スクルージは尋ねた。

「いいえ、ほとんどの人がそうであるように、社会は愛と恐怖の両方によって機能しますが、それでも、一方的な方法でのみ精神を成長させる人々がいます」とマーリーは答えました。

「これはどのように適用されますか？」

「そうですね、エベネザー、そのような人たちは、自分の気持ちがあれば常に思いやりを持って行動します。靈は愛から生まれますが、他の靈は恐怖が支配している場合のみ混乱を引き起こします。」

「ある意味では、物事は平等であるように見えます、つまり、愛と恐怖です。違いは使い方だけですか？」

「彼らは平等ではない。確かにどちらも力を持っていますが、人間は愛なしでは存在できません。それらは消えていきます。一方、恐怖はオオカミから逃げるときにのみ有益です。恐怖は人を救うかもしれないが、決して改善することはできない。」

スクルージはその概念を理解して、「私にとって、生き続けることが生存にとって最も重要なことのように思えます。人生そのものが困難に直面しているときに、誰が改善を必要とするでしょうか？」

「それはもっともな指摘ですが…」マーリーは立ち止まり、こう言った。「私は死んでいるかもしれないが、まだ存在している。危険にさらされたとき、恐怖は不可欠かもしれません、考えてみてください、エベネザー、最後に脅迫されたのはいつですか？」

スクルージはこのことについて熟考しましたが、何も言いませんでした。なぜなら、彼の最大の恐怖は、危険ではなく、喪失と欠乏のことであったからです。少ししてマーリ

一は続けた、「それではまた、昇進の可能性を高めるために、心を縛る挑戦よりも大きな挑戦が存在するでしょうか？」

「私たちは2つの異なる方法で考えていると感じています。あなたは社会の進歩に対する抽象的な願望を持ち、私は社会が実際にどのように機能するかについてのより実践的なビジョンを持っていました。」

「いいえ、それはすべて1つのビジョンですが、この会話は、恐怖と愛の二重性が人類が立っている足であるという点で単純化されています。それでも、無限の意識にとって、どちらの考え方も同じです。クリエイターの中に相対的な二元性は存在しません」とマーリーは説明した。

「ということは、無限の意識には選択肢がないということですか？それはクリエイターの創造性の欠如を示しているのではないでしょうか？」

「繰り返しになりますが、あなたがすべての創造者であるとき、すべての選択肢はあなたが作ったものであるため存在します。また、「創造性」に関して言えば、無限の意識が行うことよりも新しい世界を創造すること以上に偉大な仕事はありません。これには想像力の集中力が必要ですが、新しい惑星の安定化には浄化された愛だけが役立ちます。地球社会が最も衰弱させる形態のスピリットブレイクを発展させたという事実により、クレーターからの登りを完了した幻影は宇宙内で最も価値のある愛となっています。クレーターから来るコスアクセプタンスは、金よりも需要が高いのです。」

「地球を特別なものにするスピリットブレイクとは一体何なのか？」スクルージは尋ねた。

「私がただ話したとしても、あなたにはよく分からないでしょう。しかし、私たちは切断されたスピリットのクレーターを通り過ぎて行き、そこでなぜコスが無限の意識にとってそれほど重要であるかを理解するでしょう。」

スクルージはさらに質問を続けた。「では、人類は魂にとって価値のある存在となるために困難を経験しなければならないのでしょうか？」

「その通りです。」

「それは単なる悪意です、ジェイコブ。」

「エベネザー、それが私たちの価値の本質です。そして、それは宇宙の仕組みに関係します。」マーリーは友人に応答する時間を与えるために立ち止まり、さらに続けました、「死んだときの純粋な人間の精神は、魂にとってほとんど役に立ちません。幸いなことに、不完全な形で地球の束縛から逃れることは不可能です。赤ん坊でさえ失敗すれば死ぬのです。」

「愛が集まる星は他にもあるの？」

「はい、先ほども言いましたが、これはすべての惑星の内部の仕組みであり、創造主のやり方です。しかし、無限の意識は、賢明な考え、創意工夫、社会的に役立つ方法なども収集します。しかし、それはそのような資質を完成させた惑星を通じて集められます。地球には、魂にとって価値のある性質が1つだけあります。」

「では、地球は最悪の習慣を持っているので、最終的に最高の愛を抱くことになるのでしょうか？」エベネザーは尋ねた。

「それは矛盾しているように聞こえますが、それは真実です。しかし、もっとよくイメージしてもらうために、殺人が社会を支配している別の惑星があります。5歳以上の人々は最初に殺人者にならずに死ぬことはありませんが、地球上で最悪の罪はさらに有害です。」

「殺人よりも有害なものがあるだろうか？」スクルージは尋ねた。

「人間は意図的に無限の意識から自らを切り離すからです。そのような疎外は、個人を魂からの助けを与えられなくなります。彼らの変身プロセスは困難です。」

「別れ？ 疎遠？ それでその人は捨てられるんですか？」

「個人は見捨てられたのではなく、地上の行為を通じて自由に自分自身を分離しました。このスピリットの破壊により、孤立のせいで浄化がさらに困難になります。彼らは誰からも助けを得られません。」マーリーはスクルージの反応を待ってから、「まあ、アプルートが時々それらを集めていると思います。」と言いました。

これには返事がきました。「それで、彼らは助けを得られるのですか？」

「いいえ、彼らはまだ独立していますが、それでもクリエーターのほとんどの靈は最終的にアクセプタンスに行きます」とマーリーは説明しました。

「では、地上の靈魂破壊は殺人よりも悪いということですか？」

「その行為によってクリエーターに落ちた人はそうですが、プールにいる人はそうではありません。」

スクルージには何十もの質問があったが、その日は夕闇が迫る中、マーリーはスクルージの話を遮った。若いヤコブは、悩みを何一つ解決せずに家に入っていました。不安な夜の眠りにもかかわらず、彼はフローラを守りたいと切望していた。彼は彼女の家に

は30分早く到着した。ジェイコブはフローラがコートを着るのを待ちながら、彼女の妹に尋ねました。「それで、明日は家に引っ越すのですか？」

「はい、この公聴会の後、我々は行動を起こすつもりです。」

「ノアの財産を残されても？」

「はい、今日の結果に関係なく、彼女には永住権が必要です」とジョアンは答えた。

フローラは玄関廊下に入ってきてジェイコブを見て、「何か預かってもらえますか？」と尋ねました。

「あなたの体。」

涙がフローラの頬を伝い、ジェイコブは自分の返答が希望の欠如であることに気づきました。ジェイコブは彼女の一日を妨害したくなかったので、自分の発言を訂正しようと思いました。「あなたとノアが家を買うために貯めたお金も含めて、あなたがすべてを手元に残せるよう、私は全力を尽くします。」

「生活がなければ、そのお金は続きません。貯金以外に生き残る方法はありません。」二人がオールド・ベイリーへ向かう途中、彼女の口には緊張した笑みが浮かんだ。彼らが入った法廷はノアの裁判が行われた法廷よりも小さかった。民間人の上には5人の裁判官が座っていた。フローラの公聴会では、この5人が陪審員も務めることになる。

中央席の裁判官がほとんどの話をした。「第一被告に電話してください。」

「フローラ・マーリーさん、あなたの存在を知らせてください。」そう言って、フローラとジェイコブは証人席に入りました。判事はジェイコブを指差し、「あなたは誰ですか？」と尋ねた。

「私はノア・マーリーの弟です。」

「あなたの財産は問題ですか？」

「いいえ、私は義理の妹を助けるためにここにいます。」

「それでは続けましょう。」判事は深呼吸をしてから「今日、我々はノア・マーリーの正気を判断するためにここに来た。彼は1月17日、絞首刑予定の一時間も前に自ら命を絶った」と述べた。彼は証人席を見て抗議がないことを確認し、評決を再開した。

「ノア・マーリーは絞首刑の恥を逃れるために自殺したため、法廷にはフェロ・デ・セの評決を宣告する以外に選択肢はない。」

「いいえ、話せないのですか？」若いジェイコブは叫びました。

裁判官はその暴言に少々ショックを受けたが、「終わらせてください！」とだけ言ってジェイコブを黙らせた。部屋の中はみんな静かになった。判事は他の裁判官に目を向けた後、「この評決は決定されており、正しいものである。死刑を逃れるために自殺するには重罪の判決が必要である。これにより、ノア・マーリーの全財産を国王に没収することが求められる。」と続けた。

"いいえ！"ジェイコブとフローラは声を合わせて叫びました。

「この事実を変えるためにあなたが知っていることは何ですか？」という裁判官の視線が被告に突き刺さった。

ジェイコブはフローラを見て、「フローラは子供を抱えています。赤ん坊を貧乏にする気はありますか？」と答えました。

「君は都合がいいときはいつでもその嘘を暴露するようだ」とスクルージは言った。

「それはうまくいくよ」マーリーが答えたのはそれだけだった。

5人の裁判官は沈黙で審議し、主任判事が「これは重要なニュースだ。罪のない者を罰しないので、評決を非無罪判決に変更した。ノア・マーリーの資産を保持することは許されるだろう。」と述べた。これで、フローラとジェイコブが部屋を出て、審問は次の被告に移りました。

フローラは法廷の喧騒から離れると、ジェイコブの方を向いて抱きつき、「ありがとうございます、でもどうして分かったの？」と言いました。

「何か知ってる？」

「私に赤ちゃんが生まれることを。」

その知らせにショックを受けた若いジェイコブは、ただ彼女を見つめました。最初に彼女の腹、次に顔、そして再び彼女の真ん中を突き刺すような視線でした。「最初から最後まであなたを手伝えます、フローラ。あなたのお子さんは何も欲しがらないでしょう。」と若いジェイコブは満面の笑みを浮かべた。

「ただの父親よ」と彼女は答えた。1月の最後の日は、その月の他の日と同じくらい寒かったが、2人とも、もはや天候が異常であることに気づいていなかった。彼らは黙つて家に帰りました。

翌日、フローラは息を切らしたジェイコブにドアを開けました。興奮した彼は、「テムズ川でフロストフェアがあるんだけど、行きたい？」と口走った。

「今日はダメです。」

ジェイコブは彼女を見て、彼女の体の健康を心配して、「赤ちゃんのことで心配していませんか？」と尋ねました。

「それは問題ありません、ジェイコブ、それは単なるプロセスです。」

「どうすれば助けられますか？」

「病気は放っておいてください。明日は行けるかも知れません。」

それでジェイコブは去りましたが、翌日戻ってきたとき、フローラの状態は改善していました。彼はかつて骨折した腕を治療してくれた医師を訪ねた。ジェイコブは、妊娠の病気に何か治療法はないかと尋ねました。

「今ではつわりと呼んでいます。」

「仕方ないでしょうか？」

「心を落ち着かせる食べ物、生姜茶は多くの人にとって効果的です。ほとんどの人にとって、新鮮な空気の中を歩くことが効果があります。」

医者に感謝した後、彼はプレッサーとバークレーの食料品店に行かずに生姜をどこで買えるか考えて一日を過ごした。最終的に、彼は生姜を購入できるハニーレーンマーケットを見つけました。

家に帰りながら、おじさんになると顔に笑みが浮かんだ。それは彼の最後の幸福表現の一つとなるだろう。

次の日、ジェイコブはフローラに生姜を持ってきて、次のことを話しました。病気に対する他の治療法を試しましたが、フロストフェアへの旅行を試みるにはまだ病気が重すぎました。ジェイコブは帰り際、もしフローラが翌日行かなかったら一人で行くと決めました。彼は子供の頃以来フロストフェアを見たことがなく、イベントを見逃したくありませんでした。

スクルージとマーリーは、若いジェイコブが寒い道を歩き回るのを眺めていました。
「何も起こらない日々を待たなくともよかつたのに」とスクルージは言った。

「ほとんどの人は私よりもタイムリープが得意です。また待っても問題ありません、エベネザー」

「質問してもいいですか？」

「私はあなたに少なからず期待しています」とマーリーは答えた。さらに、「エベネザー、質問してもよいかどうかを尋ねる必要はもうありません。質問を述べてください。私はあまりにも率直で曖昧な答えをしないように努めます。」と付け加えた。

「言ってはいけないことを言ってトラブルに巻き込まれないでほしいのです。」

「心配しないでください。たとえ答えが理解できなくても、質問はいつでも答えることができます。」

「では、禁止されている科目はありませんか？」スクルージは尋ねた。

「なし。すべての質問に答えられるというわけではありませんが、質問していただいても構いません。」

「それでは、私はあなたが無限の意識と呼ぶものについて非常に興味があります。」

「創造主のことを考えない生きた人間はない」とマーリーは語った。

「でも、なぜこんな変な名前がついたのでしょうか？」

「無限の意識は名前ではなく、その目的を特定するものです。」

「でも、名前で呼んでみませんか？」スクルージは不思議に思った。

「人間はその名前を認識する能力を持って生まれてきたわけではない。」スクルージの顔が当惑した表情を浮かべている間、マーリーは続けた、「我々には音節を解読できる耳がないだけだ」

「無限の意識の名前を聞くことができる身体能力を持っている人は誰でしょうか？」

「それは平和への進化を通じて発展します。日々の活動の試練を乗り越えた社会は、最終的にはより鋭い感覚を持った社会を生み出します。」マーリーは立ち止まり、「それに、エベネザー、名前を知ることが人間の状態にどのようにプラスになるのでしょうか？」と尋ねました。

「魂の名前を知る能力が与えられないというのは、よそよそしくて孤立しているように思えます。そう思いませんか？」

「いいえ、私は同意しません。魚に足を提供しないのは孤立しているのでしょうか？鳥に歩くことだけを要求するのはよそよそしいのでしょうか？私たちはこの瞬間の私たちであり、言葉、肩書、名前があろうとなからうと、それは祝福です。」

「ジェイコブ、また少し曖昧になってきましたね。」

「現時点で真実を知ることができないとしても、それは曖昧だからです。」

「無限の意識は、より良い経験を集めるために、人々が悪者になることを望んでいるのだろうか？」スクルージは尋ねた。

「そうですね、人間の観点からはそう見えるかもしれません。しかし、私たちが遭遇する経験のほとんどは社会的環境の産物です。私たちの社会は決して無限の意識によって直接干渉されることはありません。代わりに、個人自体に影響が与えられます。」

「それで、答えは……？」

「いいえ。無限の意識には人類に対する一つの目標があり、それは人々が最も慈悲深い自己になることと関係しています。創造者は個人の惡意のあるアイデンティティを奨励しても何の利益も得られません。新しい世界が人類に必要としているのは解決策であり、論争ではありません。」

「ジェイコブ、あなたは無限の意識に会ったことがありますか？」

"いいえ。"

「いつか無限の意識に出会えるでしょうか？」

「直接ではありません。」

「無限の意識に直接会った人はいますか？」

「誰も知りません。」

「では、誰も無限の意識に会ったことがないとしたら、どうやってそれが存在することを確実に知ることができるのでしょうか？」

「私が言えるのは、プールから降り注ぐ承認のシャワーの恩恵を受けてきたということだけです。」

「では、無限の意識はシャワーにすぎないのでしょうか？」

「もしかしたら、Transmogrify の中かもしれません。しかし、創造主は Acceptance よりも謎に満ちています。」

「ということは、あなたはこの謎に満ちた創造者に会ったことがないのに、それを知っていると思っているのですか？ どうやって？」

「前にも言ったように、私もその影響に遭遇しました。あなたも同じです、エベネザー。」マーリーはその後、「朝が来た。出発する時間だ」とその日の主導権を握った。

その朝は天気が回復しただけでなく、ヤコブにとって喜びの期待ももたらしました。ジョアンの家の近くの角を曲がりながら、彼はフローラが十分元気になってフロストフェアに参加できることを願った。彼は彼女が出席することを期待していましたが、彼女がその外出を楽しむだろうと信じていたので、ドアをノックしながら、彼女が彼の申し出を拒否した場合に反論する計画を立てました。

ジョーンはノックに応え、ドアの向こうに誰がいるのかも見ずに「さあ、ジェイコブ。フローラが待っています。」と言った。

ジェイコブが玄関に入ると、フローラがキャンバス地のバッグに大きな箱を押し込んでいるのが見えました。彼はフローラの肩に手を置き、「何をしているの？」と尋ねました。

「これをフロストフェアで売るつもりよ」と彼女はジェイコブにバッグの中身を見せながら言いました。

「でも、それはノアが君にくれたオルゴールだよ」

「はい、でも赤ちゃんには音楽よりもお金が必要です。」

「そんなことはしないでください。ノアがあなたのプレゼントを買ったとき、私は一緒にいたのです。ノアがあなたにプレゼントを買ったとき、彼は興奮して興奮しました」あなたの喜びについて。」

「でも、私は幸せではありません。明るくなければいけないと思うだけで、悲しくなります。」

「何も言うことはないんですか？」ジェイコブは尋ねました。

「何を言っても構いませんが、私は決めました。」彼女は立ち止まり、「ジェイコブ、私のコートを手伝ってくれませんか？」と頼みました。

彼はフローラのコートを掴み、フローラが袖に腕を入れやすいように差し出し、「ここ一ヶ月でこんなに暖かくなったのは初めてだけど、寒さを心配しないように手袋と帽子が欲しいかもしれないね。」と言いました。フローラも同意し、すぐに二人ともその日のイベントに備えた服を着ました。

彼らがブラックフライアーズ橋に向かって歩いているとき、二人の間の沈黙は、木曜日の朝の通常の仕事を急いでこなす他の人の音で空を埋めました。

マーリーは、幼いフローラがスノーヒルを回り、ニューブリッジストリートに案内されるのを眺めていました。二人は言葉を交わす前に、フリート・マーケットの屋根付きの店の前を通り過ぎた。通りが広い車線に開くと、ジェイコブはフローラに「私はあなたと赤ちゃんをサポートします」と言いました。

「それが君にできる最低限のことだよ」スクルージはつぶやいた。

マーリーは、自分がそのコメントに値することを知っていました。しかし、彼は見続けても何も発言しなかった。

「ジェイコブ、あなたは私に対して責任はありません」とフローラは言いました。

「はい、そうだと思います。ノアを解放するためにもっとできることはあったのに、怖かったです。」

「怖い？ 何が怖いの？」

ヤコブは質問には答えず、代わりに自分の計画を言い直しました。「私があなたに用意します。だからオルゴールを売る必要はないのです。」

「あなたの助けは受け入れられないかもしれません。」

ジェイコブは、お金が拒否されるとは思ってもいなかったのでショックを受けました。「私は何も見返りを求めていません。私はあなたや子供をコントロールするつもりはありませんが、自分を立派な人間だと思いたいなら、あなたを助けなければならぬことはわかっています。」

「繰り返しになりますが、ジェイコブ、これはすべてあなたのことのようです。」

「そう思われるかもしれませんし、ある程度はそうなのかもしれません、本当に私が一番心配しているのはあなたです。」

フローラはジェイコブを見て、用心深く笑い、それから見本市の光景が視界に入つてくるのを眺めた。二人は橋の上に立つて、下での騒ぎを観察した。あらゆる種類の氷の塊が、ロンドン橋とブラックフライアーズ橋の間に停滞の障壁を作り出しました。数十のテントにさまざまな企業が収容されていました。男性を魅了する上半身裸の女性から、お気に入りの女性を魅了しようとスキットルズで遊ぶ少年まで、その日のアクティビティはあらゆるもので埋め尽くされました。笑い声、飲み物、そして肉を焼く匂いがフェア全体に広がりました。

ジェイコブとフローラは、湾曲した階段を下り、着陸ドックに向かって下り始めました。階段の半分ほどで、水夫が料金の支払いを要求したので、ジェイコブは「どういう意味ですか？」と尋ねました。合格するには2ペンス支払わなければなりませんか？」

「それは合理的だ。私はこのドックの責任者です。今すぐあなたを乗せて渡せないとしても、私はまだ生計を立てなければなりません。」

「仕事もない、お金もない」とジェイコブは主張した。

「あそこだよ」船頭はテムズ川の反対側を指差し、「二倍の金額を払いますよ」と続けた。

「ペンスでもポンドでも、私はあなたに何も払いません」とジェイコブはフローラの手を取つて言いました。二人は踊り場に向かって歩き続け、水夫は代金を受け取ろうと決心して彼らを追つた。

「もしあなたが私にお金を払わないなら、私は他の人たちに言います、そしてあなたはここで一瞬の安らぎを得ることができなくなります。」

ヤコブは渡し守の顔を見つめ、それから心を許しました。「ほら、受け取って」と彼は言って、男の手に2ペンスを押し込んだ。

「あなた達は二人ですよ。」

「これを押しつけないでください」とジェイコブは怒りに負けて答えました。できる限り多くのものを手に入れたことを悟った男は、それ以上の干渉をせずに彼らを見逃しました。

彼らが氷の上に足を踏み入れると、セントポール大聖堂から時を告げる鐘の音が鳴り始めました。一撃一撃の音が辺りに響き渡つた。ジェイコブが氷上に二歩踏み出したとき

、目隠しをした若者が彼にぶつかった。彼の押しの力でフローラは滑ってしまいましたが、バランスを取り戻す前にオルゴールの入ったバッグを落としただけでした。ゲームをしている他の子供たちは、目隠しをした少年の手を避けながら、彼をからかいました。誰もジェイコブにもフローラにも注意を払いませんでした。子どもたちのグループはすぐに新しく到着した人たちから離れていた。ジェイコブはただ首を振って反対の意を表した。彼は彼らを批判しようと口を開いたが、途中で立ち止まった。

二人が群衆の中に移動すると、羊に乗った小さな女の子が二人の横を急いで通り過ぎました。熱狂的な見物人の群衆があらゆる驚きに歓声を上げる中、ジャグラ一、剣飲み手、マジシャンが自分の才能を練習していました。フローラはジェイコブを引っ張り、雑貨を販売していた2つのテントの方向に連れて行きました。「もしかしたら、この人たちが私のオルゴールを買ってくれるかもしれない」と彼女は言った。煙が充満した部屋に入ると、オーナーから、彼は売るだけで買ははしないと告げられた。

それでも落ち込まず、フローラはジェイコブを企業の2番目のテントに連れて行きました。そこでオーナーは、彼女のオルゴールの並外れた職人技について親切に語りました。しかし、そこでも販売はありませんでした。

フローラが商人のテントから出ると、ゴロゴロしている象と鼻がぶつかった。飼い主が氷の上に連れて行くと、その獣は左右に揺れた。ブラックフライアーズ橋に沿って進む巨大な生き物を、若者たちの群衆が追いかけた。

行列が雪の上を踏み固めると、突如辺り一帯に悲鳴が聞こえた。「氷が割れるよ！」そうすることで、獣から足が離散し、そのエリアにはゾウ以外の誰もいない場所が残されました。飼い主も一時的に飛び降りた。しかし、その日、氷に飛び込むゾウはいなかった。ゾウが最終的にフェアから出ると、危険によるスリルはすぐに治りました。

ジェイコブはフローラを案内して、酒や食べ物が積まれたさまざまなテントを通り過ぎ、羊を焼いている大きな火にたどり着きました。ある若者は群衆に向かって「炎で暖まり、調理される肉のおいしい匂いを嗅ぎ、最高においしい羊肉を食べられるように準備してください。しかもたったの6ペニスですべてができます。」と叫んだ。

ジェイコブはその男に、「6ペニスで肉の一部を手に入れることができますか？」と尋ねました。

「いいえ、2ペニスの追加料金がかかります。」

「ええと、見るだけのために喜んでお金を払う人がいるのは驚くべきことです。」

男は同意して首を振ったが、出席者に向かって叫び声を繰り返すだけだった。「炎で暖まってください…」

ジェイコブとフローラは先に進みました。フローラはすぐに、6ペニスを支払う理由を説明しました。「ジェイコブ、彼らが肉代ではなくパーティ一代を払っているのが分からぬのか？」

ジェイコブはそれについて考えましたが、同意しました。「それはそれなりに理にかなっていますが、店主の言葉を聞くと、肉を期待しているように聞こえました。」

「そもそもですが、料理をする日は、人によって制限時間内に収まるわけではありません。温めるのに必要な時間だけを使いたいと思う人も多いでしょう。」

「それでも、あの値段なら肉を一口食べたい。」

「それはいいですね」フローラも同意した。

テムズ川の中心部を歩いているとき、彼らはイベントの個人用カードを作成するいくつかの印刷機の前を通り過ぎました。フローラさんは、ある顧客の肩越しに、最近購入したカードのテキストを読みました。「これは1814年2月3日木曜日、テムズ川のクイーンハイの階段の向かいで印刷されました。」彼女は、これらのカードのうち何枚が実際に次世代の手に渡るだろうかと疑問に思いました。

ジェイコブはカードのことを少しも気にせず、すぐにフローラをプレス機の向こうに移動させ、スカイラークとハイフライヤーという2つの人力スイングに到達しました。どちらも4人掛けの座席がありました。ハイフライヤーの方がもう一方よりも1フット以上高かったため、ジェイコブがお金を払って乗ったのはハイフライヤーでした。

最初、フローラさんは気分が悪くなるのではないかと心配して乗り気ではありませんでしたが、ジェイコブさんはフローラさんの不快感に最初に気づいたブランコ押しの人によるよう説得しました。すぐに脱出できるという確信を持って彼女はブランコに乗り込み、すぐにその揺れを感じた。二人はどんどん高くなっていき、フローラが「速度を落として」と呼びかけると、男はそれに従った。このためヤコブは、「彼に十分なヒントを与える必要はないだろう」と言いました。

フローラは義理の弟に微笑んで、「時々アノアのことを思い出します。ジェイコブ、あなたがいてくれて嬉しいです。」と言いました。

「とても良い女性ですね」若いジェイコブがただ黙って目をそらすと、マリーがささやいた。

「彼女がそう言ったとき、あなたは何を考えていましたか？」スクルージは尋ねた。

「そう思って、私は心の中で泣いていました。その言葉を聞いて、ノアには二度と会えないという真実を思い出しました。」

「それはいつもあなたに戻ってくるようです、ジェイコブ」とスクルージは答えた。

「もちろんそうだよ、エベネザー、他に誰の代わりに言えるだろうか？」

フローラとジェイコブがブランコから離れたとき、スキットルズのボールがジェイコブの足の上を転がりました。彼は木製のボールを拾い上げ、プレーヤーに投げ返し、「おそらく次の投球は実際にピン1～2本に当たるでしょう。」と言いました。フローラはこれを見てくすぐると笑った。彼女もまた、この酩酊した男には練習が必要だと思っていたからだ。しかし、競技者が反応する前に、子供を追いかける男性の叫び声が辺りに湧き起こった。「やめろ、財布を盗んだぞ！」

二人が競って追い越していくとき、大男がその大きな足を逃げる若者の道に差し出した。後続の少年が彼に飛びかかると、少年は氷の上に激しく倒れ込んだ。フローラもジェイコブもその結果を見るためにそこに留まらなかつたが、二人とも財布が回収されたと思っていた。

彼らがテムズ川の中心に沿って進んでいたとき、矢を持った男が近づいてきました。
「雄牛の目を射ることができれば、半分クラウンを獲得できます。矢1本あたりわずか2ペンスです。」

ジェイコブはフローラを見て、「私は昔は本当に良いショットを打っていました。」と言いました。

「はい、でもまだですか？」フローラは尋ねた。

ヤコブはその男に矢3本に対して6ペンスを渡しながら、肯定的に首を横に振った。フローラは彼が狙いを定めるのを見つめ、的が取り付けられた干し草の俵に向かって矢を放った。幸運にも彼は標的に命中しましたが、その円はどれも命中しませんでした。
「まだできるよ」と矢を売っていた男は言った。

ジェイコブが次のショットに向けて体勢を整えていると、男がフローラの肩をたたきました。振り向くと、フローラはすぐに、彼女のオルゴールを賞賛していた商人のテントの男に気づきました。彼が彼女にしたのと同じように、彼女も彼に微笑んだ。背の高い紳士を指さす彼らの後ろで彼は言いました。「この男は、生まれたばかりの息子に与える素敵なお土産を探しています。」フローラと男がお互いを認め合うと、彼は立ち止ました。すると店主は「今日見た中であなたのオルゴールが一番素敵だと思いました。まだ売る気はありますか？」と続けました。

フローラはためらうことなく、「はい、その価値の半分でも手に入れることができれば」と答えました。そう言って彼女が箱を開けると、車輪のピンが古い英国のメロディーを奏で始めました。

「ああ、それは嬉しいですね」と商人の後ろに立っている男、エドワードが言った。

商人は「私が言った通りです。それでは、取引は任せましょう。」と叫びました。そう言って彼は用事に向かったが、立ち去る前に男は握手し、手のひらに1ポンドを置くようなジェスチャーをした。

エドワードはフローラに注意を向けて、「私の名前はエドワード・オルブライトです。その箱に何が欲しいですか?」と言いました。

「新品なら75ポンドの価値があると確信しています。」

「そうかも知れませんね。それでは、お値段は35ポンドですか?」

フローラはほとんど話すことができませんでした。彼女が彼から少し目を離したとき、思い出が感情を揺さぶった。彼女は涙を見せないように頭を下げ、あごから水気が落ちるまで泣きました。

エドワードは彼女の返事を待ってから、「本当に売りたいのですか?」と尋ねました。彼女はゆっくりと肯定的にうなずいたが、その申し出を受け入れると声を上げる前に、エドワードは新たな申し出をした。「45ポンド差し上げます。確かにこの箱は最初から90ポンドの価値がありますが、同意しますか?」そう言って彼はお金を提供しようと前に出ましたが、その代わりに人通りに紛れ込んでしまいました。フローラはすぐにエドワードに顔を向け、頬に残った最後の涙を落とした。彼女は彼の腕を掴み、彼が群衆の流れの力に抵抗できるよう全力を尽くした。二人はしっかりと体を立てながら、群衆とともにゆっくりと動き始めた。最後にエドワードは「本当に売りたいのか?」と繰り返した。

「はい、ありがとうございます。あなたの息子さんはきっと音楽が大好きになるでしょう。」

「彼の絵があるので見ませんか?」

「それは嬉しいですね。」

彼らはテムズ川の中心部を群衆とともにゆっくりと移動し始めた。エドワードは財布から画像を取り出し、それをフローラに差し出しました。彼女が男性から紙を受け取ると、生後数か月の赤ちゃんが笑顔で出迎えてくれた。「明るいですね。絵も素敵ですね」。

「私はアーティストです。」

フローラはその男に微笑んで、「まあ、それでもいい絵だよ」と言いました。そう言って彼女は尋ねました、「あなたの息子さんの名前は何ですか？」

「ギルバート、ギルバート・ジェイコブ・オルブライト。」

「ジェイコブ、私は自分のものを持っています、彼はここにいます。」彼女は彼にアーチェリー競技会を見せようと振り返ったが、彼らはもう遠すぎて競技を見ることができなかった。「ああ、私たちはさまよってしまった。私は彼に戻らなければなりません」とフローラは言いました。

"もちろん。"こうして二人は取引を終え、道案内を終えた。フローラはアーチェリー競技に戻ったとき、ジェイコブが見つからないことに気づきました。新しい男たちがベルを撃っていた。唯一知っている顔は矢売りの顔だった。彼女は彼に近づき、ヤコブについて尋ねました。

「彼は5分前に出て行きました。周りを見回してください。遠くへ行ったとは思えません。」フローラさんが立ち去ろうとしたとき、その男は「一日中最悪のショットだった。寝ている間に勝つチャンスはもっとあった」と付け加えた。

フローラはその地域を捜索しましたが、ジェイコブは行方不明でした。彼女は、彼の酒への欲求が彼を酒のたくさんのテントの一つに引き込んだのではないかと疑問に思った。30分後、彼女は捜索を諦め、家に向かって歩き始めた。

"どこにいましたか？"スクルージは尋ねた。

「私がどこにいたと思う？」

「私はあなたの謎を知りません。」

「フローラを探していました。音楽と踊りのボートに行きました。彼女はオルゴールを売りに行ったのかもしれないと思いました。」とマーリーは答えました。

「なぜ彼女がそこに行くと思いますか？」

「彼らは音楽愛好家だからです。」その後、マーリーはブラックフライアーズ橋に向かって歩いているフローラを指して、「私たちは彼女について行かなければなりません。」と言いました。

「しかし、私たちはあなたの若い頃を追いかけてきました。」

「今日は違います。私の目はいつも彼女にありました。」そう言ってマーリーはフローラに向かって動き始め、スクルージは友人の後を追った。

フローラさんが銅版印刷機に近づいたとき、氷の上で滑って後ろ向きに転倒してしまいました。彼女の背中が地面にぶつかるほどの力で、彼女の命が動きました。お腹を抱えてゆっくりと起き上がった。フローラはバッグを持ち上げて、ポーチの中に45ポンドが放たれているのを眺めた。ノアとの人生を思い出し、あらゆる感情が組み合わさって圧倒的な荒廃が生まれました。フローラの視界が涙でぼやけ始めると、悲しみの声が響き渡った。

新雪の中を当てもなくとぼとぼと歩きながら、「危険！薄氷！」のところで立ち止まった。サインは、キツネのような速さで危機に向かって突進した。彼女は「死にたい！」と叫びながら、あらゆる考えを苦痛に支配されました。自己保存の欲求が働く前に、氷が彼女の破滅的な欲望に道を譲ったとき、赤ん坊は蹴りました。

遠くでジェイコブのくぐもった声が「フローラ、フローラ、どこにいるの？」と叫んでいるのが聞こえた。

「私たちは彼女を救わなければなりません」とスクルージは叫びました。

「それができれば」とマーリーは答えた。

「なぜこのことを私に教えてくれなかつたのですかいつ起こつたの？」

「私の悲しみは罪悪感に直面できませんでした。」マーリーは「1854年に戻らなければなりません」と言いながら頭を下げた。

「待てよ、ノアを助けようと思ったんだ」

「タイムトラベルとトランスマグリフィ島は同じ道をたどっていません、エベネザー。「あの世へのナビゲーションには、意識の再配置が現在で起こる必要がある。」そう言って、マーリーはゆっくりと彼らを1854年に戻し始めた。最初に出発してから数分以内にサックビル15番地に到着した。通りはキャロルでいっぱいだったので、スクルージはまだクリスマスイブであることに気づいた。10年以上前のスクルージの過去への最初の冒険と同様に、この最新の旅も時間の前進の外側から経験されたものであった。

**** ステープ 6 ****

死後の世界への参入

スクルージの今は消えた暖炉の隣に立って、マーリーは言った。「トランスマグリファイの危険性についてはすでに話しましたが、これはあなたがその方向に進むのを控える最後の機会でしょう。」彼は深呼吸をしてから、「続けますか？」と尋ねました。

「はい、多少の不安はありますが、まあ、そのまま出発しましょう。」

マーリーは心臓の鎖の間に保管されていた小瓶を外した。彼は友人に液体の入った容器を手渡し、「この薬を飲む必要がある」と指示した。

スクルージはコルクを抜き、エリクサーを飲みました。すぐに彼は咳き始めた。「これは何ですか？」

「毒だ」とマーリーは言い、すぐに「死者だけがトランスマグリファイに入ることができます」と付け加えた。

「ジェイコブ、あなたが私が危険にさらされていると話していたとき、あなたが危険な人物になるとは思いもしませんでした。」そう言って、スクルージは液体の内容物を吐き出そうとあらゆる努力をしましたが、薬は止めることができない速度で効果を発揮しました。

スクルージが椅子に倒れ込むと、マーリーは「信じてくれ」と彼を安心させようとした。彼は胸をたたきながら、「私には解毒剤があるよ、エベネザー、あなたは死なないよ。」と言いました。スクルージの死が近づくと、マーリーは友人をトランスマグリファイ島へ連れ去った。

入り口でうずくまつたスクルージの活力は、ほとんど目立たないほどに衰えていた。パニックに陥ったジェイコブは、心の鎖の間から毒の解毒剤が入った瓶を全力で引き抜こうとした。彼がやったように、ファイヤートワラーは小瓶を拘束具内に固定し続けた。粘り強さがあつて初めて、船は最終的に鎖から落ち、マーリーの手のひらを直接通り抜けました。ボトルは倒れたエベネザーの後頭部に直撃した。マーリーは地面に激突する前に小瓶を掴んだが、容器を制御するのは難しいことが判明した。マーリーがボトルを掴んだと思うたびに、ボトルは彼の羽根のような体をすり抜け始めた。

「なぜこの死者はエンタングルメントを開始しないのですか？」テントは尋ねた。

マーリーはトランスマグリファイの警備員に立ち向かう努力をしなかった。代わりに彼はスクルージと一緒に急いだ。「ここで少し問題が発生しました。」マーリーは、スクルージが解毒剤を飲まずにはいられないとは思いもしなかった。スクルージが空気を求めてえぎ始めたとき、マーリーは命を救う液体を友人の唇に届けようとした。スクルージはただ口をきつく締めただけで、息苦しさが激化した。

スクルージを生かしたくて必死だったマーリーは、スクルージの左手の指の先端をすべて噛みちぎりました。指の骨が皮膚を越えて伸びている状態で、マーリーは5本の指をカップ状にまとめて小さな台を形成しました。マーリーは指の骨を組み合わせた平らな面で小瓶のバランスをとりながら、スクルージに薬を注入する前に瓶が手から落ちないことを願った。彼は歯で解毒剤のコルクを抜き取った。

懸念通り、小瓶はマーリーの指を通り始めました。苦戦しながら、ようやく突き出た骨をひねることで、瓶の速度が十分に遅くなり、瓶が完全に手から落ちないようにすることができた。瓶を握るのは長くは続かないと悟ったマーリーは、スクルージの胸に手を伸ばし、液体を胃の中に直接落としました。

スクルージが体を動かし始めたとき、テントとアプルトのプラットフォームはロンドン市民のプラットフォームから5フィート以内まで下がっていた。「なぜこの死者はエンタングルメントを開始しないのですか？」テントは繰り返した。

スクルージは視界を眩ませる投光器のまぶしさに目を開けた。彼の隣にはマーリーの色あせた姿が立っていた。彼らの目の前には、何もないように見えるものに台がぶら下がっていました。ステージの上には二つの無色の姿が立っていた。目の視界を暗くしながら心の感情を貫く能力を持った光の灯火を持つ天使テイントは、マーリーとスクルージの前に立ち、輝かしい指揮を執った。

「ジェイコブ・マーリー、なぜこの死者はエンタングルメントを開始しないのですか？」テントは尋ねた。マーリーは再び光の存在の質問を無視した。その代わりに彼はスクルージを立ち上がらせた。

テントの隣には、大きさも形も犬ほどの動物が立っていた。それでも、その模様はトラに近かった。この生き物の短い茶色がかかった毛皮は、黒い縞模様を強調していました。犬のような動物がとぐろを巻き、テイントの光を透過すると、後端の模様が輝きを吸収し始めた。獣の縞模様が輝き始めたとき、テイントは自分の胸を叩き、「アプルト、今ここに」と命じた。そう言って動物は後ろ足で立ち上がり、尻尾で体を支え、頭のてっぺんを仲間の頬にこすりつけた。アプルトは立ち上がって、目の前の二人を気遣うテントに加わった。

「ジェイコブ・マーリー、あなたは生きている人間を連れてきました。なぜですか？」テントは尋ねた。

「ノア・マーリーを解放するにはエベネザーの助けが必要です。」

「これは許せません。彼が危害を加えられる可能性があることはわかっています。もし自分の命を失ったら、彼はあなたの兄弟を救うことはできません。」

「私が彼を守ります」とマーリーは断言した。

"どうやって？"

「我々は幻の道を歩き、回廊には決して登らない。安全を高めるため、我々は道から一歩も出ない。もしエベネザーが負傷したら、即時変身を申し出るつもりだ」とマーリーは言った。

「即時変身は交渉できるものではありません。いつでも変身を完了することを選択できますが、その使用を操作することはできません。それで、今すぐ即時変身を実行しますか？」テントは尋ねた。

「いや、いや！」マーリーは叫びました。「エベネザーを守れなかった場合に必要な罰には同意したいだけです。」

「罰ですか？生きている人間に与えられた怪我を治すのに十分な罰はありません。予防可能な怪我をした後で罰を望むことは許されません。いいえ、彼は戻らなければなりません。」

「いずれにしても、私の人生はもう終わりに近づいている。私は終わりを恐れてはいな」スクルージは言った。少し間を置いてから、彼はこう付け加えた。「私はジェイコブを助けたい。私は自分の望みでここにいるのです。」

テントもアプルトもスクルージに注意を向けた。門番が「存在しないことを歓迎することを証明してください」と声をかけたとき、テントのにらみはスクルージへの挑戦のように感じられた。

「私の死後、私はここトランスマグリファイにいないのですか？」スクルージは尋ねた。

「いいえ、エベネザー・スクルージ、あなたがトランスマグリファイで死んだら、あなたは決して存在しなかったことになります。」

驚いたスクルージは「私はどうなるの？」と尋ねた。

「地球時間は、時間の記録からの削除に合わせて調整されます」とテイント氏は説明した。

"削除？"

「あなたのすべての側面が消去されます。」

トランスマグリファイの音だけが聞こえる沈黙の後、スクルージはついに会話の静寂を破り、「ジェイコブを助けてたいのですが」と言いました。

Transmogrify の管理人である Apurto 氏はプラットフォームから飛び降りた。侵入者志望者に近づいた後、アプルトはスクルージの隅々まで匂いを嗅いだ。結局、獣はあくびをしただけだった。鋭い歯を見てスクルージは恐怖を感じた。彼は顎が耳の後ろで蝶番で動かされている生き物を経験したことがなかった。アプルトが自分を真っ二つに噛みつくかもしれないという考えに、スクルージは口をひるめた。

タントは再び胸をたたき、「アプルト、今ここに」と命じた。スクルージとペットの出会いを観察した後、テントはこう言った、「あなたの勇気は失敗した。あなたのこの世の恐怖は、トランスマグリファイであなたを裏切るだろう。」アプルトがプラットフォームに戻ると、テントは続けた、「Transmogrify はあなたの助けをあまり必要としません。あなたは諦めなければなりません…」

「待て、有罪判決を受けた無実の変身が危険にさらされている」とマーリーが叫んだ。

テントはスクルージを生者に戻す動きを止め、「有罪判決を受けたのですか？ この地上に縛られた者の助けなしでは変身の可能性はありませんか？」と尋ねた。

「おそらく 1000 年以内には」

「あなたの発言は誇張されています。これほど長い期間、トランスマグリファイを続ける人は誰もいません。なぜノア・マーリーの非難された無実の精神がモグリファイド・スピリットにならないと信じますか？」テントは尋ねた。

「彼は自分が犯していない犯罪で罰せられたのです。それに、自殺したのです」とマーリーは答えた。

「なぜ彼は自殺したと思いますか？ 彼はプールの中に住んだことは一度もありません。」

「ニューゲートの所長は自殺したと述べた。」

「ああ、そうです、所長です。彼は今、その怠惰のせいで破壊的衝動の領域に住んでいます。ノアが殺害されたという真実は、ターンキーの間で知られていました。」

ノアの本当の死のショックでマーリーは沈黙した。テントが腕を上げると、高くなつたプラットフォームの隣に映像が現れた。彼が腕を下げるとき、ノアの地上での最後の瞬間の光景が明らかになりました。動く映像の画面の中で、マーリーとスクルージはノアがニューゲートの訪問者フェンスに向かって歩いていくのを見ていた。フローラが

到着するのを待っている間、ジェームズ・マクシーが残りの資金をターンキーに渡す様子が見られた。警備員がお金をポケットに入れると、向きを変えて屋内に入った。

マクシーは気づかれずにノアに近づきました。背後に回ると、彼はノアの頭を金属製のピケットフェンスに突き刺した。突き飛ばされた衝撃でノアは意識を失った。ノアが柵の隣に横たわっている間、マクシーは獲物の腕を上げ、最も鋭い棘の上で全長いっぱいに引きずりました。マクシーはノアを殺しながら、「小さな魚は大きな魚に食べられる」と耳元でささやきました。噴き出る血から逃れるために、殺人者はノアの手首をぶら下げたままにしておきました。刑務所に入ると、マクシーは微笑んだ。なぜなら、ノアが自分より先に死ぬことを知っていたからである。

「では、この出来事がノアに有罪判決を受けた無実の者を生み出したと思いますか？」テントは尋ねた。

「たぶんイブ二つだよ」とマーリーは答えた。

「それはノアが複数の死の原因となった場合にのみ起こります。彼は自分の死にさえ無罪です。」

「彼の妻フローラは彼の数週間後に亡くなりました。彼女の死はノアの精神にも影響しているのかもしれない」とマーリーさんは語った。

「実のところ、二人の死の責任はあなたにあります、ジェイコブ・マーリー。プールの中に住んでいるのはノアではなくフローラです。テントが説明するとマーリーは目を伏せた、「ノア・マーリーは確かに非難された無実の精神を生成しましたが、予想通りに進歩しているようです、なぜなら彼は最近怒りの穴から深淵に移ったからです。」彼は自らの力で変身を終えるだろう。でもフローラ、彼女は眠りすぎます。」

トランスマグリフィ内でのフローラの停滞に驚いたマーリーは、「彼女はまだプールで眠っているということですか？」と尋ねました。

「はい、フローラはコスアクセプタンスをスプレーされても眠っています。」さらにテント氏は、「彼女はまだ目覚めに抵抗している」と付け加えた。

「コス承諾ってエンタングルメント発動確定じゃないの？」

「ほとんどの人にとって、しかし一部の人は、彼らの死の他の側面が正されるまで動搖することはできません」とテイント氏は語った。

マーリーは、フローラが壊れた魂のプールの中で冬眠したのは自分のせいだと考えていました。彼が唯一確かに知っていたのは、ノアがフローラなしでは変身を完了できないということだった。そして「ノアもフローラも救ってみせる」と申し出た。

「そうしますか？」スクルージは尋ねた。

「ノアに焦点を当てていると思った」とティントは語った。

「私も同じことを思った」とスクルージも同意した。

「ノアは私の奉仕活動です」とマーリーは答えた。さらに、「フローラはノアよりも私たちの助けに値するかもしれない」と付け加えた。

「すべての精霊は助ける価値がある。無限の意識とのつながりを断ち切った精霊たちも、モグの仕組みによって助けられる」とティント氏は語った。

「ティント、あなたが必要とする答えを見せてください」と恐る恐るマーリーが要求した。

「賢いよ、ジェイコブ。この問題は解決できません。危険はたくさんあります。おそらく毎分、エベネザーを終わらせる可能性のあるトラブルが起こるでしょう。」

「失敗したときに即時変身を申し出しができなかつたり、道だけを旅して危険な靈を避けたり、必要なときに自分の靈でスクルージをカモフラージュしたりすることができないのなら、彼を守ることはできないと思います。」

「カモフラージュ…カモフラージュ」ティントは考えの残りを沈黙に隠しながらつぶやいた。

「私は…に熟練しました。」そして次の瞬間、マーリーはスクルージの姿に変わりました。

テントは目の前に立っているスクルージの二重像を眺めながら微笑んだ。そして天使はマーリーが考慮していなかった真実を語った。「靈が恐れる存在の姿をとり、捕食したい存在に変化しないのが一番良いのかもしれません。」

マーリーはこの現実をしばらく考えてから、彼もニヤリと笑いました。しかし、スクルージを守るための解決策が見つかることに対するフラストレーションが彼の思考を支配した。考えられる答えが頭の中で交差したとき、彼は即座に、自分の心を試練に縛り付けていた残りの鎖に再び注意を向けざるを得なくなつた。警告もなく、チェーンが火花を吐き始めました。

「ジェイコブ・マーリー、なぜ Transmogrify から Fire Twirler を削除したのですか？」
テントは尋ねた。

彼は、使い果たされそうになったファイヤートワラーをチェーンの内部空間から取り出し、それをテントに差し出し、「これならどんなアクションでも実行できるよ」と言いました。マーリーはかろうじて回転する火の玉を見て、「これは違います。使う前に燃え尽きましたが、あと4つあります。」

「なぜファイヤートワラーを撤去したのですか？」

「それは、彼らが向けられるすべてのものに身体性を加えるからです。」それから彼は天使からの返事を待ったが、テントは黙ったままだったので、マーリーは続けた。

「私は刑務所にいるノアを温めるためにすでにそれを使用しました。私の残りの4つのファイヤートワラーは、エベネザーを危害から守るために使用されます。」彼は再び立ち止まり、懸念を引き起こした沈黙だけを聞いた。

テントは最後に、「あなたはスピリットのファイア・トワラーを捕らえて、スピリットの進歩を遅らせました。」と言いました。

「いえいえ、私は彼らが幻の道に入ったときだけ捕まえます。彼らはその不法侵入を生き延びることはできません。私は彼らをエネルギー源として利用することで彼らに貢献しています。」

「いえ、それはファイヤートワラーの目的ではありません。あなたが個人のエネルギーを閉じ込めると、その人の変身を遅らせることになります。ファイア・トワラーは他の精霊が使用するものではありません。」マーリーの責任感の無さにイライラしたテントは、「ファイア・トワラーは強迫的な精霊が破壊的な習慣を解放するために作り出すものであることを知っていますか？」と尋ねた。

「ある程度はね」とマーリーは答えた。

「それでは、あなたの知識を広げてみましょう」とテントは皮肉を込めて言った。
「ファイヤートワラーが閉じ込められると、それを作成したスピリットは、それが返されるか消費されるまでスタンバイモードになります。ジェイコブ、あなたは靈の進歩を遅らせました。」

「しかし、すべてはスパイralですファイヤートワラーを捕らえてください。」

「ファイヤートワラーを操る少数の者だけを『全員』とは言わないでください。」

「これらのファイヤートワラーがエベネザーの安全を確保できる唯一の方法です。」マーリーはさらに、「ファイヤートワラーがあれば、どんな攻撃も防ぐことができるだろう」と付け加えた。

ティントはマーリーの計画のあらゆる側面を検討した上で、こう言った。「エベネザーと一緒に入るのを許可するが、それは君が他の精霊から離れて道を進み、自分ではなくエベネザーが命の危険にさらされたときに使えるファイヤートワラーを取っておく場合に限る。」

「エベニーザーだけが私の懸念です。」そこでマーリーはスクルージに「気が変わらないうちに行こう」とささやいた。

彼らが **Teint** のプラットフォームの後ろに足を踏み入れると、照明のカーテンが **Transmogrify** で実行されているシーンを照らしました。黒からコバルトブルーに変わり、マーリーとスクルージの上空には、トランスマグリファイを往復する何百もの靈魂が瞬時に見えました。マーリーさんはグループを指さして、「アウトリーチの任務で私たちちは皆忙しくさせられています」と言いました。

靈魂が彼らの上を通り過ぎると、スクルージは尋ねた、「なぜ彼らは私たちの上にいるのですか？」

「この道は、特に切断された精霊のクレーターの近くでは、靈にとっては危険すぎる。ほとんどの幽霊は回廊を移動しますが、あなたと私、エベネザーは道路を歩まなければなりません。それが私たちと **Teint** との合意です。」

彼らが真っ青なエリアに入ると、アプルトは彼らに向かってうなり声を上げた。
Transmogrify の中に最初の一歩を踏み入れると、空が明るくなりましたが、ほんの少しだけでした。彼らの目の前で、精霊たちが働いている音が聞こえた。上位 5 人のモグの活動は聞こえますが、入り口からは見えません。マーリーがトランスマグリファイの内部に最初の一歩を踏み出したとき、彼の心臓に取り付けられていた 2 番目の鎖が消え、それとともにファイヤートワラーが落ちました。車が回転して誘拐者から解放されると、マーリーは「安全にいたほうがいいよ、エベネザー、残っているのは 3 つだけだ。」と言いました。スクルージの後に続くよう手を振りながら、マーリーはこう付け加えた。「おそらく 4 人目がいなくても安全だろう。」

スクルージは死後の世界の重力が彼に迫りながら、トランスマグリファイへの第二歩を踏み出した。「ジェイコブ、息ができない。」

「怖かった…」

「燃えてきました、ここは何ですか？」

「期待してなかつたんだけど…」

「何とかしてくれ！」スクルージは要求した。

スクルージが胎児のような姿勢に身を寄せると、マーリーはお尻の横にしゃがみ込んだ。息を呑む友人を包み込み、あまりにも深く抱きしめたので、彼の幽霊性がスクルージの肉体と結びついた。二人の存在が区別できなくなると、スクルージは浅い呼吸をし始め、汗が全身の毛穴を満たした。スクルージは膝をつき、「冷やさないと発火してしまうよ」と言った。

マーリーはハートの鎖の間からファイヤートワラーの1つを取り外した。わずかなエネルギーの炎が非常な速度で回転し、炎があらゆる方向に飛び散りました。マーリーは氷河のビジョンを頭の中に置き、自分の骸骨の隣にファイヤートワラーを持ちました。この精神的なイメージがファイヤートワラーを制御すると、マーリーの構造は氷に変わりました。寒さのため彼の運動能力は低下した。マーリーは硬直していたが、スクルージの上に身を投げた。スクルージはトランスマグリファイの重力と熱の二重攻撃からゆっくりと復活した。

「私たちはお互に少し離れたところに留まらなければなりません。そうしないと、また重力に押しつぶされてしまいます。暑さには対処する方法を学ぶことになるだろう。」

「なぜここにはこれほど激しいプレッシャーがあるのでしょうか？」スクルージは尋ねた。

「死後、身体的に感じる能力はほとんどなくなります。しかし、受容に向けた取り組みには、自分の感覚を認識する必要性が必要です。強化された重力がなければ、いかなる精霊も変身を完了することはできないでしょう。」

「そして暑い、なぜこんなに暑いのですか？」

「そんなことは期待していなかった。ほとんどの蒸留酒は熱に影響されないので、熱に対する計画を立てる方法がわかりませんでした。なぜ思いつかなかつたのかはわかりませんが、Transmogrifyが注目されるのは当然のことだからです。どの地域にも独自のエネルギー源があり、当然熱が発生します。あそこの丘を登り切ったら、火花がはっきりと見えるでしょう」マーリーは目の前の丘の頂上を指差した。

スクルージは浮いた頭が首に噛みつく混乱を迎えるのにちょうど間に合うように足場を取り戻した。「これは何のベッドラムですか？」スクルージは負傷箇所を掴みながら叫んだ。しかし、説明がなされる前に、別の頭がスクルージを攻撃しました。

マーリーは急いで「早くついて来い、エベネザー」と叫びながらスクルージの横を急いで通り過ぎた。何も考えずにマーリーがあまりにも前方に射撃したため、スクルージは自分が二人の共有の重力場から解放されていることに気づきました。

スクルージは膝をつき、胸を押さえた。喘ぎ声を上げながら、彼は「やめて」という言葉をささやいた。

マーリーは友人の発言に注意を払いませんでした。代わりに、彼は近づいてくる頭を弾き飛ばすことに集中した。

「助けて」とスクルージは攻撃してくる軍勢に降伏しながら叫んだ。

マーリーが振り向くと、道路に横たわり身動きもしない友人の姿が見えた。マーリーが共有の重力場に再び入るとすぐに、スクルージは彼の元に急いで戻り始めました。スクルージの首には精霊の頭から生えた歯が取り付けられていました。ヘッド自体は再組み立てできないようでした。そこでマーリーは慎重に B を掴みました。歯の反対側を外し、スクルージが解放されるのに十分なだけ歯を引き離しました。スクルージを助けて立ち上がらせ、「ついて来い」と命じた。マーリーはトランスマグリファイの中心に向かって走り始めた。「逃げろ、エベネザー、今度はついて来い。」

「なぜ私たちは頭の方に向かって走っているのですか？」スクルージは叫んだ。

「それが逃げる唯一の方法だ。」

スクルージが考えた唯一の逃亡は、彼らが巻き込まれたことであり、彼らの良識を放棄することだった。二人は必死になって丘の頂上を目指して走った。一歩ごとに、バラバラになった頭がスクルージの肉体を攻撃し続けた。丘の頂上に近づくにつれて、道路は数フィートの距離を獲得した。20 フィートが 30 フィートになったとき、スクルージは恐怖を欲求不満に置き換えました。攻撃中の頭を掴み、一度ではなく何度も跳ね返るような勢いで地面に投げつけた。残念な頭蓋骨はリバウンドするたびに新たな高みに達しました。スクルージはマーリーの重力を追いかけて、そらされた頭蓋骨を通り過ぎて走った。

丘の頂上でマーリーは突然立ち止まった。いくつかの頭が丘の上を飛んでいくと、スクルージは彼の中を駆け抜けた。もうすぐマーリーの重力から逃れることができると悟ったスクルージは、友人の方を向き、身をかがめてこう言いました。肺に空気を入れたり出したりしながら、彼は尋ねた、「なぜ立ち止まったのか？」

「それは明らかではないですか？」

スクルージはその質問について考えてから、「私には関係ありません」と答えた。

「頭たち、ほら、彼らはもうあなたのことなど気にしていませんよ、エベネザー」と彼は上を向いて言った。

スクルージは、数フィートの頭が目の上を飛んでいくのを眺めた。息を整えて、彼はマーリーの肩越しに指差し、「アプルトは何をしているんだ？」と尋ねた。

マーリーは正門の方を向いた。二人の友人は、アプルトが尻尾を使って身長の二倍の高さを跳ね返す能力を強化する様子と一緒に見ていた。アプルトは絶頂に達したとき、精霊の頭の一つをひったくって、それをそっと有袋類の袋の中に入れました。アプルトがバラバラになった頭蓋骨でポーチを満たしていると、マーリーは「あんな獰猛な噛みつき者は決してあなたを狙ったことはありませんよ、エベネザー」と説明した。

「あなたは私を騙すこともできたでしょう。」

「彼らはトランスマグリファイから逃れたいという願望だけを持っていました。アプルトは彼らを捕まえています、それが彼の仕事だからです。」

「分かりません。どうしてそんな頭蓋骨が存在するのでしょうか？」スクルージは尋ねた。

「これらは、Cross Acceptance リリースがあるたびに作成されるものです。」

"なぜ？"

「クレーター内の誰も、無限の意識や他の靈からの助けを許されません」とマーリーは言いました。

「なぜ無限の意識がクレーターにいる人々を見捨てるのか、私にはまだわかりません。」

「エベネザー、それは全く逆です。クレーターの中の人々は無限の意識を放棄しました。」

スクルージが「では、アプルトのやっていることは役に立つか？」と尋ねると、アプルトはまた頭を掴んだ。

「はい、アプルトはそれらの精霊を救おうとしています。コスのグループが承認を達成するたびに、彼らの解放の力が彼らに最も近い精霊を引き離します。アプルトは精霊が再び完全になることができるよう部品を返しているだけです。」

スクルージはこの現実にショックを受ける。「ある者の救いが他の者の破滅を生み出すのか？」

「それがクレーターの仕組みです。」

「それは残酷なようです。」

「無限の意識の影響なしに存在することの困難は残酷ではなく、耐え難いものです。」マーリーが入り口の方を指さしたとき、スクルージはその考えにひるみ、「間もなくアプルトが頭をクレーターに戻すつもりだ。ほとんどは他の手足と再び集合するだろう。」と言いました。

「ほとんどが？」

「頭や背骨が回復しなければ、失われる人もいます。そうでなければ、手足のないコスも最終的には変身を遂げるでしょう。」

"見て！"スクルージはアプルトを指差しながら叫んだ。「彼は頭を飲み込んだだけだ！」

「彼のポーチにはスペースがありません」とマーリーは説明しました。

「それで…」

「まあ、彼は彼らを Transmogrify から逃がすことはできませんね？」

「それで彼はそれらを食べるのですか？」

「それは、宇宙を旅する大勢の頭がさまようよりも良いことです。」

「個々の頭に対してではありません。」

「エベネザー、それぞれの魂はそれぞれの苦しみを生み出します。彼らには人生の選択があったにもかかわらず、クレーター内の全員が無限の意識にのみ属する権威を喜んで横領しました。」

アプルトが地面に身をかがめると、彼のポーチが道路の表面に落ち着きました。トランスマグリファイの管理人は腹を引きずりながら彼らに向かって動き始めたが、ポーチの中の十数頭の塊が彼の移動を遅らせた。頭蓋骨を返そうと彼らの前を通り過ぎたとき、スクルージとマーリーはついにトランスマグリファイを見下ろす丘を登りました。

マーリーはスクルージの反応を観察した。トランスマグリファイの咆哮が入り口から聞こえたが、その眩しさは検知できなかった。彼らが丘を登ったとき、青みがかかった光の爆発が彼らに直面した。スクルージは口を開いたまま、歩幅の途中で立ち止まった。彼らのすぐ前には、暴力平原の 3 つの穴を囲む何百もの木々が立っていた。各ピットの入り口からは無数のワンルームボックスが伸びていた。それぞれに 1 つの精霊が含まれており、中に収容されている精霊の進行状況に応じて 2 つの精霊が含まれる場合もありま

す。熟考の間。3つの穴を囲むように燃え盛る木々の森が広がっていた。ロンドンでは森林火災はほとんど前代未聞だが、スクルージはこの炎の噴出が彼の既知の現実の範囲外であることに即座に気づいた。彼は、どの木も幹の中心の内側だけが燃え、葉、枝、樹皮はすべて元の状態のままであるのを観察しました。スクルージは平原を指さした。彼は自分のビジョンを疑いながらも、「なぜ……？」と一言だけ困惑を表明した。

彼の混乱を察知したマーリーは、「燃える木の森がピットに力を与えている」と申し出た。

「炎は木材を消費していないように見えますか？」

「無限の意識は燃料を提供します。森は単なる力の伝達手段であり、実際のエネルギーそのものではありません。」

"なぜ...?" 困惑したスクルージは尋ねた。

「私の最善の推測は、これは単なる推測ですが、部屋を占拠している人々は変身を完了するために個人のエネルギーのすべてを必要とするということです。」

"なぜ?"

「そこには悪い人物がいます、エベネザー」とマーリーは言い、続けた。「暴力行為は時間が経っても解決せず、悪化します。アウトライチの任務は、平原の人々を助けるためだけに設立されたような気がします。商工会議所は冷静で組織的に見えますが、私が個人的な経験から知っていることの一つは、商工会議所は大変な仕事であるということです。」

「無限の意識が平原に力を与えているとしたら、その地域に力を与えているのは誰でしょうか？」スクルージは、貪欲の連鎖を指して尋ねた。

「ほとんどのモグは、精霊自身がその地域に必要な力を生成するように設定されています。」

「そもそも、なぜ何らかのエネルギー力が必要なのでしょうか？」スクルージは不思議に思った。

「理由は2つしか思いつきません。まず、Transmogrify 内で必要な重力を維持するために多大なエネルギーが費やされているようです。」

「これは、靈が自分自身を肉体的な存在として再び経験できるようにするためですか？」

「はい、自分自身の人生の行動を認識するのに十分です。」

「そして二つ目の理由は？」スクルージは尋ねた。

「それぞれのスピリットには、アウトリーチの任務を形成するために必要な条件が与えられているため、最終的にはモグリファイド・スピリットになることができます。受容への変容には膨大な量のエネルギーが必要です。」

「ほとんどのモグは自分でエネルギーを生成しますか？どうやって生成するのですか？」

「それに独自の方法があります。壊れた魂のプールでさえ、眠っている人々は流した涙を通してその地域の力を生み出します。しかし、暴力の平原内と深淵では、無限の意識がすべてのエネルギーを提供します。」

「なぜ無限の意識はあらゆるものにすべてのエネルギーを供給しないのでしょうか？」スクルージは尋ねた。

「それは無理だ」とマリーは暴力の平原に向かって歩き始めながら答えた。

スクルージはペースを上げて尋ねた、「無限の意識は何でもできると思ったんだ」

「ネクタイが切れている場合ではありません。」

"理解できません。"

「エベネザー、人が裏切ったらどうする？」スクルージはすぐには答えられなかつたので、マリーは続けた。「個人にとって、無限の意識とのつながりを断つことは困難です。にもかかわらず、自分の行為の背後に無限の意識の力があると自分を欺きながら他人を傷つける者は、最終的には自分の精神をクレーターに非難することになります。再び彼は立ち止まり、「クレーターにいる人々はトランスマグリファイの中で最も苦しんでいます。」と考えを終えました。

「クレーター—噛みついた頭はどこから来たの？」

「もし無限の意識が精神破壊に陥った人々を直接助けることができたら、頭は決して存在しなかつたでしょう」とマリーは答えた。

「クレーターにいる者達だけが、自分自身の無限の意識との繋がりを断つのでしょうか？」

「スピリットブレイクって言うんですか？」

「はい、そう呼んでいるようですね」とスクルージは答えた。

「自ら命を絶つ人は、無限の意識とのつながりも断ちります。無限の意識の最も貴重な贈り物である命を拒否するのは顔に平手打ちだと思います。」

「しかし、彼らはクレーターにいる人々ほど苦しみはしないのですか？」スクルージは尋ねた。

「彼らは眠っていて、目が覚めて初めて苦しみと結びつくのです。」

「確かに、それを信じるには実際に見なければならないようですね。」

「それがトランスマグリファイのやり方だよ、エベネザー」

スクルージがエリア全体の注目を集めたとき、彼は見渡す限り騒々しい環境があることに気づきました。左側には燃え盛る木々が生い茂る暴力平原があったが、道路の向こう側では石を擦る音と金属の火花が光景を支配していた。骨を碎く騒音が猛烈な緊張感を生み出し、精霊たちが鉄の円盤の周りを延々と歩き回っていた。金属がフリントの上でこすられると、火花があらゆる方向に燃え上りました。しかし、どんな騒ぎであっても、勤労精神は壇の中心にある物体、つまり「強欲の黄金の冠」だけに集中していた。

マーリーは回転する車輪を指さして、「そこが私の貪欲な精神が変わった場所です」と言いました。

「その輪の周りをシャッフルしなければならないでしょうか？」スクルージは尋ねた。

「再びやり方を変えない限り、そうではありません。」そこでマーリーはスクルージにこう言った、「我々は情報を気にしていない」貪欲な人です。ノアが最終トランスマグリファイの深淵に転送されたことを確認する必要があります。ついで来い」マーリーはノアの魂が最初に送られていた怒りの穴へと足を速めた。

ジェイコブ・マーリーは兄よりずっと後に亡くなっていたが、ノアが窃盗の濡れ衣を着せられ、その後惨殺されたという問題を解決する前に、平原の不正の穴からの彼の変化が起こっていた。ノアの非難された無実の精神は、両方の行為によって引き起こされる痛みと怒りと闘っていました。

「ノアはアビスにいるというテントの言葉が正しかったことを願っています。」

「テントなら知っていると思うよ」とスクルージは言った。

「もちろんあなたの言うことは正しいですが、私たちはピットのそばを通るので、確認したいのです。」

「信頼するけど検証する？」

「それは必要性を明確に示しています。」

サイクルでの圧倒的な研削の咆哮と、暴力の平原から来る耳をつんざくような沈黙のコントラストが、スクルージの中に不気味な絶望を生み出した。燃える木の森からの静かな音さえも、困難の感覚をさらに高めました。

3つのピットのうち、ノアのピットが最初にロード上にありました。二人は、怒りの穴に最も近い熟考室のドアが開くのを眺めた。精霊が出てきました。精霊の次の一步は直接ピットに入り、そこから即座に視界から消えました。

「魂はどこへ行ったの？」スクルージは尋ねた。

「それはすでにアビスの中になります。」エベネザーの混乱を見て、マーリーはさらにこう付け加えた、「ピットは出入り口にすぎません。この仕事は熟考の間で行われます」とマーリーは空になった部屋を指差しながら言った。

彼らは瞑想の間が消えていくのを観察した。箱はそのまま消えてしまいました。並んでいた次の部屋はピット・オブ・アンガーの入り口に移動した。一瞬も無駄にすることなく、その部屋からの精神はピットに入り、アビスに到着すると視界から蒸発しました。

靈が隔離部屋から出て、不気味にアビスと呼ばれる領域に転送されるプロセスが継続的に繰り返されます。マーリーとスクルージがモグを通過する靈の流れを観察している間、ドアから靈が出てこないため、部屋の1つが行き詰まっているように見えました。怒りの穴ではすべての行動が停止し、部屋全体が上方に持ち上がり始め、その後浮き上がりました。

「どこへ行くの？」スクルージは尋ねた。

「その部屋の中の精霊は、ピットに到着する前にその奉仕の任務を完了していました。」

「それで、どこへ行くのですか？」スクルージはもう一度尋ねた。

「列の最後尾へ。」

「最初からやり直さなければならないというのは、不公平に思えます。」

「熟考室の目的は否定できません。タスクがなければ、Transmogrify 内のスピリットはアビスに入ることができません。例外は…」

「ジェイコブ、今は黙らないでください。」

「これはあなたにとってほとんど情報が多すぎますが、コスは直接承認に進みます。彼らはアビスで時間を過ごすことはありません。」

「はい、友よ、それは私にとって何の意味もありません」とスクルージは答えた。

「私の言葉では、クレーターのようなビジュアルをあなたに説明することはできません、エベネザー。」この時点でもマーリーはノアが平原にいないことに気づいた、と付け加えた。「テントは正しかった。アビスに向かって旅をする時間だ。」

「どれくらいかかりますか？」

「もしかしたら数か月かもしれない。」

ショックを受けたスクルージは質問を立てようとしたが、何も出てこなかつたので、マーリーが自分の混乱を理解してくれることを期待してただ見つめた。「心配しないでください、エベネザー。私たちが道路を移動するのにかかる時間の長さは、Transmogrifyの人口によって異なります。」

「人口は？」

「確かに、十字軍が終わって以来、Transmogrifyは縮小し続けています。」

「縮んでる？」

「ほとんどのモグにはスピリットが絶え間なく流入しており、おそらく地球の人口が拡大するにつれて少しだけ増加するでしょう。」

「では、なぜTransmogrify内でサイズに変化があったのでしょうか？」

「クレーターと物理的害の穴は、Transmogrifyの次元に不自然な影響を与えています。」

「ジェイコブ、それは何の説明にもなりません。」

「答えてください、エベネザー、戦争は戦争なしで生まれるよりも短期間でより多くの死者を生み出しますか？」

「論理的にはそうなるでしょう。」

「私の考えでは、エベネザー、戦争の理由は二つしかありません。1つは領土を拡大するため、2つは考え方を一致させるためです。」

「それでは、クレーターは戦士が行く場所ですか？」

「戦士は死後の世界を部屋で過ごすことが多い。しかし、それは彼らの動機次第です。クレーターは、無限の意識が他人を殺すことを望んでいると考えながら、他人を殺す人間が送り込まれる場所です。あの哀れなクレーターは、人間が靈的な無知によって害を及ぼすにつれて、ただ拡大したり縮小したりするだけだ。聖戦が起きるたびに、トランスマグリファイの規模が変化します」とマーリー氏は説明した。

「聖戦、長い間戦争はなかった。」

「しかし、私たちは魔女裁判を乗り越えたばかりです。その期間中に、多くの役人やオカマ運び屋がクレーターに追加されました。」

「では、聖戦だけではないのでしょうか？」

「もし教会がなかったら、一人の人が火傷を負っていたと思いますか？」マーリーは尋ねましたが、答えを待ちませんでした。「いいえ、エベネザー、靈が切断されたスピリのクレーターで時間を過ごす唯一の理由「それは、彼らが無限の意識の仕事をしていると思いながら他人に危害を加えたからです。」マーリーは返答を待つために立ち止まつたが、何も出てこなかつたので続けた、「そして、相反する情熱の誤りが、最終的に彼らの一部を破壊することになるでしょう。」マーリーは深呼吸してから、「それで、最終的により多くの害を及ぼすのは、被害者と加害者どちらでしょうか？」と締めくくった。

スクルージはマーリーが修辞的であることに気づき、何の返答も望んでいなかったので、ただ友人の後を追い続けました。二人が物理的危険の穴を通過したとき、マーリーはジェームズ・マクシーの姿をちらっと見た。殺人者は入り口から5番目の部屋に座っていた。熟考の部屋の中で、マクシーは黙ってピットに向けて準備をした。彼の表情には、地上の顔の険しい特徴が失われていました。それでもマーリーは犯人の特徴を認識していた。マーリーは胸に手を伸ばし、ファイヤートワラーを掴み、前方に持ってきて、「彼を戦列の最後尾に送るつもりだ」と宣言した。

「待ってください、ジェイコブ、残りはあと2人だけです。ティントと約束したのに...」

「マクシーはノアより先に変身を遂げるつもりはない。」

「しかし、ノアはすでにマクシーを上回っています。彼はすでにアビスにいるのではないか？」とスクルージが尋ねた。

「はい。」

「だから、放っておいてください、ジェイコブ。マクシーは最初に変身を達成するつもりはない。」

「そして、私は彼の悲惨な待ち時間に 30 年を追加することをとても楽しみにしていました」とマーリーはファイヤートワラーを鎖の間に戻しながら言いました。

「テントが止めてくれると思いますか？」

「いいえ、おそらく私は怒りの穴に送り返されたでしょう。」彼は少し立ち止まってから、「理性を持って話してくれてありがとう、エベネザー」と付け加えた。

スクルージは微笑み、マーリーを慰めようとして精霊の肩に手を通した。

二人が貪欲のサイクルを通過すると、スクルージはサイクルを歩く必要がなくなることをうれしく思いました。彼は、エンタングルメントが達成されたらどのモグになるだろうか、つまり、トランスマグリファイによる生きている訪問者の殲滅から逃れることができるかどうかを考えていました。サイクルを通過する過程で、スクルージは、精霊の一人が中央の黄金の冠から頭を向け、すぐに消えるのを眺めました。「あれを見ましたか？」

「何？」マーリーは尋ねた。

興奮したスクルージは、その円を指差しながら、「たった今、サイクルから人が亡くなったところだ」と言いました。

「彼らはもう人間ではないし、いなくなったわけでもない。彼らはただ、Abyss Of Final Transmogrify へと進んだのです。心配しないでください、エベネザー、彼らは大丈夫です。」

彼らが静かなピットを左側に通り過ぎ、サイクルが右側に向かって進んでいく間、スクルージは服に水しぶきがかかるのを感じた。暴力平原のすぐ向こうには、狭いながらも長く豪雨が降る地域がありました。湿気の源に近づくと、マーリーはスクルージに「闇の雨から離れなさい」と指示した。

「なぜ？」

「レインズが何のためにあるのか誰も知りませんが、その水はあなたを焼いてしまいます。」

「焼却する？ どうして雨が燃えるの？」

「分からぬよ、エベネザー。私が知っているのは、靈がそれを恐れているということだけです。噂によると、レインズはファイア・トワラーを暴力の平原から遠ざけるために使われているということだ。」

スクルージは服に落ちた液体を拭き取り、「私にはただの水のようだ」と言いました。

「もう触らないで！」

「ジェイコブ、あなたがこんなに生き生きとしているのを見たことがありません。」

「私が知っているのは、物は破壊するということだけだ。放っておいてください。」

彼らは左側の *Rains Of Darkness* を危害を加えることなく通過しました。二人は、新たな魂が貪欲の環に到着するのを眺めながら歩き続けた。6人の到着者が新しい現実に落ち着く一方で、ドラゴンの咆哮のような火花が道路を横切って燃え上りました。その攻撃にショックを受けたスクルージは、本能的に炎の中から飛び降りた。火傷を避けようとした彼の試みは、道路から滑り落ちただけだった。グリードのフレアに即座に飲み込まれたスクルージは、「ジェイコブ…」と叫びましたが、その必要性を表現する前に、彼は倒れました。

マーリーはスクルージの燃えるような服をつかみました。火の粉がスクルージではなくマーリーに入り、火の流れが二人を取り囲む中、倒れた人間は静止したままだった。マーリーが炎を自分の中に吸収すると、スクルージは冷たくなり始めました。マーリーは人間に近い力でスクルージをロードに引き戻し、そこで二人は倒れた。

スクルージは灼熱の暑さでほぼ麻痺しそうになりながらうめき声を上げた。二人にとって、火の粉の飛び散りからの回復は依然として困難だった。マーリーは炎の影響はそれほど受けなかったものの、立ち直ろうと転がり回った。息を吐きながら、スクルージは仰向けに横たわった。彼は動かずに横たわり、頭上の靈たちが幻影の回廊に沿って移動するのを眺めた。

魂がそれぞれ独自の使命を持ってトランスマグリファイに出入りする間、回廊を通る流れは一定でした。スクルージは上空を移動する人々を観察していたとき、誰も鎖に巻かれていないと突然気づいた。スクルージはこの現実を熟考し、上を指差しながら尋ねた、「どうしてあの靈魂は誰も彼らの行動の鎖に囚われていないのですか？」

「エリア外に出ると、鎖で精靈をトランスマグリファイに繋ぎ止めます。それらは決して必要ありませんモグの中で。」

「ああ、あの靈を見てみろ」スクルージは足のない靈を指さして言った。マーリーが自分に注意を向かないようスクルージに警告する前に、足のない靈は道路に横たわっている二人に焦点を向けた。

「もうやり遂げた」とマーリーは言った。

次の例では、精靈はスクルージの真上に位置しました。慌てて立ち上がり、靈は彼にこう尋ねた。「あなたは誰ですか、なぜ生きているのですか？」

スクルージはすぐに自分の名前を名乗ったが、2番目の質問には答えなかった。マーリーはスクルージの仲介者になろうとしたが、足のない靈はマーリーには何の関係もなかった。幽靈はスクルージに釘付けになった。「あなた方の種族が侵入しなければ、靈は独自の場所を持つことができないのでしょうか？」

「あなたに害が無いことを祈ります。私は友人のジェイコブの要請でここにきました」スクルージはマーリーを指差し、「テイントは私の入国を承認した。」と付け加えた。

「テイントは決してそのような承認をしません」とその精神は主張した。

「その通りですが、エベネザーは有罪判決を受けた弟のノアを救うためにここに来ました」とマーリーさんは説明した。

彼の視線がスクルージに集中すると、障害を負った精神は静まりました。彼はこう告白すると、怒りは懸念に変わった、「私も有罪判決を受けた無罪者です。難しい…」断罪された無実の精神が形成された危機を思い出し、人間の不法行為についての彼の考えは消え去った。両足を切断された痛みを考えると涙が浮かんだ。血の海の中で放置されて死ぬことの恐怖を再訪したこと、スクルージに対する靈の態度が軟化した。「断罪された無実を助けるためにここに来たのですか？」

「はい」とマーリーは答えた。

「それでは承認します。続けてもいいよ」 そう言って魂は廊下へと戻っていった。

「それは奇妙だった」とスクルージは言った。

「あなたは、Transmogrify から強制されなかつたのが幸運です。どの靈もあなたにそれを要求する可能性があるので、二度と顔を上げないでください」とマーリーは命じました。

「なぜその靈は体の一部が欠けているのですか？」

「精霊は、モグリファイド・スピリットになるために必要と思われる肉体を使用することが許可されています。」

「しかし、なぜ脚なしで行くことを選ぶ人がいるのですか？」スクルージは尋ねた。

「エベネザー、あなたは時々不可能な質問をします。」

「それで…？」

「本当に私がその質問の答えを知っていると思いますか？その理由はその精神の個人的なものなので、もちろんその根拠は分かりません。あなたの質問には答えられません——少なくとも私には答えられません。」マーリーは立ち止まり、「火の粉から回復したなら、続けましょう。」と指示した。

闇の雨を過ぎて十数歩も経たないうちに、マーリーは精霊の手足だけで構成された通路を指さした。「ダムを渡ろう。」

スクルージはもつれた通路を見つめ、切り離された霊たちの足と腕の相互作用を観察した。ある精霊の手が別の精霊の脚を掴むと、何千もの他の精霊が同じことをして、動きながらも安定した手足の道を形成した。

「私の判断がより適切です…」

「それを持ち込む理由はない。ただついて来い、エベネザー」

「しかし、道は——テントは言った……」

「機会があるたびに、私は切断されたスピリットのクレーターを迂回します。誰もがそう思います。だから、私に従ってください。」

「しかし、クレーターについてはよく聞いています。それを回避したくないんです。」

「信じてください、そうですよ。」

「とても残念です。」

「私たちはここで休暇を取っているわけではありません。さあ、エベネザー、さらなるコス・アクセプタンスが次々と新しいヘッドとともにリリースされる前に。」

スクルージは切り離された部分のダムの入り口に立ち、握り合う何千もの手を見つめた。たくさんの拳を握ったり離したりすることで、視覚的な指のダンスが生まれました。付属肢が常に移動する中、マーリーはダムの上に一步を踏み出しました。混乱した爪の

触手が彼の皮膚を掴んだが、それでも彼は無傷でいた。「ほら、彼らは無力だ」とマーリーはスクルージに断言した。

友人の信頼に慰められたスクルージはマーリーを追ってダムに向かった。スクルージにとって最初の一歩は妙にしっかりとていた。二歩目で手が伸びてきて、彼の足の肉を掴んだ。スクルージは骨の横にチクチクする感覚を感じたが、骸骨は彼の中を通り抜けた。一步ごとに新しい手が掴まれ、そしてスクルージを通り抜けました。彼はダムをほぼ半分渡ったところで、2本の手が彼の足の両側を同時に掴んだ。2本の爪がスクルージの足の真ん中でぶつかり、脛骨の周りで指をつなぎ、彼をその場所に閉じ込めた。「ジェイコブ、ジェイコブ、彼らは私を捕まえた！」

驚いたマーリーは片方の手を掴んだ。2つの骸骨は魅惑的なホールドでスクルージを取り囲んでいたので、精霊の骨はマーリーのこじ開ける圧力から守る必要がありませんでした。なぜなら、それらはスクルージの足首の周りで1つの固い骨を形成していたからです。二人がスクルージの自由を手に入れようと奮闘していると、別の手がスクルージのもう一方の足に伸び、同様にダムに閉じ込められた。風になびく木のようにはためきながら、スクルージは恐怖の叫び声を上げた。マーリーが身をよじったり、傾けたり、精霊の付属物を外そうとあらゆる努力をすると、スクルージは下に引っ張られ始めた。

ちょうど彼の膝がBの網目に消えたように、そのうち、アプルトが現れた。警告もなく、獣はスクルージを最も強く引っ張った手を細断した。その下降する引力の張力を解放すると、残りの手足が彼を掴んでいた手を緩めることができた。アプルトの顎がそれぞれの犯罪者の手をしっかりと締め付けると、スクルージに対する精霊の支配は無に帰した。人間を解放した後、アプルトはスクルージのズボンの裾を掴み、彼を道路に引き戻しました。

安全が確保されると、スクルージもマーリーも野獸に向かって「ありがとう」と言いました。

アプルトはただうなり声を上げた、「やった、やった、やった！」

「彼はあなたのことが好きではないと思います」とスクルージは言いました。

「彼が私たちのことを好きだとと思えません」とマーリーは答えた。

管理人が回収した四肢を預けるために切断された精霊のクレーターに向かって急いでいたとき、マーリーとスクルージはゆっくりと後を追った。彼らは、切断された部分のダム内で靈の付属物が何エーカーにもわたって通過しました。ほとんどの人は何かを掴もうと常に体を変えていました。幅が長さの5倍あるため、クレーターに向かって歩き続ける二人はダムを何時間も見つめることができました。

この道が次に何をもたらすか分からず、スクルージは意図的にマーリーの後を追うこととした。マーリーさんは彼の不安を察して、友人を安心させようとした。「私があなたを守ります、エベネザー」さらに、「覚えておいてください、内側にいる者は道路を通行する者に危害を加えることができないということです」と付け加えた。

「内側に——何の内側に？ ジェイコブ、アプルトが助けてくれなかつたら、今頃私は手足の指に埋もれていたでしょう。なぜ私をそんな危険にさらしたのですか？」

マーリーはただ肩をすくめて言った、「私はあなたのおかげでもっと良くなります、エベネザー」。彼は反応を待ったが何も反応がなかつたので、マーリーは話題を変えた。「もうすぐクレーターの頂点が見えてきます。」

「ジェイコブ、クレーターのようなあだ名を持つのに、なぜそのような場所に頂点があるのでしょうか？」

「エベネザー、これは重要な会話ではありません。」

"なぜだめですか？"

「それはすぐに明らかになるからです。ただ辛抱してください」とマーリーは保証しました。

「それでは、受け入れることは話すほど重要なのでしょうか？」

「受け入れることがこの場所のすべてです。それで、あなたは何を考えていますか？」マーリーは立ち止まり、返事を待った。

「地球上では、愛には物理的な性質はありませんが、あなたは受け入れることが物理的なものだと思います。そして受け入れは愛ですよね？」

「受け入れは、浄化された人間の経験と愛のエネルギーの両方を結び付けます。」

「それらのことはどうちらも、物質的な実体を少しも持っていないません。そこで私の疑問は、アクセプタンスがどのようにして何らかの物理的性質を持つことができるのでしょうか？」とスクルージは尋ねた。

「すでにご存じのとおり、Transmogrify にはあらゆるものを圧縮する重力があります。それは受容の愛のエネルギーにも当てはまります。」

「それで、Transmogrify の外では...」

「それは拡散し、その物理的特性はもはや検出できなくなります。しかし、すべての言葉や概念にはエネルギーが含まれています」とマーリー氏は言いました。

「エネルギーは目に見えず、触れることもできません。それは物理的なものではない」とスクルージは主張した。

「それでも、それは肉体的な仕事をします。それで、エベネザー、物理的ではないものが物理的にどのように機能するのでしょうか?」

スクルージは、地平線上に広がる白い輝きに向かって進みながら、沈黙の中で考えを巡らせた。突然彼は尋ねました、「ジェイコブ、受け入れが実際に固体になる場所はありますか?」

「エベネザー、私には無限の意識の名前を聞くことも理解する能力もありません。どうやってそれを知ることができますか?」彼はそのアイデアについてすぐに考え、「それは興味深い概念だ。愛の岩の上に座っているところを想像してみてください。どんなに頑固な人でも、そのような触れ合いで柔らかくなるのではないかと思います。」と付け加えた。

「それで世界の問題が解決すると思いますか?」

「イングランドの血塗られた法典の代わりに、血塗られた法典になるということですか?」

エベネザーはその考え方を見て笑った。「私たちの文化は暴力に根ざしているようです。」

「共感を伴わない同調の強制は、社会が個人に与える主な損害である。」

「では、愛のレンガは何も変わらないかもしないのですか?」スクルージは尋ねた。

「確かに、それに接触している人々にとってはそうなるだろう。しかし、社会秩序によって管理された道に沿ってのみ移動する暴徒にとって、残念なことに変化は、力強い人々が調整を求めたときにのみ起こります。」マーリーは少し立ち止まってから続けました。圧力をかけている個人によっては、変化が社会内の状況を悪化させる可能性があります。」

スクルージは地平線を指差し、「白い輝きがオレンジ色に変わってきた!」と叫びました。

「クソッ!」マーリーは叫び、スクルージの上に飛び乗った。二人が道路に倒れ込むと、シューという音がマーリーの上を通過した。暖かい空気が押し寄せる中、精霊の骨が

ぶつかり合うカチャカチャという音が頭上で聞こえました。手足が切断された部品のダムに落ちると、頭蓋骨が入り口に向かって押し進みました。その間ずっと、マーリーは噛みつき頭の群れからスクルージを守っていた。

風の動きが感じられなくなると、マーリーはスクルージが立つことを許可した。完全に垂直になる前に、スクルージは鼻を上に持ち上げ、空気を大量に吸い込み、それから尋ねました、「私が嗅ぐのはバラの香りですか？」

マール丫はスクルージを狂人のように見つめてから、「いいえ、コス・アクセプタンスにはいつも焼きたてのパンのかすかな匂いが漂っています。」と答えた。

「私が嗅いだのは食べ物ではありません、あれは花です」とスクルージは主張した。

「言っておきますが、あなたは愚かです。コス・アクセプタンスは私が経験した中で最高の香りを持っています。」

「はい、バラです。」

二人は顔を見合わせ、意見が合わないと鼻を鳴らしてから、その話題をやめた。「今ではクレーターの頂上だけでなく、もっと多くのものが見えるようになったと思う」とスクルージは頂点の虹色の液体の動きと羽ばたく翼を指して言った。マーリーはただペースを速めただけだ。

数時間後、なんの警告もなく、切断された魂のクレーターがスクルージの目の前に現れました。霧が晴れるように、クレーターの動きが見えるようになりました。マーリーはダムの時からクレーターの騒ぎを見守っていた。しかし、スクルージには既知の参考資料がなかったため、理解が可能になる前に、心が視覚に追いつくまで待たなければなりませんでした。

スクルージは、クレーターの中で闘う霊たちの激怒を見るずっと前に、クレーターの熱を感じた。クレーターを包む泡があらゆる霊が石英とロードストーンの壁を登るのを誇張する中、彼は立ち止まった。クレーターの封じ込め壁の突き抜けられない質感は、絶えず動いているという点で水に似ているように見えましたが、わずかに拡大されており、動的に動いているにもかかわらず、透明なままでした。

スクルージの視界がクレーターを含むきらめく膜に焦点を合わせていると、立ち上がったコスが覆いの鞘の側面全体にバーベルを吐き出した。液体がクレーターに滴り落ちると、スクルージは飛び退いた。

「クレーターの壁を突き抜けることができるのは、コスの受け入れだけです。」マーリーは立ち止まり、障壁に張り付いたバーベルの塊を指さし、「その匂いを嗅がなくて済んだことを幸せに思うべきだよ」と付け加えた。

「バラのような香りだと思った」とスクルージはコメントした。

「あなたはバーベルとコス受容を混同しています。」マリーは囲いの最上部付近に集められたコスのコレクションを指さし、「最上部にいるより成熟したコスから放たれたバーベルは心地よい匂いを放っているが、あの若いコスは香水というより糞に近いものの洗礼を私たちに与えてくれたばかりだ」と語った。

混乱したスクルージは、「なぜ彼らは何かを吐き出すのですか？」と尋ねました。

「エベネザー、クレーターの底まで見える？」

スクルージはクレーターの深さを覗き込みながら目を細めた。さまざまな活動の動きが、彼の溝に対する認識を遅らせた。彼の視界が彼の下の壁を登る何千もの靈魂を通り過ぎながら、彼はクレーターの中心の最も深い点に釘付けになりました。新しく到着した靈魂が炎の中に崩れ落ちるのが彼の視界を支配した。「あそこは地獄だ。」

「臭いバアベルがなければ、クレーター全体が炎の塊になってしまってしょう」とマリー氏は説明した。さらに、「一般に、火は靈に影響を与えないが、あそこでは」と炎を指差し、「傷つけるかもしれない」と付け加えた。

「なぜそう思いますか？」スクルージは尋ねた。

マリーは物思いに耽りながら、「早くここを通り過ぎなければいけない。見つめるのをやめて歩き続けろ」とだけ言った。

スクルージは速度を落とした。一步ごとに、新しい印象に夢中になり、足が止まってしまった。クレーターの溝の炎の中で、精霊たちが互いに通り過ぎようと奮闘し、それぞれが他の精霊の上を乗り越えた。クレーターの底を旋回する炎の潮は、バーベルの解放時にその火と吸い上げる動きを弱めただけでした。その瞬間、渦巻く炎は一時的に鎮まるからである。しかし、それはつかの間であった。靈たちがクレーターを覆う水晶とロードストーンの上を登り続けたとき、再び火花が劣化したバーベルのプールに火をつけたからだ。

新しく到着したスピリットが炎の湖を越えてクレーターの側面を登ると、彼らの経験はコスへの変身が起こる棚に向かって苦労するものになりました。クレーターの側面を登る旅は、それぞれの靈にとって恐怖と目覚めの両方を伴いましたが、目標は、彼ら自身が無限の意識であることを認識し、その考えを、無限の意識の出自の実際の計画と提携したいという願望に変えることでした。

クレーター内の精霊たちの混沌とした動きに襲われて、スクルージは集中力を失った。慣れない活動の混乱で彼は呆然として立ち往生した。マリーは別のことについて

たが、スクルージが歩みを止めたことに気づかなかった。友人の叫び声を聞くと、彼は身をよじったが、スクルージは再び道路でくしゃくしゃになっていた。彼のところに戻ると、彼は意図的に説明した、「エベネザー、あなたは私に近づかなければなりません！」

スクルージは膝をつきながら、「だったら、そんなに早く動くなよ」と答えた。

「私たちには旅すべき領域がたくさんあります、エベネザー。もしもあなたがクレーターが巨大だと思っているなら、そして実際にそうなのです」とマーリーは広大な場所の上で腕を振りながら言った。彼はニヤリと笑い、それから「あのモグは地球全体よりも大きいかもしれないよ」といたずらっぽく付け加えた。

「いいえ、そうではありません、ジェイコブ」とスクルージは言いました、ハル笑っている。

マーリーはスクルージの上腕に指を握り、素早くぐいと彼を立ち上がらせた。

「私が見ているこれは一体何なのでしょうか？」マーリーがたった今やけに遂げたばかりのクレーターの上で同じ腕の振りをしながら、スクルージは尋ねた。

マーリーはスクルージが虜になっていた真実を掴んだ。クレーターの混乱を眺めている彼を見て、エベネザーに古き良きクレーターを眺めさせない限り、友人を道路に沿って移動させることはできないと悟った。

スクルージは、マーリーが新たな一連の行動が展開されるたびに友人の顔に浮かぶ感情が変化するのを黙って観察した。友人たちの前で、彼らから数十フィートも離れていない霊が戦っていました。スクルージは、棚の上に位置を獲得しようとする精神の中にある不安に魅了されました。魂は、コスへの変身が起こる尾根に登るという任務を達成しようとしている他の何千もの人々と同じように苦労しました。

最後に、霊はリベットで留められた二人の監視者に背を向けて立ち、ゆっくりと腕を体に対して垂直に上げた。幽霊の腕が複数の翼に発達し、それぞれが黒い羽で覆われたとき、動きが止まりました。スクルージの口は、すでにぽっかりと開いた状態だったが、体に取り付けられた各翼が瞬きして開いたとき、大きく開いた。それぞれの目から一筋の光が流れ出ました。

精霊からコスへの変身は、目の前に立つ鳥のような生き物のくちばしから大量のバーベルが飛び出した瞬間に完了した。変身者は脂っこいバアベルを吐き続けた。放出されるたびに、コスはクレーターの中心に向かって高く上昇しました。やがて、翼の羽ばたきがその生物を、囲まれたクレーターの頂部に集まつたコスのコレクションへと運び始めた。

「ほら、ジェイコブ」スクルージは奇形のコスを指差しながら叫んだ。生き物は上向きの揚力を生み出すために戦いながら円を描くように回転した。獣の回転するねじれにより、スクルージは吐き気が胃を襲うのを防ぐために目を閉じました。

「あのコスを応援したほうがいいよ。」

"なぜ? "

「彼らはすでに一度のコスの解放を生き延びていますが、彼らの見た目によると、彼らの手足のすべてがクレーターに戻ったわけではありません。」

「あれは私を噛んだ頭の一つだと思いますか?」

「いいえ。頭蓋骨は炎の湖に戻されます。彼らの棚への登りは新たに始まりますが、十分な量の骨が再接続されてからです。あなたを攻撃した頭はまだ体の一部と結合しています。」

「それは不公平だ」とスクルージは不満を言った。

「エベネザー、ご存知の通り、クレーターは公平性を重視したものではありません。外部からの助けなしに精神が進化できるように作られたのです。」

「トランスマグリフィケーションのプロセスをほぼ終えた人たちにとって、他の逃げるコスによって最終的に引き裂かれるのは過度の負担のようです。」

マーリーさんは広大なクレーターの上で腕を振り、「そこには悪意を持って作られたものは何もない」と語った。

スクルージはまだもがき苦しんでいる生き物を指差しながらうめき声を上げ、「あのコスは大丈夫だろうか?」と尋ねた。

マーリー氏は、頂点に立つコネのあるコスのグループを指しながら、「最終的には、そのグループからのコスの受け入れが最も幸せなことになるだろう」と語った。

彼らは、何百もの黒い翼の生き物が、集まってきたコスの群衆の中に押し入っていくのを眺めました。動きのひらめきは二人を魅了しましたが、スクルージは負傷した方だけに焦点を当てていました。

障害のあるコスは慎重な注意を払いながら、羽と目の絡み合った塊に近づきました。不自由な者が上に押し上げるたびに、より強力なグループが下に押し込まれることで対抗されました。固まった精霊の網目が、まるで息をするかのように動いた。群衆の下で旋回しながら、新たに変身したコスは固執した。

「あのコスは疲れ果てて倒れてしまうだろう」とスクルージは心配した。

「ただ見てください」とマーリーは指示した。二人は、周囲に溶け込もうとするぎこちないダンスに倣ったが、マーリーだけが次に起こることに備えていた。スクルージの予言通り、コスは何の前触れもなく炎の湖に向かって後退し始めたからである。

"いいえ！"スクルージは叫んだ。「私たちは…しなければなりません。」しかし、次の言葉が叫ぶ前に、2人のコスが集団から離れ、降下する仲間のレベルまで急降下しました。落下がほぼ停止するまで減速すると、2匹は苦しむ生き物に羽根を密着させた。三人は一緒に、クレーターの頂点に蓄積されたコスの山に戻りました。

黒人、灰色人、白人が入り乱れて集団が渦巻く嵐に変わる中、新しいコスの群れへの流入はスクルージを魅了した。その間ずっと、壁を登るもがく精霊たちにバーベルが雨のように降り注いだ。「あなたをダムに閉じ込めた腕のうちの二本は、あの不自由なコスから来たものだと思います」とマーリーは笑いを隠そうとしながら言った。

そんな考えも頭をよぎりました。スクルージは微笑み返した。

彼らは一緒に、バーベルが登る精霊の上に飛び散るのを観察した。スクルージは、なぜ一部の靈が復活したように見えるのか不思議に思った液体で脈打っている人もいれば、意図的に体中に液体をこすりつける人もいます。それらの靈にとって、それは軟膏が登山者にエネルギーを与える強壮剤のように見えました。

「なぜバーベルに対してこれほど反対の反応があるのでしょうか？」

「それは液体の匂いと目的です。」

「目的は……コスが飛行し続けるのに役立つだけのようだ」とスクルージは言った。

「それによってクレーターの自給自足が保たれています。」

「それを行うのはロードストーンとクオーツだと思いました。」

「いいえ、それらはクレーターに電力を供給しており、登る精霊が火花を生成してその限られた領域を維持するときに、クレーターに電気が流れます。」マーリー氏は匂いの側面によじ登る人々を指差し、こう言った。「あの可哀想な靈たちは、愛のつながりを失っている。自分たちの罪について考えながら登ると、頭ではなく、それは簡単なことだが、自分の行動の責任を受け入れる。それが彼らの受け入れへの唯一の道である。彼らにはアウトリーチの任務に就く特権が与えられていないので、過去の行為は修復できる。すべての変容はその穴の中で起こる。」と彼は再びクレーターの上で腕を振りながら言った。

「そうですが、そのバーベルはまだ謎です」スクルージは目の前の土砂降りを指差しながら言った。「バーベルを好む精霊もいれば、嫌悪感を抱く精霊もいるのはなぜでしょうか?」

「すでに言いましたが、それは臭いです、エベネザー」

「バラのような香りがするのに、なぜそれを嫌う人がいるのでしょうか?」

「実は、新たに形成されたコスは、バラよりも実際の嘔吐物の匂いに近いバーベルを生み出します、エベネザー。」マーリーが続けたとき、スクルージは頭をかいただけだった。「頂点の頂上にコスがいるのが見えますか?」

スクルージは、渦巻く霊の群れに集中しようと緊張した。「一番上ですか?」

「はい、何が見えているか教えてください」とマーリーは指示しました。

スクルージは視覚的に明確にしようと努めながら、最終的に自信を持ってこう言いました。「そこには白い光があるだけです。」

「よく見てください、羽が見えますか?」

スクルージは虹色の流れを研究しました。「羽? いいえ、羽はありません。それでも、あの白い光はあらゆる色で構成されているように見えます。」

「それでもまだ白いままだよ」とマーリーは言った。

スクルージは友人に「何色にすべきですか?」と尋ねました。

「すべての色を組み合わせると、白ではなく、濁った灰色になります、エベネザー。」

「私はあなたの主張に従っていません。灰色を見るべきでしょうか?」

マーリーはゆっくりと説明した。「その虹色の魔法はその色ではなく、光にあります。しかし、クレーターを正気に保っているのはバーベルです。」

「バラのような香りのするもののことですか?」

マーリーは、激しく揺れる輝く輝きの塊を指さし、「バーベルは動的な物質だ」と説明した。スクルージは、マーリーが自分の言葉を強調するために腕を前後に振るのをただ見ていた、「黒い羽のコスは油っぽい恐ろしい液体を噴出するが、彼らが上昇して群れ

に圧縮され始める。彼らの色、羽、そしてバーベルはコスの受け入れに変わる。最終的には、トップにいる者たちは自分自身を吐き出すことになる。」

スクルージは当惑して首を振りながら目を大きく見開いた。「彼らは腹を立てるのですか？」彼は降り続くバーベルの雨を見つめながら尋ねた。

「そうですね、最終的には彼らのエッセンスを着実に滴らせたようなものになります。」マーリーは頂点を指して続けた。「それらのコスはすでにアクセプタンスに変身しています。すぐに彼らはクレーターの天井を溶かし、その後、彼らの多くがコス・アクセプタンスが収集される最終トランスモグリファイの深淵に飛ぶでしょう。」

「黒い羽の奴らも？」

「トップが突破されると全員が変換される。」

「それは頭が攻撃するときですか？」スクルージは尋ねた。

「はい、それは助けなしで生き残って変化しなければならないという残念な仕組みです。エベネザー、クレーターには意図的に害はありませんでしたが、ここはすべてのスピリットが受け入れられるわけではない唯一のモグです。一部は失われます。」

マーリーは立ち止まってスクルージの反応を観察し、クレーターの奥深くを指差しながら「エベネザー、見てください！あれはカトリーヌ・ド・メディシス女王ではないですか？」と叫びました。彼らの下で働いているのは、手と顔以外をすべて覆うフルレングスのガウンを着た、かなり家庭的な女性だった。上に突き上げられるたびに、彼女が生み出した火花が彼女のドレスに火をつけましたが、黒い羽のコスが放ったバーベルの新鮮な流れによって消えてしまいました。

「私は彼女のことを知りません。ジェイコブ、フランス人にはほとんど興味がありません。」

「私もだけど——あれが彼女だということはわかっている」とマーリーは叫び、「私が子供の頃に働いていた厩舎のオーナー、マシュー・ペピンに会ったことはある？」と尋ねた。

「私にはその栄誉は一度もなかった。」

「毎年 8 月 23 日になると、彼は彼女の汚い画像を掘り出して壁に貼り、一日中彼女の写真に馬糞を投げつけていました。」

「フランス人はマシューに興味を持っていたのだと思います。」

「彼はフランス人です」とマーリーは言った。

「それでは、彼がフランス王妃に対してあれほど敵対するというのは、ある意味極端ですね。」

「いいえ、そうではありません。彼はいつも聖バーソロミューの日の虐殺を追体験していました。そこで彼女は」と彼らの下で苦しんでいる女性を指さして言った、「プロテstantのユグノーの肅清中に彼の家族を殺害しました。イギリスとアメリカに逃げた家族だけが生き残りました。もしマシューに発言権があるとすれば、彼女がクレーターから解放されるまでには長い時間がかかるだろう——たとえ彼女が解放されたとしてもだ。」

「マシューズといえば、魔女発見將軍のマシュー・ホプキンスではないでしょうか？」スクルージはクレーター内で働いているもう一人の者を指差しながら尋ねた。

「そうですよ。英国自身の女性拷問者だ。」

「あれは確かに、嘘が世界の行動を支配していた時代だった」とスクルージは語った。

「アプルトがいつか頭を飲み込んでくれることを願っています。」

「そのような発言はあなたに害をもたらしますか、ジェイコブ？」スクルージは尋ねた。

「また悪意を願うということですか？」

「その考え方罰が与えられますか？」

「罰——それは不承認に対するとても人間的な反応だよ、エベネザー」マーリーは黙つてから言った、「もう十分見ましたか？ 今からシュートまで行ってもいいですか？」

「その準備ができているかはわかりませんが、この道を旅しましょう。」そう言って二人は再び危険な方向へ進んでいった。

**** ステーブセブン ****

危険がたくさんある

二人がシュートに向かって足を引きずりながら、マーリーは尋ねた。「なぜ私がそばを離れるたびに地面に倒れるか、知りたいですか？」

「もうそんなことはしないですよね？」

「必要な場合に限ります。」

スクルージは友人の言葉を考えた。彼はマーリーが正しい答えを与えてくれたことを知っていましたが、それでも満足していませんでした。目に見えない力によって地面に押し倒されるという考えが、彼をマーリーの調査から遠ざけました。「ジェイコブ、Transmogrifyについてもっと学ぶことが有益だとは思いません。」

「有害なものでもないでしょう。」

スクルージはマーリーの発言の中からからかいを見つけることを期待して、鋭い視線でマーリーの表情を観察した。マーリーはストイックかつ真面目であり続けた。「正直に言うと、エベネザー、私を信用しないなら、なぜここにいるのですか？」

「いいえ、ジェイコブ、それは私の注意ではありません。私の限界を常に知っているわけではないことを認めなければなりません。」

「自分の弱さをすべて思い出すのは難しい。私はただ、あなたに魅力的なものを見せたいだけなのです。」

「そしてそれは私に害を及ぼさないでしょうか？」

「少しでもありません。」

スクルージはマーリーの目を見つめながら、まだ欺瞞の兆候を探していましたが、すぐにそのような表現は曖昧で識別するのが難しいことに気づき、「これを知らないと私に害はありますか？」と尋ねました。

マーリーはスクルージの恐怖を理解するためにスクルージを研究しました。スクルージの顔のしかめっ面を観察しながら、彼はすぐにその恐怖を理解した。トランスマグリファイ内での滅亡はスクルージの存在を脅かしており、彼、マーリーは不注意でした。危険は存在していましたが、それは彼の危険ではなく、スクルージだけの危険でした。

スクルージの不安をより完全に認識したマーリーは、彼を守るために用心深くなろうと決心した。「私を信頼する理由はない。私は泥棒で、嘘つきで、臆病者でした。私の死を通してのみ、私は改善のためのこの恵みを与えられました。それでも、現時点でのあなたの真実は私のものではありません。なぜなら、あなたの真実はここに属していないものだからです。「私はあなたのリスクを理解する能力を怠っていました、エベネザー」マーリーは約束を組み立てながら立ち止まった。

「テイントは、それが私が Transmogrify に入社する理由の一部ではありえないと言った。」

「いいえ、テイントは、もしあなたが殺されたら、罰として即時変身を要求してもあなたを救うことはできないと言いました。でも、あなたが危害を受ける直前にお願いすれば、あなたは救われるはずです。」

スクルージにはそのような策略がうまくいくかどうか分かりませんでしたが、マーリーの声に感情を感じ、自信を失いました。「それではあなたの魅力を見せてください。」

「それは簡単です。」マーリーはクレーターを指さし、「壁に指を当ててください。ただし、1秒だけです。」と言いました。

スクルージはまだ用心深く壁に近づき、クレーター内の活動の嵐を見つめ、すぐに右手の人差し指の先を膜に押し当てた。自然と彼は笑い始めた。笑いがこみ上げてきたとき、マーリーはスクルージの腕を壁から引きはがし、「ちょっと言ったよ」と言いました。

スクルージは笑いながらうなり声を上げ、平静を取り戻そうと努めた。「この喜びはほんの1秒だけです。ジェイコブ、あなたは相変わらず気難しい守銭奴です。」

「さあ、自分が何をしたか見てみましょう」とマーリーはスクルージの指が残した跡を指さしながら言った。

立ち上がったスクルージは、膜内に複数の水平線が表示されているのを見て驚嘆した。彼は心の中でその数を数え、「7行すべて残したでしょうか?」と尋ねました。

「そして、それを埋めるのにも時間がかかるだろう。なぜクスクス笑っているのかはわかりませんが、自分が何をしたかわかりますか? 自分の描いた線の意味が分かりましたか?」

スクルージは質問を解決しようと笑いを抑えたが、最終的には「ノー」とだけ言った。

「クレーターが目で追えるよりも速く回転しているのがわかりますか?」

「目に見えないほど速い?」

マーリーが説明したように、スクルージはその概念に困惑した。「クレーターは非常に高速で回転するため、炎の湖内に吸引力が生じます。」マーリーはスクルージに話をさせるために一時停止した返信する必要はありません。返答がなかったとき、彼は続けた。「円運動はトランスマグリファイの重力を強めます。」

「なぜトランスマグリファイにはより強力な重力が必要なのでしょうか？」

「理由はすでに述べました。靈が再び感じる能力を得ることができるようにするためです。アビスでは、靈は強烈な肉体的感覚を経験します。」とマーリーは答えた。

「ジェイコブ、今感じられる？」

「何を感じますか？」

"何でも。"

マーリーはこの質問について考えた後、突然手を合わせてから、「確かにそう感じました。でも、違います。手のひらがぶつかる圧を感じる代わりに、手の骨がお互いを通り過ぎていくのを感じました。平手打ちというよりは、何かをブラシで擦っているような感じです。」と言いました。

「では、何かを感じるにはもっと重力が必要なのでしょうか？」

「私もそうですし、他の精靈もそうだと思いません。」

「重力はどこでも同じだと思っていた」とスクルージは語った。

「私の知る限りでは、重力は単なる圧力です。しかし、これを尋ねさせてください。原子がなかつたら、重力は存在しますか？つまり、物体は落下します。物体が存在しなかつたとしても、重力は存在しますか？」

「それは私の学校教育を少し超えています、ジェイコブ。しかし、この問題は鶏と卵のパラドックスと本質的に似ているようです。」

「はい、確かに矛盾しています。」

スクルージが「何がクレーターを回転させているの？」と尋ねるまで、二人は沈黙を続けた。

マーリーはクレーターの頂点に目を向け、コスを指差してこう言った。

スクルージはクレーターの頂上にある巨大な形状を研究しましたが、バーベルが嘔吐している以外の動きは検出できませんでした。「回転していないように見えます。」

「はい、わかっています。靈が道を旅するとき、彼らは回転を見ることができませんでした。幽靈の回廊が作成されてからすべてが変わりました。その視点からは」とマーリ

一は多くの旅霊がいる回廊を指さし、「人は回転する頂点を見ずにはいられません。コス受け入れは輝く色で渦を巻いています。」と説明しました。

「回廊が作られたとおっしゃいましたが、回廊を『作った』のは誰ですか？」

「もちろん、精霊はそうしました。」マーリーは立ち止まり、答えを明確にした。「実は、道路の使用をやめただけなのです。」

「なぜそんなことをするのですか？」

「アプルトには、常にクレーターから靈を引きずり出さなければならぬことから休息が必要だったということです。」マーリーは意地悪な笑みを浮かべて、こう言った。「個人的には、あれはもっと利己的だったと思う。回廊の前には、新参者がクレーターに入るときにシュートから突き落とされるという経験は誰しもあった。」

「では、無限の意識は靈魂を変化させただけなのでしょうか？」

「私たちは死んでも思慮のない生き物にはなりません。無限の意識により、私たちは自由意志で状況をコントロールできるようになります。」

「なぜ無限意識はシュートを再設計しないのでしょうか？」

「それは人間の挑戦には価値があるからだと思います。無限の意識には人の行動がどうなるかは分かりませんし、その生活の質はかけがえのないものです。」

「それは、私がトランスマグリファイで滅ぼされるのか、それともロンドンに戻されるのか、無限の意識には分からぬということだ」とスクルージは言った。

「あらゆる可能性を知っていますが、実際の出来事は知りません。」

「つまり、それは過去と現在だけを知っていて、未来は知らないということですか？」

「未来は簡単に見えますが、それが起こる前に固めることは不可能です」とマーリーは答えました。

スクルージは数年前からの自分の心変わりを思い出した。そのおかげで、彼は自分の墓石から日付を消去するのに必要な時間を得ることができた。彼はマーリーの言葉が真実であると感じながらも、「人は未来を経験せずにどうやって未来を見ることができるだろうか？」と声に出して疑問に思った。

マーリーは立ち止まると、友人に振り向くように指示した。

この命令でスクルージは前進を止めたが、命令には従わずマーリーを見つめただけだった。「見せてあげましょう。」ゆっくりと、スクルージは彼らが来た方向を向いた。「さあ、前に歩いてください。」すぐに、スクルージは道に沿って戻り始めました。「いいえ、それは後ろ向きです。後ろを向きながら前に歩きます。」

スクルージはマーリーの要求を追求しながら、「つまずいてしまう」と叫びました。

「その通りですが、あなたは、ほとんどの人にとって好まれる日常生活の方法を旅しているのです。彼らは困難を抱えながら、常に後ろを向きながら前に歩きます。」

「そして未来を予測する？」

「さあ、振り返ってください、エベネザー」スクルージは指示どおりに行動し、マーリーは続けた。「立ち止まって、下を見て、目を閉じてください。」スクルージが深呼吸を始めるとき、マーリーは「よし、呼吸ごとにリラックスしろ」と言いました。マーリーが指導を再開する間、スクルージは呼吸に集中した。「次に、将来について疑問があるテーマについて考えてみましょう。」

「私は自分の死について疑問に思っています。」

「それがほとんどの人にとっての最大の問題です。呼吸を続けてください。呼吸するたびに、未来を知りたいという欲求の本質を感じてください。」

「欲望の本質？」

「考えるのをやめて、エベネザー、感じ始めなさい。」二人が道路の真ん中で黙って立っていると、マーリーは静かに見守った。「準備ができたら、指示されるまで目を閉じたまま、頭を上げてください」「地平線に向かって」スクルージは指示どおりにした。「さあ、ゆっくり目を開けて、エベネザー、何が見えるか教えてください。」

「ファニー？」さらにスクルージは、「彼女は健康そうに見えて、私を手招きしている」と付け加えた。次の瞬間、彼は「彼女は衰弱しつつある」と叫びました。

「慰められましたか？」

「彼女を追っていきたいです。」

「あなたの将来は安心ですか？」

「どうしてそうなるの？ 分かりません。」

「エベネザー、あなたのビジョンは、最も可能性の高い未来像です。すべての出来事は本質的に潜在的なものにすぎません。なぜなら、未来のビジョンは、それが見られているように経験することは決してできないからです。むしろ、それはただ現在になるのです」マーリーはためらったが、「ほとんどの場合、未来は維持された習慣に過ぎない。」と締めくくった。

「予期せぬことが起こったらどうなるのか？」

マーリーは自分の知識を振り返るために立ち止まることなく、「予測できないことは何も起こりません」と言いました。

「ジェイコブ、それは嘘のようだ。」

「予言に関して言えば、私たちはパラドックスの中にいます。つまり、すべての可能性が最終的にはその瞬間に崩壊する、解決不可能なパズルです。」マーリーはスクルージの目の奥を見つめてから続けた。「あらゆる状況は出来事の前に存在しますが、すべてにとって唯一変わらないのは変化です。最終的に未来になるオプションは最も調整が少なくなります。というのは、ほとんどの場合、それはすでにたどっている道だからです。そのため、過去と未来を現在に固定化するという要件だけが必要です。」

「つまり、すべては…それまでは達成可能…ではないのですか？」

「そして、可能性と現実が衝突するという矛盾により、この二つが混ざることで、すべての人に自分の運命を創造する能力が与えられるのです。」

スクルージはマーリーの混乱を招く概念について考えましたが、それに疑問を抱くではなく、質問を切り替えました。「もし未来への旅行が不可能なら、私がノアに対するあなたの犯罪を知り、あなたが私をロンドンに連れ戻したとき、何が起こったのでしょうか？」

「まだ来ないクリスマスの幽霊があなたを殺しそうになった。」

「いいえ、そうではありませんでした。私は救われました。」

マーリーは驚きで目を見開き、口ごもりながら説明を続けた。「私は——気づいていませんでした。」

「あなたは何も気づいていませんでした。それはなぜでしたか？」

「地平線上の未来を見るために頭を上げた方法を知っていますか？」

「もちろんそう思います。私たちはそれをやっただけです。」

「ロンドンでも同じことをしましたが、地平線を見る代わりにそこに飛びついたのです。」マーリーは理解を得るために立ち止まり、続けた。「ある意味、私たちは未来へと伸びていったが、私たちが行き着いた場所が、その瞬間の最終的な運命であるはずがない。未来は結晶化する前に常に現在に移行する必要がある。」

「混乱するよ」スクルージは独り言のようにささやいた。

「真実はよくあることだよ」マーリーはささやき返した。

彼らが幻の道を進んでいると、遠くで轟音が聞こえてきました。それは一歩ごとに激化し、ついには地球上で最も高い滝の音よりも耳をつんざくような音になりました。マーリーは叫びながらスクルージに「君をシートを越えさせる方法をずっと考えていたんだ」と語った。

「それで、あなたの解決策は？」スクルージは叫んだ。

マーリーはまるでその質問を聞いていないかのように振る舞ったが、代わりにスクルージに「我々はシートに追い返されるためにここまで来たわけではない」と断言した。

「では、ジェイコブ、あなたの頭の中で考えられる結果はどれくらい考えられていますか？」

「多すぎる」

爆発音はさらにエスカレートした。彼らは、すべての精霊がクレーターの危険に対して与えるのと同じ敬意を持って、一緒にシートに近づきました。マーリーとスクルージが耳をつんざくような突風に近づいたとき、二人の友人はクレーターの深部に新たな精霊が打ち上げられるのを眺めた。2番目の精霊が最初の精霊に続いて炎の湖に落ちました。友人たちがシートの端に近づいたとき、3番目の精霊も底で他の精霊と合流し、スクルージと衝突しそうになった。

彼らは、3人の精霊が新しい環境の中で奮闘するのを眺めました。まるで炎が痛むかのようにのたうち回り、まるで溺れれば悲惨さを終わらせられるかのようにバーベルを飲みながら、三人はやがて炎の表面の下に滑り込んだ。彼らが消滅すると、より確立された精神が彼らに取って代わりました。全員が火の中からの自由を求めて競っていた。

Cross Acceptance の次のリリースまでにそれを達成できる人は誰もいないでしょう。

スクルージはただ首を横に振りながら「どうやってこの爆発を乗り越えるつもりだ？」と尋ねた。スクルージは何も考えずに風に手を当てた。咆哮への彼の突っ込みは彼を回転させ、そして今や非常に混乱した彼を道路に投げ飛ばした。

「エベネザー！」マーリーがスクルージに害はなかつたと断言した後、叱責が続いた。
「エベネザー、あなたが危険に飛び込もうとしている場合、どうすればあなたを守れるでしょうか？」

「考えてませんでした。」

マーリーは失望して首を横に振りながら続けた。「頭を肩に戻してください。」

「痛いのは頭ではなく、手首だ」と彼は手首を振りながら言った。

「この溝を乗り越えさせないといけないから、難しくするのはやめてください。」

「ジェイコブ、あなたは多大な危害を加えたのに、私を難しいと言うのですか？」

マーリーはイライラを黙らせてから、「エベネザー、どうやってシュートを通り抜けるの？」と尋ねた。

「あなたの計画では？」「うまくいかないとは思いますが、これより良い方法は思いつきません。それでは試してみましょう。」

「何を試してみますか？」

「あなたはシュートを飛び越えるつもりです。」

「いいえ、違います！」

「たった4フィートです、私が手伝います。」

「最後の3フィートジャンプしてもらえますか？」

「あなたの歩幅はそれより長いです、エベネザー」マーリーはためらった後、「できるだけ遠くまでジャンプするのを見せてください」と指示した。

「その力を越えて？」彼はシュートを指差しながら言った。

「いいえ、いいえ、いいえ！ シュートから離れて、それからあなたが何ができるかを見せてください。シュートに飛び込まないでください。」

「実際のところ、あなたが私に何を言ったとしても、私はシュートに飛び込むつもりはありませんでした。」

「まあ、分かった、少なくともそれはわかった。それでは、さあ、どこまでジャンプできるか見せてください。」

警告もなく、スクルージは体を前に突き出しました。「うーん、二足ですね。」マーリーは首を横に振りながら「それでどうするの？」と修辞的に尋ねた。

「ジェイコブ、なぜ今のことばかり考えているのですか？」

「エベネザー、私はそれ以来このことを心配していました...」マーリーの声は考え込むにつれて消えていった。沈黙が彼らを襲ったが、マーリーが突然両腕を真っすぐに突き出し、「分かった！ グレートコートを渡してくれ、エベネザー」と叫んだ。

スクルージがコートを脱ぐと、すぐに暑さから解放され、「ああ、これは数日前に捨てるべきだった」と思った。

「何日も前ですか？」マーリー氏は繰り返した後、「我々は1時間も前にTransmogrifyに入ったばかりです」と言いました。

「また詐欺師だな、ジェイコブ。」

その非難に驚いたジェイコブは説明した、「ああ、時間だ。まだ一秒ごとの存在を経験していると考えて、私は失敗し続けている。ここでは、時計はただの動きに置き換えられている。トランスマグリファイは、時計が音を立て続けるというよりも、経験から経験への継続のようなものである。」

「このすべてが私を無防備にします、ジェイコブ、そしてあなたは私の限界を忘れ続けています。」

「私はあなたのために生き残ることを誓いました。もしそうなったら、エベネザー、私は慰めながらあなたを救うために無に消えます。」

スクルージはマーリーにグレートコートを手渡し、宣誓を確認した。「私はあなたの保証を受け入れます、そしてそれが必要とされないことを願っています。」

マーリーはスクルージのコートをつかみましたが、コートは彼の手をすり抜け、ロードに落ちました。「片方の腕を私の手首に巻き付けて、自然に掴めるようにする必要があると思います。」

スクルージは指示どおりに行動し、コートはマーリーを通過し始めましたが、結び目が骨に接触したとき、重力を止めるのに十分な物質がそれらの間で共有されました。

「心配しないでください、エベネザー」そう言って、スクルージが下に倒れると同時に、マーリーは真っ直ぐ上に飛んだ。次の瞬間、マーリーはシュートの反対側に立った。スクルージが立ち上がるとき、マーリーは「コートを投げるつもりだけど、手首に縛つたままにしておきます。掴んでください。そうすれば私があなたを引っ張って渡します。」と指示した。

スクルージがその考えを拒否する前に、マーリーはコートを渓谷の上に投げましたが、それはスクルージに向かって飛んで戻ってきました。マーリーと同じように試してみてください。グレートコートだけでは決してシュートを妨害することはできませんでした。「何をしましようか？」スクルージは叫んだ。

マーリーは説明もせずに胸に手を入れ、肋骨を2本引き抜きました。身体の一部を失ったプレッシャーを和らげるために前かがみになったとき、マーリーはその骨をグレートコートの裾に取り付けました。激しい風にコートを投げても、マーリーへの反発は止まらなかった。代わりに、それはファンタムから悲鳴を引き起こすほどの力で襲われました。マーリーは平手打ちの痛みにもめげず、最終的にスクルージがカバーをキャッチするまで挑戦し続けた。

コートに吹き付けた風の爆発により、マーリーはシュートの端まで飛ばされた。道路にかかるとをすりつけながら、彼は直立状態を保つのに苦労した。位置が移動し続けると、スクルージはコートを引っ張りました。その力がマーリーを上に持ち上げた。道路の警備を抜け出して、マーリーは「エベネザー、手放さないで」と叫び、さらに「引っ張るのはやめて」と付け加えた。

スクルージはプレッシャーを和らげた。マーリーはシュートの力に抵抗したが、自分自身を道路に押し戻す力はほとんどなかった。暴風雨に耐えながら、スクルージは「鞭で打ち倒してやる」と叫びました。

マーリーが反応する前に、スクルージは腕を上げ、力全体を下に引っ張りました。ドスンとマーリーは道路に飛び出した。立ち直ると、彼はこう叫んだ。「エベネザー、君を引っ張って渡らなければならないのは私だ。逆ではない。」

二人は吹き荒れる暴力に耐え、最後の力を振り絞った。マーリーは何の警告もなく、スクルージをシュートの途中まで引きずり込んだ。空中にいる間、スクルージはマーリーの努力を撤回した。マーリーが道路の自分側に後退すると、逆転した勢いでマーリーはスクルージのコートごとクレーターに突っ込んだ。友人の叫び声が炎の湖にまで届くのを聞いて、スクルージは仲間の重力を失いました。道路に転がり落ちた彼は、無力で横たわっていた。

風が吹いてスクルージは開口部に向かって吹き飛ばされた。彼は丸まってボールになり、クレーターの壁に叩きつけられた。彼の背後にある循環バリアの力が推進する彼の体を峡谷の口に向けて導きました。突風に囲まれたスクルージは地面から浮き上がり、シ

ュートに向かって推進されました。本能的に彼は何か固いものを掴みました。指が道路の表面を滑るたびに、彼は身を守るのに苦労した。凶暴な穴に飛び込むかもしれないという脅威がスクルージの恐怖を高めた。彼は壁と道路がクレーターの入り口に接する隅に指を突き刺した。

強烈な集中力でスクルージは指、次に手、そして両手をコントロールできるようになつた。暴風のため、スクルージは水平姿勢でシュートを横切つて揺れ続けたため、道路に戻る歩みは遅くなつた。絶え間なく続く突風は、靈に対して強力ではあるが、それだけではスクルージの体重を取り除くことはできなかつた。それでも彼はグリップを維持するのに苦労した。風よりも自分の汗の方が心配だつた。潤滑剤のビーズが彼の掴みを緩めるのを感じたとき、彼の呼吸は苦しくなり始めた。彼の体のあらゆる筋肉が状況を維持するために働いた。しかし、滑りは制御できませんでした。最初に秒針が崩れ、次に——アプルトがしがみついた片方の手首を掴んだ。

スクルージは手を囲む歯だけを見て遠吠えした。アプルトは人間のパニックにも動じず、さらに強く噛みつき、肉を碎いた。血が獣の顎を伝い、新たに到着した精靈がスクルージを突き刺した。その衝撃で、スクルージはその生物の手からほとんど引き裂かれそうになつた。血飛沫が続くにつれ、アプルトの噛みつきは激化した。そして、2番目の靈がシュートを突き抜けたとき、アプルトはスクルージを道路の安全な場所に引き戻しました。

アプルトがクレーターに飛び込む中、スクルージは血の流れをコントロールしようと手首を掴み、うめき声を上げた。1秒か1年だったかもしれないが、やがてアプルトがマーリーをクレーターから引きずり出す音が聞こえた。炎の湖の吸引力から上向きに突き上げられるたびに、マーリーは回転する囲いの中に作られた余分な重量を失いました。アプルトはマーリーを道路に戻しながら二人に怒鳴りつけた。

スクルージとはシュートの反対側に立っていると、マーリーから恐ろしい匂いが漂い始めた。スクルージがバランスを取り戻すと、マーリーはアプルトに隙間を越えてスクルージを助けるように頼みました。アプルトはにやにや笑いながら、そのまま逃げていったようだつた。マーリーは彼の後を叫びました、「この惨めな野郎！ 戻ってきて助けて！」

「あなたはとても臭いです、ジェイコブ、その臭いは何ですか？」

「それはバーベルだし、重要ではない」

「あなたは死んだら嗅覚を失ったに違いありません。」

マーリーは叫びながら、声が通るほどの大聲で「どうやって伝えますか、エベネザー？」と叫びました。彼は一言一句足を踏み鳴らしながら、こう付け加えた。「あの四本足の獣が、私たちを助けられなかつたのは、——理由がない——なぜだ！」

「理由は必ずある」数フィート上空で声が響いた。

二人は上を向いて、廊下と道路の間を飛び交う懐かしい精霊を眺めた。足のないこの精霊は、マーリーやスクルージよりも機敏に動く優雅さを持っていた。「ここで何が起こっているのですか？」幽霊は尋ねました。

「エベネザーはシュートを跳ぶには年をとりすぎている。」

「ジェイコブ、私は死ぬよりは『老い』ていたほうがマシだ」とスクルージは反論した。

「彼をその上に持ち上げることはできないでしょうか？」霊は尋ねた。

「その考えは意味がありません」とマーリー氏は言う。

浮遊霊は微笑み、そして助けを申し出た。「彼をシュートを越えさせることができると思う。」

「本当に、足がないあなたに彼を持ち上げることができますか？」

「私がそれを言いましたか？」

マーリーは立ち止まり、「どんな助けでも歓迎します」と申し訳なさそうに言った。

「バリアを作るには回廊の仲間が必要だ。」それとともに、魂は道路の上にある実体の流れの中に戻っていきました。

障害を負った霊が十数人の仲間を連れて戻ってくるまで、ほんの一瞬しか経過しなかつた。スクルージは頭上のパレードが視界を占めるのを眺めながら、全員がシュートから安全な距離を保って浮かんでいた。合意が得られないまま、足のない精霊が指示を出し始めた。「背の高い精霊たちを橋の上に集めたい。背の低い精霊たちが道の錨を作るだろう。」

「あなたはシュートの上にそびえる精霊の橋を架けるつもりですか？」マーリーは尋ねた。

「いいえ、それは不安定すぎます。そのような建造物を倒すには、たった一人の弱い精神が必要です。」

「それで、『橋』ってどういう意味ですか？」スクルージは尋ねた。

「私たちの橋は、シュート自身の力を利用してそれ自体を強化する予定です。」

「魔法みたいですね。」

「私が説明するよりも、見ていただこうがいいですよ」と精霊は、他の者たちに指示を向けながら答えた。「仲間のハートチェーンを掴んで握力を維持しましょう。」幽霊の集まりがシュートの両側に並ぶ中、障害のある幽霊が続いた。「キャサリン、あなたは道路のアンカーになるには背が高すぎます。コーラ、あなたがキャサリンをアンカーします。」

キャサリンは非常に背が高く、シュート軍に向かって横向きに横たわっていた。上半身だけが突風を感じている中、第二の精霊が彼女の隣に移動した。同じく横向きに横たわった靈はキャサリンの方を向いていました。彼女はそのハートの鎖を掴み、それがリンを生み出したケド構造。わずか1フィートずれて、靈の胸がキャサリンの頭の隣に強く押し付けられました。

シュートの両側から、精霊たちが接続構造を構築し始めました。それぞれの新しい精霊は、以前にリンクされていた幽霊の背中を這い上がっていました。シュートの爆発に対して45度の角度で対峙しても、爆発力を止めることはできませんでした。橋の両側が近づくにつれて、最も露出した靈が風になびきました。彼らがシュートから生き残った唯一のこととは、別の心臓の鎖に掴まれたグリップだけでした。最後の精神が両者を結びつけたとき、すべては変わりました。即座にシュートの力が構造物を強く押し、アーチを強化しました。

スクルージの隣に浮かんだ障害者の靈は、「急いで、プラットホームの後ろに移動してください」と指示しました。

スクルージはシュートの端まで歩いていき、ぽっかりと空いた穴を見下ろし、恐怖のため息をつき、それから非常に冷静にこう言いました。「まだそこまでジャンプできないよ。」

ショックを受けたリーダーの魂は微笑んで、彼らのニーズを再評価しました。少し間を置いてから、残された靈たちに「ファーガス、ベス、ポール、私たちはまだあなたの助けが必要です。」と簡潔に告げた。

「私もお手伝いできます」とマーリーさんは言いました。

「ジェイコブ、あなたはシュートの両側を繋ぐ台を作ることができます。橋の後ろの所定の位置に浮かんでください。横向きに寝て、シュートの両側を掴んでください。私たちがあなたを所定の位置に固定します。」

「エベネザーは肉体だ。彼は私を通り抜けようとしている。」

「だから彼はここにはいないのよ」と足のない靈が不平を言った。

「私たちはすでにそれを経験しています。私たちには、私だけではなく、より充実したプラットフォームが必要です」とマーリー氏は不満を述べた。

「それはわかっています。ファーガスとバスがあなたを押さえつけるでしょう。ポールはあなたの補強された影武者になってくれるでしょう。」

計画が伝えられると、精霊たちは所定の位置に移動した。マーリーはシュートを越えられるほど背が高かったが、ポールはそうではなかった。彼が執着を保とうとして震えていると、障害を持った魂がそのギャップを埋めるために入り込んできた。すべての幽霊が建物内に住み着いたので、スクルージは膝をつきました。スクルージが地層の上を這い始めたとき、精霊の柔らかなでこぼこが足を滑らせた。

「落ちないでください」と足のない靈に命じました。

前に進むたびに、スクルージは彼を支えているふにやふにやした精霊の中に沈んでいきました。絶えず動くことだけが彼を幽霊の上に保っていた。彼が横断を完了すると、構造全体がシュートの爆発力に屈した。

幽霊が四方八方に飛び散る中、足のない靈はクレーターに投げ込まれた。恐怖のすすり泣く音が、消えたヘルパーの映像を追った。マーリーは何も考えずに最後のファイヤートワラーをつかみ、障害のある精神に向かって両方を発射しました。一人が幽霊を逃したとき、もう一人のファイヤートワラーが幽霊に火をつけました。スクルージは恐怖のあまり叫び声を上げた。マーリーは考え抜いて、ファイア・トワラーを強く引っ張った。魂は基本的に無傷でロードに引き戻されました。

グループ全体がそれぞれの道を歩み始めたとき、お互いに感謝したが、マーリーほど感謝した人はいなかった。「あなたの勇気は私を恥じます。あなたの名前を知っていただけですか？」

「いいえ、忘れることはできないでしょう」と障害者の幽霊は答えました。

「とにかく、ほとんど何も覚えていないのです。では、なぜ名前を忘れることが問題になるのでしょうか？」マーリーは尋ねた。

「私の名前には自由の力が宿っています。」そう言ってマーリーとスクルージ以外は回廊に戻った。

「私は自由が好きだ」とマーリーさんはその精神に倣って叫んだ。

「誰もが自由を好むのです、ジェイコブ」とスクルージは言いました。それから彼は尋ねました、「なぜその靈が私たちを助けたと思いますか？」

「私の推測では、Transmogrify 内を支援することが彼のアウトリーチの任務だからです。」マリーは深呼吸をしてから言った、「一部の精靈は決して地球に戻らない。彼らは受け入れられるまでモグと回廊で働くだけだ。」

「私たちが戻ってきたら、彼はシートを越えて私たちを助けてくれると思いますか？」

「クレーターを通って帰るなんて誰が言った？」

「では、この道では戻らないのですか？」

マリーは狂ったように笑いながら「ファイヤートワラーに助けてもらおう」と言いました。

「なぜ今回は使わなかったのですか？」

「私の心の鎖には、そのために十分な量がありませんでした。」マリーは微笑み、それから間髪入れずに「血が滴っているよ、エベネザー！」と叫びました。

「これは…」スクルージはマリーに手首を見せながら言った。「アプルトは私を救うために私を噛まなければなりませんでした。」

「トランスマグリファイの中だけで…」マリーは冷笑した。

スクルージは首を前後に振りながら「アプルトが私をシートから引きずり下ろしたのは、まさに握力を失いかけたときだった」と説明した。血まみれの手を見つめながら、「実際は痛くないです」と続けた。

「それでも、それはあなたの死につながる可能性があります。すぐに次のコスドレンチングの場所に到達する必要があります。」そう言って、マリーはゆっくりとした走りに向けて足取りを加速し始めた。

スクルージはついて行くのに苦労していると、「ジェイコブ、なぜこれが必要なの？ 私の手首は気にならないよ。」と叫びました。

「あなたの体の中には溶ける溶液があるので、できれば逃げてください。」

老人と精靈がドレッシングに向かって急いでいる間、クレーターの活動は激動し続けました。機械。黒と虹色のバーベルの両方が、コスの下の休むことのない多くの精靈に絶

えず雨を降らせました。数分間競争した後、スクルージは立ち止まり、身をかがめ、「ジェイコブ、息を止めなければいけない」と叫びました。

ジェイコブが彼のペースを遮ると、心配する言葉が飛び出した。「だめだよ、エベネザー！普通の痛みを押しのけて動かなければいけないんだよ。」

「痛いのは腕ではなく肺です。」

「手首を見てみろ！」

スクルージが指示どおりに行動すると、ショックで口が大きく広がった。彼の側には、認識できない付属物が現れました。出血はなくなり、傷口は黒い泡で覆わっていました。「ああ、この汚さは何ですか？」

「あなたを救う方法はただ一つ、逃げることです。」

恐怖を感じたスクルージは、足が手首に必要な栄養を与えてくれることを期待して、肺の苦しみの安らぎを放棄した。彼は自分の状況を理解していなかったので、自分でも気づいていないエネルギーの推進力でマーリーを追いかけました。泡立つ黒い泡が彼の腕を襲った。肉体が侵食されたため、スクルージは痛みに包まれて地面に倒れ込んだ。右脇腹全体をつかんで、彼は圧力が苦痛を和らげることができると信じて道路に転がりました。そうではありませんでした。

「止まらないで！もうすぐドレンチングの現場だ」マーリーは倒れた友人を引っ張りながら叫んだ。「精霊たちが集まっている。エベネザー、次のコスのリリースを逃したら死ぬぞ！どうしても這いつくばってよ」と彼は集まった幽霊たちを指差して言った。

スクルージの人間は弱さを示しており、激しく動いてもほんの数インチしか移動できませんでした。震えながら、スクルージは丸まって丸まった。黒ずんだ腕を抱きしめていると、首の後ろが軽く突かれるのを感じた。加えられている圧力を理解するために体をよじらせながら、ぽつかりと開いた口から黒い泡が滴り落ちるのを見て、彼は叫んだ。ドスンとアプルトは溜まった魂の集団に向かってスクルージを放った。「ジェイコブ、ジェイコブ、どこへ行ったの？」

スクルージはアプルトの攻撃を避けるために、前方への突進のタイミングを計った。二人がドレンチングのエリアに入ると、アプルトはスクルージに向かって移動し、歯をむき出しにして、マーリーに戻りました。シェイプシフターは疲れ果てて道路に倒れ込んだ。二人が回復すると、ひび割れとシューという音の複合音が地面を揺るがした。

コスの解放の轟音は、受容の虹色の流れがクレーターの頂点を突き破った後にのみ弱まりました。コスが解放されると、グループ内の音楽的な声の調和が受け入れを飽和させ

ました。クレーターから噴出した液体は、道路上の霊たちに向かって大量に移動した。動きのバレエは調和のとれた色調とカラフルなパターンを組み合わせ、夢のような渦巻きが群衆に輝く愛の塊を滴らせました。浸漬はすべてをカバーしました。

マーリーは興奮に包まれた。「エベネザー、これを手首に広げてください。」そう言って彼はスクルージに、輝く受容の厚い塊を手渡した。力を使い果たしたスクルージは指の間から物質を漏らした。マーリーは慎重に残りの承認を手の折り目に集めました。ふわふわした物質が蒸発し始めると、マーリーはスクルージの怪我ができる限り強く叩きました。

「血まみれだ！」スクルージはひるみました。時間の経過とともに、光沢のある塊が傷を焼き尽くしました。「ああああ…！」受け入れの中での高揚感が彼の心を掴みながら、彼は叫んだ。動悸が至福のけいれんを引き起こし、スクルージは喜んで目を閉じた。アクセプタンスが修復し、手首を強化するにつれて筋肉が震えた。スクルージの皮膚のあらゆる毛穴から歓喜の声が響いた。「アクセプタンス」の音楽に包まれて、突き刺さるようなトライアドがスクルージを立ち上がらせた。

幽霊と人間がコス・アクセプタンスが壊れかけた魂のプールに落ちそうになるのを見て、スクルージは息を呑んだ。マーリーさんは微笑みながら「彼らは毎回そうするんだよ」と語った。スクルージの視線を感じながら、マーリーは「プールはクレーターの一番低い場所だ。ここはコスが集団として平地になる場所だから、彼らはアビスへ進むことができるんだ」と説明した。

プールの上を移動するコス・アクセプタンスの流れを観察し、眠っている自殺霊の湖にそのエッセンスを直接滴下したとき、スクルージは目を丸くした。流体の放出により、移動質量体が飛行中に上昇しました。上向きのリフトにより滑空が安定しました。

コスのアクセプタンスが嵐の雲のように彼らの運命に向かって転がる一方で、アクセプタンスの解放がプールに発光をもたらし、壊れたスピリットのプールは活動で噴火した。まだほとんど視覚範囲外ではありましたが、プールでの動きはスクルージを魅了しました。精霊がプールから浮き上がり、さまざまな精霊の要素に変化するにつれて、さまざまな色と音楽の音色が全体に響き渡りました。

一つの霊が多くの霊に変身する様子が花火のように現れ、高揚感とともに爆発した。精霊はトランスマグリファイのあらゆる方向に飛び散った。ほとんどは魂の形で残りましたが、他のものはアクセプタンスに変身し、コスを追ってアビスの底まで行きました。

「そこで何が起こっているのですか？」スクルージは騒ぎを指して尋ねた。

「彼らはエンタングルメントを経験しています。」

「それは死ぬときに入るプロセスではないでしょうか？」

「はい、でもプールの中にいる人は目覚めるまでエンタングルメントに入りません。」

「彼らが自殺したということは、変身にさらに一步を加えただけということですか？」

「ほとんどの場合、私たちは主な敵です。」

スクルージは頭をかいた後、「実際に別れが起こっているのに、どうしてそれを『もつれ』と呼ぶの？」と尋ねた。

マーリーは説明に必要な言葉を得るために立ち止まった。「個人の精神のどの要素も、その精神内の他の原理から切り離すことはできません。私の強欲の精神は今では失われていますが、ノアに害を与えたこの精神は、今は無限の意識とともに住んでいるにもかかわらず、依然としてその精神とつながっています。私たちはまだ一つです。」

スクルージは考え続けた。「なぜこのことが私にとって意味を持ち始めているのですか？」

マーリーはにっこりと笑い、それから話題を変えた。「あなたの傷のことで大騒ぎになっていたので、あなたにこれを渡すのを忘れるところでした。」マーリーは彼に4つのロードストーンを手渡した。「ズボンのポケットに入れてください。」

スクルージは石を手のひらで転がしてから、「なぜ重さがないのに形を持っているのですか？」と尋ねました。

「ここでは事情が違います。Transmogrify のすべては精神から来ています。ポケットに入れておくだけです。」

スクルージは指示どおりに行動した。石は布の外側に押し出された膨らみを作りましたが、ポケットの中に残りました。二人がアビスに向かって進んでいくと、歓迎された沈黙が生じた。

マーリーがプールを見続けている間、スクルージは視線をクレーターに戻しました。コス受容の解放によって分離された骨は、壁を登る者たちに降り注いだ。スクルージが断片化した魂が再集合するのを眺めていると、新たなコスが頂点に集まり始めた。アクセプタンスの最後の解放がまだ目の前にあったにもかかわらず、スクルージはクレーターが新たな精神を得たことに気づきました。クレーター内のより高い位置を獲得するために、それが近くにいる人たちを押しのけながら、彼らの闘争は絶え間なく続きました。

地平線を超えて、コス・アクセプタンスは最終トランスマグリファイの深淵に入った。輝きの流れが無限の意識に向かって急降下すると、青い稻妻の嵐が穴から噴出しました

。ボルトがアビスから上向きに閃光を放ち、調和のとれた音色がトランスマグリファイ全体に響き渡った。

閃光が静まると、マーリーとスクルージは沈黙を続けた。彼らの上には精霊の回廊が流れ、彼らは自分自身の存在だけでなく、人生そのものの存在を改善するために設計されたタスクに忙殺されていました。

アビスでの活動が沈静化すると、マーリーはクレーターを見つめていたスクルージに焦点を戻した。「あそこでは偽りの純粋さがすべてだ」とマーリーは言った。

「意図的に無限の意識から切り離した人のためのものだと思っていました。」

「彼らが『意図的に』別居を計画したとは思えませんが、教えてください、エベネザー、彼らの行動の動機は何だと思いますか？」

スクルージはその質問をじっくり考えた後、「力？」と柔軟に答えた。彼はもう少し考えてから、「恐怖ですか？」と付け加えた。

「愛とは恐ろしいものだ」とマーリーはペースを速めながら言った。

「待って、それはどういう意味ですか？」

「言ったよ、エベネザー」

「いいえ…私は力と恐怖と言ったのですが、あなたはそれらを『愛の恐ろしいもの』と呼びました。なぜですか？」

「これら 2 つは、無限の意識から分離する最も迅速な方法を提供します。」マーリーは次の点を強調するために一時停止した。「それは恐ろしいことだ。」

「はい、恐怖と権力の探求がいかに破壊を引き起こすかは簡単に理解できます。」

「自己破壊だ」とマーリーは明言した。「壊れた魂のプールにいる者たちは、自滅を実行する際に明白な態度で行動します。一方、クレーターにいる者たちは、自分たちの自滅に気づいていません。」

「彼らはその知識を決して発見しないのでしょうか？」

「彼らのコスの作成時のみ。」

「その前に？」

「彼らは傲慢にもがいでいる。」

彼らが切断された精霊のクレーターの終わりに近づいたとき、スクルージは炎の湖から頂上までの喧騒を最後に受け止め、それから大声で疑問に思った、「私が理解するのが難しいのは、なぜ彼らは互いに助け合わないのかということだ——回廊のグループが私を助けてくれたように？」

「あそこで何が見えるか教えてください、エベネザー」

「過密、いたるところで火花が散り、底では燃え盛る炎、絶えず降り注ぐ嘔吐物、競争——それは絶対的な争いを体現している。」

「やあ、エベネザー、あなたが実際どう思っているか教えてください。」マーリーさんは微笑みながらこう付け加えた。「クレーターは、それぞれの靈が生前に築き上げたものを吸収している。どの靈も他人への思いやりを生み出していない。では、どうやって今、お互いを助けることができるのだろう？」

「自己生存の必要性から…」

「炎の湖の近くに、近くにいる者を認識する者がいますか？」

「いいえ、彼らはまるで目が見えていないかのように振る舞っています。」

「おそらくそれが、彼らがコスに変身するときに多くの目を得る理由です」とマーリーはスクルージにウィンクし、「彼らが再び見えるようにするためです」と付け加えた。

「彼らに欠けているのは視覚だけでしょうか？」

「いいえ、暗闇は彼らの欠点の中で最も小さなものです。彼らは彼らを助けることができましたが、彼らは接触することはあっても、接触することはない、なぜならそれぞれが他のものから完全に隔離された状態に住んでいるからである。」

「孤立——それは——そこには精霊が溢れている。」

「あなたは量について話しています。私が言っているのは、共感に欠ける彼らの性格のことです。」

「亀でも、仰向けになるとお互いにひっくり返ります」とスクルージは言いました。

「できることなら、クレーター内の誰もが今すぐカメになりたいと思うでしょう。」

二人がクレーターを通過し、壊れた魂のプールに注意を向けると、浮遊する幽霊が水面を上下に揺れるのが見えました。プールからは金属の柱が現れました。スクルージがそのビジュアルを比較できるのは、十数年間水に浸かった後の浸水した森のビジュアルだけでした。しかし、水没した森は死んだ森ですが、この破壊されない森は彼らの先端に命を吹き込みました。いつもではありませんが、点滅するアークからの残り火がプール内で眠っている魂を目覚めさせることがよくありました。

スクルージは、プールから浮き上がる一匹の幽霊に焦点を当てました。爆発的な光がその人をさまざまな精神へと解放した。急いで、解放された各エンティティはモグに向かって飛び立ち、そこでアウトリーのタスクを作成する作業が始まりました。二人が道に沿って進み続けるにつれて、より多くの魂が目覚め、本質に分割され、プールを越えて移動しました。このルーチンの視覚的なダンスはプール内に波を引き起こし、その結果、新しい精神が覚醒状態に引き込まれました。

1つの精霊がマリーの注意を引きました。それは、モグごとに1つずつ、計4つの異なる精霊に分かれていたからです。4人のうちの1人が頭上をクレーターに向かって進んでいくと、マリーはにやにや笑った。「間違いなく、あの霊は眠りたかったでしょう。ベッドからいばらの茂みの中へ入っていきます。」

スクルージが応答する前に、巨大なアークのグループが金属棒の領域全体に広がり、それに対して数十の自滅した霊が目覚めました。「火花の原因は何ですか？」

「涙」

スクルージはためらった後、「それを説明したほうが有益でしょう、ジェイコブ」と言いました。

「あなたの友人のファラデー氏は、クリスマスの講義でこのテーマを取り上げませんでしたか?」

「そうですね、マイケルは電気と火花のことが大好きですが、どうしてこのプールのことを探ることができますか?」

「Transmogrify 内のすべてのものは、プールの仕組みも含め、技術的手法の範囲内で機能します。」

「でも涙は……?」

「ただの涙ではなく、悲しい涙がプールを満たします。」

そして、この涙が火花を散らす仕組みとは……?

「塩」

「それだけでいいのなら、マイケルもおそらくそれを知つていただろう」とスクルージは認めた。

プールが常に一つの精霊を複数の精霊に変えていく中、二人は歩いて、歩いて、歩いた。何日もかかるように思えた後、スクルージは、なぜ自分の体の機能に注意を払う必要がなかったのか疑問に思い始めました。彼はお腹が空くことも、疲れることも、お風呂に入る必要さえありませんでした。まるで時間が存在しないかのようでありながら、それでも未来に向かって進んでいるように見えました。

彼らが話を続けると、スクルージはクレーターについて熟考し始めました。そんなことは信じられないが、突然新たな事実が脳裏に飛び込んで、「ティントに嘘をついたんだな」と口走ってしまった。

「そうでしたか？」

「あなたは私を救うにはファイヤートワラーだけを使うと言いました。それでも、あなたはシートで自由の助けをしてくれた人を救ったのです。」

「はい、そうしました。しかし、問題は私が Teint を越えたことではなく、それが私の最後の数回の Fire Twirler だったということです。」

スクルージは少し立ち止まってからこう言った、「おそらく私も同じことをしただろう。他に理由がない限り、反射的に。」

「どうしますか？ 私も反射的にそう思いました。ただし、足のない者はアプルトなしでは湖の表面にすら登ることができないという知識もありました。彼は炎のバーベルの下に固定され、複数の足で押さえつけられていたらどう。アプルトが彼らをロードに戻す前に、精神へのダメージがその精神に起こっていたらどう」そして、プール内の場所を指して、マリーは言った、「ほら、エベネザー。フローラがいるよ。」

「彼女を起こしましょうか？」

「いや！ それは私たちには関係ありません、それに、彼女は奇妙な顔をしています。彼女を寝かせておきましょう。私の使命はノアの救出です。」

「奇妙な見た目ですね、詳しく説明してもいいですか？」

「もしかしたら後で」 そう言ってマリーは静かになった。

寝台車の貯水池を巡る旅は長く、結局は退屈だった。彼らがプールの半分を回ると、破壊的衝動の領域が焦点になりました。右側にはプール内で眠っている精霊たちが揺れ、左側にはファイヤートワラーがあらゆる方向に旋回しているのが見えました。フィールズ側の道路沿いには、幹を上下に走る2インチの穂のある木が一列に並んでいた。この特異な木の森は、見渡す限り道路を囲んでいました。

それぞれの幹は曲がる気配もなくまっすぐに立っていましたが、枝については同じことが言えません。地面から約5フィートのところで、それらはすべて道路と平行に成長しました。隣接する木の枝が絡み合い、密集した成長の網目を作り出しています。スクルージの目の高さから始まり、葉は新石器時代の記念碑よりも高く伸びていました。マーリーとスクルージは手足の境界線の下から、何千ものファイヤー・トワラーが破壊衝動のフィールド内で踊り、回転するのを眺めた。

「スパイクを避ける必要がある。」

「ジェイコブ、炎を避けなければなりません。」

「いいえ、欲しいのですが、あのとげは…」とマーリーは木の幹を指さしながら言った。「彼らは危険です。」

「もちろんそうです。ここにあるものはすべて危険です。」スクルージは微笑んで、「少なくとも私にとっては」と付け加えた。フィールド内の風景を横切って回転する膨大な数のねじれた炎に注意を向けながら、それが相手に笑いました。

ファイヤートワラーが回転して同類に衝突すると、その中で最も背の高いものは衝突するたびにエネルギーを獲得し、小さいものはパワーとサイズが減少しました。支配力の誇示は残酷に見えた。

3台のファイヤートワラーが衝突し、最も小さいものが全滅したとき、スクルージは息を呑んだ。「彼らはただ靈を殺しただけなのか？」

「テイントと私がファイヤートワラーの捕獲について話し合っていたとき、あなたはこれを理解したと思いました。ファイヤートワラーは精霊ではありません。彼らは有毒な習慣を解放するのを助けるために精霊が作り出すエネルギーです。」

「あの猛烈な炎を生み出した精霊もあなたと同じですか？」

「そうだと思います。他のモグの中の誰もフィールドからの精霊を見つめたことはありません。彼らがアビスに到着したとき、私たちは彼らを個人として認識します。それまでは、彼らの存在の唯一の証拠はそれらのファイアトワラーです。」とマーリーはフィールドを飲み込む炎の塊を指しながら言いました。

「精霊はどうやってそのようなフレアを生み出すことができるのでしょうか？」

「彼らは死の際の強迫観念に囚われすぎて、肉体全体を解放できなくなると噂されています。」マーリーは回転するフィールズの方を見て、「あれは火を起こしたいという欲求を抑えるのに苦労したようだ」と言いながら一つを指さした。彼らは一緒に、ファイヤートワラーが高く燃え上がり、その後減少し、前よりも高く燃え上がって、そしてほとんどの木がなくなるまで瞬きするのを見ました。

「ジェイコブ、あなたは今不可能なことを言ったと思います。燃える螺旋がそれを生み出した精神を変えることができるのかなぜですか？」

「そうですね、それらのものには間違いない大量の物理的エネルギーがあります。おそらくそれは彼らのアウトリーチの任務を開発する方法です。それはすべて噂です、エベネザー。彼らの精霊は私有地です、たとえ彼らがアビスに来たとしても。」

「私はまだあなたが不可能なことについて話していると思います。」

マーリーは周囲を見回し、視界に腕を振り、「彼らの存在の証拠はあなたの目の前にあります。あなたにとって彼らがどのように存在するかは、あなたの信念構造の中に含まれています。」と言いました。

マーリーとスクルージの道路に沿った進歩は、野原がほぼ永遠に続いたにもかかわらず、安定したままでした。二人はそれぞれ、地形全体を織り成す炎の奔流を熟考した。猛烈な熱の絶え間ない動きは、指向性の騒乱の突風を引き起こしました。ほとんどのファイヤートワラーは木の枝の障壁の上に立っていました。しかし、中には脆弱性をたたきつけられ、回転するたびに縮小し続けたものもあった。

その熱狂がスクルージを魅了した。衝突するファイヤートワラー間の力のやりとりが変動する中、彼は目の前の支配的な炎に視線を向けた。猛スピードで回転し、燃える螺旋が木に激突した。マーリーが警告を発する前に、ファイヤートワラーの衝撃で木に含まれていたすべてのスパイクが吹き飛ばされました。

マーリーはスクルージの上に飛び乗って、彼を地面に押し倒しました。棘が幽霊を貫いた一方で、その下の人間は無傷であった、あるいはマーリーはそう願っていた。二人が離れ離れになったとき、マーリーは現実に打ちひしがれた。彼の下には友人が動かず横たわっていた。スクルージを震えさせながら、マーリーは「どこが傷ついたの？」と必死に尋ねた。スクルージは動かなかった。「エベネザー！ 傷は見当たりませんが、どこが傷ついたのですか？」それでもスクルージは黙ったままだった。

スクルージを膝の上に抱き上げ、マーリーは友人を抱きしめながら「すべてが失敗だった、私があなたを殺してしまった」と泣き叫んだ。それでも、スクルージには身体的な損傷は見られませんでした。

マーリーに気づかれずに、アプルトは二人の背後に移動した。発見される前に、アプルトがマーリーの耳元でうなり声を上げ、幽霊の中に緊張感が強まりました。トランスマグリファイの管理人は怒鳴り続けたが、マーリーはスクルージから離れようとした。アプルトを押しのけ、マーリーはスクルージをこすって警戒させた。

マーリーがスクルージを立ち上がらせるのを手伝うと、スクルージは立ち止まり、再び「どこが傷ついたの？」と尋ねた。

「傷ついたの？ ジェイコブ、あなたが私を傷つけたのだと思います。あなたは私を押したでしょう？」

「私はあなたを木のとげから救いました。」

「幽霊が人を死に追いやるなんて誰が想像したでしょうか？」

「それで、あなたは私がやったことだと思っているのですね。あなたは死んだのですか？」

「覚えていません」とスクルージは答えた。

「まあ、死は覚えておく価値があるので、おそらくあなたは死んではいなかつたでしょう。」

二人は道路を進み続け、その間ずっと何百万ものファイヤートワラーがフィールドを駆け巡るのを眺めていた。木々に衝突するエネルギーの絶え間ない動きにより、爆発が引き起こされました。スパイク。スクルージは彼らの危険に気づいたので、彼らを避けることに熟練しました。

発射体の目的はファイヤートワラーに可燃性の油を供給することであったため、道路に向かう発射体の推力は最小限であった。ダーツからの燃料により、炎の燃焼が速くなりました。ファイヤートワラーの終わりは有害な習慣の終わりを意味するわけではありませんが、それは常にその習慣を生み出したエネルギーの減少を示します。このため、ファイヤートワラーは棘を追いかけます。

マーリーは特別な必要性を持ってフィールズを見守りました。ファイヤートワラーが木に激突する間、彼はちょうどいい衝撃が起こるのを待ちました。そして、二つのことがほぼ同時に起こりました。ファイヤートワラーの集合体が猛烈な勢いで互いに衝突し、そのうちの2台が道路に投げ出されました。マーリーは彼らを追いかけた。

「一度に二匹という課題に挑戦したことは一度もなかった。エベネザー、触らないで、その一匹を追い詰めるのを手伝ってくれ」とマーリーは捕獲したいファイヤートワラーを指差しながら言った。

「ジェイコブ、触ることができないなら、なぜ近づく必要があるのですか？」

「それはあなたの命を救うかもしれません」とマーリーは叫びました。

ファイヤートワラーを捕まえるゲームが始まりました。

「二人は互いに逆向きに回転している。彼らの後ろ側にいてください、エベネザー。」

「逆方向に回転している場合、どのようにしてそれが可能でしょうか？」

「大きいものは放っておいてください。」マーリーは立ち止まり、それからスクルージに指示した。「小さいトワラーの後に移動してください。私たちの間に追い詰めることができます。」

スクルージには、どうすればマーリーを助けることができるのか、まだ分かりませんでした。与えられた指示には、激しい衝動を抑えるための実行可能な方法はありませんでした。彼にできる最善のことは、マーリーがしているのを見たものをただ反映することだけでした。スクルージが右にステップすると、スクルージは左にステップした。腕を上向きに動かすと、スクルージの中に同じことが起こりました。両者の間で調整が行われているように見えましたが、実際はそうではありませんでした。

マーリーは回転する火の尾を掴んだ。幽霊のような肌に炎が伝わると、精霊も炎も状況を制御できなかった。二人の間で繰り広げられる鬼ごっこ。スクルージは、マーリーが他人の衝動のエネルギーでスパーリングをするのを見ていた。コメディーは、大声を上げることなく彼らの乱闘がありました。起こっていることはふざけているように見えましたが、警告もなくスクルージがズボンの後ろをつかみながら叫びました。彼を押しのけていたのは、より大きなファイヤー・トワラーだった。

スクルージがバックエンドの焦げを確認している間、攻撃的なファイヤートワラーは弱い炎に激突しました。マーリーとスクルージは両方とも反対方向に出発した。衝撃による力によって距離が生まれ、共有する重力が不安定になり、スクルージは再びロードに落ちた。

次の瞬間、マーリーは友人が立ち上がるのを助けました。「あの大きさを見てみろよ、エベネザー」新しい Fire Twirler は、Twirler 単体の 2 倍の速度と高さで回転しました。「エベネザー、追いかけてください。そうすれば後ろから掴みます。」

スクルージは困惑した表情でマーリーを見た。なぜ彼はこの猛烈な炎を餌にして自分を追いかけるのでしょうか？「あなたが私を危険から遠ざけてくれるはずだと思っていました。」

「これらは遅いです。あなたならそれを上回ることができます、エベネザー」

しばらく熟考した後、スクルージは腕を振り、恐怖に襲われた幽霊のように吠えながら上下に飛び跳ね始めた。巨大な炎が弾む人間を追いかけ始めた。ファイヤートワラーが勢いを増すと、スクルージは「あれは私に危害を加えようとしているようだ」と叫びました。

「それが克服しようとしている強迫観念を思い出させなければなりません」とマーリーは叫んだ。

「では、これが本物の靈なのか？」

「いいえ、もちろんそうではありません。それは人間のように見えますか？それは精神によって解放された精神的なエネルギーだけです。」

「なぜあなたがそれに存在の特徴を与えるのか理解できません。」

「実を言うと、フィールドの精霊は非常にとらえどころがなく、私たちには誰も理解できません。それで、私がそれをつかんでいる間、そのままあなたの方向に進んでもらえませんか？」そう言って、マーリーはその幽玄な構造を炎の上に投げ捨てた。あたかもマーリーの行動を予期していたかのように、ファイヤートワラーは方向を反転し、今度は尾部がマーリーに向かって回転しました。炎の怪物はスクルージを無視し、マーリーを猛烈に食い尽くした。

マーリーの手がスクルージの頭の上を飛んだ。マーリーの足がファイア・トワラーから投げ飛ばされたとき、スクルージはアプルトが彼の隣に立っているのを発見した。「助けてください、エベネザー、意識が飛んでしまう前に」とマーリーは叫んだ。スクルージは管理人がアプルトを見つめながらアプルトを見た。どちらも動かなかった。マーリーの幽霊のような部分は、怒濤の螺旋から投げ出され続けました。左足がアプルトの体を突き破ると、その生き物は走って反応した。

「助けて、エベネザー」と孤独になった頭が回転しながら叫んだ。

アプルトが現場から逃走する中、スクルージは何もせず固まつままだった。「炎は生きているのか？」

息を切らしながらマーリーは「ここで息をしているのは君だけだ、エベネザー。何とかしてくれ！」と叫んだ。自分の死の恐怖がマーリーを沈黙へと駆り立てたとき、スクル

ージは弱点を探して炎の周りを回った。マーレがまもなく破壊されるのではないかと恐れたスクルージは炎の中を急いだ。最初の一歩で、スクルージは両腕を肩の上に上げ、二歩目で熱から離れるときにマーリーの頭を掴んだ。彼らは一緒に道に倒れました。

数秒以内に、マーリーの左手の小指以外はすべて元通りに組み立てられました。マーリーがゆっくりと起き上がるスクルージの方を向いたとき、精霊が「脱皮したよ、エベネザー」と叫びました。

「私は自分の服が好きです。」

「それで、あなたはただの脱走兵だと思っていましたが、そうではなく、服を脱いでいたのですか？」

「ジェイコブ、私は自分の服がとても気に入っています。もうコートを失くしてしまいました。」スクルージは謙虚さを取り戻しながら、「あの爆発物すでにズボンに穴が開いてしまった」と付け加えた。

二人が再び立ち上がると、マーリーは弱りつつあるファイヤー・トワラーの方を向き、「私が捕まえる」と宣言した。

スクルージが音を出す前に、マーリーはファイヤートワラーの尻尾をつかみ、手のひらの上に持ち上げ、腕を通して心臓に繋がれた鎖に炎を吸い込んだ。そこで山火事は収まりました。

二人は急いで道を進み続けた。彼らが歩きながら、マーリーはスクルージを見つめ始め、そしてついに「あなたの眉毛はなくなった」と言いました。

スクルージは焦げた眉の位置を感じ、話し始めたとき、マーリーの指が欠けていることに気づいた。「あなたは完全な自分ではありません。あなたの指はどこにありますか？」

マーリーは落胆して、「それはポイントにある。永遠に消えてしまった。」と言いました。

「ポイントとは何ですか？なぜ今まで知らなかったのですか？」

「Transmogrifyについては、あなたには決して知らないことがたくさんあります、エベネザー。」特にポイントについて考えて、マーリーはこう付け加えた。「私にも決して分からることはありません。しかし、可視ポイントに関する限り…そうですね、それは空間参照のない世界です。」

「ああ、素晴らしい。これで問題は解決しました…少なくともなぜポイントに骨を投げ込まれるのをそんなに恐れていたのか教えてください。」

「アプルトでは彼らを救うことはできないからです。ポイントは独特の時間の流れを持つ空間です。アプルトは常にそのエリアを迂回します。」

「我々もそのエリアを迂回するつもりだ——そうだろ？」

「それはできませんが、辛抱してください、友よ。」マーリーはエベネザーの肩に手を置き、「すぐに我々はその領域に入るだろう」と言いました。

「ジェイコブ、それは慰めではありません。」

「トランスモグリファイは快適ではありません。」

「それで、発見したんです。」

次の数歩、マーリーがスクルージに「手を握る」ように指示するまで、彼らは黙って歩きました。

「どうしてそんなことが可能ですか？あなたは肉体ではないのに？」

「その通りです。あなたの『肉体』を握るのは私ですが、まず私の手らしきものを掴んでください。」

スクルージは指示どおりに行動した。二つの手は触れ合いましたが、物質には接触せずに入れ違っていました。「またか」マーリーが指示した。そして再び彼らはお互いの手のひらを押し合いましたが、成功しませんでした。「ほら、これを持って」とマーリーは言い、街路樹の一本から部分的に破裂したとげをスクルージに手渡した。

長さ 2 インチのスパイクは魔法使いの帽子の形に似ていましたが、レプラコーンですらかぶるには小さすぎました。スクルージがトランスモグリファイのアイテムを掴むと、マーリーは閉じた拳を掴んだ。「ポイントに着きました。ご案内します。」

「点は見えません…道しか見えません。」

次のステップでスクルージの視界が暗くなった。「私は目が見えないんです」と彼は叫んだ。

「冷静でいなさい、エベネザー」とマーリーがささやいた。

**** 五線譜 8 ****

裏切りに立ち向かう

恐怖のあまり、スクルージは衰弱してしまいました。マーリーは本能的にその人間に体を巻き付けた。マーリーが「心を閉ざしてよ、エベネザー」とささやくと、二人の親密さはさらに緊迫した。

スクルージは木のとげを握る力を失いました。スパイクが落ちると、マーリーは友人をしっかりと掴みました。スクルージはマーリーの抱擁に崩れ落ち、パニックを静めた。1つの実体として立っているポイントのリズミカルなスイングが、結合されたフォームを制御し始めました。目に見えない黒いエーテルの流れが彼らの上を打ち寄せた。上下のリズムで、二人は動きに合わせて揺れた。最初に背を高く伸ばし、次に太くなります。ポイント内の揺れが止まらず、彼らは前後に揺れた。

「エベネザー、落ち着いてる？」

「まるで赤ちゃんが揺り動かされて眠るように。」

「気を引き締めてください。私たちは常に連絡を取り続けなければなりません。私たちを移動させることを許可していただけますか？」

「私たちを移動させてください…私はどこですか？ いいえ、待ってください、あなたはどこですか？」

「あなたの中に。」このことに気づき、スクルージは体を硬直させた。

「エベネザーー 私たちは連絡を取り続けなければなりません。」スクルージは——理由は分からぬが——理解した。「我々はポイントに到達する必要がある。」

「これがポイントだと思った」とスクルージは言った。

「入り口だけだよ。」

「ジェイコブ、ここには居たくない。」

「そうするでしょう…多分。さあ、移動させてください。」

「やるべきことをやれ。」

「私に身を解放してください、エベネザー」スクルージにはこの命令を理解する術もなかったが、マーリーを止めたいとも思っていなかつた。ゆっくりと黒い闇の揺れが落ち

着き、スクルージはリラックスして、マーリーが行動できるようになった。マーリーは自発的に仲間の足を制御し始めました。動きはゆっくりで、暗闇の中での動きの波に影響されていました。地球上のどの洞窟の暗闇でさえ、ポイントの光の虚空よりも明るく見えたでしょう。

恩恵を通じて、過去の経験から、マーリーは脈動するエコーを追った。それらが移動するにつれて、大気によって運ばれる波は、上下の運動から前後の推進力へと変化しました。脚を前に出すたびに、道路からわずかに持ち上げられます。マーリーはスクルージを地表に接触させ続けるのに苦労した。まるで水の中にいるかのようにその場を走り、波の後ろ向きの動きも彼らをいくらか下に押し下げた。彼らが前進するにつれて、上昇する圧力の変動が激化し、そして光が噴出した。

「私たちは可視化の地点にいます」とマーリーは宣言した。二人は一つになって道路の上に浮かんだ。

スクルージは光から目を守りながら尋ねた、「なぜ動きが止まつたのですか？」

「そうではありません。ちょうどここ中心部に収束しただけです。」

スクルージは光に慣れるために何度も瞬きをしながら、「何がそれを制御しているんだ？」と尋ねた。

マーリーは指をさして、「無実の聖域」と答えた。

「新しいモグ？」スクルージは、数百フィート先の光のトンネルまで友人の人差し指を追いかながら尋ねた。ポイント内の暗闇は、暗闇を突き刺す光の標識以外のすべてを取り囲んでいました。彼が話し始めると、トンネルから笑い声が湧き起こった。混乱して彼は尋ねました、「光は喜んでいますか？」

「光の中にあるものは絶え間なく祝われています。」

「もしそれが光そのものではないとしたら、私が聞いたその喜びは何でしょうか？」

「ほとんどが子供たちよ」マーリーは答えた。

"たいてい...?"

「サンクチュアリにはペットやいくつかの植物もあります。」

「なぜ暗闇で隔てられているのですか？」

「無実の聖域には、決して汚れることのない魂が住んでいます。彼らは愛の領域には存在しませんし、存在したこと也没有。」

スクルージはびっくりと警戒し、それがマーリーの心を変化させた。当惑しながらも、「愛こそが私たちの種の原動力だと思った」と語った。

「それは成熟するまで生きる人々のためのものですが、成人になる前に過ぎ去る子供たちのためのものではありません。彼らは生まれたときの力、つまり喜びを持ち続けます。」

「喜びと愛には違いがありますか？」

「仕事は違うよ。」

「どっちがいいの？」

「いいですか？ 無限の意識には階層構造は必要ないようです。必要なのは来歴の1つだけです。」マーリーは深呼吸してから続けた。「それでも、エベネザー、あなたには必要があると思います。愛よりも強力な仕事を生み出すエネルギーが3つあると私は理解しています。喜びもその1つです。しかし、それがより優れているという意味ではありません。」

「赤ちゃんは死ぬときよりも高いエネルギーを持って生まれてくるのですか？」

「人間は生まれたときに刺激が必要なようです。社会は厳しいもので、心は邪悪であることがよくあります。成熟すると、子供は愛の力の中で自分が働いていることに気づきます。大人になる前は、喜んで遊びます。ほとんどの大人に笑顔をもたらすのは簡単な仕事ではありませんが、子供たちはその奉仕を提供します。彼らの価値は単なる再生よりもはるかに大きいです。」

「どうしてこれがわかるのですか？ サンクチュアリに行ったことがありますか？」

「道路のこちら側からは誰もそんなことはできませんが、彼らは悲しむ両親と再会するためにここに来ます。」

「見たことがありますか？」

「何度も。ほら」マーリーは橋の中央を指さして言った。「今、子供があなたに近づいてきました。」

彼らは、若者が自分たちの存在に気づかず自分たちの下を通り過ぎるのを眺めていました。子供がポイントの暗闇から消えたとき、スクルージは「なぜ私たちは聖域に行けないのですか？」と尋ねました。

「先ほども言いましたが、この道路には、私たち大人が抱き方を忘れてしまったエネルギーがあります。もしあなたと私が橋を渡ってサンクチュアリに行くとしたら、両方のモグの間の空間は一歩ごとに広がっていくでしょう。子供が道路を渡るときはその逆が起こります。彼らの歩幅は2倍の距離をカバーします。」

「それはいいかもしれない……子供は小さいからね。しかし、そのような矛盾した展開の方法は何ですか？」

「それは闇の物質の中に含まれている。」

「その論理はどこにあるのでしょうか？」

「論理？ エベネザー、人類は論理の外で生きており、多くの場合は真実でもあるが、いつかこの暗闇と変化しやすい空間という奇妙な物質が理解される日が来るだろう。もしかしたら…だが、私たちのどちらも理解できないだろう。」

スクルージはポイント内のマーリーの遅れを振り返った。暗闇の冷たさで体が冷える中、彼はこう尋ねた、「なぜ我々はここに留まるのか？」

マーリーは微笑みながら「エベネザー、トンネルの光を感じませんか？」と答えた。

「光？ 暖まる？」

マーリーは人生をシミュレートする深呼吸をしてから、「ここがトランスマグリファイで私の気に入りの場所です」と宣言しました。

「でも、暗いし、とても寒いです。」

「私にとって気温は重要ではありません。ザ・ポイントは静寂の場所を提供します。ここでは、癒しのような親密さが私を包みます。私が自分の進歩を振り返るのに最も適した場所です。私は暗闇の中で安らぎを見つけます。」

「反映は自分自身の中で行われていないモグよ」

「アウトリーの任務はそこで計画されていますが、修正なしでは達成するのは難しいかもしれません。特に有罪判決を受けた無実の人々にとっては。彼らが受け入れられるまでの道は、他の精霊によって助けられなければなりません。」マーリーは少し立ち止

まり、「私にとって、ポイントでの抱擁は自分の仕事に集中し続けてくれます。」と締めくくった。

「それで、ポイントはあなたの慰めですか？」

「私の内なる強さが漂います。」

スクルージは、「あなたには大変すぎることはありますか？」と尋ねました。

「難しいのは、自分がこのような状況に陥ったことがあるということです。しかし、困難さえも改善への贈り物です、エベネザー。」

「贈り物が多すぎるということはありません。」

「真実は、ほとんどの人が十分な贈り物を受け取っていないということです。」

「ジェイコブ、ほとんどの人は『難しい』贈り物を望んでいません。もう出発してもいいですか？ 寒さは私には厳しすぎます。」

「ロードに戻る前にバーストを体験していただきたいと思います。もう少し続けてもいいと思いますか？」

「ザ・バースト……この場所の興奮が止むことはあるだろうか？」

「あなたにとっては……おそらくそうではありません。」

「安全なら…まあ、ジェイコブ、ぜひ実現させてください。」

「バーストはポイントとサンクチュアリの距離によって発生するようです。ただ…それを実現することはできません。上向きの突風の瞬間に、この場所内で一定の回転が発生します。しかし、時計の針が刻む音と同じように、その回転は間もなく到来します。」

「もっと暖かくしてよ！」

「私が岩のように冷たいのは知っていますが、ファイヤートワラーを一台持っています。まだ使いたくなかったけど、温める必要があれば使います。」

スクルージはまた、ファイヤートワラーを熱に費やすべきかどうか疑問に思いました。歯がカタカタ鳴る中、彼はついにエネルギー・フレアを消費する許可を与えた。スクルージと同じ空間を占めていたマーリーは、ハートの鎖からファイヤートワラーを外した。この放出により噴火が発生し、スクルージのシャツに火傷の穴が開いた。スクルージは叫び声をあげながら、「温めて、料理しないで！」と叫びました。

「あなたの痛みは故意ではありません。」マーリーさんは少し立ち止まってから、「ちょっと火傷しないようにするには近すぎます」と付け加えた。

ファイヤートワラーは周囲全体に熱と光の両方を加えました。スクルージは黒い大波が近づいてくるのを眺めながら、「私はそうするだろうが…」と答えたが、考えを終える前にバーストが襲い掛かった。

突き刺すような波の「Zheeiep」が二人を極度の暗闇から真っ直ぐ上へ突き上げ、その上の空間へと押し上げた。二人の反応は相反する情熱を示していた。マーリーは乗り心地に大喜びしたが、スクルージは恐怖のあまり叫び声を上げた。マーリーは漂流しながら道路の方に戻りながら、スクルージに「あなたを私の中に確保しておきます。恐れることはありません、エベネザー。」

彼らが下に向かって浮かんでいると、マーリーは無実の聖域を指差し、「それは畏敬の念の理由ではないでしょうか？」と言いました。ライオンを追いかける子羊のパニックに近い警戒をしながら、スクルージは目の前の光景を調べた。暗闇の両側に、仄かな輝きの光が現れた。彼が目の前の映像を分析し続けていると、周囲の三日月状の光に焦点が当てられました。右と左の照明の断片は両方とも、もう一方の輝きを反映していました。スクルージがマーリーと一緒に道路に向かって羽ばたきながら、ポイントの光がこれら2つの湾曲した形状によって作成されていることに気づきました。それらの組み合せの輝きは、子供たちが道路に入るエリアにスポットライトを当てました…そして魂はバーストを待っていました。

二人は下降しながら、真下のエリア全体を眺めた。幻影の回廊はロードの視覚的なシンを遮断しましたが、アビスに入りする靈魂の絶えず変化する表示を提供しました。すべてのモグが見えましたが、Plains Of Violence と Abyss Of Final Transmogrify は視界から最も遠かったです。スクルージは破壊的衝動の場の広さに息を呑んだ。彼は、何百万ものファイヤートワラーを越える通過には、時間そのものよりも時間がかかるのではないかと疑問に思いました。

二人は稻妻が稻妻を起こしてアビスから出てくるのを眺めた。青さの閃光が、一人を除くすべてのモグの中に光を与えた。Sanctuary Of Innocents の両側の三日月がまばゆいばかりの黄色い光を放ち、そのモグだけを照らしました。スクルージの心の中で青と黄色の色が組み合わさって、静けさの緑の光を生み出しました。

喜びの涙がスクルージを圧倒した。「なぜ私はこんなに幸せなのですか？」

「それは子供たちです。光は色や明るさだけではなく、より多くのエネルギーを運びます。光には感情も含まれます。」

「いいえ、そうではありません。」

「もちろんそうですよ。交尾中のホタルに、なぜ尻尾を点滅させているのか聞いてみてください。」

「ジェイコブ、私はホタルに何も言われたことがありません。しかし、光が感情を保持できるという考えについては、じっくり考えてみます。」

ポイントの暗闇にゆっくりと戻っていくと、スクルージは視覚への欲求で激しく瞬きしました。再び道路に足を踏み入れたスクルージは、「もう出発してもいいですか？」と尋ねました。

「遅滞なく。」しかし、一步を踏み出す前に、彼らのつながりは消滅してしまいました。ファイヤートワラーは、炎からできるだけ早く解放されることを求めてマーリーを突き抜けました。炎もマーリーのスクルージへの支配力も失われた。「いやいやいや！こんな難しい贈り物は要りません」とマーリーは怒鳴った。

「ジェイコブ、ジェイコブ！」

「立っていますか、エベネザー？」

「いいえ、私は不自由です。私を見つけてください！」

「ファイヤートワラーを救わなければならなかったのは分かっていた。どこに着陸したのか見当もつきません。」

「あなたは普通のレベルで話しています。だから、きっと近くにいるはずよ。」

「私はあなたに戻る方法を聞いてみます、エベネザー。できるだけ優しくささやいて、『私はここにいます』と数秒おきにその言葉を繰り返しますが、少しだけ大きくなります。」

スクルージは要求通りしてくれました。最初の2回の発声は音量がありませんでした。3回目の発声ではマーリーは音の方を向きました。ゆっくりとした増幅により、彼は倒れた人間の位置を特定することができた。マーリーは少しずつスクルージの方向へ進んでいきました。「私はほとんど凍りました」と、沈黙が二人の間のすべての動きを止める前に発せられた最後の言葉でした。闇の声だけが響く。波が立つたびに、潮流がポイントに集まると低い「ジープ」という音が聞こえました。

「エベネザー、エベネザー！ 動いて、寒さと戦いましょう！」

スクルージは力なく腕を伸ばした。マーリーは倒れた友人を探してぐるぐると向きを変えた。うめき声を上げながら、スクルージは動き続け、それから何の前触れもなく痛み

の叫び声を上げた、「私はあなたがくれたあの抜きのとげで自分を刺してしまったのだ。出血していると思います。」

スクルージがとげの痛みを完全に表現する前に、マーリーはスクルージのシャツを掴み、筋肉を超えた精神力でスクルージを立ち上がらせました。マーリーが再び棘を掴むと、スクルージは固まって立っていた。手とスパイクの両方を握りしめながら、「暗闇の中には 13 段の階段がある。どれか一つでも受け取ってもらえますか、エベネザー？」

「オプションはありますか？」

マーリーは笑いながら、「あれは私の古い友人です。寒さは変わらないので足を動かしましょう。私が案内させていただきます。」

「まあ、ジェイコブ、あなたなしではこの凍てつくような黒い動きから抜け出すことはできないと思います。」

二人はぎこちなく、ポイントの冷たい暗闇を越えて、体をこわばらせながら歩いた。コードの熱がスクルージに浸透するまでに数分かかったが、二人はファイヤートワラーが破壊衝動のフィールドの周りで衝突するのを眺めた。

「アビスに到着するまでに、フィールドの半分弱を通過しなければなりません」とマーリーは遠くの穴を指差しながら告げた。スクルージは、青い稻妻が空洞から飛び出してくるのを眺めた。「充実感の巣の中で、多くの受容が生み出されています。」

マーリーは、心臓の鎖に留められる 6 つのトワラーを集めた後まで、彼らが静かに旅することを望んでいたが、スクルージは悩み、慰めを必要としていた。「子供を連れて行くのは残酷だ」とスクルージはつぶやいた。

マーリーはスクルージを見つめてから、「子供をどこへ連れて行く？」と尋ねた。

「もちろん家族からですよ。」

「分かりました。」マーリーは立ち止まり、深呼吸をし、それからため息を吐き出し、幽霊のような姿に疲れ果てた。彼は途中で立ち止まり、首を横に振ってからこう言った、「あの負けは感情的には近寄りがたいものだ」

「もしそれが『近寄りがたいもの』だとしたら、なぜそれが起こるのでしょうか？」ジェイコブ、なぜ若者たちは死ぬのですか？」

マーリーはわざと自分を黙らせてから、「それはノアの質問だった」と言いました。スクルージは友人が次の考えを見つけようと奮闘しているのを見ていた。ようやくマーリ

一が説明を始めた。「それがノアとの最初の思い出です。彼はまだ学齢期で、私はまだベビー服を着ていました。」

「あなたがベビー服を着ているとは考えにくいです。」

「ノアは猫を飼っていました。マーリーはそれをただ『猫』と呼んだだけだと思うが、名前がないからといってその生き物に対する愛情が薄れることはなかった」マーリーは少し立ち止まってこう言った、「春だったかな、5月だったと思うけど、雨が止むことなく降っていたので室内で遊んでいた。火事があったと思いますが、定かではありません。とにかく、生まれたばかりのヘビがドアの下を這って、溺れなくても大丈夫な乾いた場所を探しました。完全に屋内に入る前に、キャットはそれに飛び乗って、素早い動きで殺してしまいました。」

「何をしたの？」

「私はノアがこの体長4インチのヘビを生き返らせようとするのを見ていたところです。しかし、もちろんそれは不可能でした。それで次に太陽が雲を割ったとき、彼は蛇の葬儀を行いました、そして…彼は泣きました。」

「でも、そうしなかったの？」

「それはヘビでした、エベネザー。人間はヘビのことを気にしたことがありますか？」

「そうですね…ノアはそうでした。」

「いいえ…ノアは年齢…蛇の若さを気にしていました。それがその後何週間も彼が話し続けたことだ。」

「それでは、葬儀が事件の終わりではなかったのですか？」

「それはむしろ始まりのようでした。」マーリーはスクルージを真っ直ぐに見つめ、「彼は長い間、『あの蛇は生まれるべきではなかった』とか、『あの蛇が何を成し遂げたのか』とか、そして私の一番嫌いな言葉は『あの蛇が経験したのは恐怖の一つだった』といったことを言い続けた。」ノアは、ただ生き残ることが許されるという人生の約束がないことに間違いなく悩まされていました。なぜ蛇が生まれてすぐに殺されるのか、彼には理解できませんでした。彼にとって、これは混乱であり、野蛮であり、正しくありませんでした。」

「私にとってそれは正しくないようです、ジェイコブ。」

「若者の死……その死は、後に何を残すかということなのです。兄弟にとっては、自分たちも同様の喪失にさらされやすいという現実を初めて認識することがよくあります。愛情深い両親にとって、それは心を引き裂き、変化を強いることになります。」

「では、親が調整すべきときに調整を行わないためにこのようなことが起こると思いませんか？」

「そう思われるかもしれません、いいえ、子供は死ぬので、誰かが修正するわけではありません。ただし…強制的な変更は発生しますあれほど負けた後だ」とマーリーは立ち止まり、「有益な変化もあれば、有害な変化も多く、時には…その両方になることもある」と締めくくった。

「子供はどうですか？彼らが失ったものはどうなるのでしょうか？」

「人間にはこれを理解するのは難しいですが、子供はまだ存在しており、新しい経験をしています。彼らは地球との遭遇を失いましたが、依然として無限の意識の創造物の物理性の中に存在しています。」

「しかし、これは子供の死の過酷さを説明するものではありません」とスクルージは不満を言った。

「前にも言ったように、この試練は感情的には近寄りがたいものです。それは心を麻痺させ、心を打ち碎きます。それ以外にあなたに提供できる答えはありません、エベネザー。」

「しかし、それには答えはありません。それはそうだから…と言っているようなものです。あなたの答えは会話からの逃避です。」

「そうだ、そうだ」マーリーはファイア・トワラーの尻尾を掴み、それを心臓の鎖に吸い込みながら言った。長い間、スクルージは黙って歩き、マーリーが彼らの前を横切ったすべてのファイヤートワラーを無意識に掴み、確保した間、怒りが高まるのをただ黙っていました。

ついにスクルージが爆発した。「自殺が顔を平手打ちされるのなら、子供が死んで可能性が失われるのも、人類の顔を平手打ちするのと同じではないでしょうか？」

「エベネザー、私たちは自分たちの周りを動く足を理解しようとしているアリにすぎません。」この答えでは友人の問題は解決しないことを悟った彼は、「しかし、人間は、自分自身が無限の意識と同じになるまで、決して無限の意識の心を知ることはできないでしょう。」と付け加えた。

スクルージは唖然として「そんなことが起こり得るのか？」と尋ねた。

「まあ、言っておきますが、その考えは可能です。」マーリーは咳払いをして、すぐにこう付け加えた。「私たちは皆、創造の物質から生まれたのです。」

マーリーが立ち止まると、エベネザーは「無限の意識が創造主ではないのか？」と尋ねた。

「それが私の理解です。」

「それはどのようにして誕生したのですか？」

「それは、私たち人間にはそれを聞く耳がないのに、無限の意識の名前を知るようなものだと思います。」スクルージはマーリーを見つめながら説明を続けた。「創造物がどのように構築されるかを理解する上でも同様の問題があります。人間、特に私、エベネザーには、思考だけから物理的に自己を創造するという概念を理解する心も経験もありません。」

「それは思考が物理的なものであることを意味します。それには論理がありません、ジェイコブ。」

「それでも、物理世界は存在します、エベネザー。それは何らかの形で始まらなければならなかつたのです。」

「無限の意識はそもそも物理的なものなのだろうか…もしかしたら、それは精神であるがゆえに物理的な世界を創造することができたのかもしれない。絵を描くアーティストが決してキャンバスにならないのと同じです。」

「とても賢い考えですが、それだけです。証明された知識のない意見です。」

「あなたは私をイライラさせます、ジェイコブ。」

「私たちの理解の欠如は敵ではありません。それは単に私たちが個人の完璧さを求ることを可能にする制限にすぎません。」

「それは混乱しますね。つまり、私たちが受容と呼ばれる…糖蜜…に変身すると、私たちは完璧になるのですか？」

「受け入れたら終わりじゃないよ、エベネザー」マーリーが理解を明確にしている間、スクルージは首を前後に振るだけだった。「もっとあります。変化には決して終わりがないので、変化に慣れてください。しかし、受容を超えた道は、ほとんどの人がたどるにはあまりにも明るすぎます。」

「明るすぎる？」目を閉じても？」

「目を使わずに航行できますか、エベネザー？」

「ということは、本質的には盲人だけが受容以上の存在になれるということですか？」

「その理解の中に比喩を見つけてください、エベネザー、無限の意識の啓発はそのほとんど目に見えない、しかし過度に照らされたルートの中に存在するからです。」

「ハムバグ」

「そしてそこに、ほとんどの人間が決して創造主の力になれない主な理由、つまり彼ら自身の疑念が存在します。」

友人たちが最終トランスマグリファイの深淵に向かって歩きながら、関係のない会話が続きました。青い稻妻が繰り返し大気中に落ちました。スクルージにとって、それぞれのフラッシュは道路に広さを加えているように見えました。最後に彼は「我々はその亀裂に向かって少しも距離を置いているわけではない」とコメントした。

マーリーは「動きのない動議なんて、まるで国会議員みたいだな」と言う前に心の中で思った。二人は顔を見合わせましたが、マーリーが遅い足の解決策になると考えたものを作成したとき、ただ微笑むだけでした。「これを試す理由はありませんでしたが...」

「あなたは私にショックを与えるつもりですよね？」

「私たちを移動させます。」スクルージが反応する前に、マーリーはハートの鎖からファイヤートワラーを引き抜きました。「私の手足の中に入ってきてほしいのです。」

「手足？ 木？」

「私の四肢、私の付属物...私の四肢...これを使用する前に、私たちは結合する必要があります。」と彼は回転する炎を持ち上げながら言いました。

「私の……手足に入ってはいけないのですか？」

「はい、そうしましょうか？」

「なぜ聞くのですか？ あなたは一度も...」

マーリーはスクルージの構造物に押し込み、ファイアトワラーを二人の足の下に置きました。即座に、その回転により二人は両方とも上方に押し上げられ、それから両者がこ

れまでに経験したことのない速度で前進した。彼らが道路を競争しているとき、マーリーは叫びました « 「馬より速い。」 »

「崖から落ちるより早いよ、イッペー！」スクルージは彼らが満足のいく速度で移動しながら遠吠えした。1台のファイヤートワラーが燃え尽きると、マーリーはもう1台をチェーンから引き抜き、前進を続けました。6つの炎が燃え尽きると、それらは止まりました。その後、マーリーはアビスに進む前にエネルギー・バーストを補充しました。この活動は、二人とも巨大な裂け目の入口に達するまで繰り返されました。

彼らがアビスの端に近づいたとき、マーリーはスクルージに「飛び降りる準備はできているか？」と尋ねる前に、6本目のファイヤー・トワラーを心臓の鎖に押し込んだ。

スクルージは深いため息も吐かずに口を開いた。合図したかのように、可能な限り最大の効果をもたらすために、稻妻が穴から上向きに割れました。放水の威力が崖の基礎を揺るがした。スクルージは身を起こしながら、「底はどこだ？ どうすれば落ちても生き残れるだろうか？」と尋ねた。

「ポケットに石を入れてね。」

「ジェイコブ、君には頭脳の石があるよ。」

「私にはもう脳がありません、エベネザー。私にはただ考えがあるだけです。」

「ハムバグ」

「それはまたあなたの新しい最高の言葉ですか？」

「ハムバグ」

「私があげた石はまだ持っていますか？」

「彼らのヒントが分かりましたか？」スクルージはポケットから突き出た地層を指差しながら言った。

「よし、飛び込んでみろ。岩があれば速度が落ちるだろう。」

「私は…信じていません。」しかし、スクルージが踏ん張れる前に、マーリーは友人の体に飛び込み、すぐに彼をオーバーハングの端の上に歩いて越えました。

スクルージの叫び声は次の稻妻よりも大きかった。彼が未知の未来に向かって加速するにつれて、彼のズボンは彼のフォームの周りで高く乗り始めました。スクルージは、転倒によって陰部にかかる圧力を和らげることを期待して、股間を引っ張った。

そして...それは起こりました...アビスの視界が焦点になったとき、彼は速度を落としました。色の波がスクルージに集まり、彼の周りに浮力が生じました。安全に下に向かつて流れしていくと、稻妻が走り過ぎて、アビス内で移動するすべてのものを迂回するパターンを形成しました。海綿状の縦穴の中に、匂いとチクチク感の両方の新鮮さだけが残った。稻妻が周囲の空間で火花を散らし続けている間、スクルージは壁の色と曲がりくねった曲線を観察しました。その色はどれも金属的なガラスのようなもので、スクルージの視覚を強化しました。鮮やかな黄色、マゼンタ、緑、青、ラベンダーの輝く壁が彼の降下を明るく照らしました。スクルージはその色合いの中に気品の流れ、素晴らしい輝きを感じた。

彼らが合体した状態で漂っていると、マーリーがスクルージから離れても大丈夫だと感じるほどスクルージの速度が最終的に遅くなかった。スクルージの外に移動したマーリーは、友人が急降下するのを眺めた。マーリーは反応モードのみで行動し、スクルージの下に急降下し、友人の体がスクルージを通過することを許可しました。動きがこの2つを組み合わせたとき、マーリーはスクルージの体をつかみました。その時だけ、人間の体重は減少した。「ロードストーンがあなたの動きを遅らせているのだと思いました。」マーリー氏は壁を指差し、「この囲いに接触するほど石を強く投げることはできない」と付け加えた。

「どういう意味ですか？ 石はどうなりますか？」スクルージは尋ねた。

「彼らは柵からほんの数フィート落ちるだけだ。」

「私のものは外したほうがいいですか？」

「いえ、結果に賭けないようにしましょう。」

彼らが下に移動すると、大量の精霊がアビス全体に漂い、彼らの体からきらめくパステル調の色合いの反射でそのエリアを埋め尽くしました。Transmogrify の上部エリアが陰鬱な霧囲気を漂わせていたのに対し、下部エリアであるアビスは歓声で輝いていました。アビス内のあらゆる音、あらゆる突風、あらゆる動きが金属の壁に反射し、その後楽音の形で耳に戻ってきます。二人が穴の奥深くに落ちると、定義されていない、しかし輝かしい歌が高揚した感情とともに響き渡り始めました。

スクルージは垂直惰性走行を楽しんだ。ポケットの中の石がまだ不快な引っ張りを生んでいたにもかかわらず、彼はその煩わしさに身を任せた。目を閉じると、壁からのメロディーが彼の姿を取り囲んだ。肌の露出したあらゆる表面で色調が反射しました。彼の手は年齢のせいで固くなり、ほとんど感覚がなかった。しかしああ、震える音符が触れたときの顔の興奮は！ それぞれが表面をかすめると羽のようにくすぐったい。

絶え間なく稻妻の嵐が空に向かって点滅する中、スクルージは自分の下から立ち上る姿に魅了されました。そびえ立つ一枚岩の混乱が現れた。この複合施設は、色付きの金属のビジュアルと、特定の目的のために設計された構造システムを組み合わせたものです。さまざまな形や配置のピラミッドがアビスの底全体を埋めていました。

センター構成内で、承認の収集に特化したネットワークが誕生しました。このレイアウトは、頂点が埋まった状態で下から上に立つ双子のピラミッドに似ていました。一方では、より純粋なコスの受け入れが蛇行のモチーフへと滝のように流れ込み、その後...未知の世界へと消えていきました。その間ずっと、通常の受容の洪水が結合されたピラミッド内の別の部屋に滑り込んでいきました。

スクルージは、それぞれの建物の機能を理解することを期待して、ある建物から次の建物へとギリシャ語のキーのさまざまな曲がりくねったパターンをたどりました。ただし、どれも建物ではありませんでした。2つのエリアを除くすべてのエリアは、右側または逆さまのピラミッドでした。

ピラミッドエリアの1つでは、トランスマグリファイの歩道で順番を待っている間に精霊が混ざり合い、その場所全体が活気に溢っていました。3つのエレクトラム(金、銀、銅)のピラミッドが、2つの長い水平クリスタルで構成される通路を囲んでいます。それぞれの水晶の両端には点があり、歩道の中央で交わっていました。スピリットが両方の地点に直接配置されると、エレクトラムピラミッドからのエネルギーの爆発が青い稻妻に収束し、スピリットが「受容」に変換されました。

幽霊の大群によるウォークウェイでのお祭り騒ぎは、視覚的に混乱を引き起こし、目をくらませた。しかし、その地域には目前の課題、つまりモグリフィケーションに対する熱意が漂っていた。歩道の魅惑的なビジョンが続いている間、スクルージはアップバー・モグスに向かって登る階段に気づきました。

階段の金属製の各段は、踏み面と蹴上げのサイズが異なりました。スクルージは、その大きさが色によって制御されているように見えるまで、この違いに戸惑いました。黄金の階段は最も高い高さを持っていましたが、踏み面は非常に狭く、子供の足でもつま先だけを使って歩くことができました。これにより、狭い階段がはしごのように見えました。虹の各色が進むにつれて、トレッドが広くなるにつれて、立ち上がりが小さくなります。ラベンダーの階段は踏み面が最も広いものの、高さが非常に低いため平らに見え、階段というよりはスロープに近いものでした。

歓喜の感情が全体に踊り、精霊の集まりが階段の吹き抜けを上下に漂いました。何が歓声を上げたのかは特定できなかったが、それが何であれ、スクルージは微笑んだままだった。

マーリーとスクルージが愛の収集構造に向かって漂流すると、彼らの上にコス受容の雲が落ちました。重力をはるかに上回る速度で疾走し、その塊はスクルージの叫び声を上

げたほど近づいた。彼が愛のエネルギーとの衝突を恐れたそのとき、液体は分裂し、二人の周りを流れ、最終的に収集容器に入りました。

受容のしづくがペア全体に飛び散りました。受諾が発効したため、彼らの降下に対する制御はマーリーを離れました。クスクスと笑いながら、彼はコレクションのピラミッドの端を掴みました。彼はスクルージを二人を塔の角に置いて解放した。両足が端からぶら下がった状態で、二人は笑い声を抑えることができなかった。ここにはユーモアはなく、ただ受け入れが彼らに与えた信じられないほどの軽さだけがあり、それがすべてを冗談に変えました。

複合施設の隅に座ってスクルージは笑いました、「それはかなりの転落だったね」

「どこからでも、恵み以外からね」マーリーは笑った。

スクルージはただ首を振って笑い返した。「それは意味がありません。」

「信じてください、エベネザー、ほとんどのことは意味がありません。」彼は微笑んで友人にウインクしながら、「コンセプトはくすぐったいものだよ」と付け加えた。笑いを抑えることができなくなったマーリーは建物から転落し、その下にある5つの巣窟に向かって落ちていった。スクルージが別離の影響を受ける前に、マーリーは「まだ一緒にいるの？」と笑いながら戻ってきた。コーナーの端に戻ったマーリーはスクルージを見て立ち止まり、それから尋ねた、「死ぬのが待ちきれませんか？」

スクルージは神経質な笑い声を上げ、「そしてまた一緒にいてください。私はむしろ生きていたほうがいいのです。」と答えた。彼らは一緒にその考えを笑い、笑い、そして笑いました。

受容の液滴が彼らの皮膚に吸収されると、マーリーとスクルージは両方とも遠吠えを静かにし始めました。変容の通路の活気には絶えず注意を払う必要がありましたが、数分後、スクルージは視線をアビスの反対側に向きました。

巨大なプラチナアリーナに焦点を当てながら、スクルージは片腕の首のない精霊が別れのプラットフォームに入ってくるのをただ見ていた。3本のプラチナスプーンがプラットフォームから水平に突き出ています。それぞれは他の棟に対して45度の角度で設置され、中央の棟はトリオの中で最も長く、最も幅が広くなりました。3本のプラチナの棒の上には、巨大な水平の結晶点がありました。右端と左端の両方のスプーンの端には、追加の垂直クオーツポイントがありました。それぞれのクリスタルポイントの後ろで、直立したプラチナのポストがクオーツと組み合わされて、わずかな動きできらめく宝石を生み出しました。センタースプーンにはこの機能はありませんでした。代わりに、その水平な石英の先端が逆さまのピラミッド漏斗の上に張り出しています。

スクルージは、片腕の首なし靈がプラットフォームの上に彫像のように静止しているのを眺めました。彼らは二人とも、辺りが金色のもやで満たされ始めるのを観察した。雲は、それ自身の目に見えない構造によって閉じ込められており、視界がぼやけていました。「霧は無限の意識であると考える人もいます。」

「無限の意識を想像するのは難しいそれはあらゆる種類の物理的形態である」とスクルージは答えた。

「現実には、それを雲として想像することはできません。」

「はい、それは単純すぎるようと思えます。それで教えてください、ジェイコブ、なぜ靈たちは霧が無限の意識であると考えるのですか？」

「無限の意識は、絶望的な状況を乗り越える勇気を持った精神を個人的に称賛するからです。」マーリーはスクルージの好奇心が高まるのを観察し、「魂が瞬間変容の別れのプラットフォームに入ると、彼らは再び無限の意識の愛の光に囲まれるようになる。」と彼に伝えました。

「それで彼らは救われるのか？」

「いいえ、ほとんどの場合、彼らの受け入れは不純ですが、無限の意識は常に不完全な精神から最も強力なポジティブなものを引き出します。その最高の性質は、無限の意識自身の個々の精神に思考として組み込まれます。」

「ということは、瞬間的に変身した魂も永遠に生き続けるということですか？では、クレーターの目的は何でしょうか？」

「そのような精神は、去ってしまったが記憶に残っていると考えたほうがよいでしょう。マーリーはスクルージの肩に手を置き、「クレーターについては、それが人間の行為によって作られたことは知っていますよね？」

「コス解放という制御不可能な出来事が、他人の存在全体を破壊するなんて、ちょっと悲しいですね。」

「アプルトが自分の頭を食べたことを知った時、その靈はとても悲しかったと思います。クレーターは妥協を許さないモグよ。」

二人が座って待っていると、何の脅威の兆候も見られず、プラットホームが爆発した。光の破片がそのエリアを貫通し、二人に火花を散らした。マーリーは残り火には注意を払わなかった。一方、スクルージはフレアを避けるためにあらゆる努力をしました。この試みは勇敢だったが、彼の体中に火花が降り注いだため無駄だった。しかし、炎に対

する彼の恐怖は杞憂に終わり、炎が皮膚に着弾しても何の影響も与えなかった。火災嵐は目に見えていたが、マーリー自身と同じくらい幽霊のような実体だった。

これに気づくと、スクルージは心を落ち着かせてプラットフォームの光のショーを眺めました。金色の靄が晴れると、幻影の部分は見えなくなりました。中央の水平結晶への変化が起り、処理されていました。その結晶の中に鈍い灰色の光が形成され始めた。ゆっくりと、輝きはクオーツ内を前後に移動し、動きによってますます明るくなっていました。浄化されると、明るくなったアクセプタンスがクリスタルの先端から流れ出て、逆さまのピラミッド漏斗に流れ込みました。「あれは不運な精神だった」とマーリーさんは語った。

「どうしてわかりますか？」

「ほら、見てください…無限の意識の愛だけが集められました」と彼は言い、中央のクリスタルの受容の流れを指さした。

「どうやってそれがわかるの？」

「もしその人の愛がほんの少しでも集められていれば、それは外側の2つのクリスタルに流れ込み、それからアクセプタンスになっただろう」と、プラチナとクオーツを組み合わせたアップライトを指しながら彼は言った。「しかし、悲しいことに、今ではその精神は単なる思い出です。」

スクルージが「少なくとも、それは創造者の心の中にある記憶です」と言う前に、長い沈黙が生じた。

マーリーはスクルージを横目で見て微笑んで、「それは確かに何かだ…少なくとも」と答えた。

変容の通路が再び支配的なビジュアルになると、アビスのエリア全体が活気に満ちた音を立てました。二人が棚の上に座り、受領書収集ピラミッドの上に足をぶら下げていると、スクルージは霊が彼の下を行き来するのを観察した。それらの真下には5つの逆さまの漏斗ピラミッドがあり、それぞれサイズは異なりますが、1つの構造に接続されています。漏斗状の各通路への精霊の着実な流れが、アビスの喧騒をさらに高めた。

「休んだか、エベネザー？」

スクルージはその質問について考えてから、「疲れているほうがいいでしょうか？」と逆質問しました。

マーリーはただ笑った後、こう答えた。ただし、私たちにはかなりの課題が待っています。」

「つまり、休んだほうがいいということですか？」

「おそらく、このためには私たち二人とも『十分な休息』が必要になるでしょう。その巣窟に漂流する場合は」とマーリーはピラミッドの大きな開口部の一つを指差しながら言った、「警戒心が必要になるだろう。」

「それでノアはあの穴にいるの？」

「はい、彼は怒りの巣窟、またはあなたが言うところの「あの穴」にいます。しかし、時間は存在しないので、時間は私たちの味方です。それで、準備ができたら入ります。」

「私が決めていいの？」

「私たちはあなたの言葉に従って行動します。」

スクルージはただ笑った。「あなたは謎です、ジェイコブ。」

「ほとんどの人がそうです。」

「そしてもちろん、靈も同様です。」

彼らは一緒に、靈が彼らの周りを歩き回るのをただ眺めていました。青い稻妻が鳴るたびに定期的に高揚感の歓声が上がるため、ウォークウェイでのアクションは最も迫力がありました。ある精神が受容に変化すると、次の精神は栄光を期待して跳ね返りました。受け入れられるまでにかかる時間よりも、変容の通路に入るまでのほうが時間がかかったので、プロセスは迅速でした。

「見て見て、ジェイコブ…私たちを助けてくれたのはハンディキャップの精神です。」

亡靈が双頭の水晶の通路の中心に移動するのを彼らが見ながら、スクルージは尋ねた。「その靈魂はモグリフィケーションで足を取り戻すだろうか？」

「彼が失ったのは肉体だった。彼が取り戻すのは精神であり、それはすでに完成されています。」

3つのエレクトラム ピラミッドが活性化されました。記念碑の中で力が高まる中、足のない靈はスクルージとマーリーをまっすぐに見つめ、「ナワリヌイ・ゼレンスキー」という言葉を発した。次の瞬間、青い稻妻が精靈に集中し、精靈は受容となった。

「それはどういう意味ですか、ナワリヌイ・ゼレンスキー？」スクルージは尋ねた。

「それは彼の名前かも知れないと思います。シートで彼が一度聞いたら決して忘れられないと宣言したのを覚えていますか?」

「はい、覚えていますが、なぜ彼がそんなことを言ったのか分かりませんでした、なぜなら私にとって名前はいつも覚えにくいものだったからです。しかし、私は彼の寛大さと、私に与えてくれた援助を決して忘れません。」

「それでも、彼はあなたがここにいることに満足していました。」

「彼が私を助けてくれたのは、私をトランスマグリファイから早く抜け出すためだけだと思いますか?」

「それは考えですが、決して彼の行為を動機に置き換えるべきではありません。この2つはつながっていますが、決して同じではありません。」

「どちらがより重要ですか?」

「生身で創造された私たちにとって、行動は結果を伴います。」

スクルージはアビスで起きていることのすべてを観察していましたが、マーリーはただ彼を眺めているだけでした。他の靈は、生きている靈やその友人の靈に注意を払いませんでした。代わりに、彼らは自らのモグリフィケーションの仕事に忙しく、アビスに入りしながら他人に与えた危害を修復するために働きました。それは簡単な仕事だ。なぜなら、ひとたびアウトリーチの任務が形成されれば、その時だけ、犠牲の痛みの中にある精神が求められるからである。長い間座った後、スクルージはついにこう言いました。「もしそれが私次第なら…準備はできています。」

続行することに同意すると、マーリーはスクルージの姿に戻り、その後、その二重の姿を棚から滑り落としました。マーリーは、左端の逆さまピラミッドに向かって下に移動しながら、その真下にある洞窟についてコメントしました。「死骸のようにじっとしていなさい、エベネザー。私たちは破壊的衝動の巣窟に陥ることを望んでいません。」

彼らがノアのいる巣穴に向かって漂っているとき、スクルージは「ノアのいる怒りの巣窟よりも、そっちのほうが良い巣のようだ」と言いました。

「怒りの巣窟では、人は危険を感じることができます。しかし、その巣穴の中では」とマーリーは最大の逆さまピラミッドを指しながら説明し、「奇妙な出来事が漂流する魂を捕らえる可能性がある。」

「この辺で閉じ込められたくないんです。」

「それでは、移動の際は私に譲ってください。」

「私はもうそうではないのですか？」

「洞窟に入るまではひるまないでください。」

絆を深めた二人はゆっくりと四角い穴に向かって進んだ。他の靈に続いて、マーリーは怒りの巣窟に入りました。洞窟への分岐点は友人たちとその光を螺旋の中に吸い上げた。光の渦が彼らの周りを回転する中、マーリーはスクルージをしっかりと握り締めた。外から見ると、デンズは背が低いように見えました。しかし、一度入ると、宇宙の膨張により、山よりも大きな落下が起こりました。

二人が突風の光の中で旋回すると、濃度の低い靈が生きている人間と死んだ友人の横を通り過ぎていった。共有重力またはロードストーンのいずれかが、ペアの落下を遅らせるのに役立ちました。マーリーは、どちらが影響しているのか、あるいは両方が影響しているのかをテストしたくありませんでした。彼はただ、ゆっくりと回転することでスクルージの胃を落ち着かせるのに役立つことに感謝しただけで、あまりにも穏やかだったのでスクルージは居眠りをしてしまいました。マーリーはスクルージを洞窟の地点に誘導し、それから彼らはトランスマグリファイの全表面よりも広い領域を覆う洞窟を通り抜けて入った。

スクルージの目はぱっと開き、目がくらむほどの眩しさを感じた。それに比べれば太陽の輝きは薄暗いだろう。すぐに鼻がくすぐったくなり、彼は目を強く閉じた勢いでくしゃみをした。スクルージは瞼を通して強烈な光を濾過しながら、幽靈のようなものが彼の周囲を飛び回るのを眺めた。スクルージが目をきつく締めると、マーリーは二人を漏斗の光から遠ざけた。

スクルージはゆっくりと目を再び開いて、周囲を賑わす精靈の群れに目を向けた。全体の面積は、上部のすべてのモグを合わせた面積よりも広く見えました。マーリーとスクルージは、5つのモグ漏斗から精靈がその場所に注ぎ込まれるのを見ていきました。動く精靈の川が発達し、それぞれの漏斗が洞窟内に目に見えない水路を作り出しているように見えました。「すべての巣穴がこの巨大な隠れ家に行き着くのに、なぜ私たちは怒りの巣穴のそばに入らなければならなかったのですか？」

「彼らの巣窟の外に靈が動いているのが見えますか？」マーリーは尋ねた。

スクルージはあらゆる角度から観察してから、「いいえ、しかし何がその剛性を保っているのでしょうか？」と言いました。

「閉じ込められるのではないかという恐怖。」

「それで彼らはインスタントモグリフィケーションを要求するでしょうか？」

「そんな罠じゃないよ。上では、靈が彼らの人生からの行動を実行して、彼らのアウトリーチのタスクを作成します。この場所は私マーリーは問題を強調するために、視覚空間の広大な範囲に両腕を押し出し、「ここにあるのは目に見えないもの、思考、そして残る感情についてです。」と説明しました。

「まだ分かりません…」

「心の中にあるものがどのように罠にかかるのか理解していますか？」

「どうして私の心は閉じ込められてしまうのでしょうか？ここは大きな空の国のようなものです。障壁がないので、閉じ込められるものは何もありません。」

マーリーは笑いすぎてほとんど反応できなかった。スクルージは友人をじっと見つめたが、自分が嘲笑されていることに気づいて眉をひそめた。マーリーさんは深呼吸でヒステリーをコントロールし始めた。ゆっくりと彼は落ち着いて答えられるようになった。
「許してください、旧友よ。軽蔑するつもりはありませんが、心は意識です。それは同じインスタンスのどこにでも存在しますが、どこにも存在しません。こここの罠は靈の残留思念の中にある。」

「どうしてそれが私にとって罠になるのでしょうか？」

「なぜなら、彼らの熟考は私たちの道にはないからです。ひとたびそれを提示されると、私たちはそれを自分のものだと認識するか、あるいはその靈の考えが忌まわしいものだと感じるかのどちらかです。両極端は感情的な混乱を引き起こし、自己認識が夢中または嫌悪の影響の中に閉じ込められてしまう可能性があります。多くの場合、ここでは嫌悪感が人々を魅了しますが、それでも、結果として生じる当惑は、部外者が借用した考え方を認識し、落ち着くまで罠にかかります。」

スクルージはマーリーを見て、静かに笑いました。「とても分かりやすかったです、ジェイコブ。」

マーリーはうなずきながら、「別の比較を試みさせてください。」と答えた。彼は目を閉じて、心の中のイメージを中継しました。「このエリアをロンドンと考えてください。向こうにある各ファネルは市内の大通りです。」彼はスクルージからの懸念か承認のいずれかを待ちましたが、友人が沈黙したままであると、マーリーは続けました。

「もしお店に行きたければ、墓地に入る道しか通らないはずです。」

「私は墓地には近づきたくありません。しかし、どうやって靈を「閉じ込める」ことができるのでしょうか？私なら原点に戻って正しい道を進みます。」

「そしてそこにあなたの失敗があります。」

「間違いは？」

「向きを変えても、後戻りすることはできません。これらの経路は前進します。私の強欲の精神は、あなたを救おうとするその奉仕の任務がほぼ停止されるという困難な道を経て、そのことを学びました。」スクルージはマーリーが続けてうなずきました。「初めてこの領域に入ったとき、私は肉体的危害の巣窟を通って強欲のサイクルを超えて進む達成にとても興奮していました。そして、これら 2 つの Den は互いに近くにもありません。しかし、私はそこにいた…私には関係のない場所にいた。私が道に沿って進んでいると、怒った人々が私を彼らの苦しみの中に閉じ込めてしまったのです。」

「どうやって？」

「彼らは共通の嘘を生きていた。」

「グループ全体をコントロールできる嘘とは何でしょうか？」

「エベネザー、個人の純朴さは、悪意を持つ者たちが狙う弱点だ。私が引き込まれたグループは、別のコミュニティがどのように自分たちを攻撃しようとしているかについて激しく騒ぎ、代わりにその罪のない社会に対して戦争を仕掛けました。私個人としては、彼らの進入を避けて彼らの思考に引き込むこともできましたが、彼らの膨大な数が統一的に誘惑を行っていたことが私を罠にはめたのです。」

「あなたは彼らの影響に対抗するには弱すぎたのですか？」

「信じてください、エベネザー、社会的圧政が義務化されると、誰もが弱くなりすぎます。」

「逃げるのにどれくらいかかりましたか？」

「あのグループがやったことは今でも私の頭から離れず、私は個人的に閉じ込められた精神ですらなかった。しかし、あなたの具体的な質問に答えると、おそらく人間の十数年です。1 世紀なんてありえないし、そうでなければあなたもすでにここに来ているだろう」マーリーは立ち止まって考えを巡らせた。前にも言いましたが、ここでは時間は秒単位で過ぎていきます。」

スクルージはゆっくりと首を左右に振ってから、マーリーよりも自分自身に向かって尋ねた、「ということは、暴徒は真実を思い起こさせるために嘘を紡ぐということですか？」

「議員と同じだ」

「そして司祭たち。」

「エベネザー！冥府に行きたいですか？」

「今、私がいる場所はそこですか？」

マーリーはただ笑いながらこう言った。「ありがたいことに、死後の世界は永遠の神話ほど狭量ではないよ。」

彼らが巣穴の小道に沿って移動している間、スクルージは何百もの靈の動きを追った。ルートの両側には洞窟が並んでおり、一目見るだけでドラマチックなアクティビティが目に浮かびます。酔った休日のパーティの参加者たちがオリバー・クロムウェルの頭を前後に投げる中、スクルージは息を呑んだ。切断された頭蓋骨が突き刺されるたびに、「クリスマスは禁止された。死んだ支配者からの狂乱の叫び声は、騒々しい洞窟から噴き出す歓声に圧倒された。洞窟の住人たちは踊り回り、酒に溺れ、虐待された脳箱は鳥のように洞窟の周りを飛び回った。スクルージは、その洞窟の熱狂に巻き込まれたらどんな感じになるだろうかと考え、そして、洞窟を通り過ぎながら自分の考えに震えた。エリア。

頭を投げる洞窟に向かいに、小さな洞窟が見える前に音が聞こえました。「独立心が強すぎる！」と地域中に騒動が伝わる。「彼女が魔法を唱えるのを見たんだ！」「彼女は子供たちを殺します！」「彼女は魔女だ！」「彼女を燃やしてください！」「今すぐ彼女を燃やしてください！」

彼らが声を爆発させようとしていたとき、スクルージは尋ねた。「彼らは肉体的危険の巣窟にいるべきではないのか？」

「そこにいる人々は、女性は管理されなければならないという怒りに囚われています。彼らは身体的危険ではなく、言葉による暴力の場所に住んでいます。」

「女性は毎日身体的な被害を受けています。」スクルージは首を振ってから尋ねた、「それは社会的伝統として確立されているので、正しいと思われ、ほとんどの政府が望んでいるほどではないでしょうか？それなのに、怒りの巣窟にはこの洞窟しかないのですか？」

「女性嫌悪者は、物理的危険の巣窟内にある少なくとも千の洞窟によって管理されており、あらゆる言語で1つ、あらゆる宗教で数十の洞窟が存在します。」

「千人？女性がこんなに抑圧されているとは思わなかった！」

「エベネザー、これは私たちの抑圧ではありません。彼らの抑圧です。男性の権威を持って生まれたあなたや私は、生まれたときに女性に課せられた束縛に共感することはおろか、ほとんど同情できません。」

「しかし……女性がいなかつたら、男性も存在するでしょうか？」

マーリーはただ笑い、それからこう言った。「地球は相反する状況に満ちています。私たちが生きる真実と嘘が私たちの現実を決定しますが、愛だけが人を他の人の影響から解放します。」

「それは墓石の言葉のように聞こえます。ジェイコブ、あなたは実際に人々が真実の影響から解放される必要があると思いますか？」

「真実も嘘もどちらも抽象的です…意見のように、それらは私たちを強くしますが、どちらも現実を曖昧にします。」

「真実でも嘘でもないとしたら、現実とは何でしょうか？」

「現実は単なる経験であり、それは抽象的でもあります。」

「ちょっと待ってください、ジェイコブ。真実には事実が含まれています、だから…」

「それでも、優れた嘘つきは、その欺瞞的な物語の中に常に事実を織り込みます。3つの嘘と1つの真実は、しばしば心をリアリズムの地点まで連れて行きます。」

「これについてはあなたは正気を失ったようです。」

「半分知恵があるかどうかに関係なく、真実ではなく愛が、受容を拘束する要素である」とマーリーは主張した。

「偽りの中に愛はあり得るのか？」

「そのとおりです。相手の感情を和らげることが欺瞞に値するという『白い嘘』について聞いたことがありますか?」

「それが単なるお楽しみであることは誰もが知っています。」

「それで欺瞞が解けるわけではない。」

「人類は常に流砂の中を歩き、何があっても非難されているように感じます。」

「何があっても救われた。それが現実だ。なぜなら、モグリフィケーションを遅らせているのは流砂ではなく、過剰なプライドだからだ」とマーリーは訂正した。

お別れホームにいる人は除く。

「そして彼らはその選択をしました、エベネザー」

「選択肢のない選択は選択肢ではない。」

マーリーは同意してうなずいた。女性嫌いを乗り越えるにつれ、スクルージは自分に命を与えてくれたが養ってくれなかつた母親のことを思い出した。そして、彼に養いを与えてくれたがやはり命を奪われた妹のファニーのことを思い出した。どちらも彼の存在の始まりとなった女性の思い出だ。生涯を通して、彼らの死の困難はスクルージにとって個人的な強さへと発展しました。彼はいつも彼らの目に見えない仲間やサポートを感じていましたが、今では彼らを失ったことで悲しみを感じ、負担を感じるだけでした。

巣の上のアビスが受け入れを引き起こしたのと同じくらい、実際の巣は凶悪な破壊をもたらしました。次の洞窟はそれほど混雑していませんでした。そこには2つの魂しかいなかつたのですが、その2つは...邪悪な残虐行為を行っていました。しかし、それはキッチンテーブルのシーンの衝撃ではありませんでした。二人のジェームズ・マクシーが、一人がうずくまり、もう一人が攻撃するのを見る恐怖がスクルージの行動を止めた。

ジェームズは拳をテーブルに叩きつけ、「自分が少し偽物だと思う？ コインをくれ！」とジェームズの顔に向かって叫んだ。縮こまつたジェームズはゆっくりと偽コインをテーブルの上に置くと、攻撃的なジェームズはコインをひったくって獲物の耳元でこうさきやいた。彼はコインを見て、「このコインには金属の価値がない」と付け加えた。それをテーブルに投げ戻すと、邪悪な者は後ずさりしましたが、ほんの一瞬でした。次の瞬間、リピートへの道が開けましたが、今度は二人のジェームズの役割が逆転しました。従順だったジェームズが攻撃者に変わったのに対し、以前は好戦的だったジェームズは攻撃されることを覚悟していた。

スクルージはマーリーを見つめた。友人の顔にわずかな笑みが浮かんだので、彼は尋ねた、「彼らの行動でどんな混乱が治るでしょうか？」

「共感力の欠如」マーリーが説明する間、スクルージは頭のてっぺんを搔いた。「私たちが自分の中に生み出す恐怖よりも大きな恐怖はない。」

スクルージにはその関係が理解できなかった。「それで彼らは最大級の恐怖を望んでいるのか？」

「感情は常に行動の完璧な可能性をもたらします。」

「もう一度言いますが、究極の自己恐怖にはどんなメリットがあるのでしょうか？」

「被害者の役割を学ぶため」マーリーは、自分の説明がまたしても不十分であると感じたので、答えに焦点を合わせ直しました。「ここで見ているのは、ジェイムズが実際に起きた怒りの出来事です」彼のコントロール下にある誰か。多くの場合、最初の犠牲者は、怒りの精神を表現した別の人物に置き換えられます。」

「なぜ？」

「共感。被害者であるジェームズは、抑圧者であるジェームズの心の中にあるものを正確に知っています…そしてお互いがお互いを知っているので、そのテーブルに叩きつけられているのはコインや夜間の泥棒に関するものではありません。」

「彼の考えはノアにしたことと近いのでしょうか？」

「その通りです。今、あの気弱なジェームスは命の危険にさらされています。」

「この一連の出来事は終わるのでしょうか？」

「はい、もちろんですが、ジェームズ夫妻がどちらも被害者にも加害者にもなりたくないということに同意した場合に限ります。」

「どうやら…」スクルージはよろめいて考えを見つけたが、「弱い」とだけ言った。

二人は何十もの洞窟を通り過ぎ、ついにノアの前に立った。血にまみれながらも、ノアは洞窟への侵入者を認めるため、屠殺の任務に躊躇しませんでした。ジェームズ・マクシーから次へと、彼は自分自身の存在を終わらせたのと同じニューゲートのバーに悪役の頭を叩きつけました。その後、ノアも自分と同じように、囚人が作った棘に手首を押し付け、洞窟の境界を越えて血を噴き出させた。一人のマクシーが死にそうにうめき声を上げると、もう一人のマクシーが現れ、ノアは殺人を繰り返した。あっという間に、十数匹の瀕死のマクシーが囮いの鉄格子からぶら下がっていた。血は洞窟の色だった。

打ちのめされたマーリーは倒れた。スクルージの足元に横たわると、彼が今まで背負っていたすべての鎖が戻ってきました。「それは呪いだ」と彼はつぶやいた。

「ジェイコブ、あなたの窮状…」マーリーが自分の束縛に慣れるのを見ながら、スクルージの声は枯れた。

それぞれが個人的な危機の中で静まり返ったとき、マーリーの胸は高鳴った。収容されていたすべてのファイヤートワラーが爆発し、その結果彼は束縛から解放されました。彼は立ち上がってスクルージに指示した、「下がってください。アリトの呪いには容赦がありません。」

「あなたは、私を救うためにファイヤートワラーを使うとテントに約束しました。」

「私はあなたを助けています。私なしで巣穴から出でもらえませんか？」マーリーは待ったが、少し前に再び命令した、「さあ、下がってください。ノアは予測不可能です。」

「ノアは完全になれるのか？」

「呪いとは、多くの有罪判決を受けた無実の人々を不当な扱いに縛り付ける苦難である。ノアは法廷の恥辱から逃れようと奮闘する。」

「ということは、ノアの焦点はジェームズ・マクシーを殺害したいことではないということですか？」

「ああ、彼は彼を殺したいと思っていますが、その原動力は私が彼に課した政府による虐待です。」

「では、なぜあなたは殺されないのでですか？」

「彼は私の関与について何も知りません。しかし、ノアを束縛したのは王国からの支配であるため、いずれにせよそれは彼を助けることはないかもしれません。アリトの呪いは不正義の重力です。一方、彼に対する私の反逆は彼ではなく私を締め付けるのです。」

「それでは、どうすればこの重い手を終わらせることができるのでしょうか？アリトと対峙しなければならないのか？」

「彼は確かにクレーターの中に住んでおり、トランスマグリファイの呪いは彼のそこへの監禁に結びついています…しかし、2世紀近くの間、誰もアリトに目を向けることはありませんでした。」

「なぜ？」

「彼は自分自身に正義を与えた。」

「自己正義？それは神秘的です。すべての精霊は受け入れられるか、瞬間的な変身によって消滅するかのどちらかだと思っていました。」

「アリトは1600年代後半のクリスマスの日に親友のマシュー・ヘイルを訪ねた後に亡くなった。彼の絡み合いにより、自ら作り出した2つのスピリットが解放され、クレー

ターに向かいました。二人ともとても気難しくて、コスが形成されている棚にお互いが登ることを許しませんでした。」

「同じモグ体内に 2 つの魂を持つ人がいるなんて、どうしてあり得るのでしょうか？」

「傲慢さ。アリトは非常に生意氣で、無限の意識の美德の権威を主張しながら、罪のない人々に害を及ぼす 2 つの異なる正当化と 2 つの方法を作り出した。」そして、マーリーは弁護士の卑劣さを強調するために、「子供たちでさえ彼の悪質な怒りから安全ではなかった。」と締めくくった。

「それで彼は今、クレーターの中で苦しんでいるのですか？」

「彼の魂は現在、お互いを炎の湖の底に閉じ込めています。」

「一方がもう一方を解放することはあるだろうか？」

マーリーは質問で答えた。「無限には時間の制約があるのか？」

「Transmogrify に時間がなければ…無限はありません。」

「エベネザー、あなたは学んでいるが、それは放っておいてください。これらの問題は複雑すぎます…そして私たちには課題があります。」

「そこから離れろって言うの…その上に飛び乗りたくなるよ。」

「そうだね、それはあなたの魚にとっては良い餌だよ」とマーリーは冗談めかして言った。

「それで、ノアを助けるにはどうすればいいでしょうか？」

「彼に真実を話してください。」マーリーはスクルージを見つめ、それから認めた。「あなたが私のためにそうしてくれたらいいのに、でも彼は私の真実を聞かなければなりません…私から。」

「それでアリトの呪いは解けるの？」

「呪いが今彼を縛り付けているが、真実は自由への道を照らしている。私たちはノアがトランク状態から抜け出すのを手助けする必要があります。そうして初めて、彼は道の光を見ることができるでしょう。」

「真実はそんなに強力ですか？」

「虚偽の事実がない場合に限ります。」

マーリーはノアに近づきましたが、兄弟からは認識されませんでした。代わりに、ノアは目の前に立っている二人に目を上げ、血をシューシューと吐きかけました。

**** ステープ 9 ****

ストレスフルな配達人 CE

体が反り返り、スクルージは後ろにつまずき、ノアはマーリーの幽霊のような姿に血を吹き飛ばした。マーリーは恐怖のあまり叫びながら、「愛しています」と懇願した。

ノアはまたもやゴアの洪水をシューッという音を立てて放った。

「私は今でもあなたを愛しています」とマーリーは主張した。

しかし再び、ノアの影の血がマーレに流れ込んだ。

スクルージは仰向けに寝転び、「嘘つきの事実」とささやいた。

マーリーさんは友人に向かって体をくねらせながら、「私は真実を話している」と主張した。

「もしかしたら頭の中かもしれない——心で話してください、ジェイコブ。」

「まったく、私はまったく話すつもりはありません。」そう言って、マーリーは兄の手からマクシーを押しのけ、自分の腕をノアの手に置きました。誰かが状況を変える前に、ノアは兄の手首をバーブの上に引きずりました。赤い液体がその地域に飛び散る中、マーリーさんはいくつかの柵のピケットを越えて手を伸ばし、もう一方の手首を引きずって2番目のとげを越えた。マーリーは複数のバーの空間に広がり、荒れ果てた手首からぶら下がっていた。ノアは後ずさりした。

「心を込めて」とスクルージはアドバイスした。

「私はあなたにこれをしました。」ノアはもう見覚えのない弟をただ見つめていた。マーリーはあごを胸に当てて叫びました。「ノア、私が金を盗んだ——私があなたにこんなことをしたのよ！」

混乱したノアはただ「お金？」と尋ねました。

「プレッシーとバークレーの店…クリスマスイブ。私はあなたを裏切りました、ノア。」

警戒心を欠いたノアは弟の胸に腕を突っ込み、心臓を閉じ込めている鎖を掴み、それから猛烈にそれを幽靈から引き離した。その瞬間、マーリーは消え去った。ノアは獣のように金切り声を上げながら鎖を高く掲げ、意図を持ってそれをスクルージに投げつけた。スクルージはアイアンをかろうじて避け、それが自分の真後ろに着地するのを見つめた。彼は驚いて、ぴくぴく動く金属から飛び降りた。マーリーの姿はどこにもなかった。

「クソ野郎！」あらゆる方向を見回すと、マーリーが消えてしまったように見えたので、スクルージはパニックに陥りました。「ジェイコブ、私を見捨てないでください！」

「嵐を静めてください、エベネザー」マーリーは胸に手を当てて言った。「この負担を調整させてください。」スクルージの隣に移動して、「それは恐ろしい経験だった」と付け加えた。

「なかなかうまくいかないですよね？」

「私の心を話したのはこれくらいです」とマーリーはうめき声を上げた。

「何か新しいアドバイスが欲しいですか？」

「あなたの最後の話は役に立ちませんでしたが、私には解決策がありません。それで当然です、エベネザー、どうやってノアを落ち着かせるでしょうか？」

「私は、死後の出来事があなたの真実を語ることを決定することを許可します。」

「出来事は？ノアはその出来事を生きたんだ、エベネザー。なぜ私が再びあの扉を通らなければならないの？」

「なぜなら、ノアはそのイベントのドアの敷居の中に閉じ込められているからです。あなたは彼をそこから引き抜く必要があります。彼はあなたの理解、つまりあなたの理解を必要としています。しかし、それが彼の心の中で話された場合にのみ、彼はそれを吸収します。」

それで、彼の『考え方』に合う言葉が見つからなかったら……？

「あなたの兄弟に連絡するための鍵は、彼のアプローチに入ることです。彼はそこに根ざしているからです。そうして初めて、ノアはあなたの事実を聞くことができます、ジェイコブ。そうして初めて、彼はあなたを信頼し始めるでしょう。」

「それで、この『新しい』アドバイスが良いアドバイスかどうか知っていますか？」

「これまで疑う人、そしてあなたの救済策はジェイコブですか？」

考えを熟考した後、幽霊は「あなたの提案は試してみても害にはならないと思います、だから…」と認め、それからマーリーは一瞬も経たずにノアに向かってフックにぶら下がりました。彼の手首が洞窟中に異様な血の霧を吹きかけている間、マーリーは胸から頸を上げ、「生気のない体の周囲での虐殺と、フローラの嘆きの叫び…」と叫び、マーリーが言葉を探していると、ノアがマーリーの喉を掴んだ。

スクルージに野蛮な視線を投げかけ、ノアはすぐにマーリーに焦点を合わせた。ノアは弟を抱きかかえたまま、ヤコブの顔に息を吹きかけた。「あなたがその原因を作ったと聞きました。」

「それは私の人生で最悪の間違いでした。」

"いいえ！"ノアは弟の首を強く握りながら、「人生最悪の間違いだった！」と叫びました。

「ノア、私はあらゆる面であなたの名誉を打ち砕きました。」

「あなたは私を打ちのめしました！」ノアは頭を後ろに振り、次に横に振り、最後には弟の顔に深く突き付けながら叫びました。「名誉、名誉は貴族の特権だ。私は正義のために闘う。」と彼は唸り声を上げた。

「正義は生者のためにある、ノア。君がここでやっていることは、自分の不正義に対して抗議しているだけだ。ここには法廷も法廷弁護士も、告発される人さえいない——君自身を除いては。」

ノアはマーリーを鉄格子の奥まで押し込み、弟の心臓の鎖を掴んだ。彼はアイアンを後ろに引っ張り、3番目のとげにアイアンを引っ掛け、兄をフェンスに固定させた。

マーリーは兄の怒りをリラックスして受け入れた。地面からぶら下がりながら、目を上げてノアと目を合わせると、弟の怒りの炎を見つめながら、静かにこう言った。「あなたを再び元気にするために、他人ができることは何もありません。」

ノアはマーリーの首を掴んでいた手を放し、怒りで咆哮を上げ、真実を語った。「あなたはいつも無価値でした、ジェイコブ。」

「ノア、あなたはみんなの犠牲者だったのよ」

「しかし、ほとんどはあなたのものです。」

「はい、はい、私はあなたを破壊しました、しかし、あなた自身を救わなければならぬのはあなたです。」

「言葉……意味のない言葉を言うんだね」

「それでは、この言葉を聞いてください、ノア。あなたにはこの恐怖から解放されるべきなのに、それにしがみついているのです。」

「私は自分の存在の中にある力に固執します。」

「それにもかかわらず、この巣穴のせいで、あなたはアウトリーチの任務を忘れてしまいました。それは何でしたか？」

ノアは記憶を探るために立ち止まり、「私は一度も作ったことがない」と言いました。

「いいえ、あなたはここにいます…だからあなたはそれを作りました。覚えてる？」

「復讐したい！」

「それなら私を無限に殺してください、それでも正義はまだあなたにとって幻想にすぎません。」マーリーさんは兄の考えを待ちましたが、何も提案されなかつたので、「被害者を釈放しなければなりません。彼らの利益のためではなく、あなたは彼らの行為から解放されるに値するからです。」

「私には復讐に値する！」

「確かに。私があなたに提供できる最大の復讐は、即時変身を要求することです。私の排除によって君はある程度の満足を得られるかもしれないが、それでもそのような行為によって正義が君のものになるわけではない。」

ノアはマーリーの口を手で押さえた。「もう一度考えてください、そうすればあなたのハートの鎖を盗んであげます。そうすればあなたは忘却の中に迷い込み、即時変身では決して救うことができないでしょう。」

恐怖のあまり、マーリーは死んだときと同じようにじっとしていましたが、ノアの目は弟の顔の恐怖を通してギラギラと輝いていました。ノアは、思いやりの心を見つめ返してきたことに嫌悪感を抱き、激怒した。彼が弟の口に積極的に手を押し付けると、マーリーさんは掴んだ手のひらにキスをして応じた。すかさずノアはマーリーの顔から唇を引きはがした。困惑した彼は、震える幽霊のような肉の塊を手から蒸発させながら後ずさりした。マーリーは、ストイックなままだった。

兄弟の頬から同時に一粒ずつ涙がこぼれると、ノアはマーリーに向かって突進した。
「なぜ私にこんなことをしたのですか？」

「エベネザーのパートナーになるには金が必要だった」と彼はスクルージに頭を向けながら言った。

ノアはスクルージに向かって動きました。「お金を取ったの？」

「それがあなたのものだとは知りませんでした。」ノアから後ずさりしながら、スクルージは逃げたいという衝動を感じましたが、どこへ？

「ということは、こんなことをしたのはあなただ」とノアはスクルージに降り立ちながら言った。スクルージが弁護の言葉を発する前に、ノアは彼を攻撃した。喉を掴んで、彼はスクルージを部屋の向こう側に投げ飛ばした。その筋肉は、通常は精気のないものだった。巣窟の壁にぶつかり、スクルージはゆっくりと地面に沈んだ。彼が座る姿勢に戻る前に、ノアは再び彼の上にやって来ました-今度は痛みを引き起こしたいという願望がありました。

「なぜここにいるのですか？「あなたには生きる資格はない。」そう言って彼はスクルージの首を地面から持ち上げた。スクルージは自由を求めて奮闘しながら全身の筋肉を締めた。ノアは猛烈な勢いでスクルージのうなじを壁に平らに押しつけたため、スクルージは意識を失った。スクルージがぐったりしていると、ノアはさらに強く押した。

マーリーはフェンスからぶら下がり、自分自身を解放しようとした。両手首をフックから引きちぎり、鎖を縛っているフックが曲がらない中、彼は前後にバタバタした。
「ノア、やめて…」

次の瞬間、まるで稻妻が巣穴を襲ったかのように、アプルトがノアとスクルージの間に立った。頸の間でノアの前腕が振り回され、怒りで何でも掴もうとする意図で指が出し入れされていた。ノアは失われた腕の位置を見つめた。その衝撃で幽霊は精神的に崩壊してしまいました。目を閉じて崩れ落ち始めると、マーリーは「そばにいて、ノア」と呼び、アプルトに「兄の腕を飲み込まないで！」と指示した。

ノアは目を開けると、すぐにアプルトを追いかけた。「返せ、この怪物め」ノアは動物のほんの数インチ後ろを走っていたので、避けようとしていた動物をつかみましたが、逃してしまいました。

ノアがアプルトを追い続いていると、マーリーはスクルージに「まだ一緒にいるの、エベネザー？」と呼びかけた。

スクルージは気を引き締めて、「攻撃の強さを考えれば十分だ」と答えた。

「ノアが戻ってくる前に私をこの問題から解放してください。」

数歩前進すると、スクルージはぶら下がっている友人の前に立った。スクルージがマーリーを解放する方法を熟考していると、アプルトはついにノアの腕を落とした。最初、スクルージは人間を解放するために誰もがするようなことをしました…ただ彼を持ち上げて柵のとげを越えただけでした。しかし、マーリーは人間ではなかった。スクルージがマーリーの腕を掴んだとき、彼の手はまさに靈魂を通り抜けたからだ。「鎖を掴め」とマーリーが指示した。

「胸の中に手を入れてということですか？」

「エベネザー、私はあなたの体全体の中にいました。ノアが戻ってくる前に、急いで手を伸ばしてください。」

スクルージがマーリーの心臓に取り付けられた半固体の指輪をしづしづ掴むと、ノアは人間の肩を掴み、次の瞬間には3人全員が体を動かした。スクルージが脅迫的な掴みから解放されると、マーリーは束縛から解放され、ノアはただ当惑して立ち尽くした…誰に危害を加えるべきか考えていた。

マーリーは用心深くノアの体を包みました。胴体が絡み合うと、ノアの怒りは和らぎました。マーリーは弟の心を落ち着かせて慰められ、共有空間の感覚にしがみつきました。抱擁の熱さを吸収しながら、マーリーはノアの耳元で「あなたのアウトリーチの任務を教えてください」とささやきました。

ノアはミサを緊張させた彼の魂は弟の支配から引き離され、「フローラ…フローラだけよ」と言いました。

「それは十分に大きな任務です。」マーリーは立ち止まり、「その任務に取り組む準備はできていますか、それとも私をもう一度殺しますか？」と尋ねました。

「あなたには当然のことだ」とノアは微笑んだ。

「確かに稼いだよ」とマーリーも同意した。「しかし、フローラは私たちを必要としています。」

「あなたは必要ありません。」ノアはスクルージの方を向き、「私はエベネザーを選びますが、弟よ、あなたは決して信用しません。」と言いました。

「それでは私も二人の後ろについていきます」

「いいえ、あなたは私たちの前を歩きます。」

スクルージが「それで、どうやってこの巣穴から出られるの？」と尋ねるまで、相互の合意は二人を沈黙させた。

「私たちがそれを離れるのではなく、それが私たちを離れるのです。」

スクルージはそれが何を意味するのか理解しようとして額にしわを寄せた。最初は夢の中にいるのではないかと思いました。マーリーが3人を取り囲む長さまで腕を伸ばしたとき、彼は目を覚ますというオプションがあるかどうか疑問に思っていました。マーリーの腕がトリオを一つの存在に束ねると、巣穴は暗くなり始め、一緒に地面から持ち上げられました。上昇する動作は浮遊する感覚ではなく、落下するという意識を与えました。上向きに、それらは重力の影響を超える速度で落下しました。

ポイントよりもさらに暗さが増していき、スクルージは震え始めた。彼が恐怖で体を震わせていると、ノアは彼にささやきました。「あなたの恐怖が私を傷つけているのです。」

「エベネザー、トランスマグリファイでは何も恐れる必要はありません。アプルトはそれを証明しました」とマーリー氏は説明した。

「アプルト…」スクルージはつぶやいた、「そうだね…」そう理解して彼は慎重にリラックスした。

猛烈な勢いで上に倒れ、マーリーの腕の鎖が緩み、3人が回転し始めた。どんどんきつくなつて、彼らは縮む空間の中で渦を巻いた。大渦のように、円を描く力がトリオをねじれ始めた。スクルージは、生存の限界を超えて彼の姿が自らの周りを回転しながらうめき声を上げた。くるくる回りながら、マーリーはノアの耳元で「三人がいるにはスペースが足りないよ」とささやいた。ノアはうめき声を上げて兄を無視したので、マーリーは「私たち二人ともスクルージの家に行かなければなりません。」と言いました。

「そうですか？なぜですか？」

「私は彼を生かしておきたいからです。助けてくれますか、それともエベネザーを滅ぼすほど私を憎んでいますか？」

ノアは間髪入れずにスクルージの奥深くまで押し込み、以前は兄の腕が三人を一つに抱きしめていた場所に隙間を残した。マーリーはノアを追ってスクルージの体内に入った。

幽霊がスクルージの中に消えても、人間の姿は歪み続けました。足と頭が異なる速度で回転する中、スクルージはストレスで気を失い、痛みで叫び声を上げた。三人が渦の速さで回転する中、マーリーとノアはスクルージのぐったりとした体を制御しようとした

。彼らの螺旋は道に穴を開け、そこから彼らは進入した。スクルージは変形して倒れた。

ノアはスクルージに触れなくても、スクルージが死んだことを知った。真実を恐れたマーリーは、友人を振り戻しようとあらゆる手を尽くしましたが、彼には力がありませんでした。スクルージは耳、鼻、口から血を流しながら道路に体をよじって横たわっていた。彼の開いた目は友人たちに焦点を合わせることなくにらみつけていた。マーリーがスクルージを膝の上に引き寄せると、彼は悲しみのすすり泣きをしながら失敗に屈した。

体を震わせながら泣いたマーリーは、首にアプルトの息がかかっているのにかろうじて気づいた。獣は静かにうなり声を上げた、「やあ、やあ、やあ」。

マーリーは友人のバラバラになった死体を掴みながら不安が爆発した。「だめ！ 絶対にだめ！ あなたを倒すことは許さないよ、エベネザー！」

「やあああ！ やあああああ！」アプルトは咆哮を上げながらマーリーを突き進み、スクルージの碎かれた肉体の上に落ち着いた。

マーリーはアプルトに襲い掛かった。「絶対にないって言ったのに！」

二人が死んだ人間を制御しようと奮闘している間、ノアは焦点を失い、壊れた魂のプールに向かって歩き始めました。混乱したマーリーはノアに呼びかけた、「救わなければ…」戦闘が中断されたことで、アプルトはマーリーをスクルージから突き飛ばす集中力を手に入れた。

マーリーが争いから転がり落ちる間、アプルトがスクルージの上で四つん這いで立っている間、ノアはあてもなく道を歩いていた。アプルトは背中を反らせ、お腹を内外にうねらせ始めた。腸内の吸引により、胆汁が喉に流れ込みました。アプルトは何の警告もなく、消費されたクレーターの頭蓋骨から作られた濁ったアクセプタンスをスクルージに吐き出した。液体はスクルージの顔の開口部に流れ込みました。蒸発しつつあるアクセプタンスの上に楽しい音楽の音が漂うと、スクルージはけいれんを始め、それから耐え難い苦痛が始まりました。

拷問のような叫び声がトランスマグリファイ中に響き渡った。動きがちらつくたびに、スクルージは耐え難い苦痛の声を上げた。「放っておいて」彼は遠吠えの合間に息を呑んだ。アプルトは、スクルージがその生き物を彼から押しのけ始めたとき、スクルージに受け入れを吐き続けました。「この痛み！ 野獣よ、放っておいて！」

アプルトは彼の受容の爆発を止めた。スクルージが動物から解放されようと身をくねらせている間に、アプルトは倒れてしまった。獣の下敷きになったスクルージの唯一の動きは、耳をつんざくようなパニックの動きだけだった。

ノアが道をさまよい続ける間、ジェイコブは二人がサバイバルに包まれているのを見ていた。ゆっくりと、アプルトのストライプのそれぞれが光よりも明るい輝きが生まれました。彼の肩と尾の両方にある最も小さな縞模様が照明を開始しました。その後、隣接する各ストライプが輝きを増し続けました。一瞬のうちに、アプルトは明るい暖かさの塊になりました。これでスクルージは落ち着き、リラックスして癒しに入ることができました。

最初はエネルギーがスクルージに強制されましたが、一度それが何であるかを認識すると、スクルージはアプルトから癒しを引き出し始めました。エネルギーの流出がスクルージの蘇生を終えると、アプルトは弱ってしまった。スクルージが立ち上がる間、スクルージとマーリーは、アプルトの体がスクルージを止めたのと同じねじれや歪みを示し始めるのを眺めた。

スクルージは亡くなった救助者に寄りかかり、「なぜ彼はこんなことをしたのですか?」と尋ねた。

「私には動物の心が分かりません、エベネザーですが、彼は…飼育員だったのです。」

「どうすれば彼を救えるでしょうか?」

疑問が解ける前に、耳をつんざくような拍手が Transmogrify 中に響き渡った。そして、ティントから「アプルト、今ここに」という轟音が響いた。指令内の力は非常に大きく鳴り響き、破壊的衝動のフィールド内の木々がスパイクを投げ始めました。木の槍が道路を横切って飛んでいくと、マーリーとスクルージは両方とも危険を回避しようとしましたが、ノアはすべてを知らないようでした。

何十もの棘が彼ら全員に刺さりました。マーリーはそれが来ることを知っていたので、スクルージを守ることだけに努めましたが、ノアはスパイクが飛び散るたびにうめき声を上げるだけでした。スクルージは木の 3 つの武器で攻撃されましたが、どれも彼に害を与えませんでした。代わりに、彼らはあたかも彼も…精神でできているかのように通り過ぎました。

「なぜ血まみれになっていないのですか?」マーリーはスパイクが作った出入り口の穴を一つ一つ調べながら尋ねた。それぞれの出口穴からは一滴の血が滴り落ちた。マーリーはスクルージから一歩下がり、彼を上から下まで見つめてから、「あなたは今は違います。」と言いました。

「私も同じように感じます。」

「それでも、あなたの肌はもはや肉色ではありません。しかし……しかし……それは紫色に輝いています。」

「光る？」

どちらかというとラベンダー色かな。

「私の色はおそらく重要ではありませんが、アプルトの人生は重要です。」二人が道路上の死体が横たわっているはずの場所に目を向けると、何も残っていなかった。「彼はどこへ行ったの？」

「ティントと一緒に？ 分かりません、エベネザー。彼があなたを救ってくれて本当に良かったです。」

「いいえ、このやり取りには満足していません、ジェイコブ。」

「でも、もしかしたら彼はそうなのかもしれない。」

「ここにいる間、私はすべての知識から消去されるはずだったのだろうか？」

「そうですね、あなたはまだここから出ていませんし、アプルトは今後も利用できないようです。だから、おそらくあなたは完全に破滅する運命にあるのでしょうか。しかし、私はあなたにそれを起こさせるつもりはありません、エベネザー。」

「これについてどう思いますか、ジェイコブ？」

マーリーはその質問について考えてから、「何も持っていないが、自分の言葉は守るつもりだ」と答えた。

「それでは、ノアの何が問題なのか調べてみましょう。」

彼らが歩いていると、沈黙が彼らの考えを捉えた。スクルージは話そうと口を開いたが、心の霧が彼の舌を静めた。一方、マーリーは不安感に負けた。破壊的衝動の領域を通る道は非常に広大で、ほぼ無限に近いように見えましたが、マーリーは即座にノアの居場所を見つけることができました。

彼らが彼に近づくと、スクルージは異常に気づきました。「なぜ彼は動かないのですか？」

「ノアは時計の長針のように動いているようですが、それでも体を動かします」とマーリーは断言した。

動かないノアに近づくと、マーリーは「これがまたアリトの呪いを引き起こしたものだ」と叫びました。

「デンでそれを超えたノアを手に入れたと思った。」

「私たちは彼の脳の心を解放しましたが、心の心は...その苦しみはまだ残っています。」

「心は複数ですか？」

「実のところ、心の考えは、脳が心に伝えるよりも多くのことを脳に明らかにします。」次にスクルージに尋ねるべきことを強調するために、マーリーは立ち止まり、最後にこう言った。「私一人ではノアを連れ戻すことはできません。この呪いは私の力を超えていますが、一緒に...私たちと一緒に...私たちは彼の心のシステムを再接続することができます。」

「それで、ついに私が必要になったのですか？」

「エベネザー、あなたは自分がどれだけ価値があるのか分かっていないのです。ノアはあなたが自分の価値をもう少し与えてほしいだけなのです。」

「できれば。」

彼らは心配そうに、ほとんど動かないノアに近づきました。次の行動は彼を解放するか、巣穴に送り返すことになるだろう。「エベネザー、私が彼を私たちの瞬間に連れて行く間、ノアの背中に受容を流し込んでください。」

「受け入れますか？ 私は死んでいますか？」

「あなたは変わったようですが、いいえ、まだ生きています、エベネザー」

「では、ノアに承認を届けるにはどうすればよいでしょうか？」

「死と受容は、変容のプロセスによって結び付けられるものではありません。受容は最も優れた人間の資質から生み出されます。」

スクルージは首を左右に振り、「アプルト…」とつぶやいた。ちょうどアプルトが吐いた「受容」ですぶ濡れになったことを思い出した。

マーリーは友人の混乱を察知して、「アプルトのアクセプタンスは液化した頭蓋骨で構成されていたわけではない。彼のアクセプタンスのスプレーは圧縮された治癒だった。どうやら彼の体は回復を完了することができたようだ」と明言した。排尿。クレーターにいる人たちにとっては朗報だと思います...ただし、彼らがまだ即時変身を求めていない場合に限ります。」

「私には、胃の内容物を…癒しに変えるような身体的な力はありません。では、どうすれば承認を作成できるのでしょうか?」

「エベネザー、あらゆる存在は感情を目覚めさせる能力を持っています。それは創造主の贈り物であり、人類の義務です。」

「義務？」

「無限の意識の目から見て、神聖な体験を通じて愛を呼び覚ますこと…それが私たちの唯一の要件です。」マーリーは立ち止まり、スクルージの目を見つめてから、「誰を一番愛しているの、エベネザー？」と尋ねた。

「誰も」

「もちろんあなたは愛していますよ。その品質はあなたの個性の中にあります。」

「正直に言うと、ジェイコブ、私は他人を愛していません。」

「これは私にとって謎です、エベネザー。愛のないあなたの善行を説明してください。」

「私はお金が大好きでした。富こそが私の価値だった。しかし、クリスマスイブにあなたが初めて訪れた後、私は生きているだけでとてもうれしく思いました。」

「つまり、それはあなたの靈の中にある感謝であり、愛ではありません。完璧だ！」

「完璧？」

「愛は人間にとて最も簡単に発動できる性質であり、それは存在から存在へと受け継がれるからです。しかし、感謝は人から無限の意識に直接伝わる性質、またはエネルギーです。」

「これは私にとって実に理にかなっています、ジェイコブ」

「この性質のため、感謝は愛よりも大きな力を持っていますが、喜びほど恐ろしいものではありません。」マーリーはスクルージに微笑みながら、「友よ、君はもうすぐ第二の子供時代を迎えようとしているようだな」と冗談を言った。

スクルージはニヤリと笑いたかったが、「第二の子供時代」という概念が反射的に顔をしかめた。「子供のような力がどのようにしてノアを救うのか理解するのが難しいです。」

「そんな重荷を負わないでください、エベネザー。ただ方法があることに感謝してください。」

「それが私が得意になったことのようです…感謝すること。」

「ノアの後ろに立ってほしい。」スクルージが指示通りにすると、マーリーは続けた。
「左手を自分の心臓の上に置き、右腕をノアの背中に触れるくらいまで伸ばします。」

スクルージは指示どおりに行動すると、マーリーは「目を閉じてください、エベネザー。頭を下げてください。今、人生に二度目のチャンスを与えられたときの気持ちを思い出して心を満たしてください。撫でて、増幅して、その不思議。止められなくなったら、電荷を流すようにしてください。」

スクルージが思考の感覚を胸に移すと、高揚感の震えが支配した。目を閉じると、手のひらの中に熱が伝わってくるのを感じた。ノアを強化するために必要なエネルギーが幽霊の背中に向かって湧き出し始める一方で、ジェイコブは弟の前に身を置きました。突然、彼はマーリー兄弟のいづれかと同じくらい背が高く、さらにエレガントな女性に変身しました。

「あなたの熾天使の勝利がやって来ました、ノア。」

ノアはその宣言を聞きましたが、その考えを認めませんでした。スクルージは閉じた目を通して、精神集中の温もりが手からノアに流れ込んでいるのを感じた。幽霊の鼓動する器官が感謝で満たされ、すぐに輝き始めました。しかし、思考構造全体を照らす代わりに、そのエネルギーはスクルージの手のひらに跳ね返り始めました。

「もっと頑張れよ、エベネザー」とノアに向かって女性が要求した。「心は輝きに満ちているのに……」男らしくない者はノアに歩み寄り、右手を動かない胸の中心に置き、左手をノアの頭頂部に置いた。女は目を閉じて左手を上に引き上げた。光がノアの心に爆発し、彼の物質全体を照らしました。しかし、彼は自分の体の変化を認識する動きをしませんでした。

「あなたは私の初めての生まれです。」

そう言ってノアは顔を上げ、「ママ？」とささやきました。

「目を開けてください、息子よ。」家長が続ける間、ノアは黙って従った。「あなたは苦しんできました、あなたは今も苦しんでいます…それでもあなたの熾天使の勝利が到来しました。」

「セラ……何？」ノアは尋ねた。

「あなたの神聖な遺産となる能力。」

「私は正義が欲しいのです」とノアは叫びました。

「ここには判事はいない。」スクルージの力が静止した精神に自由に流れ込む中、母親の模倣者は説明を続けた。「この道を旅する者は皆、回復を得る。クレーターの底でうごめくアリトの二人の魂も、やがて変容するだろう。彼は決してアクセプタンスにはなれないかも知れないが、ひとたび自己の罠から逃れることができれば彼の呪いは消えるだろう。

ノアが目の前の靈から聞いたのは「いいえ」という言葉だけでした。彼は頭を下げて震え始めた。悲しみと混乱の涙があふれ出し始めると、母なる精靈としてのマーリーもスクルージも、自分の感情を内に秘めていました。スクルージはノアとの心のつながりを壊したくなかったので、目に溜まった湿気を取り除きたいという誘惑に抵抗しました。

母親はもう一度説明しようとした、「自然が人間に害を与えたとき、法律は彼らを回復させることができるのでしょうか？」動物による咬傷には裁判所の判決が必要ですか？いいえ、もちろんそうではありません。それは「正義」を叫ぶ人対人傷害だけ。頭を上げてください、ノア、あなたのリメイクの力は内にあります。」

ノアは泣き始めた。彼の乾いた涙が零れ始めると、彼の泣き声が道中に響き渡った。

再び母親の靈がノアの隣に歩み寄り、腕でノアを包み込み、唇にキスをしてから、「はい、泣いて自信喪失を捨てなさい、息子よ」と励ました。

二人が抱き合いながら、スクルージの感謝のエネルギーがついにノアの絶望を打ち破った。ノアは戸惑いながらもマーリーにキスを返した。二人の間には涙があふれ、ジェイコブは母親のイメージを制御できなくなりました。ヤコブが後ろに戻ったとき、ノアは欺瞞に気づき、弟を押しのけました。「あなたはママじゃないよ。あなたの詐欺が再び私に襲いかかります。」

スクルージが兄弟の闘いについて理解する価値があることによく気づいたとき、3人の間に氣まずい沈黙が生じた。新たな意識の強さの中で、彼は静かに言いました、「いいえ、ノア、ヤコブはあなたの救いに対して純粹な心を持っています。」

ノアは激怒し、くるりと回転してスクルージに立ち向かったが、スクルージの態度の中に溫和さを感じると、「まだ傷ついています」とだけ答えた。

マーリーがなぜ自分を必要としているのかについて確信を持ったスクルージは、自分の知恵を語った。「そして、あなたはいつでもそうかもしれません…しかし、経験の強さを自分の存在に統合すると、それは軽減されます。」

「その強さは何ですか、エベネザー？」

ノアもジェイコブもスクルージの心を知りたいと思っていました。しかし、スクルージは今ではトランスモグリファイの中で自分の価値を認識しており、依然として最も賢明な言葉を見つけるのに苦労していました。「ノア、あなたはすでにヤコブに力を与える境界線を設けています。」

「私には境界がありません」とノアは主張した。

「それでも私は境界を知っている」とマーリーは叫んだ。「ノア、あなたは私が道路であなたの前を歩くように要求しました。それがあなたをどのように強化するかはわかりませんが、それは間違いありません。」

「裏切り者を目立たせる必要がある。」

「はい、ジェイコブにそれを要求することはあなたの安全を強化します。しかし、それはあなたが自分の精神に溶け込む必要がある教訓の一つにすぎません」とスクルージは言いました。

「他は何ですか？」

「ノア、あなたが何を必要としているのかわかりませんが、熟考することはあなたに調和をもたらすでしょう。」

「私が考えたいのはフローラのことだけです。」

「それが私のアウトリーチの仕事でもあります」とマーリーさんは言いました。

「それでは、少なくとも1ハロンは私たちの前にいてください、ジェイコブ。」

「そうなるとエベネザーは立ち上がることができなくなります。」

ノアは弟に焦点を当て、ゆっくりと命令した、「私が彼の精神を平等にする者になります。あなたが私たちの間に必要な距離を置くまで、エベネザーと私はここに残ります。さあ出発だ、卑怯者の兄よ」

マーリーは兄より1ハロン、2ハロン先に進みながら何度も振り返った。ノアが必要とする距離に到達すると、ノアはスクルージに「今度はあなたにも私の前を歩いてほしい。」と言いました。

「私はあなたを傷つけましたか？」

「ありますか？」ノアは尋ねましたが、スクルージが答える前に、「いいえ、私はただあなたがどのくらいの距離で無防備になるかを知りたいだけです。」と付け加えました。

「ああ、それは簡単だ」スクルージはある場所まで歩きながら言い、立ち止まってノアを振り返り、そしてさらに一步踏み出した。スクルージは膝を曲げて衰弱し始めた。彼の足はよろめき、よろめきましたが、転倒するのではなく、制御を取り戻すまで動きました。当惑したスクルージはノアからさらに三歩離れ、直立したままにして尋ねた、「本当に私は生きているの？」

「まあ、あなたは死んではいませんよ。」

「慰めるよ、ノア、慰めるよ」

見知らぬ二人は悪党によってつながれ、壊れた魂のプールに向かって歩き始めた。どちらも、お互いが望む会話を始める方法を知りませんでした。二人は黙って歩きながら、口を揃えて口走ったが、「回復したのか？」笑顔で、そして笑いながら、それぞれが「そうかもしれない」と答えました。この言葉を聞くと、彼らは一斉に笑い、涙を流しました。

スクルージは笑いを静めた後、「私はもう十分元気なので、続けても大丈夫です」と言いました。

「私は…今でも記憶と格闘しています」とノアは認めた。ため息をつきながら、彼は説明を続けた。「私が暴力平原の部屋にいたとき、子供の頃と同じ出来事が何百回も繰り返されました。それを赦すことはできませんでしたが、最終的には吸収しました。」

「何かの邪魔なことがあなたに降りかかったのですか？」

「いいえ、そこからはほど遠いです。それは単なる考えを引き起こした出来事でした。」立ち止まって、説明を進めるために、ノアは最終的に告白しました、「あなたはそんな愚かなことを考えるでしょうが、野原を歩いているときに、私は巨大な蟻塚の頂上に足を踏み入れました。」

スクルージは会話を抑え込むつもりはなかったが、「それが特別なことだとは思わない。おそらく私は自分がやったとも知らずに、1000匹のアリを潰したことでしょう。」

「それは要点の一部だ。すべての生き物は知らず知らずのうちに害を及ぼします。何かにとって死でなければ、食べ物とは何でしょうか？」

「えっと…はい…もちろんです。それで、なぜアリの死骸があなたにそのような考えを引き起こしたのですか？」

「それは運命であり、アリが存在の外から殺され、散り散りになるという偶然の運命でした。」

「あなたは自分の死をそのように捉えていますか？」

「はい…そしていいえ。イベントは常に引き起こされますが、常に悪意があるわけではありません。それが私が理解する必要があったことです議場で。」

「では、ヤコブがあなたにしたことは憎しみに満ちた行為だと思わないのですか？」

「彼は法の外から逃げ出すアリにすぎなかった。一方、私は靴の真下にいました。」

「はい、でもジェイコブはその靴を蟻塚に持ってきました。」

「しかし、私を踏んだのは靴であり、ジェイコブではありませんでした。兄には罪はありませんが、実際に死んだことには罪はありません。」

「それで、最終的には彼を許してくれるのですか？」

ノアは「すでに信じている」と自分の決断を強調するために立ち止まり、「しかし、私は彼を二度と信頼することはないだろう」と語った。

「私も彼を信頼できるか分かりません。」

「それなのに、あなたはここにいるのね…」

スクルージは自分の状況を弁護する方法がわからず、「奇妙なことが起ったと思うよ」と冗談を言った。

「本当に……いつ？」

この質問はスクルージが答えを思いつかなかつたため、会話を一時的に終了させた。二人はマリーがプールに近づくのを見つめました。プールから突き出た金属の棒が継続的に火花を散らすと、複数の精霊が眠りから目覚めました。マリーはプールの上に浮かび始めました。彼は湧き上がる精霊、火花を散らす電柱、そして涙で満たされたプールの水面を避けるために細心の注意を払った。

「ノア、私はアリを踏んだというあなたの話をずっと考えていましたのですが、何か混乱しているのです。」とスクルージは言いました。

ノアはスクルージを見つめて、「まあ、そんなことはできないよ。Transmogrifyは、個人的な説明を得ることがすべてです。それで、あなたの頭をひっかく人を教えてください、エベネザー。」

「あなたの経験を軽視するつもりはありませんが、なぜあなたがそれを何度も追体験するのか理解できません。」スクルージは立ち止まり、深呼吸してから言った。「私の記憶の中で何度も再生される出来事は、ドラマチックだということです…完全にトラウマ的ではないにしても。」

「はい、そうです。」

「では、アリを踏むことがどのようにトラウマになったのでしょうか？つまり、あなたは裸足でしたか、それとも彼らがあなたに群がったのですか？」

「いいえ」ノアはその後のことを説明したがらなかった。それは自分の中に恥として残っているようだったからだ。

スクルージは緊張を感じながら、ノアの幽玄な前腕にそっと手を置き、それからこう言った、「私の好奇心には名誉などありません。聞いてしまってごめんなさい。」

「好奇心には名誉はないのか？」ノアは立ち止まってから言いました、「いいえ、エベネザー、名誉がないのは害を与えるものだけです。あなたの好奇心には知恵があります。」彼は前進を止めて頭を下げ、それから告白しました。そのとき、私の怒りの精神が生まれました。」ノアは激しく震え始めました。「私は…あの蟻塚を…墓地に変えました。私は激怒した…激しかった…」

「ノア、ノア！停止！苦しみを続けないでください。」

ノアは支離滅裂な言葉でスクルージを落ち着かせようとして、震え続けた。「これは解決されました…しかし、後…視界がさらに溶けます。」この言葉はスクルージを当惑させ、沈黙させた。なぜなら、その比喩が独特だったからである。2人は間隔をあけて移動を続ける中、ノアは数歩歩いた後、ようやく「緊張が解けてきた」と宣言した。感情的な強さを養うために立ち止まり、彼は告白した、「私の怒りの精神は、その怒りの行動の後に現れました。しかし、動物についての考えは私の中でもっと早くから芽生えていました。」

「ジェイコブは、あなたの猫がヘビを殺したことについて私に話しました。」

「あの蛇の死が、私に考え、考え、そして考えさせたのです。」

「ジェイコブは、それがあなた自身の死すべき運命を視界にもたらすと言いました。」

ノアはその考えを修正しながらただ笑った。「ジェイコブはそう思うでしょう。彼は動物が大好きですが…私はそうではありません」と道路を歩く足元を見つめながら、「あのヘビの死で、人間も含めてすべての動物がどれほど取るに足らないものであるかを思い知らされました」と明かした。

「人間？あなたは今、それが不真実な結論だと考えていますか？」

「そうならそうするよ、エベネザー。しかし、いいえ、私には別の人間である妻からの祝福があり、私を助けてくれました。しかし、私はすべての命は重要ではないという考え方を決して捨てませんでした。」

「ちょっと矛盾していますね？」

「パラドックスは人間の状態の一部です…人間は、私たちがパラドックスに対処できるかどうかを確認するためにここにいるだけだと思います…あるいは、おそらく私たちがパラドックスに「どのように」対処するかを確認するためにここにいます。」

「本当に冗談ですか？」

「社会的なパズルのどれにも答えがないという意味でのみ。」ノアは少し立ち止まってから、「フローラの優しさが私の怒りの心を和らげてくれたことを私は知っています。」と言いました。ノアは首を前後に振り、「しかし、私の惡意は死後、狂気を爆発させた」と結論づけた。

スクルージは後頭部を搔いてから、「人はポジティブな精神とネガティブな精神の両方を受け入れるのでしょうか？」と尋ねました。

「もちろんですが、ポジティブな精神だけで死ぬ人はほとんどいません。」ノアは近づいてくるブローケン・スピリットのプールを見渡し、「トランスマグリファイの中にいる者は皆、特にプールの中で眠っている者は価値あるスピリットを持っている。」と言いました。

「ポジティブな精神はどのようにしてモグリ化するのでしょうか？彼らはTransmogrifyにも参入するのでしょうか？」

「私はTransmogrify内ですでに浄化された精神を見たことがありません。私の知る限り、ここを旅行する人は誰もいません。」

彼らの焦点は一緒にマーリーに向けられ、マーリーはプールから立ち上る靈を避けるのに忙しかった。ノアは落ち着きを取り戻し、プールの向こう側に「ジェイコブ、フローラを見つけた？」と呼びかけました。

マーリーは、道路の向こう側から、切断されたPのダム内から電話をかけ直しました。芸術、手足がぶつかり合う音が兄の言葉をかき消した。ノアは弟にプールの端を示す手振りをした。「フローラを見つけましたか？」

「彼女は深く眠っています。」

"どういう意味ですか？"ノアは尋ねた。

"はい。"マーリーはロードに戻り、ノアの考えを完成させました。「コスの受け入れが彼女を包み込んだ。」

「私たちは彼女を救わなければなりません。ジェイコブ、急いで彼女を岸まで引き上げなければなりません。」

「もうケージが大きくなりすぎて、一人では移動できません。」

"どんな御用でしょうか？"スクルージは尋ねた。「肉体的には、おそらく私がこの中で一番強いです。」

「間違いなく、あなたの腕力が必要になるでしょう。しかし、プールの仕組みの危険性が私たちの行動をすべて制限するでしょう。」それから、マーリーは息もせずにこう付け加えた。「プールが浅いのはわかっていますが、彼女のところへ歩いて行こうとは考えないでください。」

「それは選択肢のような気がします。眠っている人たちの周りを回避できるとかなり確信しています。」

マーリーはプールの水面を指差し、「プールの液体が一滴でも肌に付いたら、心が折れるよ、エベネザー。それに、プールに立っている間にポールが引き起こす可能性のあるダメージについては話すつもりもない。」と警告した。

絶えず飛び散る火花がプールを照らしました。3人が崖の端に立っている間、ダムからの手足の衝突に合わせて爆発的な稲妻がリズムを刻んで割れた。音が周囲で組み合わされると、不協和音の反響室が生じました。

スクルージは「何か浮くことができるものはないでしょうか？」と尋ねた。

「まあ、ノアと私はただ浮いてもいいよ」とマーリーは言った。「しかし、合わせても、私たちの集団にはほとんど力がありません。それでも、これは悲惨です。コスが再び解放され、彼女をより深く悲しみに閉じ込める前に、フローラを回収する必要があります。」

「コス受容は眠っているものを生き返らせると思った。」

「はい、ただし修正が必要な魂を内に秘めた者に限ります。」

「これはわかりません。」

「これは最もまれな出来事だ、エベネザー。それには、価値ある精神だけを育んだ最も純粋な心が必要だからだ。それは地球上でどれほどユニークなことだろうか？」マーリーさんは返事を待たずにこう付け加えた。「多くの場合、人はほとんど天使のような人生を送っていますが、それでもまだモグリフィケーションが必要です。通常、母親と父親の魂はいつまでも残り、両親のエネルギーの力は生涯変えるのが最も難しいのです。」

「なぜフローラがあんな状態になったのか、まだ分かりません。」

「彼女が無限の意識に対してやったことはただ一つ…彼女は自らの命を絶った、そしてそれを自分の中にある命と結びつける…」マーリーは頭を下げた、なぜならフローラの終焉への道を作ったのは自分だとわかっていたからだ。「フローラは病人に対してとても慈善活動をしていました。彼女は近所の賢い女性組織を作りました。彼女自身もそのような才能に恵まれていましたが、あまりにも見落とされていたものを実現させたのです。」マーリーは顔を上げ、プールの中に閉じ込められたフローラの姿を指さし、「もし私がこんなことを引き起こさなかったら、フローラは死後すぐに無限の意識に行っていただろう。彼女の最も小さな精神は勇気の一つであったが、最も偉大な精神は平和を放射していた。」と告白した。マーリーは叫びながら、「しかし、私はその平和を打ち碎いたのです！」と叫びました。

困惑したスクルージは冷静に尋ねた、「それでは、なぜコスの受け入れが彼女を目覚めさせなかつたのですか？」

「それは彼女の死の悲しみをさらに悪化させるだけです。彼女はあまりにも深く埋もれているので、コス・アクセプタンスですら彼女の打ち碎かれた精神を落ち着かせることができません。彼女の死のあらゆる要素が彼女を記憶のループの中に閉じ込んでいます。氷のひび割れ、テムズ川の凍てつく水、そして子宮内の蹴りが彼女を解放することを拒否します。」

警告もなく、コスの急襲がプールを追い越しました。金属棒からの火花が吸引力を生み出しましたが、これはアクセプタンスの解放によってのみ克服できました。コスが嘔吐すると、彼らはプールから離れました。マーリーもスクルージも、漂う霧の中から微笑み始めた。受け入れがノアに影響を与えたとしても、ノアは海岸線を歩き続けたため、それは検出できませんでした。少なくとも十数の無生物の浮遊物がプールの表面から浮き上がり始め、それぞれがさまざまな精霊に分かれ、その後、例外なく全員がその精霊

が必要とするモグに向かって移動しました。フローラに降り注いだコスの受け入れは、彼女の周りの殻を厚くするだけでした。

「それでは、これを理解させてください。」とスクルージが言いました。「彼女の善良な人生はあまりにも悲劇的に終わったので、死という出来事自体が感情的に保たれてしまったのですか？そして、これは私がまだ理解していない部分です。罪のない人だけがコスの受け入れに反応しないという考えです。ジェイコブ、それはなぜですか？」

「彼女のジレンマについて考えてみてください、エベネザー。ここに、自分の境遇に打ちのめされているこの素晴らしい存在がいます。彼女の最後の行動は最悪の行動です…そして、彼女が死につつあるとき、彼女は何をしますか？」マーリーは沈黙の効果を待って立ち止まり、「彼女は無限の意識のせいだ」と自分の質問に答えた。再び、マーリーに沈黙が訪れた。プールを見渡しながら、彼は最後にこう説明した。「フローラは、受け入れが与える安らぎを拒否しました。私たちのアウトリーチの任務だけが助けになれます…彼女を助けることができるかもしれません。」

「失敗したらどうする？」

「ノアは決して適応しないでしょう。」

「では、どうすれば勝利できるのでしょうか？」

「私にはアイデアがありません。」

ノアのステップベットマーリーとスクルージは「私には方法がある」と言いました。彼は突然振り返り、「ついて来い！」と彼らに手招きした。3人が切断された部分のダムの端まで歩いていると、山ほどの量の腕と脚がそわそわしていました…そしてそれは遊びではありませんでした。足は他の四肢を激しく蹴り飛ばし、腕は付属物を掴んでみんなの視界から追い出しました。そのやりとりは混沌とまでは言えなかった。シーン全体は、*Transmogrify* の他のシーンとは異なり、スクルージの姿全体に恐ろしい恐怖を与えました。

「スクルージ、あなたはグループの中心人物にならなければなりません」とノアが言いました。

「ノア、私はその件については30年ほど遅すぎましたが、私は助けにきました。」

ノアはスクルージの温かさに微笑み、「私たちはあなたを搾取しないように努めます。」とからかった。

「どうしたらいいでしょうか？私にも腕っ節があるのです」とマーリーは言った。

ノアは再び微笑んだが、今度は笑い声に変わった。「弟よ、馬の糞をすくっていた頃は強かったかもしれないけど、今はまるで糞のような臭いがするんだよ！」

マーリーは首を前後に振った。彼はこの種の嫌がらせを受けて当然だとわかつていましたが、それは傷つきました。彼はノアの拒絶を止めるには何をしなければならないだろうかと考えました。しかし、熟考するのは当面の義務ではないので、彼はただため息をつき、指示を待った。

「20、おそらく30の武器を集めなければなりません。それができると思いますか、エベネザー？」

「いいえ、そうは思いません。」

ノアは混乱して、「手伝いたいの？」と尋ねました。

「ためらうことなく、それでもその爪はすでに私を一度罠にはめた。アプルトがいなかつたら……ああ、アプルト……」スクルージの声は小さくなり、ただ不安を表現しようとただ空気を飲み込んだ。

「少なくとも試してみますか？」

「私が罠にはまったとき、あなたが私を救う用意ができている場合に限ります。」

「ありがとうございます、エベネザー。あなたの力が必要です。ジェイコブにも私にも、何十もの手足はおろか、一本も外す力はありません。」ノアはスクルージの肩に手を置いて、命令した。「私も一緒に行きます。その卑劣な予測を回避できるかどうか見てみましょう。」

二人で道路から降りると、ノアはマーリーに向かって叫び返した。「骨は投げてやる。骨を積み上げる誠実さがあると思うか？」

「ノア、何かを積み重ねることに正直さの要素は含まれていない」とマーリーは激怒した。

自分の嘲笑が弟を悩ませていたことを知っていたノアは、「それなら、あなたはクレーターの高さを超えて積み重なることができるはずです…特にあなたには炎の湖の中に住む者たちと同じ名譽がないのですから。」と嘲笑した。

マーリーは兄と親友が切断された部品のダムに入ったとき、ただ空気を吸っただけだった。兄の状況に対する彼の懸念は、軽蔑の言葉を発するたびに薄れていった。それでも、彼は被害者としての論理を自分に許しました。二人が手足のぶつかり合いに足

を踏み入れるのを見ながら、彼は兄が再び自分を家族として扱ってくれるだろうかと疑問に思った。

ノアはスクルージの前を歩き、道から脅威となる建造物を蹴飛ばした。スクルージが後を追うと、探索中の指が彼の足首を捕まえようとした。その感触は彼の内に震えを刺激したが、足にはなんの障害もなく通り過ぎた。「ほら、この腕は十分長そうだよ」とノアは曲げた手を指差して言った。彼はそれを山から引き抜こうとしましたが、路上にある氷のように、幽霊のような形の間の安定性を作り出すことができませんでした。

スクルージはノアの前に歩み出て腕を掴み、ほとんど力を入れずに腕を解放した。「さて、どうすればいいでしょうか？」

「少しも動かないでください」とノアはその先端を受け取り、それを弟に向かって投げました。トスを予期していなかったが、骨はマーリーを通り抜け、プール内の寝台選手に当たった。「ジェイコブ、私たちはこれらの骨がプールの底に沈むのを見るためにこれをしているわけではありません。あなたには仕事が1つあります、それさえもできません—ジェイコブ・コル？」

「ミドルネームで私を呼ぶのはやめてください。そして、私に物を投げつけないでください、ノア。最初に私に警告する先見の明があったと思いますか？」

ノアは弟を軽蔑しながら、「ヤコブをやめて、これからはコルと呼んだほうがいいかもしれない」と言いました。

「私はこの議論は好きではない」とスクルージは言った。

「そして、私はあの少年が好きではありません」とノアは弟を指して言いました。マーリーはただ耐え、心が痛んだが、心は理解していた。

スクルージの言葉は確かに兄弟たちの緊張を静めたようだった。3人は黙々とクレーターから抜け落ちた骨を集めた。幽霊の本質の欠如が置き忘れを引き起こし続けたため、この雑用はそれ自体が困難であることが判明した。最後に、巨大な腕の骨の山が収集され、プールの岸に沿って積み上げられました。スクルージにとって、これはすべて何の事故もなく起った。

二人がヤコブへの道を歩き始めたとき、スクルージはノアに尋ねました。「あなたはヤコブを赦したと言っているのに、あなたはまだ彼に対してそれほど敵意を持っています。あなたの恵みを得るためにヤコブは何をしなければなりませんか？」

「私には他人の恵みに対して責任があるでしょうか？」

「ジェイコブの怒りを避けて、自分自身のために集中したほうがよいではありませんか？」

「そうだね、でもどうやって逃げればいいの？ だって、彼はすぐそこにいるんだよ」と彼はジェイコブを指さして言った。

"何今やったの？" とジェイコブがうめき声を上げた。

「ほらほら、エベネザー、私は何を我慢しなければならないの？」ジェイコブにナイフを投げつけるような睨みを浮かべながら、ノアは言った、「それはあなたが昔にやったことではありません。私たちが季節を過ごしていた間にあなたがしたことです。」

「それはわかってるよ、ノア。私に分からるのは、この苦しみを終わらせるために何をしなければならないかということだ。」

「拷問！ 苦しめられていたのは私だった。決して、決して自分が被害者であるかのように振る舞わないでください、この哀れな生き物よ。」

「私の即時変身を求めてることで、少なくともあなたの苦しみは終わるでしょうか？」

ノアはその考えに微笑ましたが、彼のより大きな欲求が支配しました。「いいえ、フローラを救うためにあなたの助けが欲しいかもしれません」と彼は立ち止まり、狙撃した。「しかし、おそらく私が必要とするのはスクルージだけです。」

「これを止めることはできないかもしれないが、私もそれに加わりたくない」とスクルージは言った。「コスの次のリリースが来る前に、フローラを助けたいです。」

「ぜひ、腕を繋ぎましょう」

マーリーもスクルージも目の前の手足の山を見つめたが、マーリーは「どうやって？」という当然の質問に勇気を出して答えた。

「肘に指が当たる。」ノアは、必要なイメージを視界に入れていないことに気づき、ゆっくりと説明しました。「片方の手を取り、次の腕の肘をつかんでください。そうすれば、フローラに到達するまで手足を接続することを繰り返すだけです。」

「片方の手で肘を放したらどうなるでしょうか？」

ノアはダムの上で手を振るだけで、「私たちは必要な資源をすべて持っています。」と答えました。

手に何かを掴む過程が、彼らの存在意義に近いように思えた。一度結合した指は硬くなり、ほとんど離れることができなくなりました。腕がフローラに届くまで伸びは続きました。この時点で、計画が何であるかは明らかになつたため、3人の間では位置関係のみが伝達されました。ノアは伸びた腕を引いてフローラのもとへ飛び出した。スクルージもマーリーもロードから最後のエルボーを構えた。

指を前後に曲げながら、ノアはその手を、硬化したコス・アクセプタンスが存在しない唯一の場所、ドレスの襟の後ろ中央に結びつけました。彼が指を添えると、以前に閉じ込められていた量の「受容」が彼女のうなじの斜面を流れ落ちた。「スクルージ、手を繋ぎました！ 今度は、私が彼女を他の人たちの周りに誘導しながら、そっと引っ張ってください。」

3人はまるでチームであるかのように協力し、他の眠っている魂をかわしながら連携して引っ張りました。四肢の極がスクルージとマーリーのさらに後方に伸び始めると、フローラの繭は海岸の端まで惰性で進みました。

ノアは地面に飛び上がり、「ヤコブ、檻の中の涙を拭いてください」と命じました。スクルージをまっすぐに見つめながら、彼は指示を明確にした、「はつきり言ってください、エベネザー、湿気には感情が含まれています、そしてプールから来るものはどれも楽しいものではありません。」

体が乾いて仰向けになると、ノアはアクセプタンスを通して自分の心の情熱を見つめました。彼女を見たときに感じた優しさで、彼の目には涙があふれました。彼は前腕で顔を拭きながら、彼女の唇にそっとキスをした。受容の覆いは肉体間の感覚を鈍らせた。

マーリーは「どうすれば彼女を解放できるでしょうか？」と尋ねた。

「それは、私の天才と思われる弟が必要とするのは、あなたが持っていないもの…温かさです。」

「でも、私にはその願望があるのよ、どうするの…お兄さん？」

「お願いです、もうやめてください」とスクルージは抗議した。

兄弟は両方ともスクルージに注目し、マーリーはアイデアを提示しました。「もし熱でフローラが生き返るなら、スクルージが一番暖かいので彼女を抱きしめるべきだと思います。あなたと私、ノアは、受け入れに対して彼の熱を封印しようとします。そうすれば溶けてなくなるかもしれない。」

「そうかもね」ノアも同意した。

「彼女を抱きしめてほしいですか？」スクルージはゴクリと飲み込んだ。

「熱が必要なのでそれがあなたの仕事かもしれないと思います。」

そこで、それ以上の対話は行わずに、3人はマリーのアイデアを試みました。しかし、それは効果がありませんでした。フローラを高めるのは熱ではなく、情熱だったからです。最初のアイデアが失敗すると、ノアは無理に開くのに十分な大きさの亀裂を見つけようと、フローラの寝ている姿の周りを歩き回りました。フラストレーションが彼の報酬だった。

ノアが兄とスクルージの隣で海岸線に座る頃には、憂鬱が気分を支配していた。フローラが彼らの隣に横たわっているが、北極星よりも近くなないので、彼は彼女が彼に与えたクオーツポイントをポケットから取り出しました。ニューゲートを受け入れられるものは何もなかったが、クリスタルだけが彼の希望に力を与えてくれた。たとえ死刑を宣告されたとしても、彼女のクリスタルが抱いた愛が、未来に立ち向かう彼の勇気を支えた。愛に満ちた印象を与えるたびに、ノアの内なる光の輝きがクリスタルの先端を通して流れ始めました。

彼の涙がクリスタルに落ちると、その先端に付着した幽霊のような悲しみの一滴から虹色が爆発した。液滴を通して、成長中にその点に定着した内部塵の各斑点が、虹全体をTransmogrifyに反映しました。何百もの色のスペクトルがノアを取り囲むと、そのインスピレーションによって彼は飛び上がり、クリスタルをフローラの胸に置き、両手で強く押し下げました。彼は自分が何をしているのか分かりませんでしたが、それが正しいと感じました。

何もないノアが直感的に目を閉じ、思考を静め、フローラとの人生の楽しい思い出が頭の中で展開されるのを見つめるまでは、そのようなことが起こりました。ボールルームの楽しみから寝室まで、すべてがコントロールされました。ノアの中で情熱が高まり始めました。感情がクリスタルを暖かく、そして熱くしました。思い出がクオーツを通過するにつれて、それは殻に覆われたコスの受け入れに浸透し始めました。しかし、クリスタルの探査は、特定の思考、つまり特定の肉的な思考が生じたときにのみ、受容を解消しました。

夫婦の寝室でのセックスは常に優しく、遊び心がありましたが、何よりも情熱的で、キスが長く続いていました。ノアは二人が共有する官能性についての考えに夢中になり、何の前触れもなくコス・アクセプタンスの覆い全体が解放されたとき、反射的にクリスタルをフローラのお腹の上に落とした。

彼がクオーツを回収しようと手を伸ばしたとき、フローラは彼からそれをつかみました。先端を子宮に対して垂直に保持すると、クリスタルは倍音のリズムでハミングを始めました。ゆっくりと振動する赤ちゃんのイメージが、ポイントの6つの三角形の面の隣に浮かび始めました。6人の幼児はそれぞれ異なる色の虹を輝かせた。

成長し続ける子供たちに魅了されたノアは、「これこそ私が望んでいた娘だ!」と叫びました。

当惑したフローラは、「いいえ、それは私の息子です!」と反論しました。

一緒に、それぞれが望んでいる子供を実際に見ましたが、二人とも自分たちのビジョンが真実であるかどうか確信がありませんでした。「エベネザー」とノアが言いました、「うちには男の子がいますか、それとも女の子がいますか?」

スクルージは、色以外の違いを見つけようと思って6枚の画像を眺めました。何も検出されなかったとき、彼は単にフローラの願いを「男の子です」と言いました。性別が宣言されると、6人の幼児はクリスタルの先端の上で合体して、くすくす笑う1人の男の子になった。

ノアは子供を抱き上げ、胸に抱き寄せ、息子の額にキスをしながら、「これが私の遺産だ」と喜び勇んで宣言しました。

フローラは、彼女自身の幸福感に満たされて、家族に加わりました。一緒に、彼女の善意の引力を通して、三人はアビスからの召喚を感じました...無限の意識がモグリフィケーションを求めているのです。この緊急の命令は行動を命じました。そして、警告もなく、3人が最終トランスマグリファイの深淵に向かって移動したとき、色とりどりのアクセプタンスの爆発が彼らを変容させました。受け入れの虹が Transmogrify 全体に広がり、その結果、モグ全員の中にめったに経験することのない陽気さが生まれました。そして真実は知られています-その瞬間までアビスの外でモグリフィケーションを目撃した人は誰もいませんでした。

特定の色がさまざまなエネルギーで消散すると、受け入れの至福が空中に漂いました。最も長い振動を持つ赤が残り、トランスマグリファイの青みがかかった光をわずかにラベンダー色に変えました。赤いアクセプタンスの中には、ジェイコブとノアの子供時代からの共有された思い出のすべてが存在していました。マリーの思いをよぎるにつれ、個人的な喪失の涙が彼を圧倒した。支援の任務は達成されましたが、兄を永遠に失った悲しみが彼を悩ませていました。しかし、彼はこれが自分自身のせいであることに気づき、感情的な恐怖を受け入れました。

色付きの受容の霧が蒸発すると、ジェイコブは壊れた魂の池から向きを変え、切断された部分のダムに向かいました。「もう家に帰る時間だよ、エベネザー」

「本当に、そんなに早く?」二人の男は顔を見合わせ、すぐに逃げようと考えて笑った。

「Transmogrify では時間は個人的なものです。」

「ここでは時間が夢のようです。それぞれの瞬間がそれぞれの機会の中に存在しているようです。」

マーリーは言葉を探すために立ち止ましたが、彼の思考の中の概念は、トランスマグリファイの現在の瞬間を理解するような望ましい会話を生み出すことは決してできなかつた。そこで彼は、試すのではなく、「切断された部分のダムを通過すべきだと思います。そうすれば、移動時間は少なくとも 75 パーセント短縮されます。」とだけ宣言しました。

「安全だとは思えません。」切断されたスピリッツのクレーターの頂点に向かって、スクルージはこう付け加えた。「しかし、私もここで徘徊するつもりはない。」

「あなたはプール用の武器を集めることに苦労したことは一度もありませんでした。アブルトがあなたにある種の無敵のエネルギーを与えてくれたようです。」

「それはわかりません、ジェイコブ。」

「プールに行く途中にファイヤートワラーを何台か確保しました。スケルトンに掴まれるのは許しません。」

「まあ、少なくとも努力はするだろうね」スクルージは自分を納得させようとして言った。そう言って彼は巨大なダムの中に足を踏み入れた。その巨大なスケールは、何百万もの骸骨の手足が空気を掴み、蹴り飛ばす様子で、彼の人間の認識を悩ませました。動くこと以外は何もできず、ひょろ長い指と足は意味をもたせようと奮闘した。

**** ステープテン ****

自己疑念を静める

一步ごとに、体の一部がスクルージを押したり、押し込んだり、掴もうとしたりしました。ほとんどの部分を回避し、邪魔な他のすべての手足を強制的に押し進めるために必要な操作を開発するには、彼はいくつかのステップを要しました。ダムからの絶え間ない攻撃に適応すると、彼はこう言って焦点を変えた。「これまでのところ、ノー」ああ、虹色の受容は最高だった。」

「それはフローラの仕業よ」とマーリーは答えた。

「どうやってそれがわかるの？」

「ノアは Mogrification の準備ができていませんでした。彼はまだ私に対してあまりにも多くの怒りを抱いていました。彼は巣穴に送り返されるべきだった、あるいは怒りの穴

の部屋に送り返されるべきだった。許しが欠けていると、受け入れられることは決してありません。」

「彼はあなたを許しました、ジェイコブ。」

マーリーは立ち止まり、スクルージの方を向き、「どうしてそんなことがわかるの？」と尋ねた。

「ああ、ノアがまだあなたを信じていないことを疑わないでください。それでも、彼は書斎であなたをほぼ瞬時に許してくれたと思います。」

「『私は思う』と言うとき、それは『私は知っている』という意味ではありません。それなのに、あなたの発言はまるで知らされているかのようです。」

「ノアはあなたを許したと言いました。それはあなたにとって十分に直接的な発言ですか、ジェイコブ？」

「信じられればですが、ノアは今私を憎んでいるような態度をとっています。それは許しません。」

「あなたは許しを望んでいません。ノアには何事もなかったかのように振る舞ってほしいと考えています。これはあなたを喜ばせるためだけです、ジェイコブ。」

「アウトリーチのタスクを完了しても報酬はありませんか？」

「明らかに、ノアとフローラを解放することがあなたの任務のすべてではありません。ジェイコブ、あなたは冷酷で欺瞞的な態度をしています。ノアは、あなたが気づいていないように見える、あなたのにあるこの悪党の衝動が再び彼に害をもたらすのではないかと警戒しています。それで、なぜ彼はあなたを許す以外のことをしなければならないのですか…それは彼があなたの悪から立ち直るために行われるのですか？」

「では、私は兄を永遠に失ってしまったのでしょうか？」

「あなたは弟を失ったわけではありません。あなたは兄をコントロールする能力を失ったのです。」

実践でも同じです。

「そうですよ。」

二人は手を曲げ、足を蹴る道を進んだ。羽ばたきや羽ばたきは一步一歩を妨げましたが、最終的には回避や横方向の動きは正常になりました。

彼らが道にある障害物に慣れてきたとき、マーリーは再び兄の話題を持ち出しました。
「なぜ彼の許しが私を解放してくれないのでですか？」

「それは自分自身を解放するためのものだから。あなたの行動の苦悩があなたの檻を作りました。ノアはあなたの無罪への鍵を持っていません、ジェイコブ。彼はあなたの任務だったかもしれないが、彼はあなたの許しではない。」

ジェイコブは少しの間立ち止まり、それから過去のことを話しました。「もしかしたら、家族の赤ん坊だったために、私は甘やかされて、家族の中で引き取られる立場に置かれていたのかもしれません。」

「それはおかしいですよ！あなたはまだ悪党の道を歩んでいます、ジェイコブ。子どもの誕生の順序は、家族の権力構造の中で確かに役割を果たします。しかし、あなたが兄弟を殺すことはあらかじめ決まっていたわけではありません。その不誠実さは、あなたが自分という存在の中に培ってきたものだ」スクルージは最も厳しい言葉で締めくくった。今、あなたは、起こったことは自分の意図の範囲外だという誤った理解を持っています。ジェイコブ、あなたが引き起こした…あなたがこれを引き起こしたのです。」

ジェイコブのハートチェーン内のファイヤートワラーがすべて爆発し、ダム全体に彼の幽霊のような破片が飛び散りました。自分の姿が再現されるにつれ、ジェイコブはある気づきを得た。彼は自分がノアを苦しめていることを常に知っていたかもしれません、その負担を感じたことはありませんでした。この時の彼の行動は、気づかれないようになっそりと立ち去りながら、被害を修復しようと策略を講じるものでした。そして今…彼は自分がどれほど恐ろしい人間であるかを悟り、泣きました。それは悲しみの涙ではなく、清めの涙でした。自己悲しみが彼を去った。自己保存が意識に取って代わられると、ヤコブの感情は静まりました。ジェイコブは自分の新たな洞察を説明しようとして、「私が即時変更を要求する場合にのみ正義が果たされると感じています」と述べた。

「あなたの経験は、無限の意識が必要とする教訓です。あなたは即時変身があなたにとって正当な罰であると考えるかもしれません、私の知る限りでは、それはあなたの不安を静めるだけであり、無限の意識には何も提供しません。それはあなたの望みですか、自分の人生の責任に背を向けたいということですか？」

「エベネザー、あなたには驚かされます。あなたの名誉があればよかったです。」

「あなたにはあなた自身の良さがある、ジェイコブ…それを直してください。破壊しないでください。」

彼らがダムを通過すると、不安な沈黙が生じた。腕が足を押す絶え間ない動きは男性を魅了しました。決してモグリ化されるはずのない手足の山は感情的な恐怖を発し、スク

ルージュを緊張させた。マーリーは生まれて初めて他人の不安を感じた。スクルージをロードに戻すファイヤートワラーがなかったため、マーリーは心に浮かんだ唯一のことについて落ち着いた。心配している友人の健康のために、彼は体の各部分を静かにさせました。

マーリーは善意を持ってスクルージの前に横たわった。骨のぶつかり合う音を静めることを願って、彼はスクルージに「私の上を歩いてください」と言った。骸骨のフィールドを覆う幽霊のこの奇妙なビジョンは、単なるジェスチャーに過ぎないようでした。それにもかかわらず、スクルージは友人を踏みつけました。マーリーの下の四肢は両方とも悲鳴を上げ、その後、怒りで彼の体を撃ち抜きました。スクルージの足をまだ捕らえようとして突き出た指の衝撃で、彼は串刺しにされた幽霊から飛び降りた。

マーリーはディスコンのダムの真ん中で再びスクルージと合流したパートは感銘を受け、「エベネザー、あなたを落ち着かせる適切なアイデアさえ思いつきません。私の失敗は圧倒的です！」と宣言した。

「それでも、私の状態を改善したいというあなたの願望さえも助けになります。人の価値を示すのは成功ではなく努力です。ジェイコブ、あなたは謙虚さを身につけています。さあ、その認識の種を自分の行動に植え付けてください。」

スクルージの勧めで、マーリーの緊張は緩んだ。彼らはダムの反対側に向かって歩き続けました。道路までの距離は遠かったが、どちらももはやその地域の広さの需要に悩まされているように見えなかった。マーリーは得たばかりの「謙虚さ」という新たな種について熟考する一方、スクルージは用心深く歩いていた。

マーリーは何も言わずに右腕と左腕をダムから引き抜きました。彼はそれぞれの手から人差し指を外し、それをスクルージに渡しました。スクルージはマーリーから後ずさりしながら「これは何という混乱だ？」と叫んだ。

「各指を耳に当ててください。騒音を静めるのに役立つかかもしれません。」

「本気なんですか？」

「私はあなたを助ける方法を考えることをやめません、エベネザー。」

援助が純粋な動機であることに気づいたスクルージは、その骨を自分の耳に入れました。ダムの捨てられた手足と同じ周波数で指が共鳴したため、その効果は驚くべきものでした。この振動のパルスは、ミュートされた音声を除くすべての音を吸収します。

「ああ、これは素晴らしいですね」とスクルージは言いました。

「ついに私は正しいことをした。」

「えっ？！ほとんど聞こえません。」

マーリーは「気分は良くなった?!」と叫びました。

マーリーの声の大きさにスクルージは震えた。彼はためらいながら、この幽霊のような友人を見つめて、こう言いました。「あなたの声はファイヤートワラーと同じくらい強力です。あなたの声でダムの向こう側に私を投げ飛ばすこともできます。」

マーリーの咆哮がさらに激しくなった。「はい、でも丸ごと来ていただけますか？！」

刑期が終わる前に、スクルージはお尻から激しく着地した。講演者の迫力に身もだえしながら、彼は立ち上がって「安全な道を行きます」と宣言した。

道路までの視覚的な距離は常に長いままでした。彼らが歩いていると、彼らの間に沈黙が生じた。それは、現在会話に必要な叫び声よりも簡単だったからである。マーリーの沈黙は瞑想に変わり、それが夢に発展し、そして触れられる恵みの場所に変わりました。責任の激流が彼の精神を飲み込む中、彼はダムから引き上げられた。

「ジェイコブ、何が起こっているの？どこへ行くの？」

「それは私の心の鎖です。消えてしまいました。」

スクルージは耳を澄ませて指の骨を外し、「それでは単に体重が減っただけだ。だから浮いているのか？」と言いました。

「疑いの余地はありません。しかし、その鎖の重さは決して重荷ではありませんでした。」彼は肩越しに振り返り、「私はエベネザーと呼ばれています」と打ち明けた。

「呼ばれた？何と呼ばれた？」

「それは、エベネザー、アビスが何を呼ぶかではなく、そこだ。私にはその準備ができる。」マーリーは、目に見えない力が彼の背中を引っ張ったと説明しました。スクルージから引きずり出されて、彼は叫んだ、「ただ道に戻れば、トランスマグリファイから抜け出す道は自ずと明らかになるだろう。」

唖然としたスクルージは、マーリーが運ばれていくのを見ながら「道路に戻るの？一人で？くそったれ、ジェイコブ！ここに戻りなさい！くそったれ、言っておきます！くっそ…」と叫びましたが、スクルージが怒りを表現する他の言葉を見つける前に、マーリーは視界から消えてしまいました。彼は膝まで沈み込み、胸腔が許す限り深く呼吸し、それから悲しみをほとばしらせた。「どうしてみんな私から離れてしまうの？」彼は応答がないと予想していましたが、応答がありました。

「あなたが生まれたその日から私はあなたと一緒にいます。」スクルージは頭をあらゆる方向に動かしながらその声を探しましたが、再び声が聞こえたとき、実体は見つかりませんでした。「私は決してあなたを離れません。」

当惑した彼は、「ファニー？ あなたですか？」と答えた。

「はい、私の本質のささやきが語りかけます。」

「完全な思考を通してあなたの声が聞こえますが、私にはあなたの姿が見えません。どこにいるのですか？」

「私はトランスマグリファイに一時も費やしたことはありません、エベネザー。私は受容であり、あらゆる瞬間に周波数のあらゆる領域を満たします。私の経験の強さは特定のものではありません。それらはどこにでも流れています。」

「では、私は心の中の言葉によってのみあなたの存在を知ることになるのですか？」

「あなたの思考がその反響を生み出します。」

「ロンドンに戻るのを手伝ってくれるほど本気なの？」

「私はあなたがダムから生き残るのを手伝うためにここにいます。」

スクルージは非生存という概念に息を呑んだ。「私がトランスマグリファイで死んだら、あなたの記憶から消えてしまうでしょうか？」

「はい、そうするでしょうが、見ている人は誰もそれを望んでいません。」

「見てですか？ ここに他の受容の実体はありますか？ 私には何も見えません。」

「幻の回廊を見てください。」

スクルージは指示どおりに行動し、それを見て瞬きした。彼の頭上の回廊には、精霊の群れが浮かんでいた。自分たちが監視されていることに気づいた群衆は歓声を上げ、「道路にとても近づいた」などと叫び始めた。別の人々は「迷わないでください」と叫びました。しかし、「できることなら助けますよ」という言葉を聞いて初めて、スクルージは立ち止まり、いや、完全に立ち止まった。彼の息さえも感知できなかった。

「怪我はありますか？」と妹に尋ねた。

「どうしてその靈は私を助けてくれないのですか？」

「あなたは私を道路を離れます。それをしてはならないと指示されたのには理由があります。」

「ジェイコブ……なんと無頼漢なのだろう。」

「あなたは道を離れました、エベネザー。強要されたからといって、約束を守る責任がなくなるわけではありません。」

「Transmogrify は私のこれまでの知識ではありませんでした。ジェイコブ…」

「はい、ジェイコブはまだ誠実さに欠けていますが、エベネザー、あなたは自分で道路に戻らなければなりません。」

「ジェイコブはどうしてそのような弱さを抱えたまま受け入れられるのでしょうか？ Transmogrify は偽善的です。」

「Mogrification に必要なのは、アウトリーのタスクの完了だけです。もし無限の意識が完璧を要求するなら、私ですらそれには達しなかったでしょう。」

スクルージは微笑みながら「あなたは完璧です…少なくとも私の意見では」とコメントした。

「道路に戻る必要があります。」

「どれだけ遠くへ行っても、距離が伸びる気がしない。」

「そしてそこにあなたの困難があります。左側を見てください。何が見えますか？」

スクルージは指示どおりに行動し、「クレーター」と答えた。

「今度は、プールに戻るかのように振り返って、もう一度左側を見てください。」

この奇妙な要求はスクルージにとってゲームのように思えましたが、それでも彼は要求を実行しました。彼が再び左を見ると、クレーターが見えました。「これは何の謎ですか？」

「兄弟よ、あなたは切断された魂のクレーターに入りましたが、この場合、それが実際に切断された体の部分である場合を除きます。それにもかかわらず、私たちが取り囲むこの骨の山は、クレーターの中の精霊と同じように、骨を包む膜を作り出します。」

「ダムの周囲に被覆層は見られません。クレーターのような被覆層はありません。」

「ベニヤはかすかなものにすぎません。しかし、ダムの中に四肢を封じ込めるには十分だ」スクルージの次の考えを察知して、ファニーは付け加えた、「この封じ込めは、対称的なイメージの幽玄なファサードだ。」

「その発言が何を意味するのかを解明するには科学者が必要だと思います、ファニー。」

「言い換えれば、ここの壁は反射する、つまり鏡のようなものです。その概念は役に立ちますか、エベネザー？」

「これが前進の欠如を説明しているのは間違ひありません。しかし、この視覚障害を克服するにはどうすればよいでしょうか？」

「目を閉じて盲目にしてください。」兄がその命令に従うと、手足を握り締める音がダム中に響き渡った。「腕と足がぶつかり合っているのが聞こえると思いますが、リズミカルな甲高い音に耳を傾けてください。聞こえますか？」

別の音の轟音に勝るたった一つの音の発見は、その振動が直接心に入ったときにのみ知ることができるため、その努力はスクルージの負担となった。「かすかに」

「そのくぐもった音に集中してください、エベネザー。ボリューム増えてる？」

「私はそう信じています。」

「その音に向かってまっすぐに歩いてください。」再びスクルージは指示に従いました。「よし、これからはその調子を追求し続けろ。」ダムの外の甲高い音が激化し、踏みつけられる四肢の残忍さが爆発した。スクルージの目が見えなくなったことを察知して、肉体を失った手足は彼をつまずかせることに集中しているようだった。腕が彼の道を横切って足を投げ、通り過ぎるときに手が彼の背中を叩いた。攻撃的な行動を常に避けたため、スクルージは音程を聞くのに必要な集中力を失いました。彼は心の中でファニーの励ましを聞いた。「ほぼ安全です、止まらないでください。」

「もうその騒音は聞こえません。」

「エベネザー、あなたは方向を見失っただけです。トラッキングしている音の範囲は狭いです。もう一度聞こえるまで背を向けるだけでいいのです。」ファニーの指導はスクルージの緊張を和らげた。彼は嫌がらせをする手足の苦しみには決して慣れなかつたが、それでも彼らが自分を破滅させることを許そうとはしなかつた。

靈たちがスクルージの道路への復帰を応援すると、回廊から雷鳴のような抗議の声が爆発した。すぐにスクルージは目を開けると、頭の中の喧騒の根源が貪欲の循環から来て

いることに気づきました。スクルージの上にいる好奇心旺盛な靈たちがそれぞれの必要に向かって動き始める中、ファニーはスクルージに「闇の雨が我々を待っている」と告げて指示した。ジェイコブのレインズに対する恐怖はスクルージの記憶に押し寄せ、起こり得る危険に対する恐怖をもたらした。

「私はあなたを信頼します」とスクルージはファニーよりも独り言のように言った。

スクルージはレインズまで歩き始めたとき、妹に謝罪した。「申し訳ありませんが、私はあなたの結婚を決して認めませんでした。コナーは良い人でした。」

「はい、そうでした。」スクルージの頭の中の考えは一瞬止まり、「それでも、エベネザー、夫と家族に対する私の個人的な喜びが、私が最も愛した二人から捨てられたのです。」と聞きました。

「私がその二人のうちの一人であることはわかっています」とスクルージは言った。

「あなたも——お父さんと同じですよ。」物理的に見守ってくれる存在がいなかったスクルージは、妹の感情と格闘しました。「あなたたちは二人とも私を拒否しました」とファニーは言いました。

「これは知りませんでした。私が教育を終える前に父が私を学校から退学させたことにとても腹を立て、その後父は私と話すことを拒否しました。本当にごめんなさい、ファニー、何年もの間、あなたを見るたびに彼を見ていたのです。」

「あなたは思っているほど彼に拒絶されていませんでした。」

この発言は、スクルージが証拠を主張する前に熟考した言葉となった。「どうして父は私を拒否しなかったのですか?」「あなたが彼の苦難に悩まされないように、彼は個人的な真実をあなたに隠していました。」

「私が彼の苦労人だと思っていました。」

「ニューロンドン橋の足場崩壊事件を覚えてていますか?」

「イギリス中がそのことを聞きました。」

「父は足場が落ちて死にそうになり、怪我が完全に回復することはなかった。」

この知らせはスクルージに完全に衝撃を与え、説明を要求した。「なぜ今だけこんなことを聞くのですか?」

「あの時言っていたらどうしていましたか?」

「私なら家に帰って仕事に行くべきだった——そうすべきだった。」

「いいえ、お父さんは貯金を使い果たしたので、エベネザー、あなたは事故後さらに1年間学校に通えるようになりました。お父さんはあなたを助けるために医師の治療も放棄しました。」

「そして学校を卒業した後、なぜ私は追放されたのでしょうか？」

「お父さんはとても苦労しました、特にあなたが家に戻ってからは。事故で左腕を骨折しました。左腕を前側に縛り付けなければなりませんでした。そうしないと、一歩ごとに左腕が前後に揺れてしまいました。」

「私が手伝うことを決して許されなかつたのは正しくありません。」

「父は、あなたが必ず成功すると決心していました。父の心配は決してあなたの心配にはならないと私にはつきりと言いました。それは過酷ではありました、最善の意図で行われたのです、エベネザー。」

「若かった頃は同意しただろう。でも、人生の大半を生きてきた今では、これは間違っていたとわかっている、ファニー」スクルージは首を前後に振ってから言い終えた、「なぜ私は父が私を憎んでいるという考えを抱えて生きなければならなかつたのですか？なぜ少なくとも私の中にあるその痛みを慰めてくれなかつたのですか？」

「父は、もし私がそうしたら、私を人生から追放すると脅しました。結局、彼はとにかく私を拒否しました、コナーと私が結婚した翌日。」

「では、彼は決してコナーを認めなかつたのですか？」

「実は彼は結婚を認めていました…結婚式の翌日までは。」

「何が起こったのですか？ 彼はあなたが私たちの家からコナーの家に引っ越してくることを知らなかつたのですか？」

「いいえ、結婚式でコナーの友人の一人が、なぜ持参金がないのかと彼に尋ねました。父は彼らの会話を聞いていて、とても恥ずかしくて私を勘当してしまいました。」

「あなたにはそのような扱いを受ける資格はありませんでした。」

「それなのに、あなたは私を勘当もしましたね、エベネザー」

「私は、過敏で鈍感な人間だった自分の失敗を今でも後悔しています。」

スクルージは、自分の知らないうちに起こった一連の行動について熟考した。たとえ重傷を負ったとしても、父親が自分のために犠牲を払ってくれるという考えは、彼の頭には一度もなかった。何年もこの男に認めてもらはずに一緒に暮らしていたことに気づき、父親がいかに誇り高い人だったかを理解するようになった。結局それが彼に残された唯一の尊厳だったようで、彼はそれを武器のように使った。

レインズに到着すると、スクルージは尋ねた。「入り口に向かって移動すべきではないでしょうか？」

「闇の雨だけが、生者がトランスマグリファイを通過することを許可します。エベネザー、あなたには特別なアクセスが与えられました。なぜなら、あなたはファンタムの道に留まると約束したからです。」

スクルージはゴクリと唾を飲み込んだ後、「約束を守らなかつたことは分かっている」と認めた。

「いいえ、そうではありません。しかし、約束を正せば、虐待は許されますが、忘れられるわけではありません。」

「道路への再参入によって『約束』は修正されたのではないか？」

「完全ではありません。状況に関係なく、ここからあそこまで道路を走り続けることを約束しなければなりません。」

「本当に、ファニー、私はロードを離れるにはあまりにも疲れています。だから、ロードに留まると誓います。」

レインズの前で立ち止まったスクルージは、ファニーが「エベネザー、あなたはそこにいるよ。闇のレインズに入りなさい」と言ったとき、土砂降りを眺めていた。

最後の言葉「闇」がスクルージの心に響き渡った。その反響音が彼の心を掴み、震える声に押し始めた。「ジェイコブの雨の恐怖は今でも私を怖がらせますが、もし私が道路を離れた場合に私が受けるであろう不名誉に比べれば、それは恐れていません。私はちょうどその約束を作り直しました、そして私たちがそこにいると言われるまで私はそれを守ります…そこにいます。たとえここに留まることが排除を意味するとしても。」

「それよりもあなたにとって悲惨なことはわかっているでしょう。消滅とは肉体の喪失です。無化とは肉体と精神の両方の喪失です。あなたは誰にも記憶を残さずに無化されます。」

「私はそうなるまで道路を渡らないよ…」

「……そこね」沈黙は緊張へと発展した。「あなたの言葉の名譽は回復されました、エベネザー、今こそあなたの恐怖と向き合う時です。雨を見てください、何が見えますか？」

スクルージは何を探せばいいのか全く分からなかつたが、最後に「大洪水？」と言いました。

次の考えが解放されたとき、ファニーが微笑んでいるのが感じられました。「レインズが濡れているように見えるのは確立されていますが、エベネザー、あなたにとってレインズはあなたの『そこ』です。今が最も困難な恐怖に直面する時です。道路から歩いてレインズに入りましょう。」

「では、この場所、レインズが、私との約束の『そこ』なのでしょうか？」

「はい、通路です。」

「一緒に来てくれませんか？ レインズはあなたにとって危険ですか、ファニー？」

「危険な場所はどこにもありません。また、特定の場所が受け入れから遠ざけられているということはありません。それでも、エベネザー、これはあなたの旅です。あなたは自分でそれを完了しなければなりません。」

スクルージは土砂降りを指差し、それから確認した med、「では、『そこ』に入るべきですか？」

「それはあなたの最大の利益です。」

「少し前、ジェイコブが誰を愛しているのかと尋ねたので、誰でもないと答えました。でも、私は間違っていました、ファニー、私はいつもあなたを愛していました。」

「あなたは他人を愛しています、エベネザー、あなたはただ誰が誰かを特定していないだけです。」

「ベルが私のもとを去った後、私は別のロマンチックなパートナーを見つける気はまったくありませんでした。」

「愛はロマンスよりも無限に強力です。」

「私には愛する子供がいません。でも、クラッチットの子供たちは皆、私が彼らを愛していると思っていると思います。」

"あなたは？"

「愛は単なる瞬間的な感情の創造でしょうか…それとも感情を捉える永遠の出来事ですか？」スクルージは尋ねた。

「それ以外のこととも考えられます。愛には抽象的なものと具体的なものがあります。人は愛するために力を尽くすことはできませんが、愛には戦争を終わらせる力があります。愛に満ちた母親は子供たちのために命を落としました。私たちの父を氷のテムズ川から引き上げた男は、愛によって命を救いました。彼は、アウトリーのタスクがランスモグリファイ内で生み出すのと同じ愛、つまり他者への奉仕の一つを生み出しました。」ファニーは兄に少し時間を置いてから、もう一度尋ねました。「クラッチットの子供たちは大好きですか？」

スクルージは少し考えてから、「子供たちが私にとって少し心配なのですが、心配していることを愛してもらえますか？」と言いました。

ファニーはスクルージの無実を見て笑った。「それは親の愛の一部であり、親が子供に与える愛のすべてではありませんが、心配は初日から始まり、それは愛につながっています。エベネザー、あなたは親のように聞こえます。」

「私は子供たちの世話をしています。でも、それぞれを平等に大切にしていると言うと…それができるかわかりません。私の性格は、一部の子供を他の子供よりも好きになることのようです。ですから、私はおそらく愛情深い親ではないでしょう。」

「あなたは、自分が最も愛する子供を他の子供よりも良く扱いますか？」

「いいえ、そんなことは決しません。」

「エベネザー、あなたは実際には愛を知っています。しかし、多くの人たちと同じように、愛の最大の力は概念としては抽象的でありながら、実際に行動する具体的な力であるということを忘れてています。」

「あなたはいつも私にそう言います。でもファニー、すべての強い感情にはエネルギーの力があるわけですか？恐怖も愛と同じくらい強力ではないでしょうか？」

「間違いなく、しかし、誰が恐怖に向かって走るだろうか？愛は人類に偉大さを創造したいという願望を与えます。生まれた瞬間から、愛は個人が向かって走るものです。」

「はい、ほとんどの人はテロを避けるためなら何でもするでしょう。それで私が理解しているように、私たちが強調するものは力を増し、忘れるものは弱くなるのでしょうか？」

「それは常に現実の真実だ、エベネザー。そして今、あなたは自分の最大の脆弱性に直面しなければならない。あなたは闇の雨に入らなければならない。恐れる必要はない。そして、もしそれがあなたを見つけたら、救済を受け入れてください。」

スクルージは震えながらも嵐の中に滑り込んだ。即座に、虹色の垂直方向の爆発が彼の体のあらゆる細胞を圧倒しました。光を浴びると、彼の肌は愛撫の感覚でヒリヒリし始めた。彼が光の洪水の奥へと進むにつれて、彼の視界はまばゆいばかりの青ざめに変わった。一瞬、彼は方向を見失い、つまずいて、そして転んでしまいました。

彼は物理的ではあるが曖昧な床に座っていた。膝を胸に引き寄せるとき、彼は抑えきれないほど笑い始めた。音は鳴り響き続け、その賑やかさが強制的に止められて初めて辺りは静まり返った。彼は恐れることなく立ち上がって、ただ歩き始めました。自分が勇敢であるのか愚かであるのかは彼にはわかりませんでしたが、自分の状況のあいまいさを信頼したいという圧倒的な願望がパニックになりたいというすべての欲求を飲み込みました。彼はまだ自分が特定できないものに対する恐怖を抱えていましたが、今では Transmogrify が自分を守ってくれると信じていました…深く信頼していました…。

スクルージが歩いていると、光の壁が見え始めました。視力が回復した彼は、脈動する鍾乳石で満たされた洞窟のような部屋に足を踏み入れた。洞窟の視覚的な外観が彼の記憶を悩ませました。

部屋の中央に移動すると、鍾乳石が鉱物でできているのではなく、生命で脈動していることに気づきました。天井には 2 種類の突起が覆われていました。2 つのうち最も活発だったのは、小さなさび色の繭の形をした膜でした。しかし、恐ろしいものは 2 倍の大きさで、姿を隠すために周囲に霧の渦を巻き起こしました。

天井の絶え間ない動きを見上げながら、彼は小さな突起が裂けるのを口を半開きにして見ていた。この部隊は何千もの小さな茶色がかかった蛾を部屋に放ちました。彼らは欲望を目的としてスクルージのもとに降り立った。それぞれの蛾が欲望にうめき声を上げて彼に降り立った。それらの中で最も優れたものは、生き残るために必要性を表現いただけです。彼らのうち最悪の者たちは、自分たちの生存手段を確保することを期待して、すぐに彼の服を食べ始めました。スクルージが身を守る前に、生き物たちが彼の姿を覆い尽くしました。

虫がスクルージのあらゆる開口部に侵入し始めると、より大きな繭が巨大で常に変化する蛾の大混乱を引き起こした。もやの外套の下を飛行していた蛾は、数匹の小さな蛾に着陸し、それらをその位置に固定しました。小さな蛾が自分たちの欲求を嘆き続ける間、大きな生き物は誤って自分たちの欲求を嘆いています。彼らの下にいる者たちは不幸になるのは当然だと主張した。両方の野蛮なグループがスクルージの上で結合して、彼のリソースをすべて枯渇させようとしました。

その存在たちはあまりにも早く彼を追い越してしまったので、彼は服からそれらを払いのけようともしましたが、今や反応するには遅すぎました。飛行する生き物によって麻痺した彼に残された唯一の行動は、助けを求めて叫ぶことだけでした。「今、困窮し無知な人々のために何をしなければなりませんか？」無数の蛾に覆われながら、スクルージは息を引き取り始めた。膝が体の自重に負けそうになったとき、彼は「誰も助けてくれないの？」と叫びました。片方の膝があまりにも強い力で地面を叩き、もう片方の脚も座屈してしまいました。「お願いします」と彼は泣き叫んだ。

彼が倒れ始めたとき、小さな人間の手が彼の小指をつかみました。「もう十分やりましたよ、スクルージさん。」力を込めて握ると、子供の手は手首を振り、それとともに蛾の雲を放ちました。「すべての個人が社会情勢に対して責任を負っている。」人間の子は、恐ろしい生き物が獲物から飛び去るまで、老人の腕を引っ張りました。昆虫の大部分は、より大きな蛾が作り出すもやの中で浮遊し続けました。彼らが翼を羽ばたかせるたびに、霧が新たに放出され、無知の影響の中にすべてが隠蔽されました。それで子供は部屋から危険がなくなるまでスクルージを押しのけました。

スクルージは膝から立ち上がった。目の前の若者に注目すると、彼は彼女を知っていることに気づきました。「エリザベス？」

「ママと私はパパのためにここに来ました。助けてもらえるでしょうか、スクルージさん？」

「一生かけてお世話になりました。」

スクルージが母と娘の幽霊を見つめていると、第三者の影がちらつき始めました。「夫が死にそうです」とナンシーは告げた。

「中尉は？」

「ギルバートは間もなくティントに到着します。しかし、あなたの助けがなければハンフリーが失われるのではないかと心配しています、エベネザー。」

「ギルバートは銃弾の傷で死亡したのか？」

「いいえ、クリミアはコレラでいっぱいです。」

スクルージは、その恐ろしい病気の他の犠牲者を見て、「どうやって？ 私に何ができる？」と尋ねました。

「ギルバートが亡くなったという知らせがハンフリーに届くまでに何か月もかかるかもしれない。彼は取り乱し、無力になるだろう。ピーターはできる限り手助けするが、ハンフリーはさらなる指示を必要とするだろう。指導が必要になるだろう。」

「少年には欲望があるのか？」

「科学…科学だけです。」

「それでは、腹心の人を知っています。あなたの息子さんの将来を私が安定させてみましょう。」

「あなたは私たちの祝福です。もう去ってください。」

スクルージは、火の消えた暖炉の隣の椅子で眠っており、体を震わせて直立した。朝日が窓から差し込み始めると激しく瞬きをしたとき、彼は自分の服に虫の巣ができていることに気づきました。飛び起きて立ち上ると、セント・ジェームス・ピカデリー教会からのチャイムが聞こえ、その日がクリスマスだということが分かりました。

彼は部屋中を踊りながら、陽気だが音痴な態度で歌った。スクルージは休日のお祝いに備えて体を整え、一番いいスーツを着て、薄くなった髪をとかし、3通の手紙を書き、それぞれを専用の封筒に入れました。手紙をジャケットのポケットに折りたたんで、彼は家を出て王立研究所の大ホールに向かって歩き始めた。

一步ごとに、焼き栗の匂い、パンを焼く匂い、そして常に存在する馬糞の匂いが組み合わさって、休日を過ごす人々にとても心地よい経験を生み出しました。歩きながら、スクルージはすれ違う人たちに挨拶をしてお辞儀をした。彼は物乞いとすれ違ったときだけ立ち止まり、日銭をコップに落としたとき、「もう十分やったよ、スクルージさん」と聞いた。

話者が誰なのか確認しようと振り向いて、彼は物乞いを見て、それから心の中できさやきました、「私ですか？」物乞いは、その言葉が実際に自分の耳に向けてのものではないことに気づき、頭を上下に振って自分の発言を肯定しただけでした。スクルージは、まだ自分の価値を認めていませんが、それでも前に進みました。

その日は特別でしたが、クリスマスとしては特別なものではありませんでした。気温は冬としては穏やかで、北からの風だけが天候が荒れ模様になる兆候を示していました。しかしその瞬間は、太陽が輝いていて、スクルージは口笛を吹いていましたが、もちろん音程は合っていませんでしたが、見ていた人全員が陽気だとわかるような歓声を上げていました。

ストリートシーンは、パフォーマー、売り子、キャロルの色とりどりの群衆で賑わっていました。石畳の車道を馬車が川のように進みました。ロンドンのあらゆる道路の両側

には、ヒイラギ、常緑樹、リボンで装飾された建物が並んでいます。笑いが住民の雰囲気だった。

スクルージは、複数のナイフを投げるジャグラーを避けながら、コインをパフォーマーの瓶に投げ込み、「もう十分です、スクルージさん」と聞きました。スクルージはためらうことなく首を前後に振った。

王立研究所に近づくと、スクルージはコートから「慈善信託」と書かれた封筒を外し、建物の入り口に足を踏み入れた。彼は講義劇場に直接歩き、マイケル・ファラデーが燃焼化学に関するクリスマス講義の準備をしているのを眺めた。

スクルージは、さまざまな化学薬品を入れた長いトレイを用意し、ファラデーが容器に火をつけるのを眺めた。マルチ複数のフレアが爆発し、青、緑、紫の炎を生み出しました。「それは大騒ぎになるだろう」とスクルージは宣言した。

ファラデーはテーブルから顔を上げて言った、「エベネザー、どれくらいそこに立っているの？」

「たった今到着しました、マイケル」

「子供たちはこのデモンストレーションに感動すると思いますか？」

「彼らの両親も感動すると思います」とスクルージは断言した。

「時々彼らは若者よりも魅了されることがあります。」

「火は人に注意を促すものですが、それは色付きの火でもありますが、それは火が来るのと同じくらい目立ちます。」

「あなたが火に魅了されにここに来たとは思えませんが、どうすればあなたを助けることができますか、エベネザー？」

スクルージは「慈善信託」と書かれた封筒をファラデーに手渡し、「ハンフリー・オルブ赖トという名の若者の教育費を払いたい」と言いました。

「これは珍しいですね、エベネザー、でもその少年のことを教えてください。彼は好奇心旺盛で、賢くて、一生懸命働く気があるのですか？」

「私が彼のことを知るようになったのですが、彼は質の高い人です。」

「私たちは従業員に品質だけでなく知性も求めます。」

「彼は科学のことだけを考えていると聞いています。」

「エベネザー、なぜこんなことをするの？」

「その子は孤児になったばかりです。」

「あまりにも多くの孤児がロンドンの通りを歩いています。ここと何が違うのでしょうか？」

「私は……きっとこの子のことが好きなんです」

「つまり、あなたは彼を特別だと思いますが、私もそう思いますか？」

「はい、彼がユニークで、親切で、並外れた人物であることがわかるでしょう。」

ファラデーはスクルージから封筒を受け取り、それを開け、少年に与えられた金額を確認し、それからゆっくりとスクルージの目に焦点を合わせました。「これは十数名の研究員を教育するのに必要な資金を上回る額です。」

「ハンフリーが世話をしてくれる限り、余分なお金は好きなようにしてください。私は若者に十分なお金があることを確認したいだけです。」

「これで十分だよ、エベネザー。この少年に能力があるなら、我々は彼を科学者に仕立て上げるだろう。」

「最後に一つだけ、マイケル、家族を失ったことを少年に知らせないでください。」ファラデーは少し当惑しながらも同意し、それを言ってスクルージは建物を出た。

スクルージは休日の歓声で迎えられることを期待して通りに出たが、その予想にもかかわらず、スクルージは自分が口論の真っ最中であることに気づいた。見物人のグループに囲まれ、真ん中の二人が口論しているのが聞こえた。

「免許証を見せてください」と巡査は要求した。

「私はただ賛美歌を歌っているだけだ。君主制を招かなければ、人を楽しませたり、食事を得ることができないのか？」

「お願いしないでください。あなた方の種族は合法的な雇用を決して知りません。免許証を見せてください。さもなくば先に進みます。」

「あなたは私に食事さえ拒否するでしょう。」

「あなたの声の質を考えると、食事をする資格すらないと思います。」

このコメントとともに、スクルージは前に出て、「クリスマスのお祝いは、困っている人々の窮状に心を開くことについてのものです。この女性は困っているようです。」と言いました。

「法は法であり、国家は知恵のない者に対して責任を負わない。」

「あなたの言葉の残酷さには私は嘔然とします。先生、あなたは生まれつき無知だったのですか、それともそれが培われた性質ですか？」

巡査は目を細め、スクルージの瞳孔を真っ直ぐ見つめながら、「音量を下げてくれ」と怒鳴った。そう言って警官は急いで立ち去った——おそらく嫌がらせをする不幸な別の者を探していたのだろう。

女性のカップにペンスを落としながら、スクルージが数え所に向かって歩き始めたとき、彼を追いかける声が反響するのを聞いた。「スクルージさん、もう十分ですよ。」

彼は心の中で「そうかもしれない」と考えた。

街区を一周して彼の会社に向かうと、ドアの上にある揺れる看板が北風が強くなってきたことを示していました。建物に入ると、彼は約 30 年前、自分とジェイコブがその場所に引っ越してきた日のことを思い出した。憂鬱な思い出が頭の中に浮かんだが、逸話として定着するものは何もなかった。

彼は作業員の部屋の中で一人で彼らの机を眺めた。それぞれが、書き込みエリアの中央に労働者のボクシングデーの封筒を置いていました。いつもの液体が封筒を所定の位置に保持していた。スクルージは自分とボブのオフィスに入った。彼はパートナーの机の上に、「ボブ・クラッチット」とだけ書かれた封筒を置いた。封筒に手を置き、彼はささやきました。「ボブ、あなたは私の良心であり、自分の外側にあるものの価値を私に示してくれました。」

金庫を見て、彼は思いついた。そのドアを開けて、彼は一握りのポンドを取り出した。労働者のテーブルに戻り、彼は中央のポンドを各封筒の左上隅にスライドさせました。残りの 3 つのコーナーのそれぞれで、彼はさらに 1 ポンドを追加しました。封筒の四隅が硬貨で覆われていたため、彼は「これらの資金を移動させるにはドーバー海峡地震よりも強い力が必要だろう」と考えた。

背中から「もう十分やったよ、スクルージさん」という声が聞こえた。

聞き覚えのある声に顔を向けて、彼は言った、「そう言わされました」。彼は立ち止まり、「今日はあなたのご家族があなたに家族と離れることを許可してくれたことに驚いています」と付け加えた。

「子どもたちの喜ぶ叫び声にはもう慣れません。」

「彼らはあなたにプライバシーを求めているんですよね？」

「まあ、少しは静かにして。熱気が冷めたらまた行きます。ここで何をしているの、エベネザー？」

自分の名前が書かれた封筒をボブに手渡し、「私は引退するつもりです、ボブ」と明かした。

「引退…私…何が原因でこうなったの？」

「弱い骨だ、友よ、弱い骨だ。ボブ、私は決してこれに固執するつもりはありませんが、ピーター・ニダをマネージャーにしてほしいと思います。すべては封筒の中で説明されています。」

「ピーターは良い人だが、昇進を待っているのはフィンガルだ。」

「はい、それは知っています。私が退職するので、両方を宣伝してください。フィンガルのための特別な進歩を発明するのは簡単なはずです。」

「それで、これは……さようなら？」

「私はそばにいるよ。まだあまり派手になりすぎないでください。」

「贅沢……私？」

「あなたのお孫さんたちはあなたの不在に気づいているでしょうね。」

「実際のところ、私はそれを疑っています。私が彼らと別れたとき、彼らは贈り物を破壊する方法を発明していました。しかし、私は彼らの陽気な雰囲気を楽しんでいます、そして空腹ですぐに家に帰りますが、エベネザー、あなたが去ってしまうのはとても悲しいです。」

「願いの中でだけ時間が止まる。これが必要だ、ボブ、これが必要だ…」

「それでは、やっていただけだと嬉しいです。」

彼らが入り口に向かう途中、クラッチットは右手をパートナーに差し出した。スクルージはその手を掴み、自分に引き寄せて、決して忘れられない友人を抱きしめた。建物から出て、それぞれが反対方向を向いた。クラッチットが角を曲がる前に、スクルージは回転した。彼はパートナーに愛していることを伝えたかったのですが、緊張して止められました。彼自身は、彼らの間に芽生えた極度の友情を理解していませんでした。右目の端から涙がこぼれた後、彼は向きを変え、顔に残った水分を拭き取り、フレッドとエレノアの家に向かって歩き始めた。

スクルージが甥の家の玄関先に着くと、ロンドンのさわやかな空気が鼻をつまんだ。しかし今日は、寒さが彼の気力を弱めることはなかった。彼は、エレノアの小さな小鬼であるいたずら好きな双子が、ぬいぐるみを詰めすぎたガチョウのようにクリスマスツリーの周りを飛び跳ねているのを見るのが待ちきれませんでした。

ドアを押し開けて、彼は「エレノア、あなたの叔父さんだよ！」と叫びました。

ドアを閉める前に、小さな足の旋風と楽しい金切り声が彼を包み込んだ。「スクルージおじさん！」「早いよ！」と二つの声が完璧に調和して叫んだ。スクルージはドアに背中を押し付けて、女の子たちに抱きしめられる準備をした。二人どころか一人にもほとんどついていけないよ！」

「遊びに来てね！ ファーザー・クリスマスが来たよ！」

姪たちはそれぞれ足につかまり、応接間に向かって引っ張り始めました。さまざまな方向に動く足の力が合わさって、スクルージが倒れる恐れがありました。彼はドアに体を張って「ついていきます」と言った。彼は自分の足を指して、「あなたと同じように、私にも二本の足があります。」と笑いました。

彼らが部屋に入ると、クリスマスの歓声が彼を襲いました。装飾品できらめくツリー、シナモン、そして火の轟音が組み合わさって、空気は休日の幸福感で満たされます。ディナーテーブルにはジンジャーブレッドハウスがあり、やや偏っていましたが、間違なく魅力的でした。おもちゃはいたるところに散乱しており、それに短いながらも熱狂的な遊びの跡が残っていました。

彼らがクリスマスの騒ぎの中に消えてしまう前に、スクルージはなんとか外へ出てこう言いました、「エレノア、私の声が聞こえましたか？」早いよ！」

台所からくぐもった声が戻ってきた、「もうすぐですよ、スクルージおじさん！」

「ファーザー・クリスマスが私にもたらしてくれたものを見てください」とエビーは、色鮮やかに塗られた木製の電車のエンジンを手に突きつけながら叫んだ。

ファニーは、これまで競争相手でしたが、「私の本を読んでもらえますか？」と口を挟みました。

相変わらず魅力的なスクルージはウインクして、「電車でジンジャーブレッドハウスの周りの壮大な冒険に連れて行ってもらっている間、本を読んでみませんか？」と言いました。双子はクリスマスのろうそくのように顔を輝かせて笑いました。

しかし、双子が休日の興奮状態にあったため、焦点は新たな驚きに移りました。「なぞなぞを考えたんです」とファニーは言いました。

「私もだよ！」エビーは叫んだ。

少し驚いたスクルージは、「両方とも聞きたいのですが、まずファニー、あなたが」と指示した。

ファニーはなぞなぞを唱えた。「私には彫像のように立っている警備員がいて、屋上から離れることなく翻る旗がいます。私は魔法の家ですが、ドラゴンはいません。私は何ですか？」

スクルージは思慮深く顎を撫でた。「まあ、それは難しい問題だ。別の手がかりはありますか？」

ファニーが答える前に、エビーは「バッキンガム宮殿だよ！」と口走ってしまった。

スクルージは大笑いしたが、真剣に言った、「エビー、これはあなたのなぞなぞではない。」

かつては外交官だったファニーは、「心配しないでください、スクルージおじさん。彼女の助けがなければ、最終的にはそれを手に入れることができたでしょう。」

スクルージは彼女の優しさに微笑みながら、「さあ、あなたの番だよ、エビー」と言いました。あなたのなぞなぞは何ですか？」

エビーは妹を上回ることを決意し、こう宣言した、「私はテムズ川を渡って横たわり、馬が私の上を駆け巡り、ボートが私の下を音を立てて進んでいます。誰……いや、私って何？」

スクルージは深く考え込むふりをした。「テムズ川を渡るって？ 馬と船…これは知っています！ それは……ブラックフライアーズ橋ですか？」

エビーの顔が崩れた。「いいえ、それは私たちのメインブリッジではありません！」

「それならロンドンブリッジですね」げ。」

エビーの目が輝いた。「わかったよ！」

スクルージは手のひらで彼らの髪をかき乱した。「お二人とも天才ですね。」

「スクルージおじさん、あなたも賢いですね。今度はあなたの番です。」

急いで考えなければならないことに負担を感じながら、スクルージは最終的にこう言いました、「一人は大声で笑い、もう一人は頻繁に笑い、顔は共有されますが、名前は共有されません。私たちは誰ですか？」

女の子たちは知ったかぶりを交わし、その後「私たちだよ！」と喜びました。

スクルージは大笑いした。「黒幕たちよ！ まさに素晴らしい！ あなたたち二人は、私がこれまで望んでいた中で最も楽しいプレゼントです。」

三人はエレノアがパーラーに入ってくるまでしばらく遊んだ。「エベネザー、なぜそんなに早くここに来たのですか？」彼らは同等の賞賛の気持ちを抱いて抱き合った。分離すると、小麦粉の粉が床に漂いました。

スクルージは彼女の頬にキスをしながら、「よく眠れなかつた」と告白した。

「それで、双子があなたを眠らせているのですか？」

「まるで工場の汽笛のようだ。でも、私は主にあなたを助けるために早めに来ました、エレノア」

彼女はスクルージから離れ、彼を上下に見つめ、それからゆっくりと言いました、「助けて？」

「はい……キッチンで。誰もあなたの食事の支度を手伝ってくれなかつたの？」

「もちろん、私も他の女性を助けたことはありますが、男性を助けたことは一度もありません。」

「私がここに来たのは、人間はただ食べるだけではないということを証明するためです。それで、どうすればあなたを助けることができますか、エレノア？」

「ジャガイモは皮をむく必要があると思います。」

「私はナイフを十分に使えると信じています」と、切断台に向かって歩きながら彼は言った。

キッチンはまるで嵐の中で乱闘しているかのようだった。ボウルや食べ物があらゆる面の上に置かれています。ガチョウのぬいぐるみは鍋の中で休んで、調理されるのを待っていました。オーブンで焼いたミンスミートパイの香りが心を和ませながら、スクルージはまだ準備が必要なジャガイモ、ニンジン、ペースニップを眺めた。

スクルージは、さいの目切りを始める前に、コートのポケットから最後の封筒を取り出し、エレノアに手渡しました。「前のめりになりすぎないことを祈ります。」

封筒を受け取ると、彼女は慎重に中を見ました。すぐに彼女はそれをスクルージに返しました。「いいえ、これは受け取れません。フレッド…」

「私は彼がここに来ることを期待していました。後で彼に話しますが、エレノア、あなた自身のためではなくても、双子のためにこれが需要です。」

「フレッドが用意してくれたのは……」

「これはフレッドについての話ではありませんが、もしフレッドに何かが起こった場合に社会があなたをどう扱うかについてです。」

「それは女性の立場です。それには逆らえないよ。」

「私はあなたにそれを求めているわけではありません。私はただあなたに安全を提供したいだけです。その封筒の中のすべてのものは、食事、ベッド、衣類、そして人生そのものです。」

「そして人生そのもの」というフレーズを聞いたとき、エレノアは涙を流しました。スクルージは戸惑いながらも、ただ彼女の肩に手を置いた。そのしぐさは何の慰めにもならなかった、なぜなら彼女は彼のほうを向き、それから公然と泣き始めたからである。
「とても怖いです。」スクルージは彼女に自分の恐怖を伝える時間を与えた。「私は妊娠しているようです、エベネザー」

彼はすぐに理解しました。「これはまさに私の懸念事項の1つです…産後発熱です。」
彼は自分の話を続ける前に少し立ち止まった。「私が母を亡くしたのはご存知でしょう。彼女が死んだのは、私が生きるためだった。「彼女にそんなことをしたのは、私にとって生涯の重荷でした。」スクルージさんは立ち止まり、援助について語った。「私が生まれた当時、少なくとも社会にとって、助産師以外の援助は依然として不必要でした。しかし、現在、横たわっている病院は支払い能力のある人々を治療しており、私はそのための資金を提供したいと考えています。」

エレノアはこの助けに対する安堵と愛の涙を流し続けました。

雪がちらちらと降っていたので、フレッドがドアを通っていきました。彼が声を発する前に、無限のエネルギーが彼に向かって突進した。「お父さん！帰ってきたよ！彼を連れてきましたか？」

運んでいた箱を家に運ぶのに苦労しながら、彼はこう答えた。「ポニーを箱に入れることはできなかったけど、もっといいものを持ってきたよ。」

「ポニーより優れているものは何ですか？」エビーは不平を言った。

隅にある真っ赤な布に向かって足を引きずりながら、フレッドは木箱を小さなテーブルの上に滑り込ませた。想像力を膨らませながら、双子はまるで自分たちの願いが込められた箱を撫でた。

「何ですか？子犬ですか？」ファニーはその場で踊りながら尋ねた。

フレッドはくすくすと笑った。「来年、もう少し大きくなったらかな。」彼の言葉が少女のビジョンに火をつけると、彼の笑顔は暖かさを生み出しました。「ここには魔法があります…心の魔法です。」

女の子たちは箱の蓋を慎重に持ち上げ、歓声を上げました。箱の中には木と石で丁寧に作られたおとぎ話の村が入っていました。石畳の通りには、鮮やかな色で塗られた小さな家が並んでいた。

「ああ、お父さん！」エビーは驚いて目を大きく見開き、金切り声を上げた。「でも…どうやって中に入るの？」

フレッドはニヤリと笑った。「あなたのインスピレーションだけがこの集落に入ります。」彼が女の子たちを遊びに任せていると、キッチンから楽しそうな笑い声が聞こえました。

フレッドがキッチンに入ると、エレノアとスクルージがお互いに小麦粉を投げ合っていた。幽霊のような物質に覆われた彼らは、フレッドが部屋の隅で彼らをただ見ていて、投げの途中で立ち止まりました。

「楽しみを逃してしまったようです。」

「ああ、もう間に合うよ」とエレノアは一掴みのパウダーを投げながら言った彼のコートの上に。

三人はお互いを避けながら、部屋に小麦粉をまく作業を続けた。劇が変わったのは、エビーとファニーがキッチンに入ったときだけでした。大人たちの騒ぎを見て、エビーは「私たち子供たちだと思った」と大声で言いました。

発見された後、3人は彫像のように静止し、その表情のそれぞれに悪党のように遊んだ罪悪感が表っていました。そして…エレノアとフレッドの両方が女の子たちに一握りずつ投げました。キッチンはあっという間に、吹雪いて凍った湖の上に雪が積もったようになつて真っ白になりました。5人全員がようやく落ち着いて、家族のはしゃぎからキッチンを修復できるようになると、家中がいたずらで笑い声に包まれました。

キッチンでの仕事と遊びが終わると、スクルージと双子は応接間に戻りました。彼は暖炉の近くで家の中で最も快適な椅子に座り、すぐに眠りに落ちました。双子はおとぎ話の村で遊び、二人とも似ていてユニークな寓話を想像しました。

スクルージがリラックスして眠りにつくと、いびきをかくたびに口が開閉し始めました。パチパチとはじける火と競いながら、エビーとファニーは、スクルージの鼻息と喘鳴が静寂を支配し始めるのを畏敬の念を持って見守った。そして、スクルージが口を最大限に広げたとき、エビーは口の中に人差し指を入れました。彼が噛みつく前に、彼女は素早くそれを取り除いた。双子はクリスマスのおもちゃでは決して味わえないスリルで笑いました。そして、この喜びが彼らの遊びになったのです。指が出入りし、次から次へと開口部に侵入してきました。

クスクス笑い声があまりにも大声だったので、フレッドが調べた。「お嬢さんたち、それは叔父さんに対して失礼なことだと思いますか？」

「彼も知りません。」

それだとさらに失礼になるかも知れません。ファニーはスクルージに噛みつかれたとき、集中力を失って叫びました。

フレッドさんは「彼はもう知っている」と言い、「夕食のために片づけをする時間だ」と付け加えた。

スクルージはいびきをかき続いている間、少女たちは二人とも部屋から逃げ出した。
「エベネザー、エベネザー、夕食の時間だよ。」彼の眠りは続いた。スクルージの隣にしゃがみ、フレッドは肩を軽く振りながら叔父の顔を覗き込んだ。「エベネザー、エベネザー——」返事はなかったが、彼は両肩を掴み、スクルージを眠りから戻そうとした。

ついにスクルージは体を震わせて立ち上がった。咳き込みながら空気を飲みながら、彼はうめき声を上げた、「私は妹を愛している」。

フレッドは少し驚いて、「みんなお母さんが大好きだった」と答えました。

「でも、私はまだ彼女を愛しています。」

「私も。私も…」フレッドはためらってから言った、「彼女の死…まあ、今でも辛いことはあるけどね。でも今日は楽しい日だ。二人の若者は私たちを笑わせ続けなければならないし、食事は必ず私たちを眠らしてくれる。それで、どう思うか、叔父さん、私たちもその喜びに与りましょうか？」

スクルージはフレッドの救いの手を握りながら微笑んだ。エレノアはキッチンの匂いを嗅ぎながら、蒸したニンジンとジャガイモが入ったボウルを持って入ってきた。「フレッド、ガチョウを飼うのを手伝ってくれませんか？」風味豊かな空気が腹の中でうなり声を抑えていたため、二人の男は陽気に従った。

色とりどりのクリスマスツリー、燃える暖炉、無数のおもちゃが飾られた応接間はすぐに宴会へと注目を移しました。二人の子供たちは、それぞれのボウルがテーブルに追加された後、食べ物を検査しました。ガチョウが最後に加わったことで、この祝日はお祝いとして生まれました。

「始める前に、今シーズンに乾杯しましょう」とフレッドが言った。「新年に向けて…口論が減り、休暇が増えますように。」

スクルージが「弁護士の問題は？」と尋ねると、大人たちは笑った。フレッドは首を前後に振るだけだった。

「乾杯したいんです」とエビーは言いました。

「それでは私です」ファニーが主張した。

彼女が話したとき、エビーの顔には欺瞞的な笑みが浮かんだ。「私のものはガチョウに…私が噛むことができる限り彼が長持ちしますように、そして彼が見た目よりもおいしいですように。」

ファニーが宣言したとき、エレノア以外の全員は笑った。「私はクリスマスピディング用です…その硬さが胃に耐え、その味が飲み込むに値しますように。」

「私はここで少し無視されているように感じ始めています」とエレノアは言いました。

フレッドはウインクして言った、「でも今度はあなたが他の人を軽視する番よ、それどう言う、エレノア？」

「その場合は、スクルージおじさんに乾杯しましょう…あなたの投げる腕が常に目標を下回り、あなたの寛大さがあなたのいびきの音量を永遠に上回りますように。」

双子はスクルージを指差しながら、いびきをかいているおじさんとの最近のふざけた行為について笑いました。スクルージはこれらの直感的な兄弟を見て、「私はここで最高の乾杯を持っています。」と宣言しました。

「それでは、ぜひ、エベネザーさん、お願ひします…」スクルージが乾杯の挨拶を始めるのを期待して、フレッドは後ずさりした。

「私は双子たちにグラスを上げます…ここに、混乱を起こす人たち、笑いをもたらす人たち、そして将来のクリスマスキャロルを担う人たちに敬意を表します…彼らが音程を保つことができれば。」

「私はエビーより歌が上手です。」

「でも、言葉は覚えています。」

「よし、女の子たち、今日はこんなつまらないことをする日じゃないよ。」

食事が終わると、休日はあっという間に過ぎていきました。フレッドは夕食後のお楽しみとしてホイストゲームを勧めたが、スクルージは代わりに馬車を呼んだ。立ち去るとき、フレッドはおとぎ話のような別荘の引っ越し作業をしていました。女の子の寝室に行ってください。

駅馬車が跳ねると、疲れ果てたスクルージの安定した呼吸はいびきに変わりました。サックビルの住所の前に車を停めると、運転手は年配の男性を揺さぶり起こすために座席から飛び降りなければならなかった。スクルージはその男性の心配のために追加のコインを与えました。

彼の冬の家に入るのはいつもショックでしたが、決して驚くことではありませんでした。無人の建物の冷気が、やせた男の骨を麻痺させた。差し迫った必要が熱くなってきたとき、彼はその日のこと、特に陽気な双子のことを思い出しました。火の炎で煙突にすすが舞い上がる中、スクルージは椅子に倒れ込んだ。睡眠でいびきが発生し、筋肉が弛緩して体幹が機能不全に陥った。彼の胸の上で顎をリラックスさせたまま、彼の命が終わったとき、彼の襟から小麦粉の粉が落ちました。

「お父さん、もっと遊びたいです。」

「長い一日を過ごしました。もう寝る時間です。あなたのお母さんはすぐにここに来ます…そしてそれが何を意味するかあなたは知っています。」女の子たちは小言を言うのを超えて、喜んで続けました。慌ただしい活動の中で、彼らは村を農場に変えました。独自の木製動物をシーンに追加することで、本物の動物が糞の匂いを嗅ぎそうな雰囲気を作り出しました。

フレッドは双子の部屋の鏡の前を歩きながら、余分なジェスチャーに注目しました。鏡に向かって彼が見たのは自分自身ではなく、エベネザー・スクルージの幻影でした。 "叔父?"

「落ち着け、フレッド」

「これについてどう思いますか?」

「お願いがあります。」

「それで、今が適切な時間ですか?」

スクルージはその質問を無視して、自分の優先事項について話しました。「私はエレノアにコンソール債券で 2,000 ポンドを渡しました。」

「2,000 ポンド? よくもそんなことするね!」

「冷静になりなさいと言うのは無駄のようです。しかし、すでに行われたことなので、私はこれについて話したいと思います。」

フレッドが勢いよく息を吐き出したので、ファニーは父親の不安を探ろうと顔を上げた。映った彼の姿を見て、彼女は叫びました、「エビーを見て! お父さんがスクルージおじさんに似てきたよ。」彼らははしゃぎながらも一緒に笑いました。

「フレッド、あなたは私がここで行き過ぎたと思うかもしれません、私はあなたに危害を加える可能性があることを心配しています。」

フレッドは必要以上に空気を吸い込み、「エレノアには経済の知識がありません。女性にはその才能がありません。私たちは守っています…」と言いました。

「くだらない! くだらない! 間違った教義についておしゃべりするのはやめてください。」

「しかし、家庭内崇拝は…」

「ただ服従するためにのみ創造された。」スクルージは立ち止まり、「もしもあなたが死んだら女の子たちはどうなるか考えたことはありますか？」と尋ねた。

「私はその話題を避けてきたので、その話題には持ち込まれないようにしました。」

「いい人よ、準備は決して無駄ではないよ。」スクルージは、同意なしにエレノアに権限を与える理由を説明した。「これを避けるにはあまりにも多くのことを見てきた。資金を持っている私たちは、稼ぎ手が倒れたときに生じる困難に目を向けることさえない。」

「寡婦保護法は安全を提供します。」

「エレノアはあなたの衣服を受け取るでしょうが、家やお金は受け取りません。あなたが死んだとき、彼女はまだ完全な権利を失っているでしょう、そして双子は...彼らの虐待の可能性については考えることさえできません。」緊張を和らげたいという願いを込めて、スクルージは「そして、生まれたばかりの赤ちゃんが生まれる」と締めくくった。

「新しい赤ちゃん？」

「またここで自分を超えてしまった。」

「NEW BABY! それは私が考えなければならないニュースです。」

「ジョイセという名前は聞いたことがあります、男の子が生まれるのか女の子が生まれるのかわかりません。」

「私にとってそれは問題ではありません。」

「しかし、社会が彼らの出生時の自由を決定することになるので、そうすべきです。」継続的な説得方法を探しながら、スクルージは付け加えた。「あなたに気を配るように強制することはできません。しかし、あなたの死が早すぎる場合に備えて、私はあなたの家族の安全のためにできる限りのことを行いました。」

「感謝すべきですが、それでも軽視されているように感じます。」

「それが私が相談せずに行動したためなのか、それともあなたが自分のコントロールを守る必要があるためなのか、私にはわかりません。」

フレッドは息を吐きながら、「どちらも私をつまらないものにしてくれた」と言いました。

「やあ、やあ、やあ」

スクルージは肩越しに振り返って微笑み、「私は呼ばれています。少なくとも優しさの中で生きることを忘れないでください。」と言いました。

「待って…どうしたの、叔父さん…」

「やあ、やあ、やあ、カアック」

終わり